兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書

２０１４

神戸市教育委員会

序

神戸市中央卸売市場本場は、市道高松線により東西に分断されていたものを東側に集約し、老朽化した施設を再整備する事業が行なわれ、平成21年に移転が完了し、新たに神戸の台所として機能し始めました。移転後の西側跡地の活用に際しては、法令による汚染土壌の除去が前提となり、掘削が伴うため事前の発掘調査が必要となりました。

当該地は、兵庫県庁が最初に置かれた場所であり、更には港湾都市兵庫津の行政の中心たる兵庫勤番所、尼崎藩の飛び地として治められていた頃には、藩庁である兵庫陣屋、戦国時代には港湾機能を重視した兵庫城が存在した地点であり、絵図などからも兵庫城が存在することが推定される調査となりました。

港湾都市として発展してきた神戸。その別の顔、「城郭」のある港湾都市「兵庫津」が新たに神戸の歴史を解明する一助となるよう願っています。

最後に、発掘調査および報告書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

神戸市教育委員会

例　言

1．本書は、神戸市兵庫区中の島町２丁目に所在する、兵庫津遺跡第57次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、旧神戸市中央卸売市場本場内における汚染土壌除去工事事業に伴うもので、神戸市産業振興局より委託を受けて神戸市教育委員会が調査主体として実施した。

3．現地での調査は、平成24年４月１日～平成24年12月27日まで実施し、平成25年度は神戸市西区に所在する神戸市埋蔵文化財センターにて出土遺物の整理、金属製品の保存処理並びに、発掘調査報告書の作成を行った。調査面積は、4,640㎡である。

4．現地での調査は神戸市教育委員会文化財課学芸員 丹治康明・富山直人・川上厚志・井上麻子が担当した。

5．本書の編集は神戸市教育委員会文化財課 川上・井上が行った。執筆については、第１章・第２章・第４章は富山・川上・井上がそれぞれ分担執筆したが、鉄製品及び木製品に関する記述については同学芸員 中村大介が執筆した。

6．遺物実測の一部およびデジタルトレース、実測図への遺物立面写真の編集作業などは、株式会社文化財サービスに委託した。

7．出土遺物のうち陶磁器に関しては堺市立泉北すえむら資料館の森村健一氏、石造品については元興寺文化財研究所の狭川真一氏、動物遺存体については奈良文化財研究所の丸山真史氏からご指導をいただき、第3章においてそれぞれ玉稿を賜りました。記して、深謝いたします。

8．石垣の調査に関しては、金沢城調査研究所名誉所長の北垣総一郎氏、滋賀県立大学教授の中井 均氏、奈良大学教授の千田嘉博氏からそれぞれご指導いただきました。また、石垣および石造品の石材観察については兵庫県立人と自然の博物館の先山 徹氏からご指導いただきました。記して、深謝いたします。

9．木材の樹種調査は古代の森研究舎、古環境調査についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

10．現地での遺構写真撮影は調査担当者の他、神戸市教育委員会社会教育部専門役 丸山潔が行った。航空写真撮影と垂直写真による合成図面、石垣の平面・立面図については株式会社ＧＥＯソリューションズが実施した。遺物写真撮影は杉本和樹氏(西大寺フォト)が行った。

11．本書に使用した方位・座標は世界測地系第Ⅴ系座標、標高は東京湾平均海水面(T.P.)で表示した。

12．本書に記載した遺跡の位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」を、調査地点の位置図は、神戸市都市計画総局発行2,500分の１地形図を使用した。

13．花熊城の名称については、「熊」を使用しているが、過去の調査名には花隈城とし、『神戸市埋蔵文化財分布図』の名称に準じて「隈」を使用した。

14．発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、事業主である神戸市産業振興局に多大なる協力をいただいた。

15．現地での発掘調査および遺物の整理にあたっては、下記の関係諸機関並びに諸氏にご協力・ご指導を頂いた。ここに記して感謝いたします。(敬称略)

大阪歴史学会、城郭談話会、中村博司、森岡秀人、藤川祐作、黒田慶一、山上雅弘

本文目次

第１章　はじめに
　第１節　遺跡の立地と歴史的環境（川上）
　　（1）　遺跡の立地・・・

図版目次

fig. 1　兵庫津遺跡の位置　1
fig. 2　兵庫津遺跡周辺の遺跡　2
fig. 3　元禄絵図合成と兵庫津遺跡調査地点位置図　3
fig. 4　調査範囲と調査区の設定　5
fig. 5　元禄絵図と兵庫城関連の調査地区位置図　7
fig. 6　E-1区 第1遺構面平面図　8
fig. 7　E-1区 石垣平面・立面・断面図　9
fig. 8　E-1区 井戸・下層土留遺構平面・立面図　11
fig. 9　F-1区 兵庫城関連遺構と町屋概略図　12
fig. 10　F-1区 兵庫城関連遺構平面図　13
fig. 11　F-1区 東辺城外側石垣平面図・立面図断割　15
fig. 12　F-1区 東辺城外側石垣平面図・立面図1　15
fig. 13　F-1区 東辺城外側石垣平面図・立面図2　16
fig. 14　F-1区 土橋平面図・立面図3・4　16
fig. 15　F-1区 馬出状郭検出時平面図・立面図　18
fig. 16　F-1区 馬出状郭入隅平面図・立面図　19
fig. 17　F-1区 馬出状郭後列石垣平面・立面図　20
fig. 18　I区 第3遺構面平面図　21
fig. 19　I区 城内側石垣平面・立面図　22
fig. 20　I区 城外側石垣平面・立面図　23
fig. 21　I区 城内側石垣　最下段平面・立面図・城外側石垣断面図　25
fig. 22　K-3区 第1遺構面平面図　26
fig. 23　K-3区 石垣立面図　26
fig. 24　K-3区 石垣土層断面図　27
fig. 25　K-3区 SK62004 石垣立面図　27
fig. 26　A区 第2遺構面平面図　28
fig. 27　A区 第1遺構面平面図　29
fig. 28　B-1区 第1遺構面平面図　31
fig. 29　B-2区 遺構面平面図　31
fig. 30　B-2区 SE81005 平面・断面図　31
fig. 31　B-2区 SE91001 平面・断面図　31
fig. 32　C-1区 遺構面平面図　33
fig. 33　C-1区 SX101 断面図　33
fig. 34　C-1区 出土陶器・線刻瓦　33
fig. 35　C-2区 遺構面平面図　34
fig. 36　D-1・2区 第2遺構面平面図　36
fig. 37　D-1・2区 第1遺構面平面図　36
fig. 38　D-3区 第1遺構面平面図　37
fig. 39　F-1区 石組溝と町屋関連図　38
fig. 40　F-1区 堀埋土 土層断面図　39
fig. 41　F-1区 第8遺構面平面図　40
fig. 42　F-1区 第7遺構面平面図　40
fig. 43　F-1区 第6遺構面平面図　41
fig. 44　F-1区 第5遺構面平面図　41
fig. 45　F-1区 第4遺構面平面図　42
fig. 46　F-1区 第3遺構面平面図　42
fig. 47　F-1区 第2遺構面平面図　43
fig. 48　F-1区 第1遺構面平面図　44
fig. 49　F-1区 石組溝平面図面割　45
fig. 50　F-1区 石組溝平面・立面図1　45
fig. 51　F-1区 石組溝平面・立面図2　46
fig. 52　F-1区 石組溝平面・立面図3　47
fig. 53　H-1区 遺構面平面図　48
fig. 54　I区 第3遺構面平面図　49
fig. 55　I区 堀埋土 土層断面図　49
fig. 56　I区 第3遺構面 町屋平面図　51
fig. 57　I区 カマド平面・断面図　51
fig. 58　I区 第2遺構面平面図　52
fig. 59　I区 SX201 平面・断面図　53
fig. 60　I区 SX201・石組溝土層断面図 東壁部分　54
fig. 61　I区 第1遺構面平面図　55
fig. 62　I区 石組溝平面・立面・断面図　56
fig. 63　I区 第1遺構面 町屋 焼土坑 平面・断面図　57
fig. 64　I区 堀底検出井戸 平面・断面図　57
fig. 65　K-1区 第3遺構面平面図　58
fig. 66　K-1区 第2遺構面平面図　59
fig. 67　K-1区 第1遺構面平面図　60
fig. 68　K-1区 SM11001 西側石組　61
fig. 69　K-1区 SM11001 東側石組　61
fig. 70　K-1区 SM11001 断割断面図　61
fig. 71　K-2区 第4遺構面平面図　62
fig. 72　K-2区 第3遺構面平面図　62
fig. 73　K-2区 SE24001 平面・立面図　63
fig. 74　K-2区 SE24001 断面図　64
fig. 75　K-2区 SK23002 平面・断面図　65
fig. 76　K-2区 SD22002 平面図　66
fig. 77　K-2区 第2遺構面平面図　67
fig. 78　K-2区 第1遺構面平面図　67
fig. 79　K-2区 SM21001 西側石組　68
fig. 80　K-2区 SM21001 東側石組　68
fig. 81　K-2区 SM21001 断割断面図　68
fig. 82　各種下駄の形状別法量　70
fig. 83　堺擂鉢・丹波擂鉢　90
fig. 84　中国陶磁器窯跡位置図　91
fig. 85　焼塩壺『堺鏡』貞享1年（1684）　92
fig. 86　『慶長十年（1605）携津国絵図』　92
fig. 87　骨角貝製品　101
fig. 88　E-1区の主要珪藻化石群集　116
fig. 89　F-1区における主要珪藻化石群集の層位分布　118
fig. 90　I区・K-3区における主要珪藻化石群集　122
fig. 91　F-1区 石垣から石組溝への変遷図　130

挿図写真目次

挿図写真 1　現地説明会風景　6
挿図写真 2　遺物整理作業風景　6
挿図写真 3　保護・枠組作業　10
挿図写真 4　石垣軽量化作業　10
挿図写真 5　展示台設置作業　10
挿図写真 6　東辺城外側石垣北端部 立石（3D画像）　14
挿図写真 7　真光寺無縁塚内の釘貫材　96
挿図写真 8　鹿角製品Ｘ線写真　100
挿図写真 9　貝類①②③　105
挿図写真 10　魚類・爬虫類　106
挿図写真 11　鳥類・哺乳類①・哺乳類②　107
挿図写真 12　骨角貝製品　108
挿図写真 13　兵庫津遺跡出土木製品の顕微鏡写真１　113
挿図写真 14　兵庫津遺跡出土木製品の顕微鏡写真２　114
挿図写真 15　珪藻化石　117
挿図写真 16　種実遺体・昆虫遺体　127

表 目 次

表 1　出土金属製品一覧　74
表 2　出土銭貨一覧　75
表 3　石造品石材観察表　76
表 4　石造品統計　77
表 5　一石五輪塔･五輪塔　空･風輪部長幅比分布　77
表 6　遺物一覧１　77
表 7　遺物一覧２　78
表 8　遺物一覧３　79
表 9　遺物一覧４　80
表 10　遺物一覧５　81
表 11　遺物一覧６　82
表 12　遺物一覧７　83
表 13　遺物一覧８　84
表 14　兵庫県の一石五輪塔年代別分布図　96
表 15　兵庫城跡出土火輪幅とその数量グラフ　96
表 16　動物遺存体種名表　98
表 17　動物遺存体集計表１　103
表 18　動物遺存体集計表２　104
表 19　出土木製品樹種同定結果 (1)　109
表 20　出土木製品樹種同定結果 (2)　110
表 21　出土木製品樹種同定結果 (3)　111
表 22　樹種別集計表　113
表 23　器種別樹種集計表　113
表 24　種実同定結果　124

遺物図版目次

遺物図版 1　1．A 区 SD82001 出土陶磁器・土器
　2．A 区 SK82004 出土陶磁器・土器
　3．A 区 SP82015 出土土器
　4．A 区 SE81002 出土陶磁器・土器
遺物図版 2　1．A 区 SE81001 出土陶磁器・土器
　2．A 区 SK 出土磁器・土器
　3．B 区 SK91005 出土陶磁器・土器
　4．B 区 SE91001 出土陶磁器・土器
遺物図版 3　1．B 区 SE91002 出土陶磁器・土器
　2．B 区 SE81003 出土陶磁器・土器
　3．D 区 SX・SD・SK 出土陶磁器・土器
　4．D 区 SE 出土陶磁器・土器
遺物図版 4　1．E - 1 区 石垣裏込出土陶磁器
　2．E - 1 区 石垣検出及び堀内出土陶磁器
遺物図版 5　1．E - 1 区 石垣下層及び整地層出土陶磁器
　2．E - 1 区 出土瓦
遺物図版 6　1．F - 1 区 東辺石垣出土陶磁器
　2．F - 1 区 馬出状郭出土陶磁器・土器
遺物図版 7　F - 1 区 南辺石垣出土陶磁器・土器
遺物図版 8　F - 1 区 堀下層出土陶磁器 1
遺物図版 9　F - 1 区 堀下層出土陶磁器 2
遺物図版10　F - 1 区 堀下層出土陶磁器 3
遺物図版 11　1．F - 1 区 堀中層出土陶磁器
　2．F - 1 区 堀上層出土陶磁器
遺物図版12　F - 1 区 南・西辺石組溝城内側掘方出土陶磁器
遺物図版 13　1．F - 1 区 東辺石組溝城内側掘方出土陶磁器・土器
　2．F - 1 区 石組溝城内側掘方出土陶磁器
遺物図版 14　1．F - 1 区 石組溝城内側掘方出土陶磁器
　2．F - 1 区 石組溝内下層出土陶磁器・土器・土管

遺物図版目次

遺物図版15　F-1区 石組溝内上層出土陶磁器
遺物図版16 1．F-1区 第7･8遺構面出土陶磁器
2．F-1区 第5･6遺構面出土陶磁器
3．F-1区 第4遺構面出土陶磁器
遺物図版17 1．F-1区 第1～3遺構面出土陶磁器
2．F-1区 出土硯
遺物図版18 1．F-1区 東辺石垣土橋付近出土瓦
2．F-1区 東辺石垣裏込出土瓦
遺物図版19 1．F-1区 馬出状郭検出時出土瓦
2．F-1区 馬出状郭南東入隅出土瓦1
遺物図版20 1．F-1区 馬出状郭南東入隅出土瓦2
2．F-1区 馬出状郭前列石垣裏込出土瓦
遺物図版21 1．F-1区 第8遺構面出土瓦
2．F-1区 第7遺構面出土瓦1
遺物図版22 1．F-1区 第7遺構面出土瓦2
2．F-1区 第6遺構面出土瓦
遺物図版23　F-1区 その他出土瓦・鞴羽口
遺物図版24　F-1区 堀埋土出土瓦
遺物図版25 1．Ⅰ区 石垣裏込及び石垣基盤層出土陶磁器・土器
2．Ⅰ区 石垣付近崩落石中出土陶磁器・土器
3．Ⅰ区 堀埋土下層出土陶磁器・土器1
遺物図版26 1．Ⅰ区 堀埋土下層出土陶磁器2
2．Ⅰ区 堀埋土中層出土陶磁器1
遺物図版27 1．Ⅰ区 堀埋土中層出土陶磁器・土器2
2．Ⅰ区 堀埋土上層出土陶磁器・土器
3．Ⅰ区 SX201出土陶磁器1
遺物図版28　Ⅰ区 SX201遺構出土陶磁器2，
石組溝出土陶磁器・土器
遺物図版29 1．Ⅰ区 堀底検出井戸出土陶磁器・土器
2．Ⅰ区 第1･2･3遺構面出土陶磁器･土器･瓦
遺物図版30 1．Ⅰ区 城内側石垣裏込出土瓦
2．Ⅰ区 城内側石垣付近崩落石中出土瓦1
遺物図版31　Ⅰ区 城内側石組･城外側石組付近崩落石出土瓦2
遺物図版32　Ⅰ区 堀埋土出土瓦
遺物図版33　Ⅰ区 SX201・堀底検出井戸出土瓦
遺物図版34　Ⅰ区 出土硯・墨書土器
遺物図版35 1．K-1区 SD13002出土陶磁器・土器
2．K-1区 SP12006出土陶磁器・土器
3．K-1区 SP12004出土陶磁器・土器
4．K-1区 SP12007出土陶磁器・土器
遺物図版36 1．K-2区 SE24001出土陶磁器・土器・瓦
2．K-2区 SD24001出土陶磁器・土器
3．K-2区 SK24005出土陶磁器・土器
遺物図版37 1．K-2区 SK24007出土陶磁器・土器
2．K-2区 SK23005出土陶磁器・土器
3．K-2区 SK23007出土陶磁器・土器
遺物図版38 1．K-2区 SK22001出土陶磁器・土器
2．K-2区 SM24001埋没後の井戸出土陶磁器
3．K-2区 SD21001出土陶磁器
遺物図版39 1．K-2区 SM21001掘方出土磁器・土器
2．K-2区 SM21001最下層出土陶磁器・土器
3．K-3区 SK64004出土陶磁器・土器
4．K-3区 SK64001出土陶磁器・土器
遺物図版40 1．E-1・2区 出土石造品
2．F-1区 石組溝・堀内出土石造品
遺物図版41　F-1区 馬出状郭出土石造品
遺物図版42　F-1区 東辺・南辺石垣出土石造品
遺物図版43　Ⅰ区 出土石造品
遺物図版44　木製品(食膳具)
遺物図版45　木製品(容器)
遺物図版46 1．木製品(柄鏡箱)
2．木製品(横櫛・傘轆轤)
遺物図版47　木製品(下駄1)
遺物図版48　木製品(下駄2)
遺物図版49　木製品(祭祀具・玩具・その他)
遺物図版50　船材・建築材
遺物図版51　鉄製品1
遺物図版52　鉄製品2
遺物図版53　銅製品1
遺物図版54　銅製品2・豆板銀

カラー写真図版目次

カラー図版1 1．調査地付近空中写真（北から）
2．調査地付近空中写真（東から）
カラー図版2 1．E-1区 石垣・堀全景（西から）
2．E-1区 石垣（南西から）
カラー図版3 1．F-1区 石垣・堀全景（南から）
2．F-1区 石垣・堀全景（南西から）
カラー図版4 1．F-1区 石垣・堀全景（北西から）
2．F-1区 東辺城外側石垣（北西から）
カラー図版5 1．Ⅰ区 石垣・堀全景（南東から）
2．Ⅰ区 城内側石垣（南東から）
カラー図版6 1．Ⅰ区 城外側石垣（北西から）
2．K-3区 城内側石垣（北から）
カラー図版7 1．F-1区 東辺城外側石垣裏込出土陶磁器
2．Ⅰ区 城内側石垣裏込出土陶器
3．Ⅰ区 城外側石垣裏込出土陶器
カラー図版8 1．F-1区 漳州窯染付皿見込
2．F-1区 漳州窯染付皿高台内
3．F-1区 唐津皿
4．F-1区 備前建水（植木鉢転用）
カラー図版9 1．F-1区 堀埋土出土陶磁器
2．F-1区 堀埋土出土染付磁器
カラー図版10 1．F-1・Ⅰ区　土人形・泥面子
2．F-1区 横櫛
3．F-1区 横櫛（反転）

写真図版目次

写真図版１　１．A区 第２遺構面（北から）
　　２．A区 第１遺構面（北から）
写真図版２　１．B-１区 第１遺構面全景（東から）
　　２．B-１区 SE91001全景（西から）
　　３．B-２区 第１遺構面全景（西から）
　　４．B-２区 SE81005全景（南から）
写真図版３　１．C-１区 遺構面全景（南から）
　　２．C-２区 遺構面全景（南から）
写真図版４　１．D-１区 第２遺構面全景（東から）
　　２．D-１区 第１遺構面全景（東から）
写真図版５　１．D-２区 第２遺構面全景（東から）
　　２．D-２区 第１遺構面全景（東から）
　　３．D-３区 第１遺構面全景（東から）
　　４．D-４区 第１遺構面全景（北から）
　　５．D-５区 第１遺構面全景（西から）
写真図版６　１．E-１区 堀底下層土留遺構検出（南西から）
　　２．E-１区 下層土留遺構（南西から）
　　３．E-１区 下層土留遺構全景（西から）
写真図版７　１．E-１区 石組井戸（西から）
　　２．E-１区 石組井戸断面（西から）
　　３．E-３区 石垣断面(西から）
　　４．E-３区 石垣裏込断面(西から）
写真図版８　１．E-１区 堀埋土断面（西から）
　　２．E-１区 石垣・堀全景（西から）
　　３．E-１区 石垣・堀全景（南西から）
写真図版９　１．F-１区 東辺城外側石垣（北西から）
　　文亀四年一石五輪塔出土状況
　　２．F-１区 東辺城外側石垣部分１(西から）
　　３．F-１区 東辺城外側石垣部分２(西から）
写真図版10　１．F-１区 東辺城外側石垣（南西から）
　　２．F-１区 東辺城外側石垣南端部裏込（北西から）
　　転用石材検出状況
　　３．F-１区 東辺城外側石垣断面（南から）
写真図版11　１．F-１区 馬出状郭検出状況（南東から）
　　２．F-１区 馬出状郭南東隅埋設過程（南東から）
　　３．F-１区 馬出状郭南東隅埋設断面（南から）
　　４．F-１区 馬出状郭南東入隅全景（南から）
　　５．F-１区 馬出状郭後列石垣全景（南東から）
　　６．F-１区 馬出状郭後列石垣二段目全景（北東から）
　　７．F-１区 馬出状郭後列石垣一段目全景（北東から）
　　８．F-１区 馬出状郭後列石垣最下段目全景（北東から）
写真図版12　１．F-１区 馬出状郭後列石垣矢穴１(東から）
　　２．F-１区 馬出状郭後列石垣矢穴２(東から）
　　３．F-１区 馬出状郭前後石垣断面（北から）
　　４．F-２区 遺構面検出全景(北から）
　　５．F-１区 南辺石垣西端（北東から）
　　６．F-１区 南辺石組溝と南辺石垣断面（西から）
　　７．F-１区 南辺石組溝と南辺石垣（北西から）
　　８．F-１区 堀埋土断面（北西から）
写真図版13　１．F-１区 石組溝城外側全景（南西から）
　　２．F-１区 東辺石組溝城外側（北西から）
　　３．F-１区 石組溝南東角（南東から）
写真図版14　１．F-１区 石組溝内埋土断面（北から）
　　２．F-１区 石組溝内完掘状況（北から）
　　３．F-１区 石組溝城外側断面（北から）
　　４．F-１区 石組溝城内側断面（北から）
写真図版15　１．F-１区 第１遺構面全景（南から）
　　２．F-１区 第２遺構面全景（南から）
　　３．F-１区 第３遺構面全景（北西から）
　　４．F-１区 第４遺構面全景（南西から）
　　５．F-１区 第５遺構面全景（南西から）
　　６．F-１区 第６遺構面全景（南西から）
　　７．F-１区 第７遺構面全景（北東から）
　　８．F-１区 第８遺構面全景（南西から）
写真図版16　１．F-１区 第５遺構面北東隅町屋（東から）
　　２．F-１区 第６遺構面北東隅町屋（東から）
　　３．F-１区 第７遺構面北東隅町屋（東から）
写真図版17　１．Ⅰ区 城内側石垣と崩落石（南東から）
　　２．Ⅰ区 城内側石垣裏込（東から）
　　３．Ⅰ区 城内側石垣中央最下段（東から）
写真図版18　１．Ⅰ区 城内側石垣裏込内瓦出土状況(北から）
　　２．Ⅰ区 城内側石垣東端最下段（南東から）
　　３．Ⅰ区 城内側石垣西端最下段（南東から）
写真図版19　１．Ⅰ区 城内側石垣断割（東から）
　　２．Ⅰ区 城内側石垣裏込断割（東から）
　　３．Ⅰ区 堀埋土土層断面（北東から）
写真図版20　１．Ⅰ区 城外側石垣（北東から）
　　２．Ⅰ区 城外側石垣裏込（東から）
　　３．Ⅰ区 城外側石垣断割（東から）
写真図版21　１．Ⅰ区 第２遺構面SX201（南東から）
　　２．Ⅰ区 第１遺構面全景（南から）
　　３．Ⅰ区 石組溝（東から）
写真図版22　１．Ⅰ区 城外側崩落石検出状況（南東から）
　　２．Ⅰ区 第３遺構面町屋（南から）
　　３．Ⅰ区 第３遺構面カマド（北西から）
写真図版23　１．Ⅰ区 近代遺構上層（南から）
　　２．Ⅰ区 近代石組溝(西から）
　　３．Ⅰ区 近代遺構下層(南から）
　　４．Ⅰ区 第1遺構面SK112
　　５．Ⅰ区 第1遺構面SK105
　　６．Ⅰ区 第1遺構面SK104
　　７．Ⅰ区 第1遺構面SK107
　　８．Ⅰ区 堀底検出井戸
写真図版24　１．K-１区 第３遺構面（西から）
　　２．K-１区 第２遺構面（西から）
写真図版25　１．K-１区 第１遺構面（東から）
　　２．K-１区 SM11001全景（北西から）
写真図版26　１．K-１区 第４遺構面（東から）
　　２．K-２区 SE24001（西から）
　　３．K-２区 SE24001断割（西から）
写真図版27　１．K-２区 第３遺構面全景（東から）
　　２．K-２区 第２遺構面全景（東から）
　　３．K-２区 SD22002全景（東から）
写真図版28　１．K-２区 第１遺構面全景（西から）
　　２．K-２区 SM12001全景（南から）
　　３．K-２区 SM12001（西から）
　　４．K-２区 SM12001断割（南東から）

写真図版目次

写真図版29　1．K-3区 第1遺構面全景（西から）
2．K-3区 第1遺構面全景（東から）
3．K-3区 SM24001（東から）
4．K-3区 SM24001 断割（南東から）
5．K-3区 SM24001 全景（北東から）
6．K-3区 SK62004 全景（南から）

写真図版30　1．E-1区 出土瓦（120）
2．E-1区 出土瓦（115・117・118）
3．F-1区 第8遺構面出土瓦（413）
4．F-1区 第8遺構面出土瓦（413 裏面）
5．F-1区 第8遺構面出土瓦（414）
6．F-1区 第7遺構面出土瓦（416）

写真図版31　1．F-1区 馬出状郭前列石垣裏込出土瓦（409）
2．F-1区 馬出状郭前列石垣裏込出土瓦（409 裏面）
3．F-1区 馬出状郭前列石垣裏込出土瓦（遺物図版 20-2）
4．F-1区 馬出状郭検出時出土瓦（遺物図版 19-1）

写真図版32　1．F-1区 東辺石垣裏込出土瓦（遺物図版 18-2）
2．F-1区 出土硯（遺物図版 17-2）
3．F-1区 南･西辺石溝組溝掘方出土墨書擂鉢（251）
4．F-1区 南･西辺石溝組溝掘方出土墨書擂鉢（251 裏面）
5．F-1区 石組溝内上層出土　陶製オロシ（318）
6．F-1区 石組溝内上層出土　陶製オロシ（318 裏面）

写真図版33　1．Ⅰ区 城内側石垣裏込出土瓦（556）
2．Ⅰ区 城内側石垣裏込出土瓦（555）
3．Ⅰ区 城内側石垣・城外側石垣付近崩落石出土瓦（遺物図版 31）
4．Ⅰ区 城内側石垣付近崩落石中出土瓦（遺物図版 30-2）
5．Ⅰ区 城内側石垣付近崩落石中出土瓦（遺物図版 30-2）

写真図版34　1．Ⅰ区 堀埋土出土瓦（591～593）
2．Ⅰ区 堀埋土出土瓦（581～586）
3．Ⅰ区 堀埋土出土瓦（587～590・595）
4．Ⅰ区 堀埋土出土瓦（598・597）

写真図版35　1．瀬戸美濃灰釉碗　人面墨書（615）
2．瀬戸美濃灰釉碗　高台裏墨書（615）
3．丹波鉄釉徳利　墨書（613）
4．Ⅰ区 出土硯（遺物図版 34）
5．硯裏面刻書（607）

写真図版36　1．E-2区 出土　一石五輪塔（750）
2．同上　地輪部　寛正二年八月
3．F-1区 東辺城外側石垣　一石五輪塔（786）
4．同上　地輪部　文亀四 二月

写真図版37　1．F-1区 馬出状郭入隅部出土　石仏（782）
2．宝珠（791）
3．相輪（790）
4．角塔婆（780）
5．宝篋印塔（794）

写真図版38　1．屋根材（753）
2．屋根材（753 裏面）
3．釘貫（758）
4．宝篋印塔塔身（774）

写真図版39　1．層塔（762）
2．層塔（762 裏面）
3．F-1区　石垣裏込転用一石五輪塔

写真図版40　1．五輪塔　各種
2．一石五輪塔　各種

写真図版41　1．一石五輪塔（756）
2．宝珠（810）
3．五輪塔（809）
4．五輪塔（809 裏面）
5．宝篋印塔（821）
6．石仏（818）

写真図版42　1．木製品（容器：845～852・854）
2．木製品（食膳具：839・842～844）
3．木製品（天目台：841）

写真図版43　1．木製品（柄鏡箱：855～858）
2．木製品（傘轆轤：864）
3．木製品（下駄：865～870・872～876）

写真図版44　1．木製品（船形：877～880）
2．木製品（人形：881）
3．木製品（玩具･その他：882～887）

写真図版45　1．木札（1001～1003）
2．木札（裏面）
3．船材（888～893）

写真図版46　1．建築材（894・895）
2．E-1区 下層土留杭

写真図版47　　銅銭（寛永通宝）

写真図版48　1．銅銭（渡来銭）
2．銅銭・鉄銭・豆板銀
3．分銅・豆板銀

写真図版49　1．銅煙管
2．銅製品（匙・火箸・雁首銭ほか）
3．銅製品（小柄・刀装具・服飾具）
4．鍍金銅製品（小柄・煙管・調度品）

写真図版50　1．銅製品（調度飾金具）
2．銅釘
3．鉄製品（包丁・鎌）

写真図版51　1．鉄製品（火打金・小札・釣針・把手）
2．鉄製品（鋤先・棒・板）
3．鉄釘
4．簪

第１章　はじめに

第１節　遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の立地

兵庫津遺跡は、兵庫区の南部、JR兵庫駅の南東側に広がる広範囲な遺跡である。兵庫津は、瀬戸内海に突き出た和田岬によって波風を避けられる天然の良港であり、古代から近世にかけての複合遺跡を形成している。

兵庫津は、古くは「大輪田泊」と呼ばれており、古代から瀬戸内海航行において風波を避ける天然の良港として文献にもたびたび登場する。特に、平安時代後期に平清盛によって経ヶ島が築造されて日宋貿易の拠点とされたことで注目される。

兵庫津の地形を特徴づける瀬戸内海に突き出る和田岬は、六甲山地に起因する土砂が湊川によって瀬戸内海に流出し、東流する湾岸流により形成された砂嘴として発達したものである。この発達した砂嘴である和田岬の東海岸に「泊」が建設され、付随する集落が発展して、港町として栄えた。

(2) 遺跡の地理的環境

兵庫津は、天然の良港を形成する起因となる六甲山系が北側に連なり、その裾野に南へ緩やかに傾斜する狭小な平野部がある。この山裾となる狭小な平野部に西国街道が九州との主要幹線道として整備されてきた。兵庫津は、この陸の交通路と海の交通路の交差点の一つであり、大消費地である畿内への入り口となる大物流拠点として位置づけられた。砂嘴が発達して形成された立地であるため、海に面した低地の集落遺跡である。現在の地表面は東京湾平均海水面から約２ｍ前後であるが、古代から近世に至る生活面は、場所によっては海抜０ｍに当たる部分もある。

fig.1　兵庫津遺跡の位置

(3)遺跡の歴史的環境

兵庫津遺跡と今回の報告に関わる近隣の遺跡について概観する。

平安時代以降の遺跡については、兵庫津遺跡との関連が考えられる。特に平安時代末期～鎌倉時代にかけては、当地域が日本史上の表舞台となったことでも注目される。

兵庫津の北には楠・荒田町遺跡がある。特に、神戸大学医学部校内では福原京（和田京）に関連すると考えられる二重の濠や居館跡が検出されている。楠・荒田町遺跡の更に北側では平安時代末の庭園遺構や輸入陶器である玳玻天目小碗が出土した祇園遺跡がある。玳玻天目小碗は、政治の中枢であった京以外では、博多や鎌倉など当時の港町と有力者が拠点とした場所で発見されている。

戦国時代に入ると、兵庫津は商業的な面だけでなく、軍事的な面でも重視されるようになる。天正８(1580)年には、天下統一をめざす織田信長に反旗を翻した荒木村重方の城である花熊城が織田方の池田恒興らに攻撃され、落城とともに兵庫津も焼失した。その直後、池田恒興により、現在の中央市場跡地付近に兵庫城が築かれた。その際には、花熊城を解体した用材を使用したとの記録が『花熊落城記』(1732年) に見られる。

兵庫津の町は、この兵庫城を中心に、江戸時代には約２万人が暮らす港湾都市として発展しており、これまでの発掘調査の大半は江戸時代の兵庫津に関する成果となっている。兵庫城は、江戸時代に入ると尼崎藩の藩庁である兵庫陣屋となった。その後、明和６(1769)年の上知令により幕府直轄領となり、出先機関として勤番所が置かれた。明治時代には一時、兵庫県庁が置かれ兵庫県発祥の地となった。第35次調査では、城の北西隅を調査し、勤番所時代の石垣を確認している。

元禄期に尼崎藩によって作成された『摂州八部郡福原庄兵庫絵図』（以下、元禄絵図）が現在の地図と照らし合わせても変わらないことが、これまでの調査でわかっている。

Fig.2 兵庫津遺跡周辺の遺跡 (S＝1：50,000)

第２節　兵庫津遺跡の既往の調査

兵庫津遺跡は、現在の兵庫区南東海岸部に位置し、南北約２km、東西約１kmの範囲が想定されている神戸市最大の遺跡である。兵庫津遺跡の調査は昭和60年に実施された第１次調査から、これまで56次におよぶ発掘調査が行われている。その結果、港湾都市として栄えた江戸時代の寺院跡や町屋跡が見つかり、港湾都市「兵庫津」の全体像が解明されつつある。

Fig.3　元禄絵図合成と兵庫津遺跡調査地点位置図（S=1:10,000）
（神戸市立博物館『よみがえる兵庫津』及び『神戸市教育委員会、兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書より）

兵庫津の町は、西国街道の宿駅に指定された岡方と、港湾機能をもつ築島船入江を境に北側を北浜、南側を南浜に分化して町政運営がされてきたことが、古文書などで知られている。これまでの調査では、殆どが岡方地域での調査であり、僅かに北浜地域の調査が行なわれているが、南浜海岸部での発掘調査は今回まで行われていない。昭和63年に遺跡の南西部端において大手前女子学園調査団が行った第２次調査では、町域から外れてはいるが15世紀後半の汀遺構と礎石建物が確認され注目される。また、平成15年に神戸市教育委員会が調査した第32次調査では、奈良時代～平安時代前半にかけての溝や柱穴を検出した。２条の溝については、港湾施設の可能性が考えられ、兵庫津の起源を考える上で重要な発見となっている。第２次と第32次調査が南西部で行なわれた調査であり、他の調査は今回の調査地となった兵庫城以北での調査である。単に開発行為による調査が集中したことにもよるが、西国街道に沿って中世以降の遺構面が確認されている。兵庫津遺跡では文献による記述や絵画に描かれた資料が多く、発掘調査によりその存在などが証明されることが多い。また、記録には残らない新発見が発掘調査により明らかとなってきている。

第３節　調査に至る経緯と経過

（１）調査に至る経緯

中央卸売市場本場の再整備事業により、市道高松線で東西分断された西側市場施設の東側施設ゾーンへの移転・集約が図られることになった。移転が完了した西側の中央卸売市場本場跡地は、元禄時代に描かれた『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』（以下、元禄絵図）と現在の地図を合成すると、兵庫城が存在した地点となる。兵庫城に関しては、絵図などから新川運河で大半が削平されていると考えられ、これまで僅かに兵庫勤番所の遺構が検出されたに過ぎなかった。当該地区に関しても中央卸売市場本場施設と市営中之島住宅などの基礎により、地下に残る遺構に影響を及ぼしていることが考えられたので、文化財の取り扱いを決めるために、４回にわたる試掘調査を実施した。

平成17年度第１回試掘調査（平成18年３月２日～28日）では、城跡の南堀と城内に当たる地点に試掘坑を設置して試掘調査をした結果、①元禄絵図にある兵庫城の南辺の堀跡上面と城外側には町屋の跡を確認。②堀が埋め立てられて町屋が拡大していることを確認した。

平成18年度第２回試掘調査（平成19年２月20日～27日）では、中央市場の建物と建物の間の地点５ヵ所を試掘し、埋設管で撹乱されて遺跡が消滅している部分もあるが、敷地全体に近世の遺構、遺物を確認した。

平成20年度第３回試掘調査（平成20年11月17日～平成21年２月25日）では、①元禄絵図にある兵庫城の東と南の堀を確認。②近世の町割りに伴う石組みの水路を確認。③近世の遺構面（生活面）も複数存在することを確認。④湧水が激しく、堀底や堀の石垣は確認できなかった。⑤近世以前の16世紀代の遺構と遺物を確認した。

平成21年度第４回試掘調査（平成21年７月21日～29日）では、旧中央市場建物の各棟内部において、従前建物の基礎による遺跡の損壊状況を確認する目的で実施した。①建物基礎が標高０ｍまで達する部分は、すでに遺跡が損壊している。②一部標高０ｍ以下でも、堀内部と推定される部分は残存している。③高松線沿いの2棟については、建物範囲全体に基礎掘削が及んでおり、遺構・遺物は残存していない。他の建物については、地中梁間に遺構が残存している。

これら４回の試掘調査の結果から、土木工事で地下に影響を及ぼす場合は、その範囲において、発掘調査が必要であることが、文化財の取り扱いとして示された。

今回の調査は、神戸市中央卸売市場本場の東隣接地への移転により、跡地の土地活用事業に伴う発掘調査を実施している。調査対象地は、土壌汚染調査により汚染土壌の除却洗浄が必要な範囲を対象として行なう地区と、土壌汚染に関係なく兵庫城の堀の範囲と残存状況を確認することを目的として行なう地区を対象に発掘調査を実施した。

調査に際し、事業者である神戸市産業振興局から委託を受けた（財）神戸市都市整備公社と埋蔵文化財発掘調査にかかる契約を締結し、費用についても事業者の協力を得た。発掘調査の一部の作業については、神戸市教育委員会が主体となる発掘調査に、施工者がその一部を提供する形態となった。

（２）発掘調査の経過

移転の完了した敷地面積は、約40,000㎡である。この敷地に汚染土壌の範囲を特定する為に10m角の区画を設けて、その中心で汚染土壌の測定を行い、範囲と深度が決定された。その結果、汚染土壌の除去のため調査が必要となった対象地は、38箇所となった。調査の深度についても、土壌汚染が及んでいる範囲としたため、現状の地表面から１ｍ～６ｍまでが調査の対象となった。１ｍ以上の掘削を行なう調査区については、鋼矢板を設営し、調査を実施した。また、兵庫城の堀の残存状況を確認すべく、汚染土壌の除去対象とは別にＫ区を設定した。調査対象とならない部分での既存基礎の撤去工事についても、随時立会を行った。

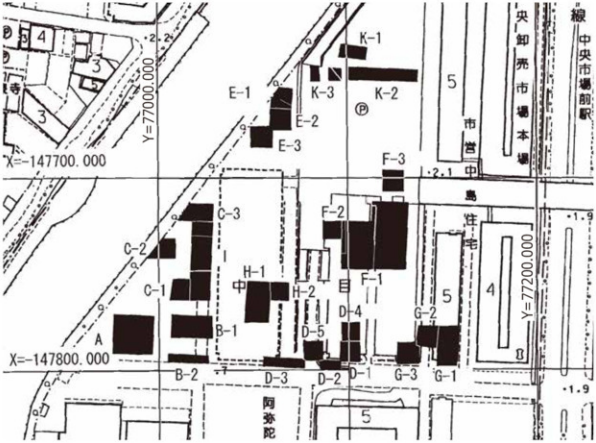


fig.4　調査範囲と調査区の設定（Ｓ＝1：2,000）

（3）発掘調査組織

発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表（平成24年度）

神戸市文化財保護審議会　（史跡・考古資料担当）

工　楽　善　通	大阪府立狭山池博物館館長
和　田　晴　吾	立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教　育　長	永井秀憲
社会教育部長	東野展也
担当部長（文化財課長事務取扱）	安達宏二
担当課長（埋蔵化財係長事務取扱）	千種　浩
文化財専門役	丸山　潔
文化財課担当係長	丹治康明・安田　滋・斎木　巌
事務担当学芸員	佐伯二郎・井尻　格・中谷　正・小林さやか
調査担当学芸員	富山直人・川上厚志・井上麻子
保存科学担当学芸員	中村大介
遺物整理担当学芸員	池田　毅・内藤俊哉・藤井太郎・阿部　功

整理作業

出土遺物の水洗作業、ネーミング作業、接合・復元作業、金属器の保存処理は、神戸市埋蔵文化財センターで実施した。遺物実測及びデジタルトレース、図版への写真編集については株式会社文化財サービスに委託した。

挿図写真１　現地説明会風景

挿図写真２　遺物整理作業風景

第２章　発掘調査の成果

第１節　兵庫城関連の調査

（１）兵庫城の推定と調査区

当該地での調査開始に際し、元禄絵図により兵庫城の範囲に当たることから、教育委員会では４度にわたる試掘を行い、遺構の損壊状況を確認し、明治以降に開削された新川運河の影響と考えられる湧水状況を確認した。その結果を受けて、今回の汚染土壌除去作業による調査対象のうち、F－１区・I区において深い遺構となる堀の存在が明らかになることが期待された。また、汚染土壌範囲からは外れていたが、堀の確認を目的としたK区を設定した。E－１区では、汚染土壌除去作業に伴う発掘調査をしている過程において、兵庫城に伴う石垣の一部を確認することができた。よって、今回の兵庫城関連の報告となる調査区は、E－１区、F－１区、I区、K－３区、の４地区である。

各調査区すべてに、従前の神戸市中央卸売市場本場に伴う建造物があり、試掘調査の結果からも上層部は大半が撹乱を受けているものと考えられた。E区は西側に新川運河があるため、その擁壁による損壊、F区周辺には本場施設の建物、I区には隣接してバナナ保存用の冷蔵庫棟、K区は立体駐車場があり、大きな独立基礎が地下深くまで入っていることがわかっていた。K区に関しては、あらかじめ独立基礎やそれを繋ぐ地中梁を避けてトレンチを３地区設定し、兵庫城の東北部の堀を確認することとした。I区に関しては兵庫城南辺に当たる堀、F区は兵庫城東南部の堀が存在することが予想された。調査は、試掘調査でも判明していたが、多くの撹乱を除去することから始まった。

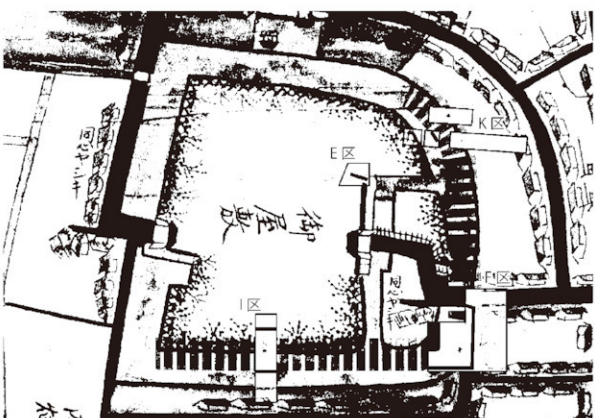


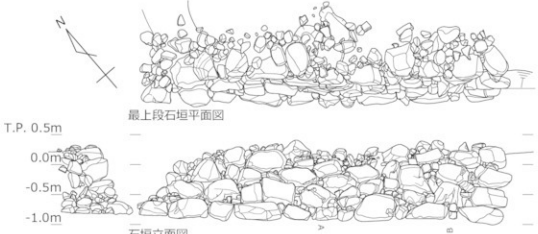
fig.5　元禄絵図と兵庫城関連の調査地区位置図

（２）Ｅ区　石垣の調査

Ｅ区は、新川運河に面しており、運河開削時や下水管敷設などにより削平されていた。しかしながら、Ｅ－１区の削平を免れた東側では、南東方向に伸びる長さ６ｍ、高さ４段分1.5ｍの野面積みの石垣を検出した。使用石材は自然石がほとんどであり、僅かに転用石が用いられている。西側は、明治初期に開削された新川運河と下水管敷設により削平されている。この撹乱により石垣の断面を確認することができた。裏込めの幅は0.5ｍもなく、人頭大の石を用いている。また、Ｆ－１区で検出した石垣に比べると使用石材が小ぶりであり、石種も多種に及んでいる。検出した石垣のほぼ中央部分では、石垣を構築する際の単位である目通りのある境が観察できる。この目通りを境に積み方が異なる。目通り境より西側は最下段の石がその上の石よりも少し前にせり出した積み方である控え積になっているのに対し、目通り境より東側は野面積になっている。このことから構築時期の差を指摘することはできないが、石垣の普請単位をあらわすものと考えられる。石垣構築に際して複数の石工集団が関わり、受け持ち単位によって、積み方に違いが現れたものと考えられる。

石垣に対して、南側は一度に埋められた土であり、石垣が南に面を持つ位置関係からも堀部分と考えられる。この堀については大半が調査区外となるため堀幅などは不明である。堀底の標高はT.P.－0.9ｍを測る。西側には新河運河が開削されているが、堀底からの湧水は認められなかった。堀底の一部には人頭大から拳大までの石が敷かれた部分があり、石垣が破壊される原因となった南北方向の汚水管を挟んで西側にも敷石が見られることから、堀は西側に続いていたものと考えられる。

fig.6　E-1区　第１遺構面平面図



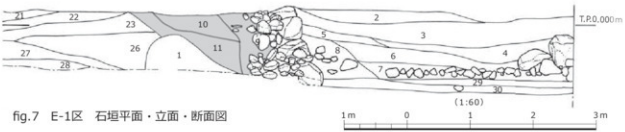


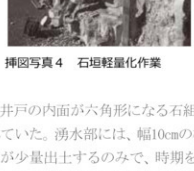
fig.7　E-1区　石垣平面・立面・断面図

当初予期していた地区以外での石垣の検出となった。『元禄絵図』と比較すると、堀の位置とは大きくそれているため、可能性が高いのは、D字形の堀を一部分切り離して馬出状に作り出した郭と主郭を隔てる堀の主郭側の石垣と考えられる。

石垣の保存

この石垣は汚染土壌の及ぶ深度に全てが入るため現地での保存が不可能であった。そのため、最も特徴的な石垣の普請境部分、幅約2.4m×高さ約1.5m×奥行約1.0mを切り取り保存することとなった。まずは崩落防止のため、切り取り範囲の石垣前面を発泡ウレタンフォームで固定した。梱包時、石材表面の離型としてPEG4000を溶解したものを塗布した。周囲4面を掘削し切り出しの完了した石垣は、全面を発泡ウレタンフォームおよび鋼材、木枠にて梱包、クレーンで吊り上げた。この時、梱包材を含めた総重量は約4.5tであった。しかし、埋蔵文化財センター既設のホイストクレーンが2t吊であることから実際の運用を考慮し、軽量化する必要があった。そのため、石材背面の露出しない部分につき、回転式の電動ダイヤモンドカッターを用いて切削軽量化を行なった。結果、梱包資材を含めて約1.8tまで軽量化することができた。再梱包した後、トラックにて埋蔵文化財センターに搬入した。各石材同士のずれを防止するため石材背面をドリルで穿孔し、ボルトを埋め込んでエポキシ系合成樹脂で固定した。これらボルト同士はサビ止め材を塗布したL型鋼材で結合した。その後FRPで裏打ち補強し、発泡ウレタンフォームを充填した。下部台座は角材とH型鋼材を用い、重量に耐え得るものを作成した。最終的な重量は1.9tとなり、現在埋蔵文化財センターにて展示公開している。

挿図写真３　保護・枠組作



挿図写真４　石垣軽量化作業

挿図写真５　展示台設置作業

石垣の下層遺構

汚水管で削平された地点で、井戸の内面が六角形になる石組みの井戸が残存しており、井戸の内部には大きな石が投棄されていた。湧水部には、幅10cmの板材を使用した桶が埋め込まれていた。井戸からは微細な遺物が少量出土するのみで、時期を特定することはできないが、石垣の裏込断面との切り合いから、石垣構築後に作られた井戸と考えられる。また、検出した石垣の下からは、石垣と交差する状態で土留に使用したと考えられる杭列と横板を検出した。横板は5mもの長い一枚の板であった。石垣との構築順序からすると、この土留状の構造物が先行して構築されている。石垣に転用されている石には円形の柱座を削り出した礎石などが複数含まれることも判明しており、大掛かりな土留遺構と合わせて、兵庫城築城以前に大きな建造物があったことが想定できる資料である。

E−2・3区

E−1区から新川運河沿いを南に並ぶ調査区である。共に、新川運河開削時に大きく削平を受けており、汚染土壌の除去深度では撹乱のみが確認された。調査は、影響深度の深さ1mをもって終了した。

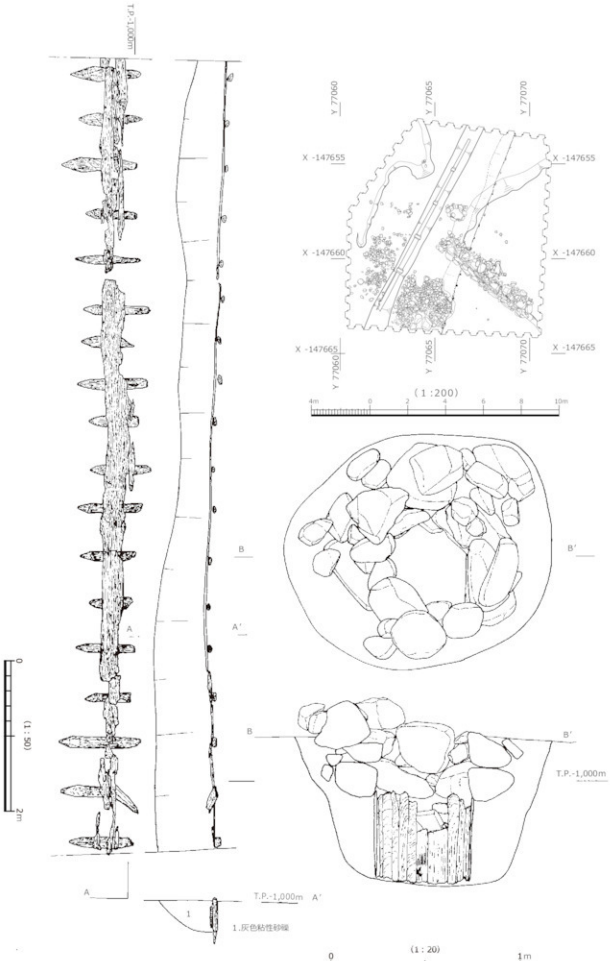


fig.8　E-1区　井戸・下層土留遺構平面・立面図

（3）F区　石垣の調査

F－1区は、今回の調査区の中で最も大きな調査区である。調査区の東半部では町屋の遺構を確認し、西半部では兵庫城に伴う堀と石垣を検出した。本報告では、石垣の調査と町屋の調査を分けて報告するため、本項では西半の石垣についての報告を行なう。

今回検出した石垣は、F－1区西半部の西北隅において『元禄絵図』に描かれた主郭から更に堀により区画を設けた郭の南東部分に当たる石垣と、主郭を取り巻く堀の東辺城外側石垣の南東部と土橋の一部、南辺城外側石垣の裏込だけが残存していたものを検出した。これらの石垣は、『元禄絵図』に描かれた堀の形状と位置がほぼ一致することから、兵庫城の石垣である可能性が高いものと考えられた。

主郭の南東部の大手口にL字状の堀を設けて、独立した郭を設けた部分についての呼称については、主郭の中に埋め込まれたような状態であり、「馬出」の機能としては主郭から突出した本来の機能上の形状とは異なっているため、城郭研究上の「馬出」としてよいかの判断は難しい。今回の報告をするにあたり、場所を特定するために便宜上「馬出状郭」として呼称しておく。堀の形状は、西に馬出状郭の石垣と東に東辺城外側石垣が検出できたため、東辺の堀底の規模は幅が12～13m、堀底の標高はT.P.－0.8～－1.0mを測る。堀の南辺については、18世紀以降に構築された石組溝が存在したため、石垣を検出するには至らなかった。

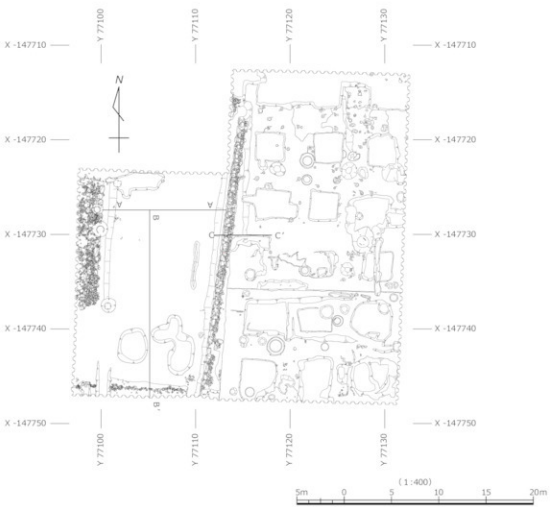


fig.9　F-1区　兵庫城関連遺構と町屋概略図（断面位置　fig.40）

堀底は、後世の撹乱による凹みが存在するものの、ほぼ平坦である。東辺城外側石垣の西側には、石垣に沿うように南北方向の高0.1m底幅0.6mの畝状の高まりが見られるが、堀の浚渫時に出来たものと考えられる。他に堀内に設けられる障壁などの施設は確認されなかった。堀底の土壌は、5～10㎜の灰色砂礫が基本であり、海抜より低い地点ではあるが、湧水は認められなかった。

南辺の堀については、明和6(1769)年の上知令以降に構築された石組溝に伴う裏込のさらに南側から、石垣の裏込に使用されている石と同様の栗石を検出している。しかし、この栗石の間から出土する遺物には17世紀前半の唐津焼(遺物図版7-148・153～155)が出土することから、天正9(1581)年に構築された当初の石垣から堀の内側を埋めて、17世紀前半に堀幅を狭めて兵庫城を改築した際の石垣の裏込と考えられる。よって、堀の幅は、当初の堀幅に比べて狭いものになっていると考えられ、裏込の検出位置から石垣が残されていたことを考慮すると、堀幅は8m前後が想定される。使用されている裏込材である栗石は、直径10㎝前後の拳大の花崗岩やチャートなど角の取れた川原石が主体である。残存状況としては、密に充填されているものではない。西端部において、五輪塔の水輪部2点(遺物図版42-796・797)が使用されているが、その他に転用材としての石造品は見られなかった。西端部で見つかった五輪塔の水輪部は、直径36㎝の大型のものであり、裏込の栗石としての使用よりも表面の石垣部材としての利用が考えられるが、積み上げた状態が観察されないため、石垣面として認めることはできない。東辺の堀幅が南辺にも同様に巡らされていたとすると、今回の調査区の南側において築城当初の石垣が存在する可能性が考えられた。そのため、裏込のみが残った調査区の南端に僅かに残った土層に断ち割りを行い、背後の土層の確認を行なったが、土層については明和の埋め戻しのような雑多な遺物を含む明らかな埋め土ではなく、自然堆積層のような土層堆積しか確認できなかった。土層は、南側に緩く傾斜する地形があるようであった。この断ち割り調査からは、さらに南に築造当初の石垣が存在するかどうかの確認はできなかった。

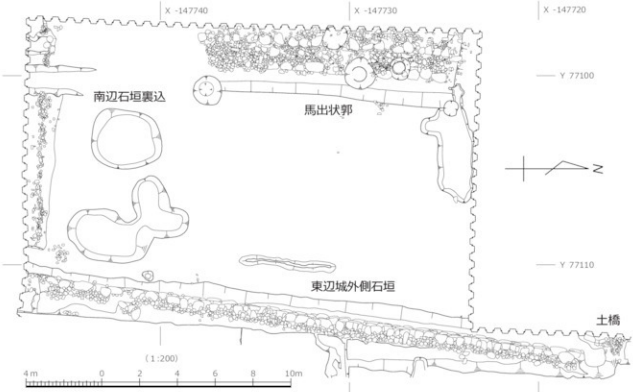


fig.10　F-1区　兵庫城関連遺構平面図

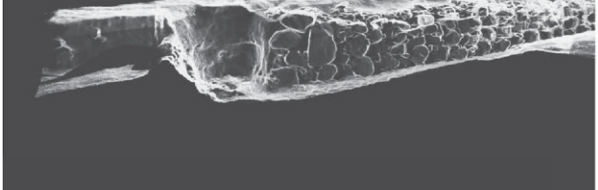
東辺城外側石垣

F－1区のほぼ中央、西半と東半を区分する境にあたる地点に、南北方向に東辺城外側石垣を検出した。石垣の規模は、長さ30m、堀底から残存する石垣の高さは、1.7mを測り石垣は残りの良いところで4段分を検出した。使用石材は、40～100cmの大きさが不揃いの自然石を主体として使用されており、石垣構築部材としての加工を施したものは見受けられない。石垣に使用されている石材の特徴としては、角が取れた丸みを帯びた川原石のようで、全体に青みがかった花崗閃緑岩と、粒子が粗く風化しやすいピンク色の六甲花崗岩を使用している。もう一つの特徴として、石垣には自然石以外に多くの転用石材が使用されている。

石垣の堀に面した表には、五輪塔の地輪部や石塔などの周囲を結界する釘貫や地覆石等の石材が多く用いられている（表4石造品統計参照）。場所によっては切石を積み上げたようにも見える。中には、梵字などが刻字されたものもあり、一石五輪塔の地輪部に「文亀四年月日」(1504年)（遺物図版42-786・写真図版36-3・4）と年号の刻まれたものが石垣に転用されていた。また、幅の狭い裏込には、比較的小さな一石五輪塔の地輪部を打ち欠いた残余を大量に栗石として使用している。東辺城外側石垣の南端部の裏込には特に集中して用いられている。

北端部には、近代の井戸による撹乱により大きく損壊しているものの、『元禄絵図』から推定すると土橋部分に当たる地点において石垣が途絶えて、堀部分に横断する形で拳大の円角礫と大きな杭を検出した。この円角礫については、土橋に伴うものと考えられるが、当初は石垣があり、その裏込だけが今回検出されている可能性がある。堀の埋め立て時に、石組の溝が造営されていることが今回の調査で確認できたが、その石組溝を構成する石材に、当初の石垣の転用された石造品と同様の中世の要素を持ったものが多く使用されていることから、当初の石垣を外して再度、石組溝に使用されていたことが考えられる。この付近が、城内へ入るための土橋付近であったことを想起させるものに、東辺城外側の石垣に見た目を意識した立石が確認できる（挿図写真6）。他の地点の石垣には、横長に石垣は積み上げられているが、この石材だけが縦方向に据えられており、鏡石のように見た目を重視した配置が考えられる。

東辺城外側石垣は30mの長さで確認できており、その積み方は野面積ではあるが横方向への目地を揃えて積む場所と大きな石を多く使用する場所や転用石造品を多用する地点など、



挿図写真6　東辺城外側石垣北端部　立石　（3D画像）

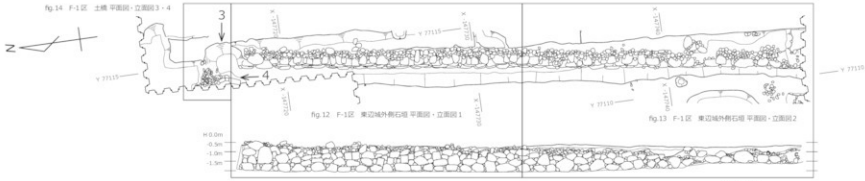


fig.11 F-1区 東辺城外側石垣 平面・立面図面割

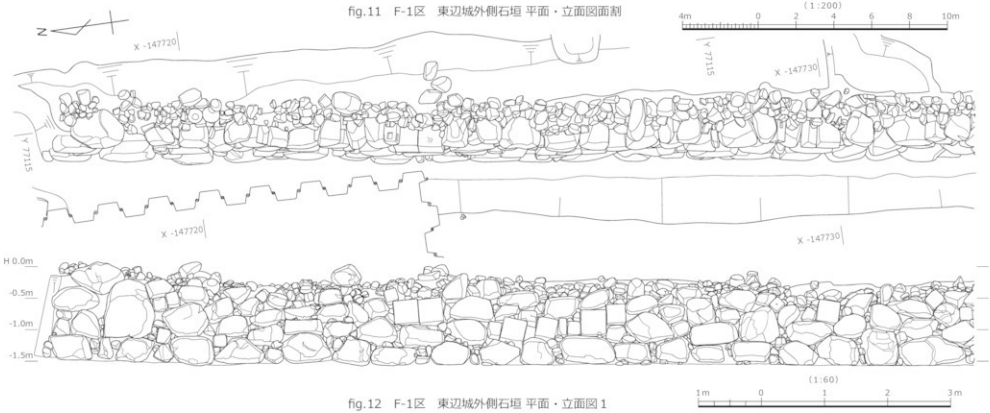


fig.12 F-1区 東辺城外側石垣 平面・立面図1

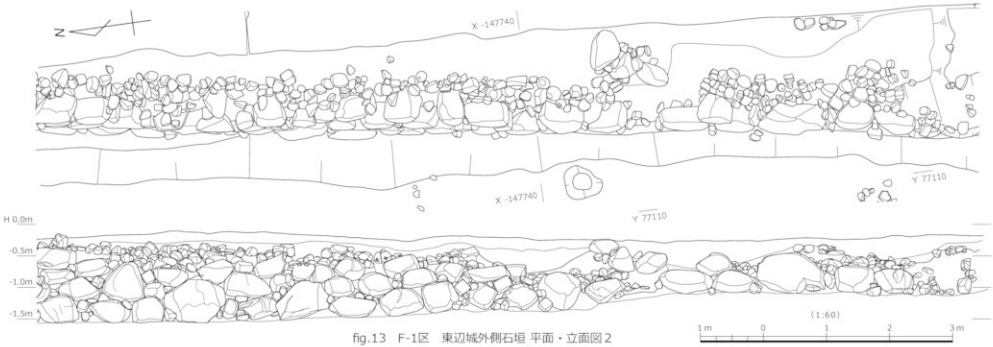


fig.13　F-1区　東辺城外側石垣 平面・立面図 2

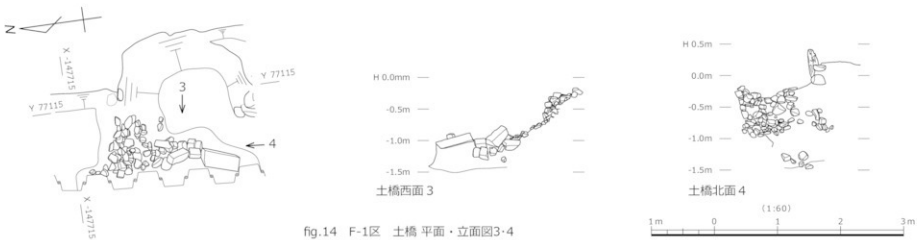


fig.14　F-1区　土橋 平面・立面図3･4

積み方に僅かな違いが見られる。この違いは、普請の受け持ち単位によるものと考えられる。石垣を構築した年代を決定づける石垣の裏込からの出土遺物には、16世紀前半～後半の陶磁器（遺物図版6-1）が出土しており、天正期に構築されたとする兵庫城の石垣と考えられる。

馬出状郭石垣

東辺城外側石垣に対面する城内側の石垣も検出することができた。『元禄絵図』では、D字形の堀がめぐる主郭部分の南東隅が独立したように郭が描かれている。この地点は、城内に入るための虎口にあたることから、主郭から突出して馬や兵を溜めておく「馬出」のような用途が当初考えられた。しかし、「馬出」とするには、主郭に組み込まれたようになっており、本来の「馬出」としての機能を果たし得たのか疑問であり、純粋に「馬出」とするには疑問が残るものであるため、先述したとおり場所を示すため便宜的に「馬出状郭」としている。

検出した石垣は、南北14m、高さは3段分で最下段の石から残存する最上段の石までが0.9mを測る。石垣の平面形状は、0.8m前後の大きさの自然石を二列に並べ、それぞれの石列には裏込に栗石が積まれていた。裏込には東辺城外側石垣と同様に多くの一石五輪塔を空風火水輪部と地輪部を割り、空風火水輪部はさらに使用しやすいように割られて裏込の栗石として使用されていた。ほぼ完全な形に近いものもあるが、大半は地輪部を欠損するものであった。このことは、ほぼ長方体の切り石状態となる地輪部が石工場で選別して集められて何かに転用されていることを示唆する。東辺城外側石垣には石垣の正面に地輪部などの転用石が使用されていたが、この石垣には角の丸くなった自然石が使用されている。南東部の隅は入隅構造になっており、前列の石垣が途切れて２石分、約１m後列に直角に入込んで後列の石垣のみが南に約３m続いている。この入隅部はしばらくの間、海水性の湿地状態であったことが、珪藻分析によって指摘されている。この植物遺体を多く含む粘土を覆うように、この入隅部は埋め立てが行われている。軟弱な粘土層には、石仏や比較的大きな一石五輪塔を横たえるように地盤を固めたようであり、その後、小さな一石五輪塔の割られたものや、裏込の栗石として使用されるような拳大から人頭大の川原石のような丸みをもつ石が積み上げられていた。なお、入隅部を埋め立てる範囲の南辺には直径10㎝前後の杭が一列に４本打ち込まれており、南辺部への崩落を防ぐ土留が行われていたものと考えられる。

当地区の土壌汚染は、現地表面から６mまでが影響するため、順次石垣の取り外しを行った。使用されている石材は、大半が六甲花崗岩の丸みを帯びた川原石のようなものであり、次に花崗閃緑岩が主体となっている。これらは、すぐ北にある六甲山系で容易に手に入るものであり、地元の石材を使用したと考えられる。前列の石垣には見受けられなかったが、後列の石垣には矢穴が残るものがある。矢穴は、幅10㎝、深さ５～６㎝の台形状のものであり、石の形状を整えるものではなく、大きな石を分割するためのものと考えられる。石垣として使われていた転用石の大半は、一石五輪塔を割ったもので、次いで五輪塔の空風輪部、水輪部が多く使用されている。他に角塔婆、釘貫、台座などが出土した。遺物としては瓦が多く出土しており、古いもので14世紀中頃以前のものから16世紀第３四半期までのものが出土している。石垣を構築した年代を決定づける石垣の裏込からの出土遺物は、16世紀後半から17世紀の陶磁器が出土しており、量的にも17世紀代の遺物が多いことから、江戸時代に入ってから構築されたものと考えられる。

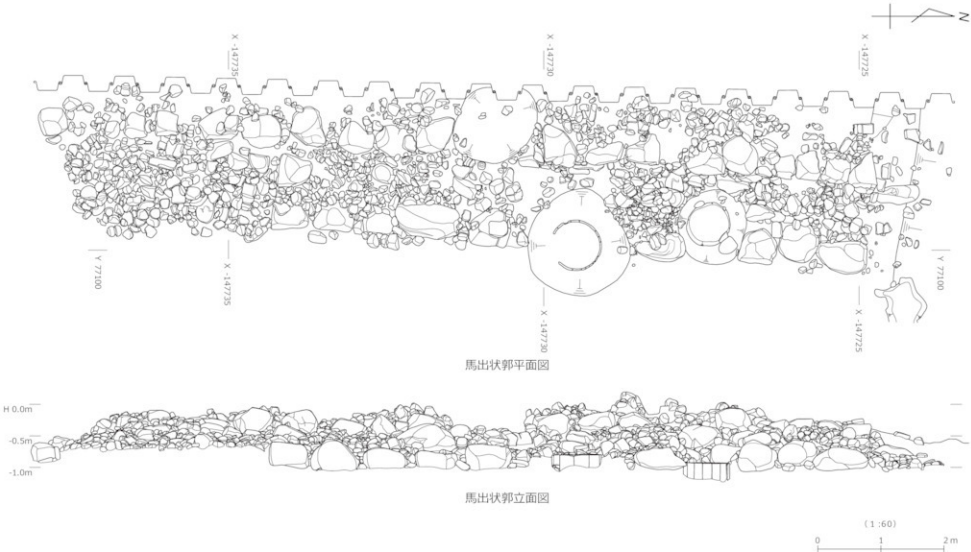


fig.15　F-1区　馬出状郭検出時 平面・立面図

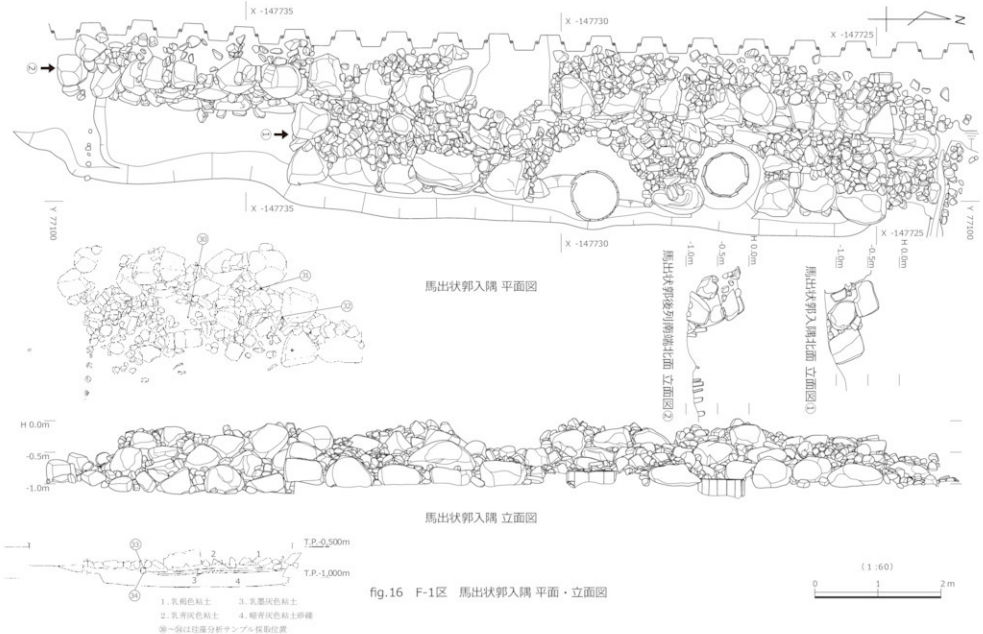
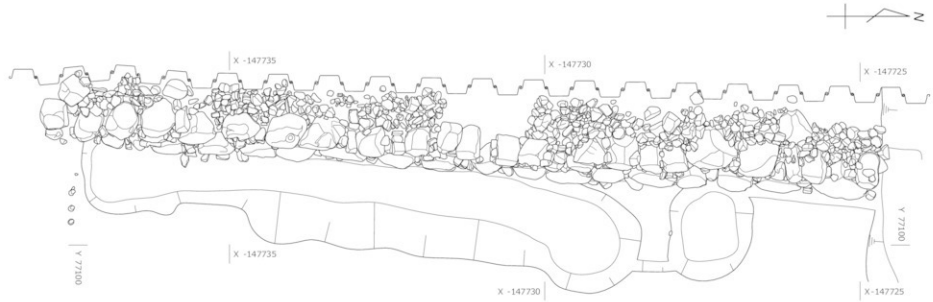


fig.16　F-1区　馬出状郭入隅 平面・立面図



馬出状郭後列　平面図

馬出状郭後列　立面図

fig.17　F-1区 馬出状郭後列石垣　平面・立面図

(1:60)
1 m　0　1　2　3 m

（4）Ⅰ区　石垣の調査

Ⅰ区は、東西10m、南北40mの細長い調査区である。調査区の南半部では町屋の遺構を確認し、北半部では兵庫城にともなう堀と石垣を検出した。南半部の町屋城では、18世紀以降の遺構や遺物が多く、明和の上知令以降の遺構面である可能性が高い。そこで、本項では北半部の堀と石垣について報告する。

Ⅰ区で検出した堀は、兵庫城の南辺にあたると考えられ、北側に城内側石垣、南側に城外側石垣を検出している。堀幅は約18m（9間）を測り、堀底の標高はT.P.-0.8mである。堀底は黄灰色の中粗砂で、平坦であった。堀内の中央付近に、木枠の井戸と、礫の詰まった土坑を検出しているが、出土遺物などから兵庫城築城以前の遺構である可能性が高い。これらについては、次節で記述する。障壁などの堀内構造物はなかったものと考えられる。

城内側石垣

城内側の石垣は、長さ10m、高さ0.7m、２段分を検出した（fig.19）。自然石の野面積みで、最下段には五輪塔の火輪部、宝篋印塔の笠部を転用石材として用いている。自然石は大きさ約40～80cmで、青みがかった花崗閃緑岩とややピンク色を呈する六甲花崗岩が使用されている。裏込めは狭く、幅90cmほどである。栗石は10～30cmほどの円礫や角礫を使用しており、一石五輪塔を打ち欠いたものも転用されている。最下段に据えられている宝篋印塔笠部の隅飾部も石垣南側の崩落石中から出土した。石垣を構築しながら現地で打ち欠いたと考えられる。検出した石垣の西半分では、細かい栗石の背後に80cmほどの比較的大きめの石材を据えていることを確認した。２段に積んでいる箇所もあり（fig.21）、石垣の背後からの土圧を支える控え積みの可能性が考えられる。石垣の掘方は、標高T.P.0.1mで検出しており、石垣の高さは少なくとも0.9m以上はあったものと想定できる。胴木のような基盤構造はみつかっていないが、しまりのよい自然堆積の砂地上に控え積みなどによって下部

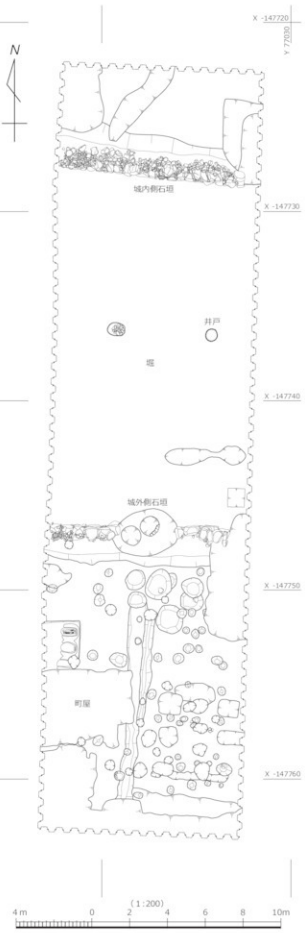


fig.18　Ⅰ区 第３遺構面平面図

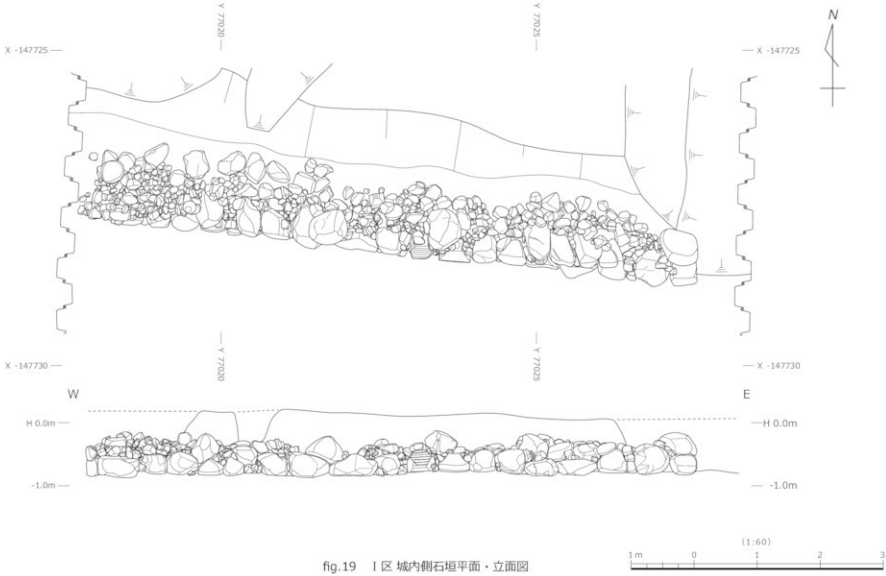


fig.19　Ⅰ区 城内側石垣平面・立面図

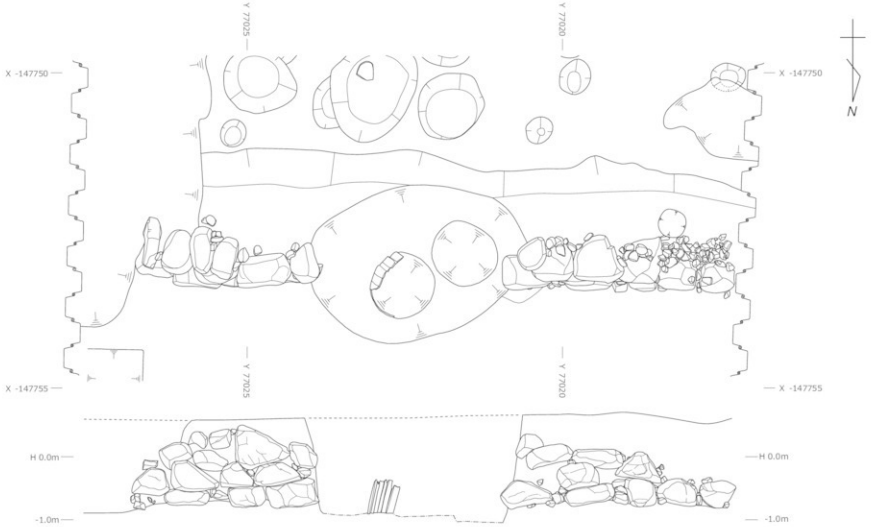


fig.20　Ⅰ区 城外側石垣　平面・立面図

構造を強固なものにして、ある程度の高さをもった石垣を構築していたと考えられる。

城内側石垣については、石垣より深い掘削を行うため、石垣を解体しながら断面の調査も行った。東断面と西断面の２か所を断面図として表示した（fig.21）。１層は石垣掘方埋土と考えられ、東断面の２～５層、西断面の２～４層に自然堆積層とは異なる小礫混じりの砂質土層を検出した。兵庫城築城にともなう造成土と断定することはできないが、大掛かりな土地造成が行われているようである。ここから土師質の皿・へそ皿、東播系須恵器鉢が出土した（遺物図版25-1）。いずれも13世紀後半～14世紀後半の所産と考えられ、石垣構築以前のものと捉えられる。

石垣の裏込めからの出土遺物はごく少量である。瀬戸灰釉皿や備前擂鉢・甕・小壺、瓦などが出土しており（遺物図版25-1、30-1）、16世紀以前におさまるものである。

城外側石垣

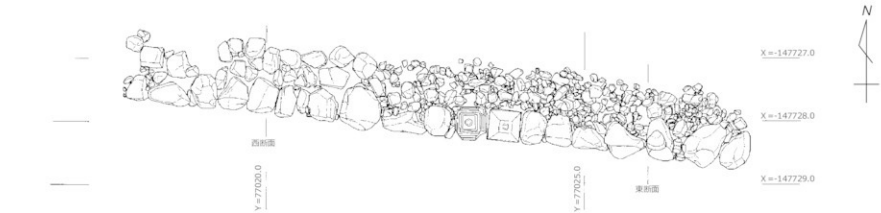
城外側の石垣は、長さ10m、高さ1.3m、３段分を検出した。中央部分は、後世に井戸が２基掘削され、攪乱を受けてしまっている。石垣は自然石の野面積みであるが、２、３段目には間詰め石が著しく少なく、石が相互に組み合っていない積み方をしている。結果として、上段ほど前傾してきている。積み方があまりにも粗いので、２、３段目は一度崩壊してしまったものを再び積みなおしたものではないかとの指摘を受けた。ただし、最下段の石は築城当初のものである可能性が高い。特に西半分では間詰め石が効果的に入り、西端の２石には栗石が多く認められた。この様相は城内側石垣のものと同様である。自然石は50～85cmほどで城内側石垣に比べ大きめのものが多い。石材は城内側石垣と同様に、花崗閃緑岩と六甲花崗岩である。石垣の掘方は、標高T.P.0.7mで検出した。石垣の高さは少なくとも1.5m以上あったものと考えられる。

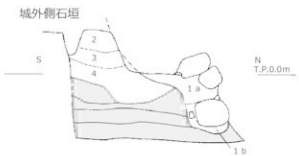
中央の井戸による攪乱を利用して、断面調査を行った。城内側石垣と同様に、こちらでも自然堆積層とは異なる礫混じり砂質土層を確認した。断面図（fig.21）の２～４層である。遺物の出土はなく、城内側石垣と同様に造成の時期を判断することは難しい。また、より南側の町屋域では、より粗い砂礫層を基盤としており、石垣付近の造成土はこの付近に部分的に存在するものであると考えられる。

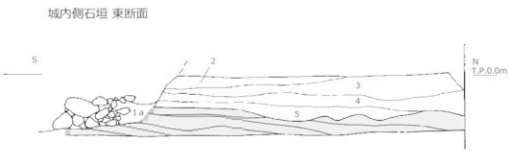
石垣裏込めからの出土遺物はごく少量である。また、検出した石垣上面より上層の掘方には、堀を埋め立てる際の埋土が混在している可能性が高いため、西端最下段の２石の裏込めから出土した遺物を石垣構築時の遺物として図示した（遺跡図版25-1）。土師質の皿と備前擂鉢である。いずれも小片であるが、16世紀代の所産と考えられる。城外側の石垣は現地保存している。

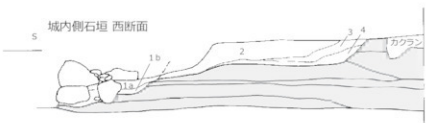
城内側石垣と城外側石垣の崩落石について

城内側石垣の南側、城外側石垣の北側では、多くの崩落した石を検出した。おそらく石垣として積まれていたものが堀を埋め立てる際に倒壊したものであろう。自然石を中心に、石造品も多く含まれていた（遺物図版43）。城内側石垣の崩落石中からは多量の瓦片が出土した。瓦当資料を中心に図示している（遺物図版30-2、31）。また、丸瓦片と平瓦片凹面において調整技法の観察を行った。調整を確認できたものはナデ、コビキA、吊り紐痕跡で、コビキBは認められなかった。おおむね15～16世紀代の所産と考えられる。石垣構築時に裏込めとして、石造品などとともに寺院や周辺施設から持ち込んだものである可能性が考えられる。瓦当文様については、周辺資料とのさらなる検討が必要である。









城外側石垣
1 a．暗灰黄色礫混砂質土
1 b．暗灰褐色砂質土
2．灰黄色礫混砂質土
3．灰色礫混砂質土
4．暗灰色礫混砂質土

城内側石垣東断面
1 a．暗灰色礫混砂質土
2．黄灰白色礫混砂質土
3．灰黄色礫混砂質土
4．黄灰色礫混砂質土
5．暗灰黄色礫混砂質土

城内側石垣西断面
1 a．暗灰色礫混砂質土
1 b．暗灰色砂質土
2．暗灰黄色礫混砂質土
3．黄灰白色砂質土
4．暗灰色礫混砂質土

□…基盤層（灰褐色系中砂）　□…基盤層（黄灰色系中細砂）

fig.21　Ⅰ区 城内側石垣　最下段平面・立面図・城外側石垣断面図

(1:60)

1m　0　1　2　3m

（5）K区　石垣の調査

K-3区東側では、南北方向からやや西にカーブする石垣の基礎部分を検出した。この石垣は18世紀後半には破壊され、埋没したものと思われる。K-2区の調査成果とあわせれば、この石垣は堀の西側肩部分と考えられ、この堀の幅は、約10m前後と考えられる。おそらく兵庫城の堀の一部に相当するものと考えられる。

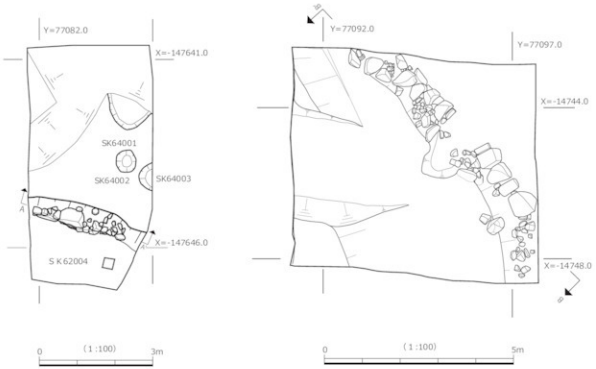


fig.22　K-3区 第１遺構面平面図

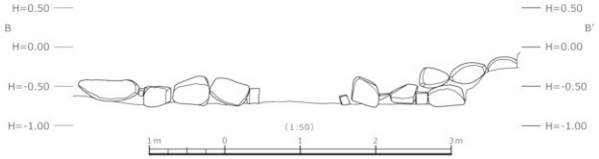


fig.23　K-3区 石垣立面図

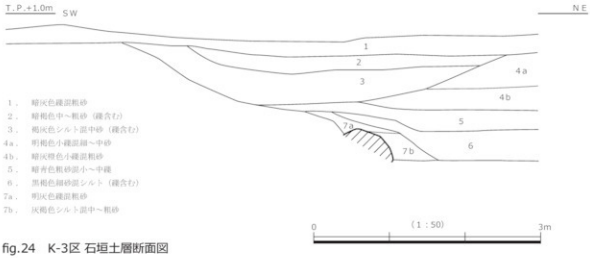


fig.24　K-3区 石垣土層断面図

SK62004としたものは、最大長3.5m、深さ0.7mを測る。北側には東から南に深くなる石垣を備え、傾斜の入り口付近には柱の礎石状の方形の石材が配置されている。石垣は最大で2段積みとなっており、石材もやや大型である。しかしながら、石材との間は密ではなく、隙間が各所に認められる。この石垣は位置関係から見て、城内の施設と考えられるが、積みなおしの可能性も残されているため、築造当初の施設である可能性は低いと思われる。遺構からは、肥前磁器草花文染付碗・唐津系抹茶碗・堺系擂鉢・土師器皿が出土しており、石垣の埋没時期は18世紀末と考えられ、城の堀が埋められる時期に近い時期と考えられる。これは、城の堀が埋められるのに対応して、城内の施設にも変化がおきていたことを示すものと考えられる。

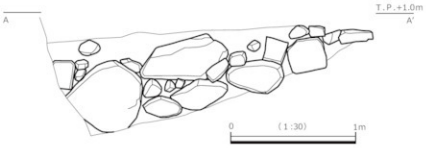


fig.25　K-3区 SK62004石垣立面図

第２節　町屋の調査

(1) Ａ区の調査

Ａ区は調査区の南西隅に位置する。汚染土、深さ１ｍ分の除去対象区域である。

今回の調査では、汚染土除去によって影響を受ける範囲までを調査対象とし、上面の盛土を重機で掘削した後、人力で攪乱を掘り下げた。その結果、2面の遺構面の調査を実施した。

Ａ区第２遺構面

おおよそ17世紀代の遺構面であるが、一部に14世紀代の遺物も確認している。

SK82001は、調査区北東付近に位置する隅丸方形の土坑である。規模は、長辺1.4m、短辺0.95m、深さ0.3mを測る。遺構からは、肥前磁器・土師器焙烙などが出土しており、17世紀代と考えられる。

SK82002は、調査区北東付近に位置する丸形の土坑である。規模は、一辺0.88m、深さ0.3mを測る。

SK82003は、調査区南付近に位置する隅丸方形の土坑である。規模は、長辺1.6m、短辺1.4m、深さ0.2mを測る。

SK82004は、調査区南東隅近くに位置し、最大幅2.75m、深さ0.4mを測る不定形の土坑である。遺構からは、龍泉窯青磁・備前擂鉢・東播系捏鉢・土師器皿などが出土しており、14世紀代の遺物も出土しているが、丹波擂鉢などの年代観から、17世紀の遺構と考えられる。

SD82001は、調査区南東付近に位置し、幅0.7m、深さ0.2mを測り、東西方向に走る溝である。この溝の延長線上に２段の石組みがある。この石組みの南側には何らかの建物が築かれていた

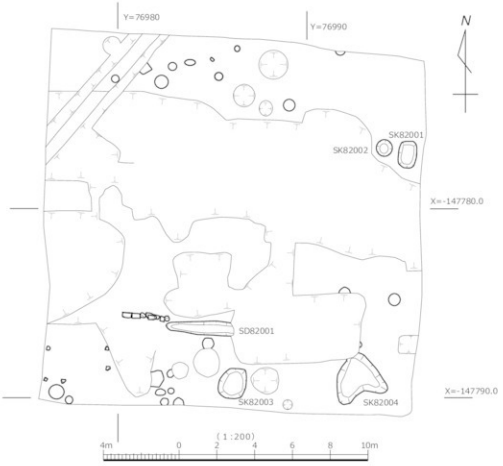


fig.26　A区 第2遺構面平面図

と考えられるが、明確に規模等を復元するには至っていない。龍泉窯青磁・丹波擂鉢・東播系捏鉢・土師器皿・石鍋などが出土しており、14世紀代の遺物も出土しているが、丹波擂鉢などの年代観から、17世紀の遺構と考えられる。そのほか、直径0.3mほどのピットSP82015からも土師器皿等が出土しており、17世紀前半の遺構と考えられる。

A区第１遺構面

18世紀代の遺構面である。攪乱によってかなり遺構面が壊されており、そのために複数面の遺構を同時に検出している。

SK81001は、調査区中央南端に位置する土坑である。この土坑は、不整形な円形を呈し、直径約0.9m、深さ0.3mを測る。

SK81002は、調査区北西隅付近に位置する、円形の掘方をもつ石組みの土坑である。規模は、掘方の直径、0.9m、深さ0.4mを測る。石組みは上部に２段組まれているが、その下は、土の埋土となっている。本来は桶状のものの上に石を組み上げていた可能性があるが、明確に木部の痕跡は検出できていない。遺構からは、丹波擂鉢・肥前磁器染付碗・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀と考えられる。

SK81003は、調査区北西隅付近に位置する、円形の土坑である。規模は、直径1.3m、深さ0.2mを測る。遺構からは、肥前磁器染付碗・土師器皿などが出土しており、18世紀後半と考えられる。

SK81004は、調査区北西付近に位置する、隅丸方形の土坑である。規模は、一辺1.5m、深さ0.3mを測る。遺構からは、肥前磁器仏飯具・土師器焙烙などが出土しており、18世紀と考えられる。

fig.27　A区 第1遺構面平面図

SE81001は、調査区中央南端に位置し、直径1.7mを測る井戸である。影響深度との関係から、深さ0.4mまでの掘削でとどめており、完掘していない。遺構からは、肥前京焼系鉢・肥前磁器染付蓋・丹波擂鉢・土師器皿などが出土しており、18世紀前半と考えられる。

SE81002は、調査区中央南端に位置し、直径1.8mを測る井戸である。影響深度との関係から、深さ0.4mまでの掘削でとどめており、完掘していない。遺構からは、肥前磁器草花文染付碗・土師器皿などが出土しており、18世紀前半であろう。

ピット群　調査区内にて多数のピットを検出している。ただし、建物として復元できるようなピット群のまとまりは確認できていない。ピットの時期はおおよそ18世紀代と考えられるが、井戸周辺のピットの一部には18世紀前半のものも含まれている。ピットの直径は、おおよそ、0.2m～0.5mを測る。

（2）B区の調査

B-1区第1遺構面

B区は1mの影響深度内では、1面の調査にとどまる。攪乱が深く及んでいたため、複数の時期の遺構を同時に検出している。

SK91001は、調査区南東付近に位置する楕円形の土坑である。規模は、最大径で、0.9m、深さ0.2mを測る。

SK91002は、調査区北付近に位置する円形の土坑である。規模は、直径0.8m、深さ0.1mを測る。遺構からは、明石擂鉢が出土しており、18世紀でも末に近い時期と考えられる。

SK91003は、調査区北付近に位置する円形の土坑である。規模は、直径1.4m、深さ0.25mを測る。遺構からは、備前擂鉢が出土しており、18世紀代時期と考えられる。なお、SE91005に切られているが双方の出土遺物からは、明確な時期差は存在しない。

SK91004は、調査区北付近に位置する円形の土坑である。規模は、直径1.0m、深さ0.2mを測る。遺構からは、肥前磁器染付碗・土師器皿などが出土しており、18世紀後半と考えられる。

SK91005は、調査区北付近に位置する円形の土坑である。規模は、直径0.9m、深さ0.2mを測る。遺構からは、肥前磁器染付碗が出土しており、18世紀代と考えられる。

SK91006は、調査区北付近に位置する土坑である。調査区外に伸びており、形状は不明である。規模は、最大幅で、1.7m、深さ0.2mを測る。遺構からは、肥前京焼系皿・土師器焙烙などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SE91001は、調査区北東に位置する石組みの井戸である。井戸内の規模は直径0.7m、掘方の直径は、1.4mを測る。遺構からは、肥前磁器染付蓋・肥前磁器草花文染付碗・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SE91002は、調査区北東に位置する方形の素掘りの井戸である。井戸の規模は一辺約1.0m、深さ0.4mを測る。遺構からは、肥前京焼系皿・肥前磁器草花文染付碗・土師器焙烙などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SE91003は、調査区北に位置する円形の素掘りの井戸である。井戸の規模は直径1.6m、深さ0.3mを測る。遺構からは、肥前磁器染付碗・明石擂鉢・土師器焙烙などが出土しており、18世紀末と考えられる。

SE91004は、調査区北に位置する円形の素掘りの井戸である。井戸の規模は直径1.5m、深さ0.5mを測る。遺構からは、肥前磁器染付筒茶碗・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、

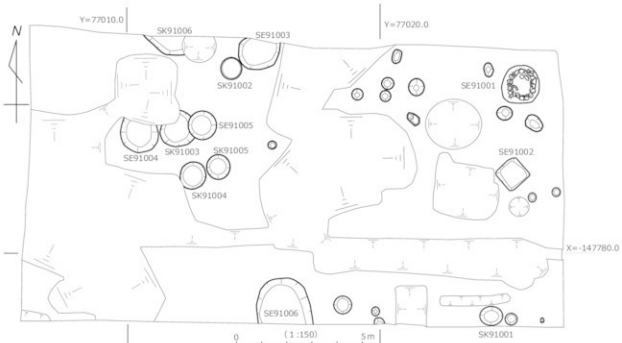


fig.28　B-12区 第１遺構面平面図

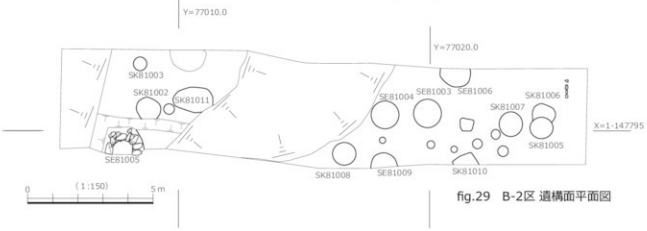


fig.29　B-2区 遺構面平面図

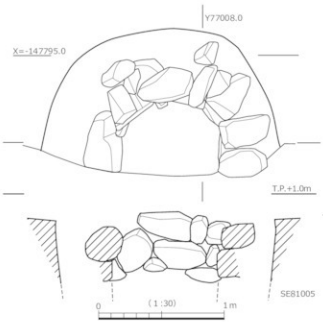


fig.30　B-2区 SE81005平面・断面図

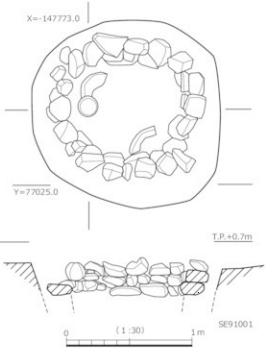


fig.31　B-2区 SE91001平面・断面図

18世紀代と考えられる。

SE91005は、調査区北に位置する円形の素掘りの井戸である。井戸の規模は直径1.1m、深さ0.4mを測る。遺構からは、備前擂鉢が出土しており、18世紀代の遺構と考えられる。

SE91006は、調査区南に位置する隅丸方形の素掘りの井戸である。井戸の規模は一辺2.1m、深さ0.4mを測る。遺構からは、土師器皿が出土しており、18世紀代と考えられる。

B－2区第1遺構面

B－2区では、1mの影響深度内では遺構に影響が及ばないため、遺構の検出にとどめた。そのため、検出した遺構の明確な時期は把握できていない。

SK81002は、最大径0.9mを測る楕円形の土坑である。遺構からは、堺擂鉢などが出土しており、18世紀後半代と考えられる。

SK81003は、直径0.5mを測る円形の土坑である。

SK81005は、直径0.9mを測る円形の土坑である。SK81006を切っている。

SK81006は、直径0.9mを測る円形の土坑である。

SK81007は、直径0.9mを測る円形の土坑である。

SK81008は、直径0.9mを測る円形の土坑である。遺構からは、土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SK81010は、一辺0.9mを測る方形の土坑である。

SK81011は、最大径1.5mを測る楕円形の土坑である。

SE81003は、直径1.1mを測る円形の井戸である。遺構からは、肥前磁器草花文染付碗・肥前磁器牡丹文染付碗・堺擂鉢・土師器焙烙が出土しており、18世紀末と考えられる。

SE81004は、直径1.1mを測る円形の井戸である。

SE81005は、石組みの井戸である。井戸内の規模は直径0.77m、掘方の直径は、1.7mを測る。遺構からは、肥前磁器染付筒茶碗・明石擂鉢などが出土しており、18世紀後半代と考えられる。

SE81009は、直径1.1mを測る円形の井戸である。

(3)C区の調査

C－1区

C－1区は、I区の南端西側に位置する調査区である。従前の建物や近代以降の開発により著しく撹乱を受けているが、T.P.0.3m～0.1mで遺構を確認した。汚染土壌の除去深度は深さ1mである。

第1遺構面

主に確認した遺構として、木枠遺構(SX101)、土坑、ピット多数を検出した。木枠遺構(SX101)は、長辺が約2m、南西側短辺0.65m、北東側短辺0.9mの長方形で残存する深さは0.16mである。底には炭化した木材の痕跡があり、さらにその下には枕木を三本横たえて下部構造としている。上部構造は、腐食により元の形状をとどめていなかったが、北東側短辺端部から0.22mに区切り板のようなものの痕跡が見られた。上部構造は削平されているため、付随する溝などの存在有無は不明である。しかし近代以降、この木枠遺構の方向に沿うようにして排水路が設けられていることから、検出した木枠遺構は江戸時代における排水溝の会所桝などの機能が考えられる。

土坑（SK101）は、この木枠遺構の南東方向で検出した。直径1.3m、深さ0.34mの円形のものである。播鉢、瓦、陶磁器が出土しており、廃棄土坑と考えられる。その他の土坑としては、調査区の南辺に直径0.7～1mのものを連なって検出したが、遺物も少なく、用途は不明である。

ピットは、直径0.2～0.4mで、建物を構成するようなものではない。

18世紀後半以降の遺構面と考えられる。

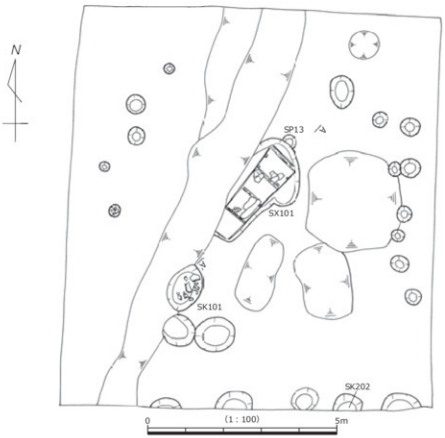


fig.32　C-1区 遺構面平面図

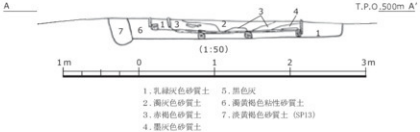


fig.33　C-1区 SX101断面図

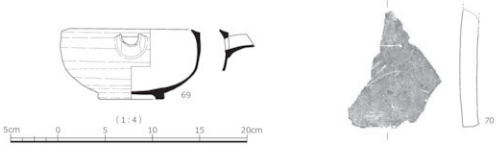


fig.34　C-1区　出土陶器・線刻瓦

C−2区第１遺構面

C−2区では、１mの影響深度内では遺構に影響が及ばないため、遺構の検出にとどめた。

この遺構面では、幕末期に存在したと考えられる石組みの溝が撤去された後の、石組みの基礎部分を確認した。石組みが築かれたのは19世紀初頭と考えられるが、撤去されたのは、19世紀中葉以降であろう。

C−3区第１遺構面

C−3区は、I区の北端北側に位置する調査区である。西側は新川運河に接しており、新川運河開削時に大きく削平を受けている。この調査区での汚染土壌の除去深度内では撹乱のみが確認され、遺構面には達していない。調査は影響深度、深さ１mをもって終了した。

fig.35　C-2区 遺構面平面図

(4)D区の調査

D−1・2区第２遺構面

D−1・2区では、汚染土除去が２mに及ぶため、鋼矢板を設置し、調査をおこなっている。上部の撹乱が激しく、第1面では複数の時期の遺構を同一面で確認しており、第２遺構面までで、すべての調査を終了している。

SK72001は、D−2区で検出した円形の土坑である。規模は、直径2.1m、深さ0.3mを測る。遺構からは、伊万里染付・備前擂鉢・丹波擂鉢などが出土しており、18世紀初頭と考えられる。

SK72002は、D−2区で検出した円形の土坑である。規模は、直径0.9m、深さ0.2mを測る。時期としては、出土遺物から、18世紀前半と考えられる。

SK72003は、D−1区で検出した隅丸方形の土坑である。規模は、長辺2.9m、深さ0.2mを測る。遺構からは、備前壺・土師器皿が出土しており、18世紀前半代と考えられる。

SK72004は、D-1区で検出した円形の土坑である。規模は、直径2.1m、深さ0.3mを測る。遺構からは、肥前磁器染付・土師器焙烙が出土しており、18世紀前半代と考えられる。

SK72005は、D-1区で検出した不定形の土坑である。規模は、最大長2.5m、深さ0.2mを測る。時期としては、出土遺物から、18世紀代と考えられる。

SK72006は、D-1区で検出した円形の土坑である。規模は、直径1.0m、深さ0.2mを測る。時期としては、出土遺物から、18世紀代と考えられる。

SK72007は、D-1区で検出した円形の土坑である。規模は、直径0.9m、深さ0.2mを測る。時期としては、出土遺物から、18世紀代と考えられる。

SK72008は、D-1区で検出した不定形の土坑である。規模は、最大長0.4m、深さ0.2mを測る。遺構からは、土師器焙烙が出土しており、18世紀前半代と考えられる。

SD72001は、D-2区で検出した東西方向の溝である。規模は、幅1.2m、深さ0.3mを測る。遺構からは、景徳鎮窯染付碗・備前擂鉢・備前壺・土師器皿が出土しており、18世紀初頭の時期と考えられる。

SX72001は、D-1区で検出した不定形の遺構である。規模は、最大長2.9m、深さ0.2mを測る。遺構からは、備前擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀初頭と考えられる。

D-1・2区第1遺構面

SK71001は、D-2区で検出した不定形の土坑である。最大長2.4m、深さ0.4mを測る。遺構からは、肥前磁器染付・丹波擂鉢が出土しており、18世紀代と考えられる。

SK71002は、D-2区で検出した円形の土坑である。規模は、直径0.8m、深さ0.2mを測る。

SK71003は、D-1区で検出した円形の土坑である。規模は、直径1.3m、深さ0.2mを測る。遺構からは、備前大甕・土師器皿が出土しており、18世紀代と考えられる。

SK71004は、D-1区で検出した円形の土坑である。攪乱により南半は失われている。規模は、直径0.8m、深さ0.1mを測る。出土遺物から、18世紀代と考えられる。

SK71005は、D-1区で検出した楕円形の土坑である。規模は、長径1.1m、深さ0.1mを測る。出土遺物から、19世紀代と考えられる。

SK71006は、D-1区で検出した楕円形の土坑である。規模は、長径1.9m、深さ0.3mを測る。遺構からは、肥前磁器染付などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SD71001は、D-2区で検出した東西方向に走る溝である。規模は、幅0.5m、深さ0.1mを測る。出土遺物から、19世紀代と考えられる。

SD71002は、D-1区で検出した南北方向に走る溝である。規模は、幅0.6m、深さ0.2mを測る。出土遺物から、18世紀～19世紀代と考えられる。

SX71001は、D-1区で検出した最大長1.6mを測る不整形の遺構である。SX71002を切っているが、出土遺物からは明確な時期差は認められない。遺構からは、肥前磁器染付・肥前系擂鉢・丹波擂鉢・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SX71002は、D-1区で検出した最大長4.4mを測る不整形の遺構である。遺構からは、肥前磁器染付・土師器焙烙が出土しており、18世紀代と考えられる。

D-3区第1遺構面

D-3区では、1mの影響深度内では遺構に影響が及ばないため、遺構の検出にとどめた。そのため、検出した遺構の明確な時期は把握できていない。

SK71007は、直径0.9mを測る円形の土坑である。

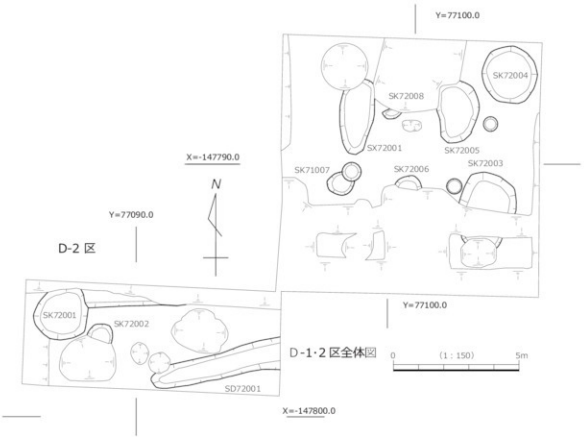


fig.36　D-1･2区 第２遺構面平面図

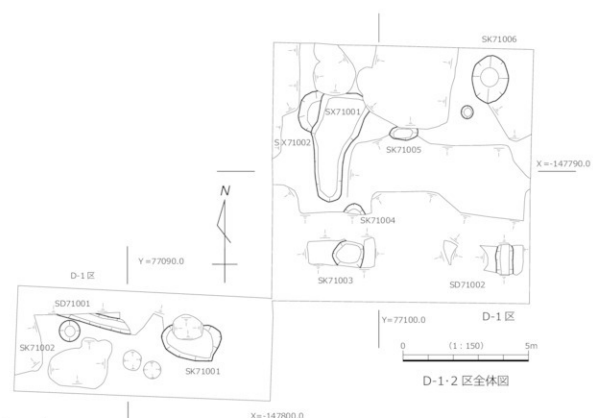


fig.37　D-1･2区 第１遺構面平面図

SK71008は、直径0.7mを測る円形の土坑である。SK71007を切っている。遺構からは、肥前磁器染付が出土しており、18世紀から19世紀代と考えられる。

SK71009は、最大長0.5mを測る方形の土坑である。

SK71010は、最大長1.1mを測る不定形の土坑である。

SK71011はSE71010に切られている最大長1.5mを測る不定形の浅い落ち込みである。遺構からは、肥前系擂鉢・肥前磁器染付碗・土師器皿などが出土しており、18世紀後半と考えられる。

SK71012は、直径0.7mを測る円形の土坑である。内部に石組みを持つ。

SK71013は、直径0.8mを測る円形の土坑である。SE71006に切られている。

SE71001は、直径0.7mを測る円形の井戸である。遺構からは、土師器焙烙が出土しており、18世紀代と考えられる。

SE71002は、直径1.1mを測る円形の井戸である。遺構からは、肥前磁器染付・土師器焙烙が出土しており、18世紀代と考えられる。

SE71003は、直径1.5mを測る円形の井戸である。遺構からは、肥前磁器草花文染付碗・堺系擂鉢・土師器焙烙が出土しており、18世紀代と考えられる。

SE71004は、直径1.3mを測る円形の井戸である。

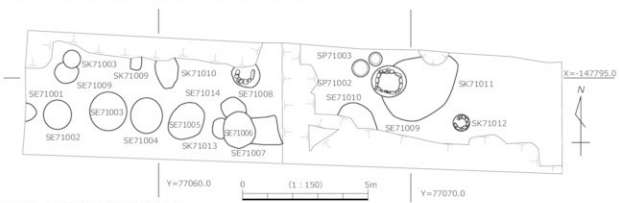


fig.38　D-3区 第１遺構面平面図

SE71005は、直径1.5mを測る円形の井戸である。遺構からは、肥前磁器草花文染付碗・土師器皿ほかが出土しており、18世紀代と考えられる。

SE71006は、直径1.2mを測る円形の井戸である。SE71006は、SE71007ならびにSE71014を切っている。遺構からは、肥前磁器染付が出土しており、18世紀から19世紀にかけての時期と考えられる。

SE71007は、一辺1.1mを測る方形の井戸である。遺構からは、肥前磁器染付碗が出土しており、18世紀代と考えられる。

SE71008は、直径1.1mを測る石組みの円形の井戸である。石組みの内径は、0.5mを測る。

SE71009は、直径1.5mを測る円形の井戸である。

SE71010は、直径1.4mを測る石組みの円形の井戸である。石組みは、やや隅丸方形を呈し、長辺0.86m、短辺0.73mを測る。遺構からは、瀬戸美濃磁器染付碗が出土しており、19世紀代と考えられる。

SE71011は、直径1.2mを測る円形の井戸である。

SE71012は、直径0.7mを測る円形の井戸である。

SE71014は、直径0.9mを測る円形の井戸である。

（5）F区の調査

F－1区 堀の埋め立てについて

土橋の南側、堀の東と南に当たる範囲が関屋町とされる町屋地域となる。堀部分については、当初の兵庫城の姿から江戸時代に描かれる絵図のような郭へと改変を繰り返し、最終的には、関屋町の町域が広がるように埋め立てが行われたようである。今回の発掘調査においても堀の埋土からは、18世紀中頃以降の遺物が大量に出土しており、古い遺物が出土しない。このことは、尼崎藩の飛び地としての管理下にあり、兵庫城跡を藩庁として利用していた時代にはゴミ一つ落とさないほど丁寧な堀の浚渫作業が行われていたことを裏付ける。

次に堀の埋土については、水性堆積である植物遺体を多く含む粘土層とその上に複数の砂礫層である一過性の埋め立て土に大きく大別することができる。このことは、明和6（1769）年の上知令により幕府直轄地となるが、すぐに埋め立てが行われたのではないため水性堆積により泥が堆積し、木製品や18世紀中頃の陶磁器が捨てられるような、未管理状態で堀が存在した時期があり、そう長く年月をおかずに多くの土砂が持ち込まれて埋め立てが行われたと考えられる。この埋土には古い遺物が含まれてこないことから、18世紀中頃に大量に瓦礫を処分する必要がある原因があったことを思わせる。

埋め立て時には、町割りの水路として、新たに石組溝を構築した。その時、東辺と南辺の石組溝を構築したのち、西辺と北辺の石組を設置したことが石組の最下段に粘土層が入り込んでいることにより確認することができた。

堀の縁辺を幅１mほどの石組溝が巡らされたのちは昭和に至るまでその石組溝を改修しながら使用し続けており、元は堀の中に当たる部分にも町屋が立ち並んでいたようであるが、中央市場建設以前から撹乱を受けているために町屋としての様相は判然としない。

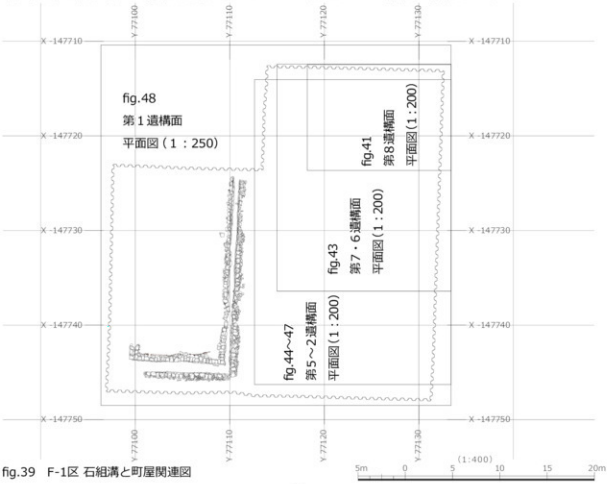
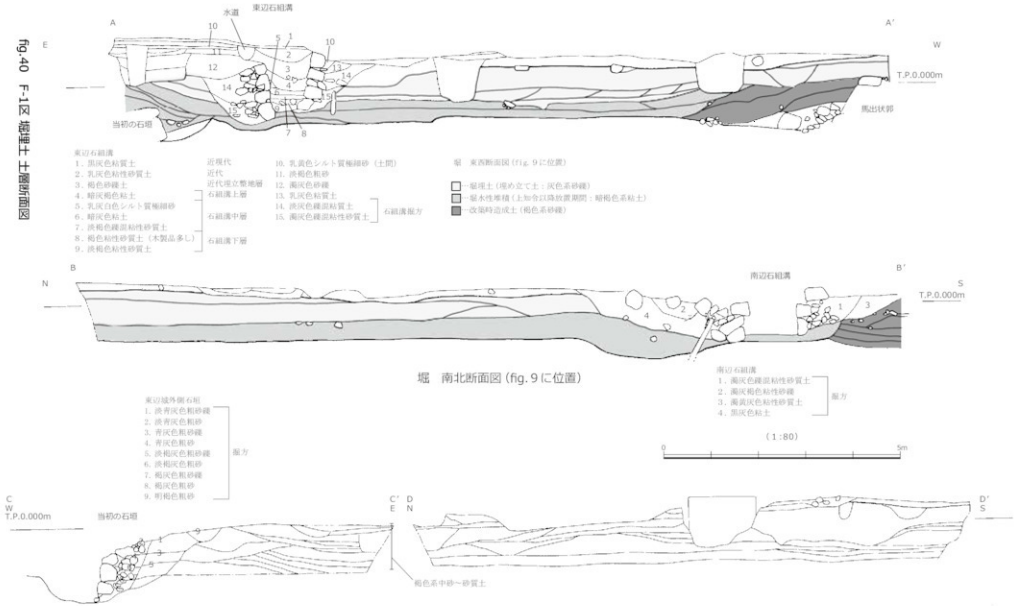


fig.39　F-1区 石組溝と町屋関連図

fig.40　F-1区 堀埋土 土層断面図



町屋の調査

堀よりも外側の町屋部分に関しても、多くは中央市場以前の撹乱と、中央市場および市営住宅に伴う建物による撹乱で実態を把握することは困難であった。

この地区については、砂礫による堆積層と三和土による土間が構築されている面などにより、面を掘り分けた。その結果、８面に分けて調査することができたので、古い面から報告を行う。

F－1区　第８遺構面

調査区の北東隅に当たる地区で、他の範囲に比べて高く安定した範囲であり、汚染土壌除去深度に抵触するためにこの部分のみを1面分を調査し、遺構を検出した。検出遺構は直径0.2m前後のピットを複数と浅い土坑を３基検出した。SK804とSP817からは接合する瓦が出土しており、同時期の遺構である。

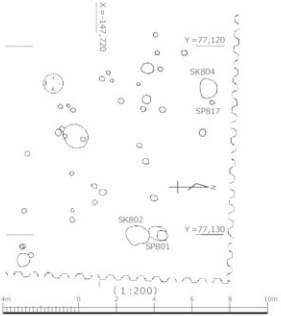


fig.41　F-1区 第８遺構面平面図

この瓦は軒平瓦で、凸面には滑り止め横桟が取り付けられている。瓦の中心部のみではなく端まで一文字に取り付けられるタイプである。また、凹面の側辺部には立桟が剥がれた痕跡があることから、引掛瓦と思われる。瓦当の文様は唐草文で、花隈城第３次調査において同文とのものが出土している。この瓦の作製年代は14世紀以降のものと考えられるが、ピット内から出土した遺物に16世紀後半の備前擂鉢が出土することから、第8遺構面は16世紀後半の生活面と考えられる。

F－1区　第７遺構面

直径0.２～0.6mのピット多数と直径１m前後の土坑5基、北東隅を区画するような溝を検出した。この溝は幅0.２～0.3m、深さ0.05mほどの溝が西側に南北方向３列、南に東西方向３列が並行して設けられている。その内側にピットが多数検出されるが、建物を構成するような配置は確認されなかった。遺構内から出土する遺物は、16世紀後半から末にかけてのものである。

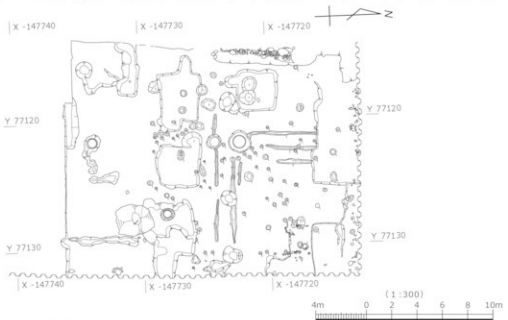


fig.42　F-1区 第７遺構面平面図

F－1区　第６遺構面

北東部に集中してピットなどの遺構を多数検出した。遺構が集中する北東部には三和土による土間が一部検出されていることから、町屋が存在したと考えられる。平面形が馬蹄形や正方形で、内側の側面に粘土を貼り付けた内部に炭を多く含む遺構を検出している。遺構の中からは、16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土している。

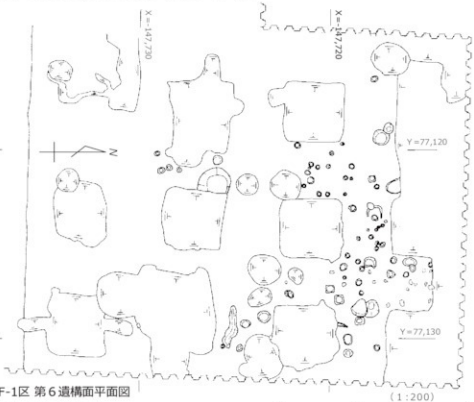


fig.43　F-1区 第６遺構面平面図

F－1区　第５遺構面

北東隅の町屋部分が明瞭に宅地として認識できた。北東隅の宅地と西側に一段下がって宅地が設けられていた。遺構からは、17世紀初頭から17世紀第２四半期のものが出土している。

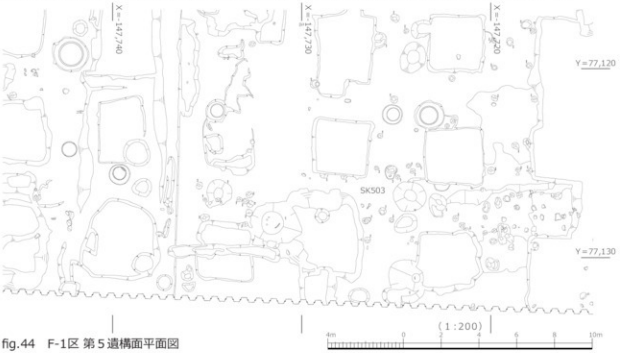


fig.44　F-1区 第５遺構面平面図

F－1区　第４遺構面

北東隅の町屋部分が最も明瞭に宅地として認識できた。宅地部分の北西に石が配置されており、周囲は炭、焼け土が見られることから、火災にあっているものと考えられる。遺構内からは、17世紀初頭から17世紀第２四半期の遺物が出土している。

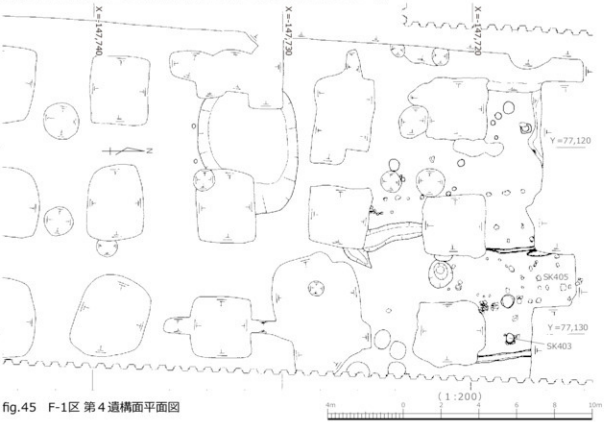


fig.45　F-1区 第４遺構面平面図

F－1区　第３遺構面

遺構が希薄な面であったが、F－1区東半のほぼ中央において検出した土坑から、大量の貝殻が投棄されたものを検出した。土坑は、直径0.8m、深さ0.15mほどのものである。遺構から出土する遺物は、17世紀第２四半期から18世紀のものである。

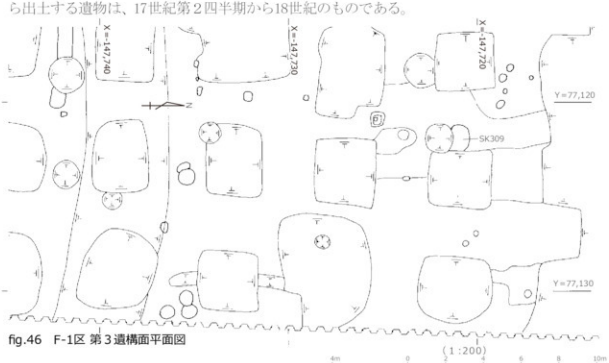


fig.46　F-1区 第３遺構面平面図

F－1区　第２遺構面

F－1区東半の南側に東西方向の溝状の落ちを検出した。SD201は第１遺構面での町屋を区切る遺構があり、有機質の染み込みにより溝のように検出された可能性がある。遺構から出土する遺物は、17世紀第２四半期から18世紀のものである。

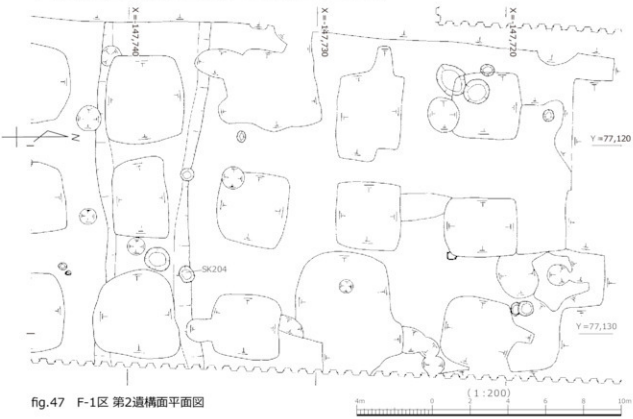


fig.47　F-1区 第2遺構面平面図

F－1区　第１遺構面

F－1区東西共に遺構が残っていた面である。ほぼ中央に南北方向の道路があり、道路を挟んで東西に旧中央市場の建物が建設されていたため、建物基礎による大きな撹乱が多いため、面的にも遺構の残存が悪い面である。

西半の石組溝の内面も昭和初期と考えられる撹乱、および焼土層により町屋の確認ができなかった。焼土層は、第２次世界大戦による戦災と考えられる。西端部では、甕を据え付けて、周辺を三和土で囲った遺構があり、その近くに作り替えた便器が据え付けられていることから、昭和の戦前までは便所として使用された場所だけが唯一、町屋としての遺構が確認されている。

石組溝よりも東側の東半地区では、西側に比べると遺構の残りが良好であった。この石組溝よりも東側において東西に並ぶ石列を検出した。石は丸みを帯びた自然石を中心として使用しており、場所によっては、内幅が0.3mほどの側溝状になっている部分もある。これらの東西方向に並ぶ石列を、南北に約６m隔てて石列が繰り返し配置されていることが確認できた。また、石列のある空隙地には石組溝のある西端にそれぞれ井戸が設けられている。この井戸と石列並ぶ場所から石組溝に排出する暗渠が一か所検出された。暗渠の蓋には一枚板が使用されている。

南北方向の石組溝東側は、現在に至るまで通路として使用されていたようであり、建物による撹乱はないが、「1898 DYS&Co」と神戸市の水道マーク「六剣水」が鋳込まれた鋳鉄製の水道管が埋設されていることからも、通路もしくは道路として従前から使用されていたこと

が窺われる。鋳鉄製の水道管については、明治31（1898）年に、神戸市がイギリスのD・Yスチュワート社に発注して製作されたことが知られている。

これらの石列の間隔や井戸の配置から、長屋の様子を彷彿とさせる町屋の区画を検出したと考えている。今後、残されている関屋町の水帳など、この区画と一致する絵図資料との考察によりこれらの区画が江戸時代後期以降の町屋の解明が期待される。

石組溝については、第２章第１節で堀が埋められる過程での構築について報告した。石組溝に使用されている石材には、一石五輪塔や層塔が転用されている。これらの転用石が使用されているのは、下部であり石組溝築造当初に使用されている。これらの転用された石造品は天正期の石垣に使用された転用石造品と様相を同じくしており、兵庫城の石垣を崩して石組溝を構築する際に再度利用したと考えられる。その他にも南東隅の最下段に使用されているものは方柱状のもので、縁石を利用したものと考えられる。場所によっては、川原石のような丸い石を利用している部分や、間知石を使用している場所などがあり、使用石材や積み方の変化などから明和上知以降に少なくとも４回以上は改修を行っているものと思われる。最下段の下には、兵庫城の堀の粘土堆積があるため軟弱であったと思われるが、胴木などは使用されていない。

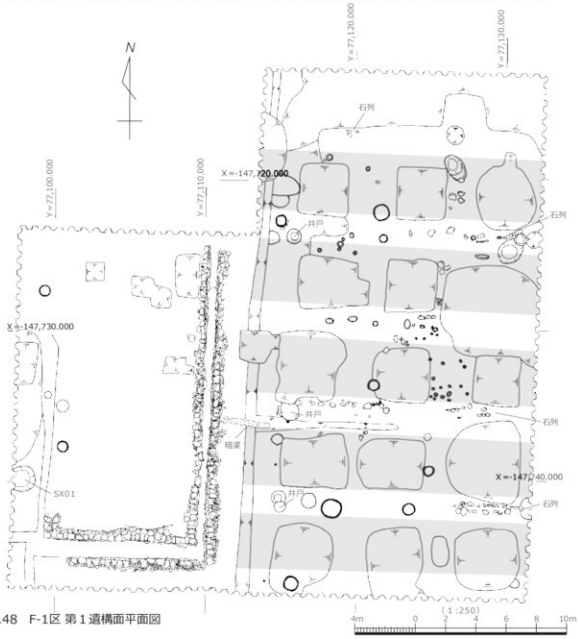


fig.48　F-1区 第１遺構面平面図

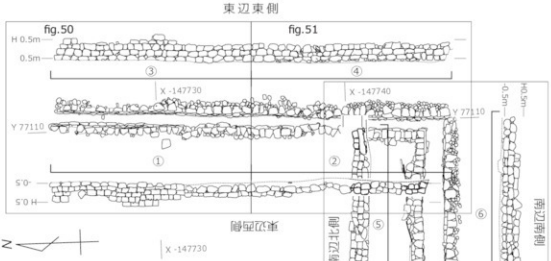


fig.49　F-1区 石組溝平面図面割

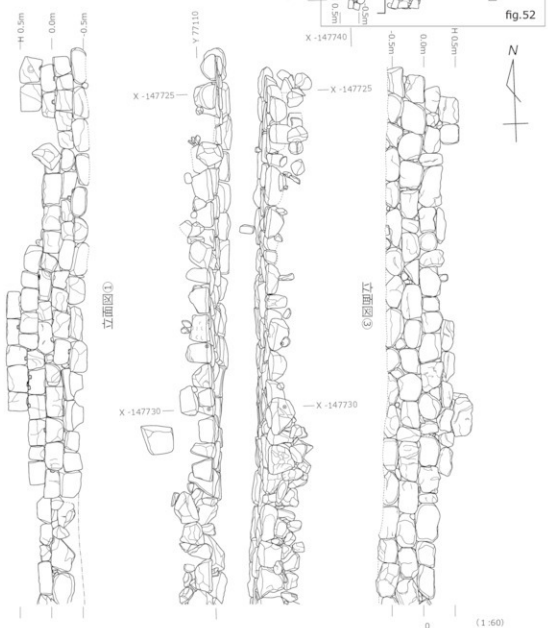


fig.50　F-1区 石組溝平面・立面図１

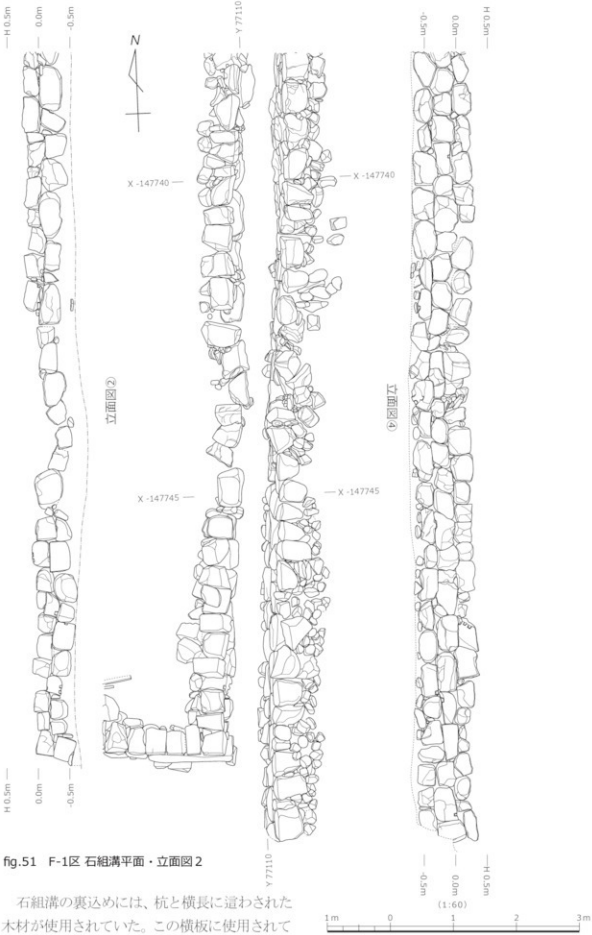


fig.51　F-1区 石組溝平面・立面図２

石組溝の裏込めには、杭と横長に這わされた木材が使用されていた。この横板に使用されていた木材は、和船の部材を転用したものを使用している。（第２章第３節参照）石組溝は、改修を繰り返して、区画を保ったまま昭和初期まで使用されており、最終的には

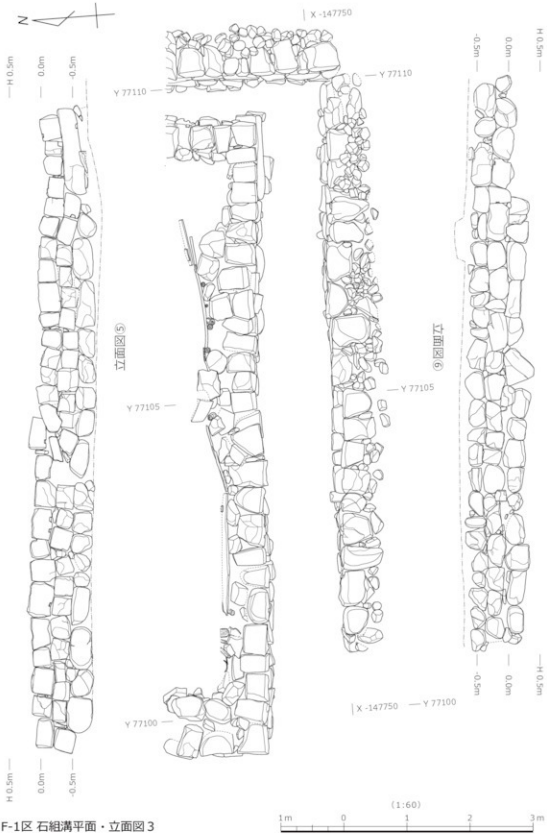


fig.52　F-1区 石組溝平面・立面図３

溝の底はあげられてレンガとモルタル、場所によっては瓦などを使用した溝に作り替えられて使用し続けられていた。

南辺の石組溝は、西端で北へ直角につけ変わっており、兵庫城の堀の区画を巡るように石組溝が巡らされて、堀内を埋め立てた新たな町屋の区画を形成していたものと考えられる。

F－2区

F－2区は、F－1区の西に隣接する調査区である。従前建物の基礎などで汚染土壌の除去深度内では撹乱のみであった。調査は影響深度の深さ1mをもって終了した。しかし、F－1区の調査結果から『元禄絵図』に見られる馬出状郭の部分に当たるため、部分的に下層確認をし、撹乱を受けていない層を確認した。その結果、堀の中から出土する粘土層は見当たらず、地盤を形成する土層が存在することから、絵図に見られるとおり、馬出状郭内面に相当する地区となることが確認できた。

F－3区

F－3区は、F－1区の北側に位置する調査区である。北端部で石組みの構造物を検出したが、近代以降の遺物を伴うため、撹乱であると判断した。そのほか、従前建物の基礎などで汚染土壌の除去深度内では撹乱されていた。調査は、影響深度の深さ1mをもって終了した。

(6)G区の調査

G区は1～3区を設定したが、いずれの地区も撹乱が著しく、汚染土除去によって影響を受ける1m以内では明確な遺構面は確認できていない。いずれも近現代の盛土内の途中でおさまっている。

(7)H区の調査

I区の東、F区の西に位置する調査区である。従前の建物基礎による撹乱の深度が深く、ほとんどが削平を受けており、島状に残った部分的な遺構面観察により町屋が存在したであろうことがうかがえたが、詳細についてはほとんど不明である。なお、方形の石列で囲われた井戸の一部を検出したが、中から鉄管が出土したため、近代以降も使用されていたものと考えられる。

H－2区

H－1区の東側に隣接する調査区である。従前建物の基礎などで汚染土壌の除去深度では撹乱のみが確認されたため、調査は影響深度をもって終了した。

fig.53　H-1区 遺構面平面図

（8）Ⅰ区の調査

南北に細長い調査区のうち、南半部で顕著に町屋の遺構を検出した。また、堀を埋め立てた後の北半部でも石組溝などの遺構を確認している。この調査区は、『元禄絵図』によると関屋町の範囲に相当する。今回検出した町屋関連の遺構の多くは18世紀以降のものである。明和6（1769）年の上知令により、北半部で検出した堀は埋め立てられ、町屋域が広がってからのものと考えられる。そこで、はじめに堀の埋め立てに関連した調査成果を記述したのち、下層の第3遺構面から第2遺構面、第1遺構面と順に記述していくこととする。

堀の埋め立てについて

Ⅰ区では幅約18m（9間）の堀を検出した。北側に城内側石垣、南側に城外側石垣が残存しており、堀の南北幅を確定することができた。この堀の埋土について、fig.55に示している。

城内側石垣、城外側石垣ともに現存する石垣に覆い被さるように石垣崩落石の土層堆積が見られる。粘性の強い明黒褐色粘質土で、栗石として使用されていたと考えられる礫や一石五輪塔、五輪塔、石仏などの石造品や多量の瓦が出土した（遺物図版25-2、30-2、31、43）。第1節で記述したように、裏込めに使用されていたと考えられる瓦については15～16世紀代の所産と考えられる。しかし、土器

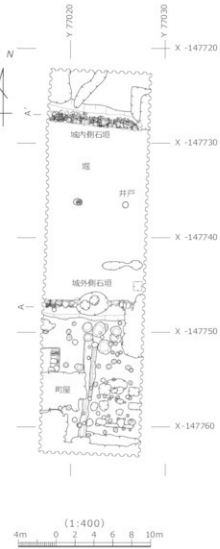


fig.54　Ⅰ区 第3遺構面平面図

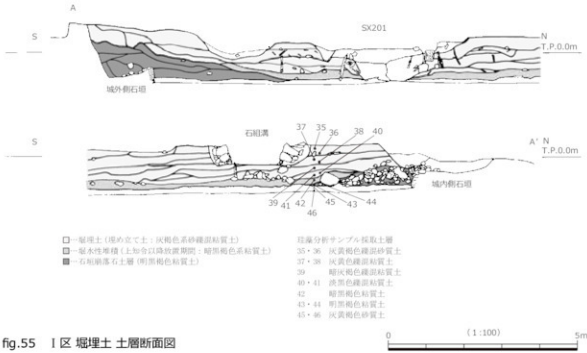


fig.55　Ⅰ区 堀埋土 土層断面図

や陶磁器類は17～18世紀代のものであった。いずれも小片である。石垣に築造後の改築がありその際に裏込めに入ったものなのか、石垣倒壊時に堀埋土の一部として紛れ込んだのか、判断は難しい。城外側の石垣は最下段以外の２段目、３段目が粗雑な積み方であることから、築城当初のものではなく、積みなおしの可能性が指摘されている。城外側石垣は裏込めの調査ができていないため、多くのことは語れないが、崩落石土層から出土した17世紀代の遺物は示唆的である。なお、この土層断面図中には城外側石垣の崩落石が明確に示せていないが、城内側の崩落石土層と同様に、石垣に使用された大きな石が検出されている（写真図版22-1）。この崩落石は、比較的並んだ状態で検出したため、前傾してきている２段目、３段目の石垣を支えるための石ではないかとの考え方もできる。しかし、城内側石垣の崩落石の状況と合わせて考えると、堀埋め立てのときの崩落石と捉えるほうが自然ではないかと考える。

崩落石土層の上層および堀の中央において最下層に堆積するのは、暗黒褐色系の粘質土である。植物遺体を多く含み、粘性が強い。陶磁器や瓦、木製品などの遺物も多く出土しており、堀埋土下層遺物として図示した（遺物図版25-3、26-1、32）。瓦や中国産陶磁器の中には古いものも含まれるが、18世紀代の遺物が大半を占める。出土遺物の年代により、明和6（1769）年の上知令前後において、堀が本格的に埋め立てられるまでの放置期間に、堀の浚渫が行われなくなったことで堆積した土層ではないかと考えられる。またこのことは、兵庫城の築城以降、尼崎藩の管理下で丁寧な堀の浚渫が行われていたことを示している。この様相は、F－1区においても同様である。

本格的な堀の埋め立て土は、砂礫混じりの灰褐色系粘質土である。検出面から１mほど堆積している。この土層中にも多量の陶磁器や土器、木製品、硯、瓦などの遺物が含まれていた。陶磁器類と瓦は堀埋土中層、上層遺物として図示している（遺物図版26-2、27-1、27-2、32、34）。中国製の磁器など古い遺物も含まれているが、多くは18世紀代の所産である。特に波佐見窯の大量生産磁器が多く見られ、上層からは19世紀代の瀬戸染付小椀も出土している。埋め立てに必要な造成土の量も、廃棄した陶磁器など生活用具の量も、とても短期間に行ったとは思えないほど多量であるが、18世紀代という遺物のまとまりが顕著であることから短期間で埋め立てたであろうことが指摘できる。

遺構面の設定について

Ⅰ区の調査では、遺構面を３面検出した。古い第３遺構面から順に記述していくが、全体平面図に示した遺構が必ずしも同時期のものとは限らないという問題を含んでいる。第３遺構面では、北半部に石垣をともなう堀、南半部に溝やピットなど町屋の遺構を示しているが、南半部の遺構の大半は堀埋没後の遺構であると考えられる。そうすると、第３遺構面南半部の遺構は、第２遺構面としたSX201と同時期の可能性がある。

このように、調査区の北半部と南半部において、平面図における同時性を図示できていない場合がある。出土遺物の検討も含めながら詳述していきたい。

Ⅰ区第３遺構面

調査区南半部の町屋域について記述する。検出した遺構は、ピット43基、土坑７基、溝２基、カマド３基である（fig.56）。遺物は18世紀代の陶磁器や土器の小片が多い。第３遺構面上層の第２遺構面基盤層には19世紀代の遺物が含まれていることからも、第３遺構面は18世紀後半頃の遺構面ではないかと考えられる。しかし、複数時期の遺構を同一面で検出している可能性も高い。遺物は、古い時期のもの、遺構に関わるものを中心に図示した（遺物図版29-2）。

ピットは径約0.3～0.5m、深さ約0.3～0.55mである。複数基検出したが、建物等を明確に見出すことはできなかった。ただし、特徴的なものとして、SP315・322・327・328・331・349をあげておく。いずれも埋土中心付近に径0.1～0.2mほどの黄灰色粘質土が検出され、柱痕跡である可能性が考えられる。SP327・328・331、および黄灰色粘土は検出していないがSP330を含めると、柱間約0.7mで東西方向に並ぶ。これらのピットからの出土遺物はとても少ないが、SP322・331から出土した土師質の鍋と皿（537・538）はいずれも17世紀代のものと考えられ、第３遺構面出土遺物の中でも古い時期の遺物である。城外側石垣掘方からは約８m離れた位置にあり、堀や石垣が機能していたころの遺構である可能性も指摘しておきたい。

土坑は７基検出した。大きいもので径1.08mを測る。遺物はSK304出土の江永窯染付碗を図示した（541）。その他、陶磁器片や柿釉

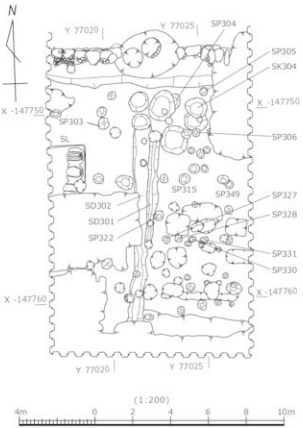


fig.56　Ⅰ区 第３遺構面 町屋平面図

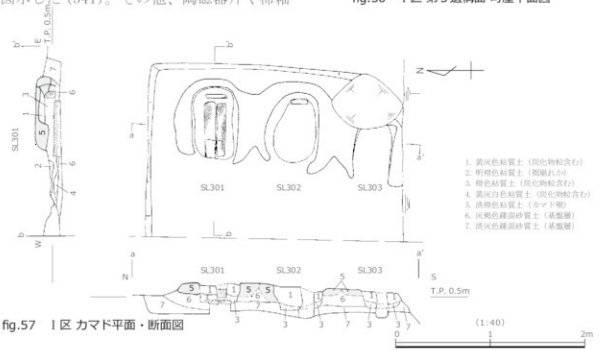


fig.57　Ⅰ区 カマド平面・断面図

皿、瓦などが出土している。いずれも小片であるが、18世紀後半に位置づけられる。

溝は調査区中央付近で、南北方向に２条検出した。SD301と302は新旧関係にあり、SD301がSD302より新しい。SD302からは14世紀代の東播系擂鉢が出土している(542・543)。２個体とも口縁部と底部との接合関係はないが、胎土や色調から同一個体である可能性を考え復元図化した。直接遺構の年代を決めるものではないが、当地の中世における土地利用や造成過程を知る上で貴重な資料である。その他、２条の溝からは磁器片や土師質皿などが出土している。石垣掘方との切り合い関係を確認することはできなかったが、おそらく18世紀後半以降の遺構であると考えられる。

カマドは焚口を西に向けて設置されている(fig.57)。３連１組で北からSL301・302・303とした。淡橙色の粘土によって馬蹄形に構築され、裾部は途中まで共用しているが、先端で分かれている。SL301とSL302には扁平な凝灰岩が用いられていた。もっとも残存状況が良好なSL301では、燃焼部に長さ60cm、幅12cm、厚さ８cmの凝灰岩を２個並べ、奥壁には24cmほどの同様の凝灰岩を横に立てている。埋土には炭化物粒や壁面の粘土ブロックが含まれており、SL303からは土師質皿の小片が出土した(遺物図版29-2・536)。手づくねで作られ、口縁が広がる形状から17世紀前半代かと考えられるが、この小片だけでカマドの年代を確定するのは難しい。その他陶磁器が出土しているが、いずれも小片である。カマド検出時には、柿釉を施した在地系土師質の花入れ(545)や軟質施釉陶器(544)が出土している。18世紀後半から19世紀代のものと考えられ、カマドも19世紀頃には廃棄されたと見られる。

Ⅰ区第２遺構面

第２遺構面は、堀を埋め立てた後の調査区北半部と、南半部の町屋域で、ピット10基、井戸１基、性格不明遺構１基を検出した。

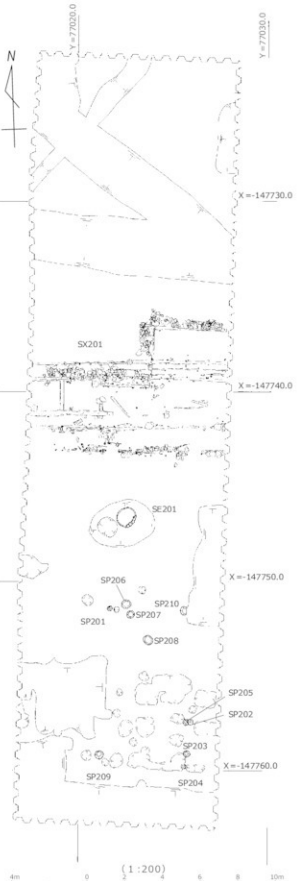


fig.58　Ⅰ区 第２遺構面平面図

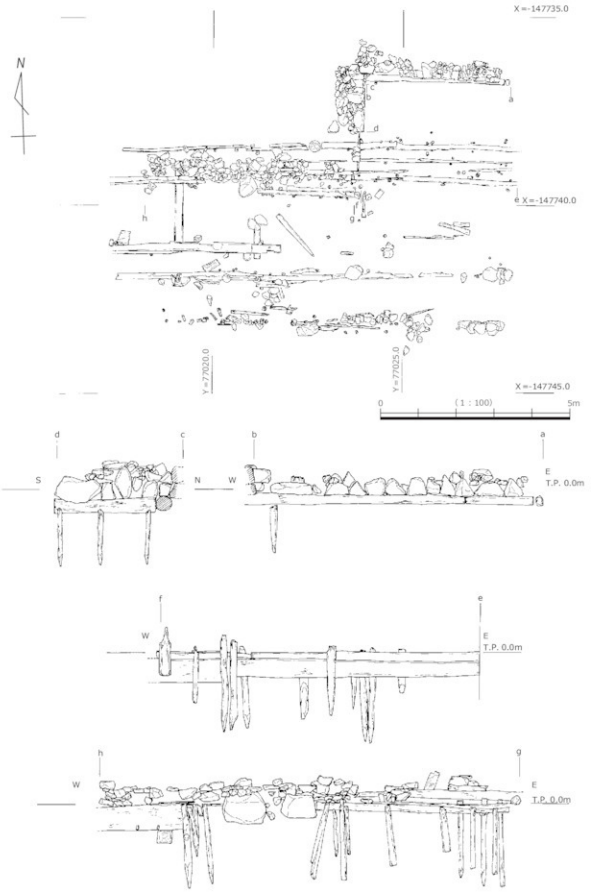


fig.59　Ⅰ区 SX201 平面・断面図

ピットは径0.23～0.5m、深さ0.1～0.48mで、調査区南半部の町屋域で検出した。遺物は陶磁器片や土師質片、瓦片などが出土しているがいずれも小片である。南半部の第２遺構面の基盤層には、18世紀後半から19世紀代と考えられる遺物が含まれている。このことからも、南半部の第２遺構面は19世紀以降の遺構面と考えることができる。遺物はいずれも小片のため図示できていないが、第２面基盤層中から出土した中国製翡翠釉菊皿を図示した（遺物図版29-2・547）。16世紀末～17世紀初頭のものと考えられ、直接遺構に関連する遺物ではないが、この遺跡に特徴的な交易による品物として取り上げた。

井戸SE201は、城外側石垣の中央に掘られていた井戸である。木枠の井戸で径1.34mである。掘方は隣接する近代の井戸により、大きく削平されている。井戸枠内の埋土は暗灰色砂質土で、粘土ブロックを含む。陶磁器や瓦が出土しているが、いずれも破片である。18世紀後半頃の所産と考えられる。

性格不明遺構SX201は、堀を埋め立てた調査区北半部で検出した。東西、南北に板材や丸太材を据え、木杭を打ち込んで押さえた土台を作り、その上部に石材を積んでいる。石材は、大きいもので約60cm、残存状況の良いａ－ｂ間では25cmほどの大きさに揃っている。石はａ－ｂ間では南に、ｂ－ｄ間では東に面を持つように積まれ、南北幅1.5mの長方形の区画を作っている。立面図を示せていないが、南端には東西方向に、北側に面を持った石積みも検出している。裏込めとみられる拳大の石も多く検出され、おそらくｇ－ｈ間にも同様の石積みがあったものと考えられる。２段に積んでいる箇所を確認しているが、積み方は粗雑で、隙間もある。石積みは最大50cmで、ほぼ垂直に積まれている。土台となっている木材の中には、長さ約200cm、20cm角の大きな角材（894）や、長さ430cm以上の船材の転用材（888）もあった（遺物図版50木製品については第３節に記す）。遺構の用途は不明である。

SX201からは多くの陶磁器や木製品が出土し、貝殻などの動物遺体も見つかっている（遺物図版27-3、遺物図版28-509・510、遺物図版33-599・600）。埋土は堀の埋め立て土と類似している。埋土下層からは、瀬戸染付碗など19世紀代の遺物が出土している。SX201は、18世紀後半の堀の埋め立てののち作られ、19世紀初め頃には埋没したと考えられる。

Ⅰ区第１遺構面

第１遺構面では、北半部で石組溝、南半部でピット21基、土坑13基を検出した（fig.61）。石組溝は、調査区北半部で東西方向に構築されているのを確認した（fig.62）。南北幅は1.2m、検出面からの深さは0.85mであった。石材は大きいもので50cmほど、多くは20～40cmほどの大

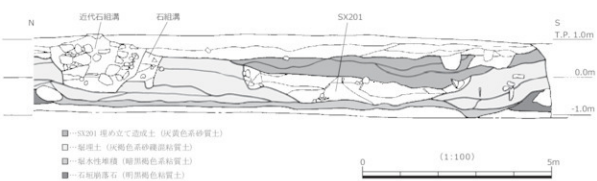


fig.60　Ⅰ区 SX201・石組溝土層断面図 東壁部分

きさである。南側で３段、北側で２段に積まれている状況を確認した。石の表面にはゲンノウハツリ痕が見られ、落し積みされている箇所もある。基礎は径13cmほどの丸太材を胴木としている。石積みの技法やハツリ痕などからも18世紀後半から19世紀初頭頃に構築されたものと見られる。埋土からは多くの遺物が出土した（遺物図版28）。埋土には19世紀代の瀬戸染付ぐい呑みなどが含まれており、石組溝の東端が明治７（1874）年に開削された新川運河に直行する石組溝により削平を受けていることから、19世紀半ばころには埋められたと考えられる（写真図版23）。

石組溝と第２遺構面SX201は同時存在の可能性も考えられるが、そのことを明確にすることはできなかった。東壁土層の観察では、どちらも同じ土層から切り込んでいる（fig. 60）。SX201埋め立て造成土と石組溝との関係が判然としないが、石組溝は他の調査区と比較しても当時はもう少し高さがあったと考えられるため、SX201が先に埋没したことは想定できる。石組溝の構築年代や、SX201の性格を考える上で重要な点であるが、明確にすることができなかった。

ピットは小さめのもので径0.22～0.44m、深さ0.1～0.45m、柱痕跡を残す大きめの柱穴で径0.45～0.93m、深さ0.75～0.87mであった。小さめのピットのうち、SP108・109には黒褐色土の柱痕跡が確認できた。柱穴であったと考えられるが、柱筋の通る遺構は確認できなかった。柱痕跡を残す大きめの柱穴は、SP101・102・103・111・112である。SP101・102・103には、径20cmほどの柱材が残っていた。遺物は少なく、図示できたものもごく少量である（遺物図版29-2・549-551・553）。SP101・102・103・111がレンガを用いた近現代の土管に切られているので、19世紀前半頃の遺構と考えられる。

土坑は13基検出した。そのうち、SK104・105・110・112は平面長方形で壁面を粘土で囲んだ

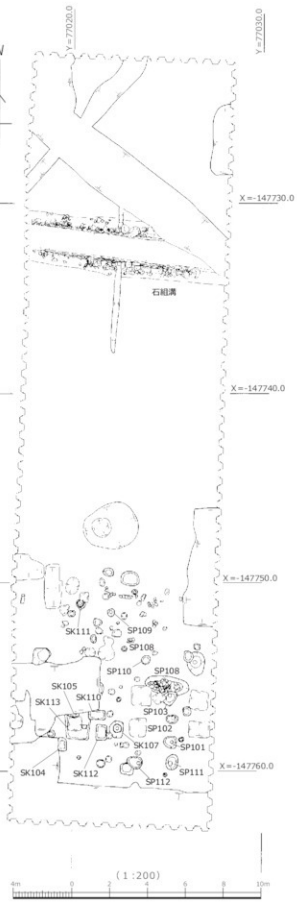


fig.61　Ⅰ区 第1遺構面平面図

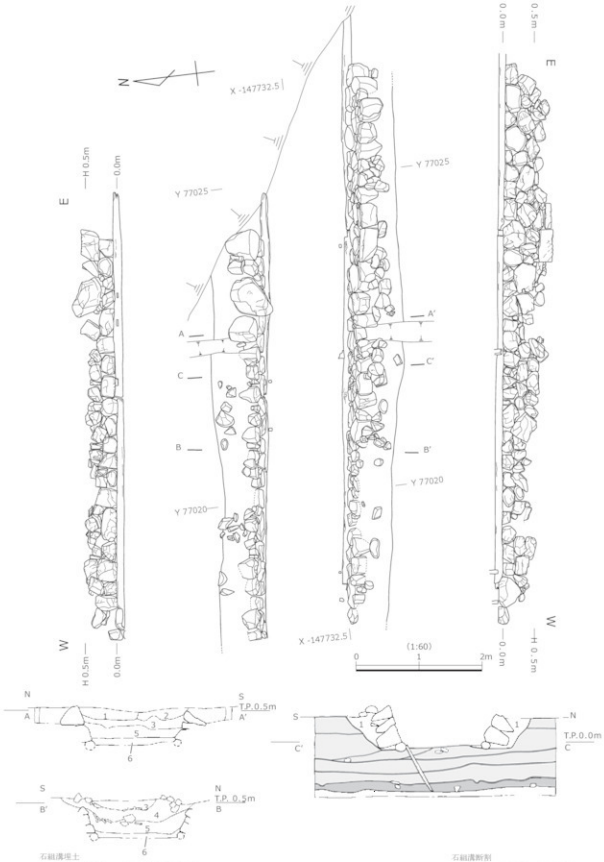


fig.62　Ⅰ区 石組溝平面・立面・断面図

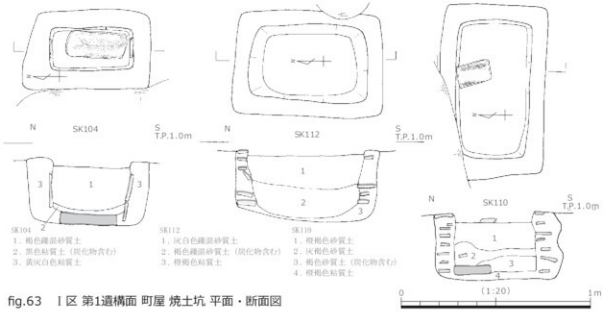


fig.63　Ⅰ区 第1遺構面 町屋 焼土坑 平面・断面図

土坑である（fig.63）。短辺0.42～0.55m、長辺0.55～0.9mの平面長方形を呈し、深さは0.35mほどである。壁面の粘土は瓦片を支持材として埋め込みながら構築されている。粘土は橙褐色で、埋土下層には炭化物も検出したことから、内部で焼成を行う施設であったと考えられる。壁面の瓦材から18世紀後半から19世紀前半頃の遺構と考えられる（遺物図版29-2・552）。

近代の遺構面

第1遺構面上層で、レンガや間知石を使用する近代の遺構面を検出している（写真図版23-1～3）。近代遺構上層面では、新川運河の方位に規制されるような地割りとなっていることがわかる。石組溝は運河に直交し、間知石列は並行している。運河開削によって、近世以来の土地利用が大きく変わったことを示している。

最下層遺構

最後に、堀底から検出した遺構について記述する。堀底から井戸と石の詰まった土坑を検出している（fig.54）。いずれも堀底面以下の掘削は行われないため、平面で確認したのみである。井戸は埋土の状況を上層部分だけであるが確認することができた（fig.64）。幅10～20cmの板材を縦方向に用いた径0.66mの円形の井戸である。埋土からは五輪塔の火輪部や、瓦、陶磁器、土師器、瓦器などが出土した（遺物図版29-1、遺物図版33-601、遺物図版43-811）。16世紀末から17世紀初頭と考えられるもので、堀の開削にともなって埋め立てられたと考えられる。兵庫城築城以前の調査区周辺の様相についてはまだ不明な点が多いが、こうした遺構の存在から、生活城があった可能性が考えられる。

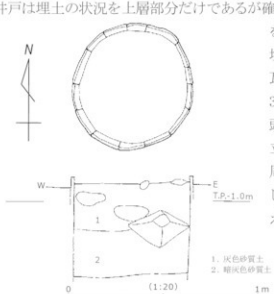


fig.64　Ⅰ区 堀底検出井戸 平面・断面図

(9)K区の調査

K-1区第3遺構面

この調査区では、鋼矢板を設置し、調査をおこなっている。

第3遺構面では、土坑と溝を確認している。

SK13001は、1.6m×0.8m、深さ0.2mを測る隅丸方形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付碗・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、17世紀代前半と考えられる。

SK13002は、0.8m×0.6m、深さ0.3mを測る隅丸方形の土坑である。

SK13003は、1.1m×0.9m、深さ0.1mを測る隅丸方形の土坑である。

SK13004は、0.8m×0.7m、深さ0.1mを測る隅丸方形の土坑である。

SK13005は、0.9m×0.5m、深さ0.2mを測る隅丸方形の土坑である。

SK13006は、0.9m×0.6m、深さ0.1mを測る不定形の土坑である。

SK13007は、0.8m×0.6m、深さ0.1mを測る隅丸方形の土坑である。SD13002に切られている。

SP13001は、0.6m×0.4m、深さ0.1mを測る隅丸方形のピットである。

SP13002は、0.8m×0.6m、深さ0.1mを測る楕円形のピットである。

SP13003は、0.7m×0.6m、深さ0.1mを測る楕円形のピットである。

SD13001は、幅0.5m、深さ0.1mを測り、東西方向に走る溝である。SD31002は、SD31003に繋がる溝である。遺構からは、丹波擂鉢・肥前磁器草花文染付碗・土師器皿が出土しており、17世紀後半から18世紀代と考えられる。

SD13003は、幅0.85m、深さ0.3mを測り、東西方向に走る溝である。

この面の遺構の時期は、出土遺物より17世紀前半と考えられる。

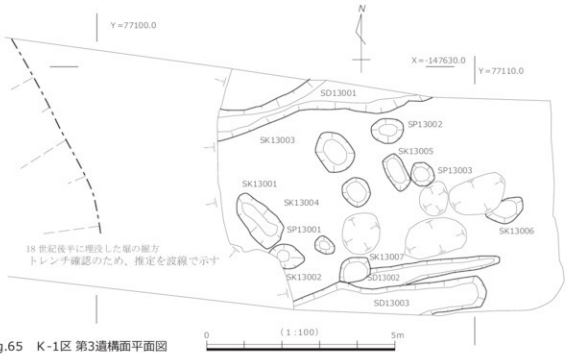


fig.65　K-1区 第3遺構面平面図

K－１区第２遺構面

調査区西側は、堀状遺構保存のため、下層については部分的に断ち割りをおこなったに過ぎない。

西側では、石組みの溝や素掘の溝ならびに土坑を確認した。

SP12001は、1.0m×0.7m、深さ0.1mを測る隅丸方形の土坑である。

SP12002は、最大長0.8m、深さ0.1mを測る楕円形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付碗・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SP12003は、1.4m×0.9m、深さ0.3mを測る隅丸方形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付碗・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SP12004は、1.3m×0.8m、深さ0.2mを測る隅丸方形の土坑である。遺構からは、堺系擂鉢・肥前磁器赤絵染付碗・肥前磁器草花文染付碗・肥前磁器二重網目文染付碗・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀前半と考えられる。

SP12005は、1.0m×0.8m、深さ0.2mを測る隅丸方形の土坑である。遺構からは、肥前磁器二重網目文染付碗などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SP12006は、1.2m×1.0m、深さ0.5mを測る２段落ちの隅丸方形の土坑である。遺構からは、肥前京焼系碗・伊万里白磁小碗・堺擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SP12007は、1.5m×1.0m、深さ0.5mを測る２段落ちの隅丸方形の土坑である。遺構からは、肥前磁器草花文染付碗・瀬戸美濃系擂鉢・信楽擂鉢・大阪系焼塩壺・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀前半と考えられる。

SP12008は、0.8m×0.5m、深さ0.3mを測る隅丸方形の土坑である。遺構からは、肥前磁器草花文染付碗・土師器焙烙などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SD12001は、幅0.6m、深さ0.2mを測り、東西方向に走る溝である。遺構からは、堺系擂鉢・丹

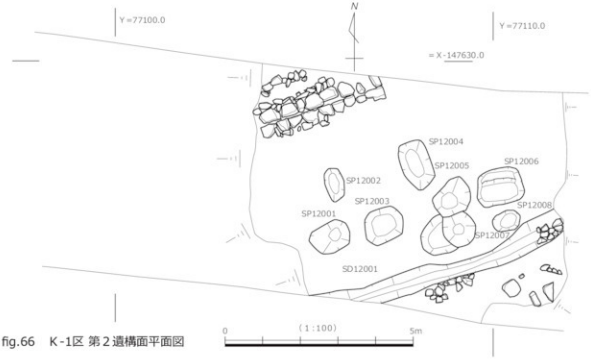


fig.66　K-1区 第２遺構面平面図

波擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。
調査区北側に位置する石組みの溝は、幅0.1m、深さ0.15mを測り、東西方向に走る。
SD12001とこの石組み溝との間隔はおよそ５mである。遺構からは、堺系擂鉢・丹波擂鉢などが出土しており、18世紀代と考えられる。
調査区西端では、堀が埋められた痕跡を確認している。壕が確実に埋没したのは18世紀後半と考えられる。これらの遺構の時期は、出土遺物から。18世紀代と考えられる。

K-１区第１遺構面

調査区西側で、石組溝SM11001を検出している。溝幅は、1.85m、残存している最深で、0.5mを測る。周囲の遺構の状況から見て、本来は深さ１mほどであったと考えられる。この石組溝に使用されている石材は方柱石や自然石に近い割り石などであり、西と東では使用石材に違いが認められる。石材に使用のあり方から、補修時に使用されたか、築造時の石材かは明確にできないが、全体のバランスから見て、この石組溝のために用意された石材というより、転用により集められた石材が使用されているものと考えられる。
調査区東側では、東西方向の道路側溝とおもわれる溝とそれに直交する幅1.8mほどの道路を確認している。この道路に面して、東側には、建物が築かれていたと考えられるが、規模等は確認できていない。
調査区北側の東西方向に走る道路側溝は、幅、0.34m、深さ0.25mを測る石組みの溝である。この溝は、西に位置する石組溝につながっていたと考えられ、道路もおそらくこの石組溝に接していたと考えられる。
石組溝の中には、杭状の丸太が何本も打ち込まれており、その方向は石組溝に直行する方向で、それぞれ３列確認できる。また、石組溝の埋土内には、多数の板材が出土している。これらのことから、道路（推定幅3.6m）から石組溝を渡る簡単な橋状の構造物がここに築かれていた可能性が考えられる。
この遺構面は、19世紀前葉から中葉にかけての時期と考えられる。

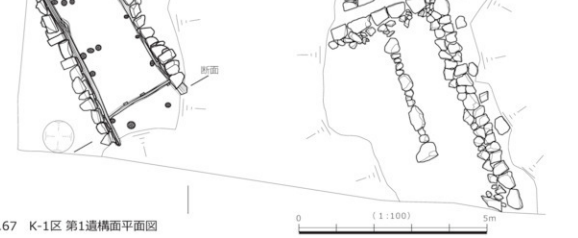


fig.67　K-1区 第1遺構面平面図

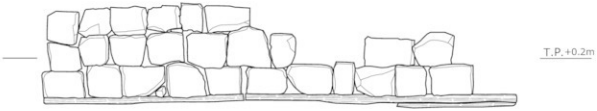


fig.68　K-1区 SM11001西側石組

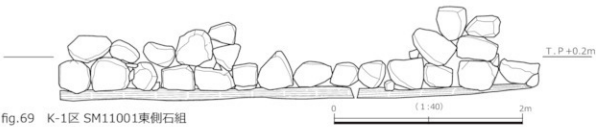


fig.69　K-1区 SM11001東側石組

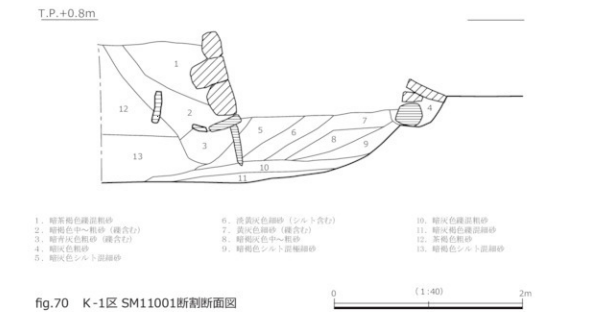


fig.70　K-1区 SM11001断割断面図

K－２区第４遺構面

SK24002は、2.1m×2.2m、深さ0.5mを測る隅丸方形の土坑である。SE24001を切っている。遺構からは、肥前磁器染付・備前壺・唐津系盤・丹波擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、17世紀から18世紀前半代と考えられる。

SK24003は、幅3.1m、深さ0.4mを測る土坑である。遺構からは、肥前磁器染付・丹波擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀前半代と考えられる。

SK24005は、深さ0.3mを測る土坑である。遺構からは、肥前磁器染付碗・丹波擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀前半代と考えられる。

SK24006は、最大幅1.9m、深さ0.6mを測る土坑である。遺構からは、肥前磁器染付碗などが出土しており、18世紀前半代と考えられる。

SK24007は、最大幅1.8m、深さ0.6mを測る土坑である。遺構からは、肥前磁器染付碗・

fig.71　K-2区 第4遺構面平面図

fig.72　K-2区 第3遺構面平面図

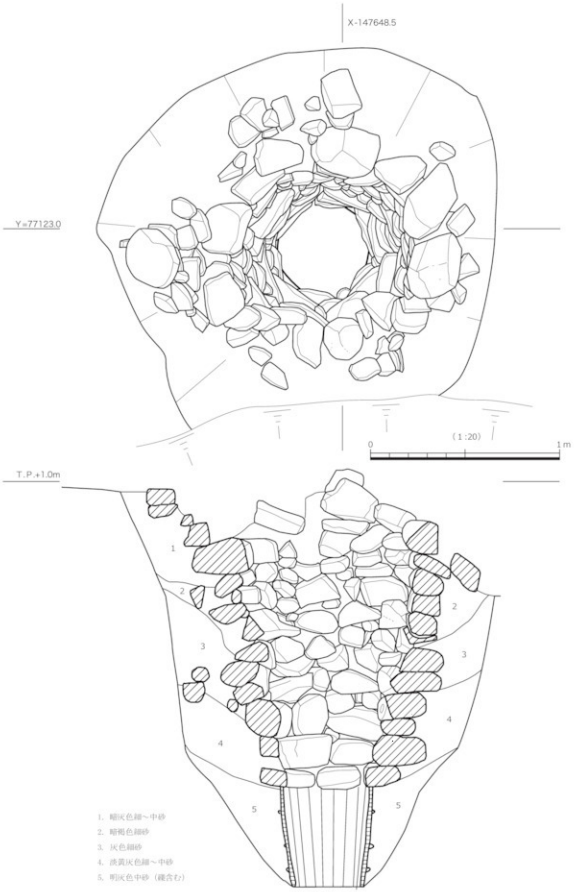


fig.73　K-2区 SE24001平面・立面図

堺系擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀前半代と考えられる。

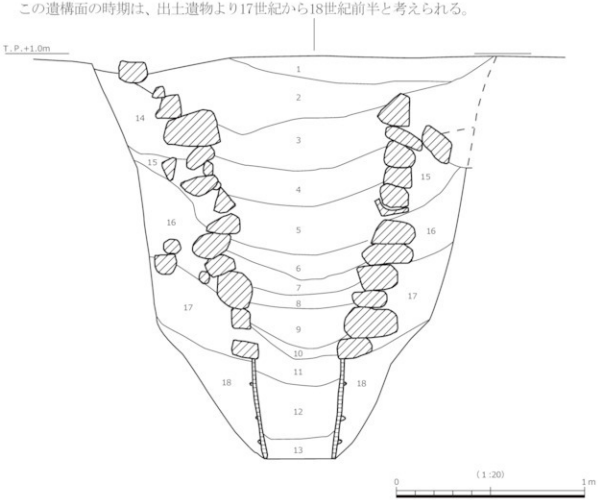
SK24008は、1.2m×0.6m、深さ0.3mを測る楕円形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付・丹波擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀前半代と考えられる。

SK24009は、1.4m×0.9m、深さ0.1mを測る楕円形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付・丹波擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀前半代と考えられる。

SD24001は、幅1.1m、深さ0.2mを測り、東西方向に走る溝である。遺構からは、景徳鎮窯青花碗・丹波擂鉢・土師器皿などが出土しており、17世紀から18世紀前半代と考えられる。

ＳＥ24001は、石組みの円形の井戸である。石組みの井戸の内径は、約1.0m、深さ約2.0mを測る。掘方の直径は約２mである。この井戸は、最下段に深さ0.5mの桶を据え、掘方を埋めて周囲を固めてから上部に石を組んで井戸を構築している。この井戸は、18世紀前半に埋没したと考えられるが、井戸最下層の桶内からは景徳鎮窯青花碗・漳州窯青花碗・備前擂鉢・丹波擂鉢・土師器皿などが出土しており、これらの遺物が16世紀末から17世紀初頭の時期を示していることから、井戸の構築時期は17世紀代と考えられる。

この遺構面の時期は、出土遺物より17世紀から18世紀前半と考えられる。



1．灰色礫混粗砂
2．淡黄灰色細砂
3．明褐灰色細～中砂（礫含む）
4．黄灰色細砂
5．黄灰色中～粗砂
6．明灰色中～細砂
7．明褐色中～粗砂
8．暗灰褐色細砂
9．淡褐灰色細～中砂
10．淡茶褐色細砂
11．明灰褐色細砂
12．淡青灰色細砂
13．暗灰色シルト混細砂
14．暗灰色細～中砂
15．暗褐色細砂
16．灰色細砂
17．淡黄灰色細～中砂
18．明灰色中砂（礫含む）

fig.74　K-2区 SE24001断面図

K−2区第3遺構面

SK23001は、1.2m×1.1m、深さ0.5mを測る楕円形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付・備前壺・丹波擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SK23002は、0.8m×0.6m、深さ0.3mを測る隅丸方形の土坑である。土坑内には甕が伏せて置かれており、甕の内部には石が充填されていた。よって、この遺構は水琴窟と考えられる。遺構からは、肥前磁器染付・柿釉土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SK23003は、1.2m×1.1m、深さ0.5mを測る隅丸方形の土坑である。この土坑は2段落ちの形状をしており、素掘りの井戸であった可能性が考えられる。遺構からは、肥前磁器染付・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SK23004は、深さ0.3mを測る土坑である。攪乱により、形状は不明である。遺構からは、肥前磁器染付・備前甕・丹波擂鉢・土師器焙烙などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SK23005は、2.6m×1.3m、深さ0.5mを測る不整形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付碗・丹波甕・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SK23006は、1.1m×0.9m、深さ0.2mを測る隅丸方形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付・堺系擂鉢・土師器焙烙などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SK23007は、2.4m×1.7m、深さ0.2mを測る隅丸方形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SK23008は、直径0.9m、深さ0.5mを測る円形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付・土師器焙烙などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SK23009は、幅0.9m、深さ0.3mを測る土坑である。

SD23001は、幅0.6m、深さ0.3mを測り、東西方向に走る溝である。遺構からは、肥前磁器染付碗・丹波擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。

SD23002は、幅1.7m、深さ0.2mを測り、東西方向に走る溝である。遺構からは、肥前磁器染付・堺系擂鉢・土師器皿などが出土しており、18世紀代と考えられる。調査区西端では、堀が埋められた痕跡を確認している。堀が確実に埋没したのは18世紀後半と考えられる。

この遺構面の時期は、出土遺物より18世紀中〜後半を中心とした時期と考えられる。

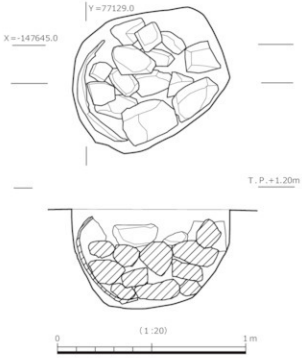


fig.75　K-2区 SK23002平面・断面図

K−２区第２遺構面

第２遺構面では、土坑ならびに溝を検出した。

SK22001は、直径1.7m、深さ0.1mを測る円形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付碗などが出土しており、18世紀から19世紀代と考えられる。

SD22001は、幅1.3m、深さ0.3mを測る溝である。遺構からは、肥前磁器染付碗・堺系擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀から19世紀代と考えられる。

SD22002は、幅0.4m、深さ0.3mを測る溝である。一部に裏込めを丁寧に施した石組部分があり、本来は石組みの溝であった可能性が高い。SD22001とSD22002は、共に東西方向に並行して走る溝であり、溝間の幅は約２mを測る。この溝は道路側溝である可能性があるが、確定するには至っていない。遺構からは、肥前磁器染付碗・堺系擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀から19世紀代と考えられる。

これらの遺構の時期は、出土遺物から。18世紀末～19世紀初頭と考えられる。

K−２区第１遺構面

この遺構面では、K−1区に継続する堀状遺構や土坑、溝などを検出した。

石組溝SM21001は、幅2.1m、深さ0.6mを測る。本来は深さ１mほどであったと推定できる。石組の掘方からは、肥前磁器染付碗・瀬戸美濃磁器染付碗・土師器皿などが出土しており、石組溝の構築時期は、19世紀初頭と考えられる。

トレンチによる確認調査にて断面で検出されたこの石組み溝築造以前の井戸は、堀埋没後に築かれたもので、石組み溝築造時に取り壊されたものである。井戸の最終堆積内からは、肥前磁器染付碗・明石擂鉢等が出土しており、井戸の埋没は19世紀初頭と考えられる。よって、井戸の存続期間を考えるならば、堀の埋没は18世紀後半の内に完了していたことは確実と思われる。

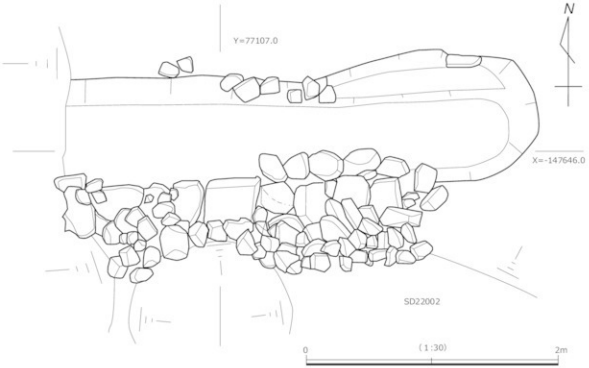


fig.76　K-2区 SD22002平面図

K−２区第２遺構面

第２遺構面では、土坑ならびに溝を検出した。

SK22001は、直径1.7m、深さ0.1mを測る円形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付碗などが出土しており、18世紀から19世紀代と考えられる。

SD22001は、幅1.3m、深さ0.3mを測る溝である。遺構からは、肥前磁器染付碗・堺系擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀から19世紀代と考えられる。

SD22002は、幅0.4m、深さ0.3mを測る溝である。一部に裏込めを丁寧に施した石組部分があり、本来は石組みの溝であった可能性が高い。SD22001とSD22002は、共に東西方向に並行して走る溝であり、溝間の幅は約２mを測る。この溝は道路側溝である可能性があるが、確定するには至っていない。遺構からは、肥前磁器染付碗・堺系擂鉢・土師器焙烙・土師器皿などが出土しており、18世紀から19世紀代と考えられる。

これらの遺構の時期は、出土遺物から。18世紀末～19世紀初頭と考えられる。

K−２区第１遺構面

この遺構面では、K−1区に継続する堀状遺構や土坑、溝などを検出した。

石組溝SM21001は、幅2.1m、深さ0.6mを測る。本来は深さ１mほどであったと推定できる。石組の掘方からは、肥前磁器染付碗・瀬戸美濃磁器染付碗・土師器皿などが出土しており、石組溝の構築時期は、19世紀初頭と考えられる。

トレンチによる確認調査にて断面で検出されたこの石組み溝築造以前の井戸は、堀埋没後に築かれたもので、石組み溝築造時に取り壊されたものである。井戸の最終堆積内からは、肥前磁器染付碗・明石擂鉢等が出土しており、井戸の埋没は19世紀初頭と考えられる。よって、井戸の存続期間を考えるならば、堀の埋没は18世紀後半の内に完了していたことは確実と思われる。

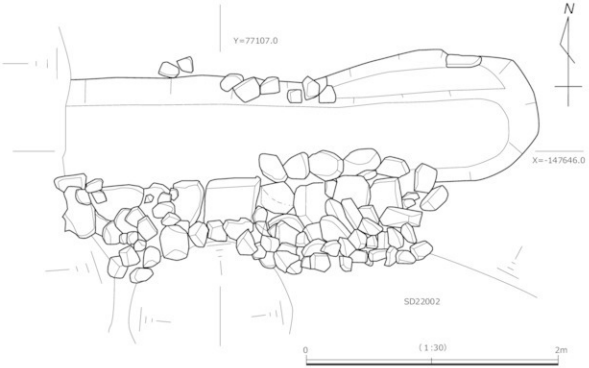


fig.76　K-2区 SD22002平面図

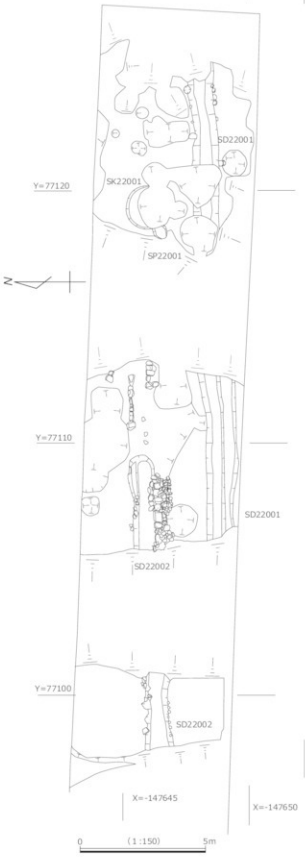


fig.77　K-2区 第2遺構面平面図

fig.78　K-2区 第1遺構面平面図

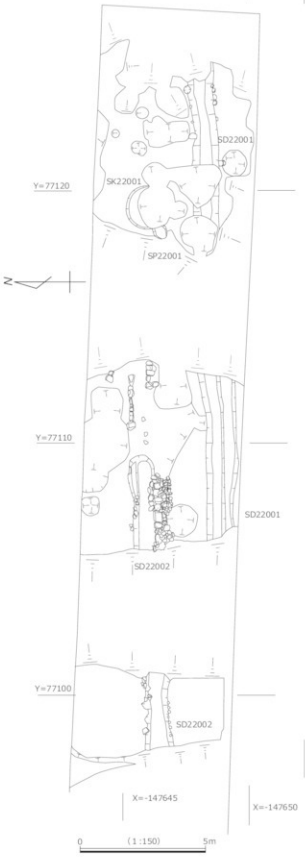


fig.77　K-2区 第2遺構面平面図

fig.78　K-2区 第1遺構面平面図

fig.79　K-2区 SM21001西側石組

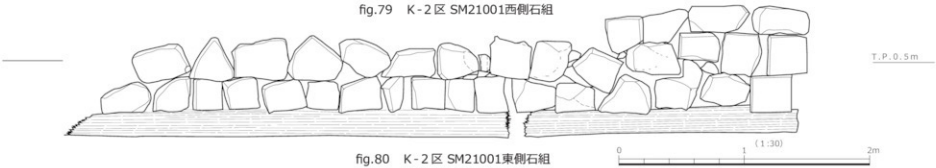
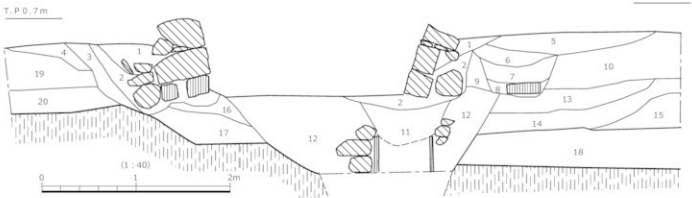


fig.80　K-2区 SM21001東側石組



1．淡黄灰色礫混中～粗砂
2．明灰色中～粗砂（礫含む）
3．褐灰色中～粗砂
4．灰色中砂
5．明黄灰色中砂
6．暗黄灰色中～粗砂
7．暗茶灰色小礫混粗砂
8．暗灰色細～中砂
9．灰褐色シルト混細砂
10．淡黄茶灰色中～粗砂（礫含む）
11．黒灰色細砂混シルト
12．暗褐色シルト混細砂（土器・炭多く含む）
13．暗茶褐色中～粗砂（礫含む）
14．褐灰色細砂混シルト
15．暗灰色細～中砂（礫含む）
16．淡青灰色細～中砂（シルト含む）
17．暗青灰色極細～細砂（シルト含む）
18．暗灰褐色シルト混極細砂
19．暗灰褐色中～粗砂（礫含む）
20．黄灰色小～中礫混中～粗砂（整地層）

fig.81　K-2区 SM21001断割断面図

おそらく、堀埋没後、堀上面は井戸などで生活に使用されていたが、それらを取り壊して、新たに石組溝を築いたものと考えられる。

SK21001は、1.2m×1.1m、深さ0.5mを測る隅丸方形と考えられる形の土坑である。

SK21002は、1.3m×1.0m、深さ0.5mを測る不定形の土坑である。遺構からは、肥前磁器染付・擂鉢・土師器皿などが出土しており、19世紀代と考えられる。

SK21003は、1.1m×1.0m、深さ0.4mを測る隅丸方形の土坑である。土坑内からは、大量の鞴の羽口や鉄屑・肥前磁器染付・柿釉土師器皿などが出土している。出土遺物から見て19世紀代と考えられる。

SK21004は、最大1.1m、深さ0.5mを測る土坑である。遺構からは、肥前磁器染付・土師器皿などが出土しており、19世紀代と考えられる。

SD21001は、調査区中央付近に位置する石組みの溝である。西半では、石材のほとんどが抜き取られているが、現状で、幅0.5m、深さ0.2mを測る。
この遺構面は、19世紀中葉までの時期と考えられる。

K-3区第1遺構面

K-3区で立体駐車場の地中梁を隔てた西側で検出した。(26頁fig.22参照)

SK64001は、最大長1.1m、深さ0.4mを測る土坑である。遺構からは、伊万里染付蓋・肥前磁器矢羽根文染付碗・肥前磁器染付広東碗・堺系擂鉢などが出土しており、18世紀後半から19世紀にかけての時期と考えられる。

SK64002は、0.6m×0.5m、深さ0.2mを測る隅丸方形の土坑である。

SK64003は、最大長0.7m、深さ0.2mを測る土坑である。

第３節　木製品・金属製品・その他

（1）木製品

今回の発掘調査では、堀埋土という湿潤な埋蔵環境から、多量な有機質遺物が出土した。木製品も多種多様な遺物が出土しており、近世都市部における木器文化の一端を垣間見ることができた。なお、使用された樹種については第３章第４節を参照されたい。

食膳具　食膳具には椀・杯・鉢などの盛り付け容器と、杓文字（839）・箸（842～844）などの食事具、また盛り付け容器の台として天目台（841）や折敷（846・849）などがある。漆塗りの食膳具には椀・杯が多い。標準的な口径は10～12cm程度である。木地の素材にはトチノキ、ブナ属以下、13種に及ぶ樹種を使用していることが判明しているが、近世の東部瀬戸内ではトチノキの漆器への利用はほとんど見られず、木地師の動向や流通について検討の余地がある。

服飾具　横櫛が５点出土している（859～863）。形状は棟がアーチ状を呈するが、丸みの強いものと弱いものがある。うち４点は漆塗りで、859は金泥と金箔で格子・草花・雲などが描かれた豪奢なものである。約半分を欠損し、復元される幅は約15～16cm（５寸～５寸５分）、歯の密度は幅３cmあたり13本で、女性が頭髪を飾る飾り櫛と考えられる。860は黒漆地に朱漆が上塗りされ、掻き取り技法によって菊花が描かれている。

柄鏡箱（855～858）は有効内寸が長さ20cm、鏡部径12cmの小型品と、長さ26cm、鏡部径16cmの大型品がある。いずれも漆塗りが施されている。

傘轆轤は３点出土している。いずれも手元轆轤で、ロクロ整形された円筒の上半に放射状の溝を刻み、小骨を受ける構造である。864は溝数52を数え、これが骨数を反映している。材はエゴノキ属と同定されているが、加工性の良さや粘り強さにより現在でもロクロ細工にはエゴノキ（＝チシャノキ、ロクロギ）が選択的に使用されている（註１）。

履物では下駄が各種出土している。種別ごとの出土点数は、連歯下駄50点（865・869～873）・刳り下駄22点（866～868・874）・露卯下駄11点・陰卯下駄13点（875・876）・草履下駄１点を数える。これらには角型と丸型が存在する。種別・形状と、台の法量との相関をプロットしたものがFig82で、これを見ると例外はあるものの全体に丸型の方が、幅が同じであれば長さが長い傾向にあることがわかる。特に連歯下駄ではその傾向がよく表れている。

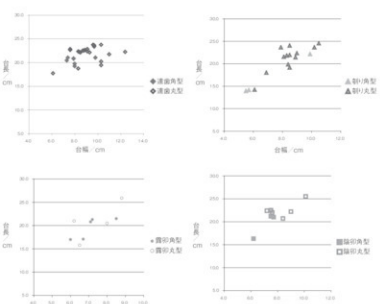


fig.82　各種下駄の形状別法量

船材　Ｉ区およびＦ区の堀埋土や石組溝の部材として、大型木製部材が出土した（註２）。

これらは板状と角柱状の２通りがあり、船材および建築部材と考えられる。

888は角材で、長さ291.0cm（9.6尺）、太さ34.5cm（1.1尺）×24.5cm（0.8尺）を測る。左端片面に幅約20cm、深さ約５cmの仕口を刳り込む。また左端より57cm付近の下方にも段差約５cmの抉りが施されている。材がスギ材であることと法量、形状を見れば、和船の帆柱に似ている。ただし15か所以上に船釘が打たれており、別材との連結が想定できるため、梁（舷側を内側から支える補強材）など別用途の可能性もある。

889はマツ属複維管束亜属製の板材である。長さ242.0cm以上、幅60.8cm以上、厚さ6.0cmを測る。横長の板が２枚、上下にはぎ合わされており、表裏から縫釘で結合される。上側の１枚は幅40～43cm（1.3～1.4尺）である。また、裏側には厚さ半分程度まで刳り込まれた範囲があるが、ここに板をはぎ合わせていたと見られ、上向きの縫釘が11か所打たれる。さらに図（遺物図版50）左下の幅広部分の下端を頂点として、左右に135度に開く部材接合痕跡がある。江戸後期の弁才船建造法として「戸立（船尾を閉塞する板）」と「航（かわら：船底板）」の取り付け角が135度とされており、戸立の設置痕跡である可能性が高い。また、材中央部付近の裏に幅約55cm、高さ約８cmの扁平な台形の刳り込みがあり、梁などの取り付け部の可能性がある。以上から本品は構造船の艫付近に使用された舷側板と考えられる。

890は板材で、釘の下穴の埋め木共に、スギ材を使用する。最大幅20.5cm（0.7尺）で、全長209.0cm（6.9尺）の細長い三角形を呈する。厚さは3.5cmである。縫釘は約23cm間隔で９本が下向きに打たれるため、下方に板をはぎ合わせていたことがわかる。上部にははぎ合わせの痕跡はなく、舷側板の上端を構成する材であったと考えられる。

891はスギ製板材で、全長は218.0cm以上、幅は26.5cm以上、厚さは2.5cmである。右下に別材をはぎ合わせているのに加え、上辺には縫釘が打ち込まれており、上側にもはぎ合わせがあったことがわかる。また、板の下端には幅2.5～４cm、高さ２cm前後の方形穴が穿たれる。これは舷側を構成する棚板同士の接合に用いた通り釘の頭隠しの穴である。弁才船の場合、舷側は船底の「航」から上へ順に「根棚」「中棚」「上棚」と、３段の棚板同士を接合して組み上げられており、下位の板の上端外側に、上位の下端内側を重ねて打ち付ける。よって本品は、上中下いずれかの棚板下端に当たるものであろう。

892も棚板の下端にあたる。スギ材のはぎ板２段分で、全長193.0cm以上、幅26.5cm（0.9尺）、厚さ3.0cmである。両材は下辺端面から縫釘ではぎ合わされている。また上辺にも縫釘が打ち込まれており、さらに幅のある部材であったことがわかる。下左辺には左下方向から斜めに３本の縫釘が打ち込まれているが、はぎ板との接合でなく、「水押（みよし：舳先材）」など、他部材と結合する可能性もある。また891同様、通り釘の頭穴が残り、本品が棚板の下端であることを示唆する。

893は長方形のスギ板で、全長170.0cm以上、幅23.8cm（0.8尺）、厚さ3.1cmを測る。右端は幅約７cmと細く作り、別板とのはぎ合わせを準備したものである。上端面にはぎ合わせの痕跡は認められず、現状の幅で使用されたものであろう。下辺には10本の通り釘が１列に打たれており、本品が棚板であることを示唆している。また上端から約３cmに４本の釘が１列に打ち込まれている。

これら船材について888、889の２点と890～893の４点を比較すると、前者は大型で、後者が小型なことが看取される。これらは部材の使用箇所と言うよりは船体の規模に比例すると考えられるが、さらなる検討が必要である。

木札　墨書木札が３点出土している（写真図版45）（註３）。1001は縦22.5cm、幅5.5cm以上、厚さ約1.5mmのスギ製経木であり、片面に墨で「兵庫磯之町＼蛤屋勘右衛門様　亀屋＼善助」と書かれる。上部に開く針孔の位置が左に偏っており、この孔が全幅の中央と考えれば、少なくとも幅は9.5cmに復元できる。付け札的な用途であるとすれば、左には目録等の記述があったと考えられる。

1002も付け札と考えられるスギ柾目板製の墨書木札で、縦20.4cm、幅5.1cm、厚さ6.1mmを測る。両面に文字があり、片面に「京〈○○○○〉殿　　扇屋＼善兵衛」とある。裏面にも５文字が記されるが、判読はできていない。

1003はヒノキの板目板の破片で、両面に墨書がある。「文ヵ吉」「□暦□」と読める。

（２）金属製品

兵庫津遺跡では、既往の調査においてもその金属製品の出土量の多さが非常に顕著である。今回の調査でも鉄製品356点、銅製品503点（うち銅銭312点）、鉱滓85点、その他７点（うち豆板銀１点）と、多くの金属製品および関連遺物が出土した。各遺物の法量、出土遺構については表１、２の一覧を参照されたい。なお一覧表には遺物名を特定できたものを中心に掲載している。

鉄製品　鉄製品は包丁、鎌、鋤、火打金、釘、小札、釣針、寛永鉄銭などが出土している。

896～902は包丁である。896～899はいずれも先端を欠損するが、あごから先端まで刃幅が変わらない薄刃包丁と考えられる。刃幅の広いものと、897のように狭いものがある。

900、901は反刃の柳刃包丁である。902は刃部を欠くため形状が不明な刃物である。

903、904は鎌で、棟と刃がほぼ同じカーブを描き先端に達する。903は捻りが入り、全体に内湾する。

905は平面Ｕ字形の鋤・鍬先で全長は25.0cm、幅11.3cm、装着部の深さ1.4cmを測る。

906、907はいずれもカスガイ型火打金（註４）の部類に入る。906は長さ6.4cm以上、幅2.5cm、厚さ3.5mm、907は長さ8.1cm、幅2.6cm以上、厚さ4.7mmを測る。

913～939は釘であり、鉄製品356点のうち167点を占める。今回出土したものは船釘と頭巻釘に分けることができ、船釘はさらに「縫釘」「通り釘」「皆折釘」に分類できる（註５）。

913～916は縫釘で、頭幅が身幅と同じ、身断面が幅広な長方形を呈する大型の釘である。用途は板材を長側辺同士ではぎ合わせ、板材の幅を広げて使用するために用いる。今回出土したものでは913、914は身幅がそれぞれ2.6cm、3.0cmを測る。一方915、916は1.2cm、1.7cmであり、大小２形式が見受けられた。また、出土船材に打ち込まれた船釘においても888には大型品が、889～893には小型品が使用されている。

917～919、926は通り釘である。特徴は大きく広がった頭部で、板材端面と別材の平面を結合するために適した釘である。特に棚板同士や棚板と水押などの結合に用いられる。

920～925、927～931は皆折釘で、コベリ（棚板上端に取り付けて舷側を保護する部材）の取り付けなどに使用する。頭幅は身幅を超えず、縫釘より小型である。

941は甲の小札である。上下を欠損し、３孔分のみの破片である。札足（高さ）が2.4cm以上、札幅は2.2cm、厚さ3.0mmを測り、直径3.1mm～3.6mmの孔が２列に穿たれる。

942は釣針である。高さ2.3cm、ふところ幅1.3cm、軸径2.4mmであり、兵庫津14次調査で出土している釣針群に比べ、ふところ幅がかなり広い（註６）。

銅製品　銅製品では銭貨の出土数が312点と突出する。その他に鏡、簪、小柄、煙管、匙、火箸、分銅、釘等がある。なお銭貨については写真図版47、48および表２を参照されたい。

944は和鏡の破片である。変形、破損している上、表面は高い熱を受けて溶融している。鋳損じか２次的な被熱によるものかは未詳である。鏡背には松が鋳出されている。

945は環状の銅製品である。径5.6cmのやや歪んだ円形で、環は太さ5.9mm、厚さ2.2mmを測る。表裏に松竹梅がレリーフ状に鋳出される。また梅花の中心に金色が残存する。

946～950は小柄であるが、いずれも刃部を欠損しており柄のみが出土した。銅板の１枚作りで、内部に茎が残存している。946は銅板を折り曲げ、棟側で端部を接合する。表面全体が金色を呈する。鍍金と考えられるが、理化学的分析を実施しておらず、詳細は不明である。佩表に後ろを振り返るウサギと、三日月が沈線で描かれる。佩裏は無文である。

950は小柄の小口付近破片である。銅板は棟方で折り曲げられ、刀方の佩裏側で接合される。佩表には小口に７条平行線が施され、菱形区画に囲まれた右卍が描画されている。

951は鍔状を呈するが、玩具または形代ではないかと考えられる。茎孔は1.4cmである。

952 ～957は簪で脚が二股に分岐する952、953と単脚の954 ～957がある。952の頭部には透かし彫りがある。953は松葉を表現する。954には頭部に球状の飾りが付く。

958 ～966は煙管で、958 ～ 962が雁首、963 ～966は吸口である。いずれも銅製で、966以外は銅板を丸めて蝋着けしたものと考えられる。煙管の変遷は火皿の大→小、脂返しの長→短などに反映されるが、今回の出土品は新古が混在する模様である。

967 ～968は銅製匙である。柄が長い967、968と、柄が貧弱な969がある。

970 ～972は火箸である。全貌が判明しているものは970のみで、図下半は断面円形であるが上半は断面方形に削り出しており、木製の把握部が付属していたと考えられる。

973 ～981は調度品の飾金具と考えられる。973 ～975、980は銅薄板で、鋲留め用の孔が各所に開けられる。973、980には実際に鋲が残された状態で出土している。また975、974、980は飾文様が彫金によって描出されている。特に980は繊細な文様が彫り付けられ、鍍金で仕上げられる豪奢なものである。

983、984は錘である。いずれにも「天下一」の刻印がある。なお984には「天下一」の上下と、別面の菊紋の上下に９つ星が刻印される。983は38.53g(10.27匁)、984は29.00g(7.73匁)である。

990～993は銅製釘、994～999は鋲である。調度品の部材結合などに用いられたものか。

豆板銀　988は豆板銀であり片面に大黒像の打刻がある。秤量は6.65g (1.77匁) である。

(３)その他

写真図版51-4はⅠ区のSM33001下層埋土より出土した簪である。全高12.1cm、幅7.0mmで、頭部に耳かきが付き、その下に玉を装着した玉簪と考えられる。重量2.94g、比重は1.75もあるため木材の可能性は少ないが、素材について詳細は不明である(註７)。なお江戸期の簪の素材には金属以外ではサンゴ、瑪瑙、ヒスイ、鼈甲、象牙などがある。

註１　和傘については、1995住友和子ほか『傘　和傘・パラソル・アンブレラ』INAX出版　を参考にした。
註２　船材については、1995石井謙治『和船Ⅰ』ものと人間の文化史76－Ⅰ　法政大学出版局　を参考にした。
註３　墨書の判読については、神戸市教育委員会文化財課　高久智広氏にご協力いただいた。
註４　火打金の分類等については、1985高嶋幸男『火の道具』柏書房　を参考にした。
註５　船釘の記述については、注２の文献を参考にした。
註６　釣針については、2010神戸市教育委員会『兵庫津遺跡発掘調査報告書　第14・20・21次調査』を参考にした。
註７　(独) 奈良文化財研究所　丸山真史氏の調査により、本品が骨角貝製品ではないことが判明している。

表 1　出土金属製品一覧

分類番号	照載番号	出土地区	出土遺構	遺物名	素材	法量 (mm) 最大（長）	幅（厚）	厚（底）
8E2	525	調査 12-1	土坑	SK0411	銅製	25.50	25.50	5.00
8E2	526	調査 12-1	土坑	SK0411	銅製	25.50	25.50	5.00
8E2-2		調査 12-1	土坑	第 1 遺構面検出	鉛合金	16.20	15.35	3.20
8E2-2			土坑	SK0411	鉄	25.50		4.00
8E2-2	527	調査 12-1	土坑	SK0411	銅	25.50	4.75	3.00
8E2-2		調査 12-1	土坑	SK0411	銅製品	25.50	25.50	5.00
8E2-2			土坑	SK0411	鉄	25.50	25.50	5.00
8E2-2	540	調査 12-1	土坑	第 1 遺構面検出	土師	25.50	25.50	5.00
8E2-2			土坑	SK0411	銅	25.50	25.50	5.00
8E2-2	541	調査 12-1	土坑	SK0411	銅	25.50	25.50	5.00
8E2-2	542	調査 12-1	土坑	SK0411	銅	25.50	25.50	5.00
8E2-2			土坑	SK0411	銅	25.50	25.50	5.00
8E2-2	543	調査 12-1	土坑	SK0411	銅	25.50	25.50	5.00
8E2-2			土坑	SK0411	銅製（銅製）	25.50	25.50	5.00
8E2-2			土坑	SK0411	銅

表 2　出土銭貨一覧

遺物番号	遺構番号	地区	出土層位・層位	遺物名	幅(cm) 外径	幅(cm) 内径	厚(cm) 外径	厚(cm) 内径
B021	47 上	A区	第1面掘方中	開元通宝（新）	2.51	0.55	0.16	0.10
B078	46 上	A区	第1面掘方中	開元通宝	2.51	0.56	0.16	0.12
B101	46 上	A区	第1面掘方中	元豊通宝	2.45	0.55	0.16	0.12
B102-1-1		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10
B102-1-2		A区	第1面掘方	開元通宝（古）	2.51	0.57	0.12	0.14
B102-1-3		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10
B102-1-4		A区	第1面掘方	開元通宝	2.47	0.56	0.15	0.11
B102-1-5		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.16	0.12
B102-1-6		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.16	0.12
B102-1-7	47 上	A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.16	0.12
B102-1-8		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.56	0.16	0.12
B102-1-9	47 上	A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.56	0.16	0.12
B102-1-10	47 上	A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.16	0.12
B102-1-11		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.16	0.12
B102-1-12	47 上	A区	第1面掘方	開元通宝	2.45	0.55	0.15	0.10
B102-1-13		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10
B102-1-14		A区	第1面掘方	開元通宝	2.45	0.55	0.15	0.10
B102-1-15	47 上	A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10
B102-1-16		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10
B102-1-17		A区	第1面掘方	開元通宝	2.45	0.55	0.15	0.10
B102-1-18	47 上	A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10
B102-1-19		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10
B102-1-20	47 上	A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10
B102-1-21		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10
B102-1-22		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10
B102-1-23		A区	第1面掘方	開元通宝	2.46	0.55	0.15	0.10

表 3　石造品石材観察表

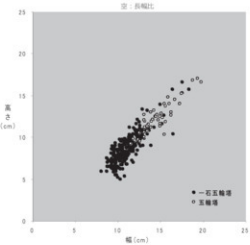
遺物図版	番号	出土位置	石造品名	石材名	石材観察	実測番号	S
40-1	750	2 区	東正年銘 一石五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（斑晶：黒雲母 力ノ長石 粘色、半透明、斜長石 褐色）	2	16
	751	2 区	一石五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（斑晶：黒雲母 力ノ長石 粘色、半透明、斜長石 褐色）	1	14
	752	1 区廻上段裏山	一石五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（斑晶：黒雲母 力ノ長石 粘色、半透明、斜長石 褐色）	3	17
	753	1 区石垣裏山	屋根材	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（斑晶：黒雲母 力ノ長石 粘色、半透明、斜長石 褐色）	4	36
遺物図版	番号	出土位置	石造品名	石材名	石材観察	実測番号	S
40-2	754	石組溝	一石五輪塔 五輪塔？	花崗岩	中粒～細粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：半透明、粘色、斜長石 褐色）細粒で石質	5	7
	755	石組溝	一石五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（力ノ長石：白色～半透明、粘色、斜長石 褐色、黒色 （ほぼ黒雲の石質：力ノ長石：白色）	7	42
	756	石組溝	一石五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（力ノ長石：白色～半透明、粘色、斜長石 褐色、黒色 （ほぼ黒雲の石質：力ノ長石：白色）	8	78
	757	石組溝	一石五輪塔	花崗岩	黒雲母細粒、力ノ長石：白色～半透明～白色 角閃石：1 mm 以下、点在、一部集合	12	92
	758	石組溝	釘貫	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（力ノ長石：白色～半透明、粘色、斜長石 褐色、黒色 （ほぼ黒雲の石質：力ノ長石：白色）	10	83
	759	石組溝	五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（力ノ長石：白色～半透明、粘色、斜長石 褐色、黒色 （ほぼ黒雲の石質：力ノ長石：白色）	6	30
	760	堀埋土	相輪	花崗岩		49	484
	761	石組溝	一石五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（白色～半透明の斜長石が最も目立つ黒色） 粘色斜長 黒色	9	81
	762	石組溝	層塔	花崗岩	黒雲母細粒、力ノ長石：白色～白色 角閃石：1 mm 以下、点在、一部集合	15	100
	763	石組溝	五輪塔	花崗岩	中粒粘色黒雲母花崗岩（黒雲母：粘土 力ノ長石：透明色	13	97
	764	石組溝	一石五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（力ノ長石：白色～半透明、粘色、斜長石 褐色、黒色 （ほぼ黒雲の石質：力ノ長石：白色）	11	87
	765	石組溝	層塔	花崗岩	中粒黒雲母花崗岩（黒雲母：細粒、点在 力ノ長石：半透明	14	98
	766	石組溝	五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（白色粘色～白色粘色、角閃石：1 mm 以下、少量、点在 力ノ長石：白色 粘色、粘色 斜長石は最小限）	16	101
遺物図版	番号	出土位置	石造品名	石材名	石材観察	実測番号	S
41	767	馬出状郭南入口	一石五輪塔	花崗岩		30	279
	768	馬出状郭後列北端	一石五輪塔	花崗岩	細粒～中粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：淡粘色、淡粘色、1 mm 以下の黒雲母が散在	38	414
	769	馬出状郭入口	五輪塔	花崗岩		32	315
	770	馬出状郭前列北端	笠塔婆？	花崗岩	細粒～中粒角閃石含有黒雲母花崗岩、中粒粘色 斜長石 黒色 （力ノ長石：半透明、淡粘色、粘色、粘色 黒雲母 黒色	37	323
	771	馬出状郭後列北端	一石五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（力ノ長石：粘色 粘色斜長石 黒色 黒雲母 黒色 角閃石）	39	415
	772	馬出状郭後列北端	一石五輪塔	花崗岩	細粒～中粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：淡粘色、淡粘色 粘色斜長石 1 mm 以下の黒雲母が散在	40	416
	773	馬出状郭入口	一石五輪塔	花崗岩		31	280
	774	馬出状郭後列北端	宝筐印塔塔身	花崗岩	中粒石英粘、粘色斜長に富み、黒色 力ノ長石は少ない	41	418
	775	馬出状郭入口	台座	花崗岩		35	319
	776	馬出状郭入口	一石五輪塔	花崗岩	細粒～中粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：淡粘色、淡粘色 粘色斜長：1 mm 以下の黒雲母が散在	34	318
	777	馬出状郭後列南端	一石五輪塔	花崗岩	中粒石英粘、粘色斜長に富み、黒色 力ノ長石は少ない	44	451
	778	馬出状郭後列南端	一石五輪塔	花崗岩		45	452
	779	馬出状郭後列北端	一石五輪塔	花崗岩	中粒角閃石含有黒雲母花崗岩（力ノ長石：粘色 粘色斜長 黒色 黒雲母 黒色 角閃石）	42	424
	780	馬出状郭後列南端	角塔婆	花崗岩	細粒～中粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：淡粘色、淡粘色 粘色斜長：1 mm 以下の黒雲母が散在	43	434
	781	馬出状郭入口	一石五輪塔	花崗岩		33	317
	782	馬出状郭入口	石仏	花崗岩		36	321
	783	馬出状郭後列南端	矢穴石材	花崗岩			457
	784	馬出状郭後列南端	矢穴石材	花崗岩			458
	785	馬出状郭後列南端	矢穴石材	花崗岩			459

遺物図版	番号	出土位置	石造品名	石材名	石材観察	実測番号	S
42	786	東辺石垣	文亀年銘 一石五輪塔	花崗岩		28	276
	787	東辺石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩		20	149
	788	東辺石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩		17	146
	789	東辺石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩		29	277
	790	東辺石垣裏山	相輪？	砂岩	粘土サミックス研磨で骨粘質無し	23	169
	791	東辺石垣裏山	宝珠	花崗岩	中粒角閃石黒雲母花崗岩～石英閃緑岩（粘色 粘色 黒色 力ノ長石：半透明、白色 粘色 白色	24	241
	792	東辺石垣裏山	五輪塔	花崗岩		26	274
	793	東辺石垣裏山	五輪塔	花崗岩	中粒角閃石黒雲母花崗岩～石英閃緑岩（粘色 粘色 黒色 力ノ長石：半透明、白色 白色	21	159
	794	東辺石垣裏山	宝筐印塔	砂岩	粘土サミックス研磨で骨粘質無し	22	166
	795	東辺石垣裏山	碑石	花崗岩	粘色斜長に富む花崗岩～石英閃緑岩（力ノ長石：粘色 粘色 粘色斜長 黒色	27	275
	796	東辺石垣裏山	五輪塔	花崗岩	少量の角閃石を含む黒雲母花崗岩（粘色状、粘色 力ノ長石：粘色 粘色斜長 黒色	19	148
	797	東辺石垣裏山	五輪塔	花崗岩	中～細粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：粘色、粘色 粘色斜長 細粒、黒色	18	147
	798	東辺石垣	矢穴石材	花崗岩			273
遺物図版	番号	出土位置	石造品名	石材名	石材観察	実測番号	S
43	799	城内側石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：淡粘、粘色、黒雲母 細粒、多い。	50	5
	800	堀埋土下層	一石五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：淡粘、粘色、黒雲母 細粒、多い。	68	73
	801	城内側石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩	中～細粒（角閃石）黒雲母花崗岩（力ノ長石：粘状、粘色、粘色斜長：1～2 mm、黒雲母粘が点在	56	24
	802	城内側石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：淡粘、粘色、黒雲母 細粒、多い。	51	7
	803	城内側石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（中粒粘色斜長に富む）（力ノ長石：細粒、粘状	53	18
	804	城内側石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（中粒粘色斜長に富む）（力ノ長石：細粒、粘状	67	59
	805	城内側石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：淡粘、粘色、黒雲母 細粒、多い。	62	33
	806	城内側石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩		65	52
	807	城内側石垣裏山	一石五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（中粒粘色斜長に富む）（力ノ長石：細粒、粘状	66	57
	808	城内側石垣裏山	五輪塔	花崗岩	中～細粒（角閃石）黒雲母花崗岩（力ノ長石：粘状、粘色、粘色斜長：1～2 mm、黒雲母粘が点在	52	15
	809	堀埋土下層	五輪塔か？	花崗岩		69	75
	810	城内側石垣裏山	宝珠	花崗岩	中～細粒（角閃石）黒雲母花崗岩（力ノ長石：粘状、粘色、粘色斜長：1～2 mm	63	40
	811	堀底検出井戸	五輪塔	花崗岩	粘粒閃石含有黒雲母花崗岩（粘状状で金属に 1 mm 程度の結晶、粘色斜長：2～2 mm 程度 黒色、力ノ長石：中粒色	73	97
	812	城内側石垣裏山	五輪塔	花崗岩	中～細粒（角閃石）黒雲母花崗岩（力ノ長石：粘状、粘色、粘色斜長：1～2 mm、黒雲母粘が点在	54	21
	813	城内側石垣裏山	五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（中粒粘色斜長に富む）（力ノ長石：細粒、粘状	61	32
	814	城内側石垣裏下段	五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：淡粘、粘色、黒雲母 細粒、多い。	71	93
	815	城内側石垣裏山	五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（力ノ長石：淡粘、粘色、黒雲母 細粒、多い。	55	23
	816	城内側石垣裏山	五輪塔	花崗岩	粘粒黒雲母花崗岩（中粒粘色斜長に富む）（力ノ長石：細粒、粘状	57	25
	817	城内側石垣裏山	台座	花崗岩	中～細粒（角閃石）黒雲母花崗岩（力ノ長石：粘状、粘色、粘色斜長：1～2 mm、黒雲母粘が点在	59	27
	818	城内側石垣裏山	石仏	花崗岩	中～細粒（角閃石）黒雲母花崗岩（力ノ長石：粘状、粘色、粘色斜長：1～2 mm、黒雲母粘が点在	58	26
	819	城内側石垣裏山	角塔婆	花崗岩	中～細粒（角閃石）黒雲母花崗岩（力ノ長石：粘状、粘色、粘色斜長：1～2 mm、黒雲母粘が点在	60	30
	820	城内側石垣裏山	碑石	花崗岩		70	92
	821	城内側石垣裏山	宝筐印塔	花崗岩		72	94

表４　石造品統計

区	出土地点	一石五輪塔	五輪塔	宝筐印塔	角塔婆	相輪	層塔	石仏	訂賣	台座	地蔵石	碑石	棟石	石臼	加工石	合計
E	全体	21	6							1	1		1		4	34
F-1	東辺城外側石垣	137	32	1	1	1				1	1	1				175
	馬出状郭	146	38		1			1	2	1				1		190
	石組溝	71	25				2		1					6		105
	南辺城外側石垣		2													2
	町屋	3	1										1			5
I	城内側石垣	34	12	1	1			1		5		1		3	1	58
	城外側石垣	7														7
	堀	14	1													15
	石組溝	9	1													10
	合計	421	112	2	3	1	2	2	3	7	1	2	1	10	5	572

表５　一石五輪塔・五輪塔　空・風輪部長幅比文布



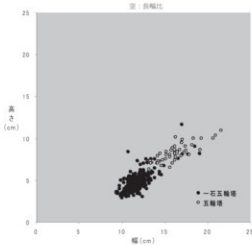


表６　遺物一覧 1

調査区	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	写真番号
1-1	1	A	SD82001		土師皿	14ｃ		1
	2		SD82001		土師皿	14ｃ		2
	3		SD82001		土師皿	14ｃ		3
	4		SD82001		土師皿	14ｃ		4
	5		SD82001		瓶須賀青磁碗	14ｃ		5
	6		SD82001		瓶須賀青磁碗	14ｃ		6
	7		SD82001		丹波擂鉢	14ｃ		7
	8		SD82001		東播系擂鉢	14ｃ		8
	9		SD82001		東播系擂鉢	14ｃ		9
	10		SD82001		石鍋	14ｃ		10
	11		SD82001		石鍋	14ｃ		11
1-2	12	A	SK82004		瓶須賀青磁碗	13ｃ末		12
	13		SK82004		瓶須賀青磁碗	14ｃ		13
	14		SK82004		備前大皿	14ｃ		14
	15		SK82004		備前擂鉢	14ｃ		15
	16		SK82004		備前擂鉢	14ｃ		16
	17		SK82004		東播系擂鉢	14ｃ		17
	18		SK82004		土師皿	14ｃ		18
	19		SK82004		土師皿	14ｃ		19
	20		SK82004		土師皿	14ｃ		20
1-3	21	A	SP82015		土師皿	14ｃ		21
	22		SP82015		土師皿	14ｃ		22
	23		SP82015		土師皿	14ｃ		23
	24		SP82015		土師皿	14ｃ		24
	25		SP82015		土師皿	14ｃ		25
	26		SP82015		土師皿	14ｃ		26
	27		SP82015		土師質鍋	14ｃ		27
	28		SP82015		東播系擂鉢	14ｃ		28

調査区	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	写真番号
1-4	29	A	SE81002		丹波擂鉢	18ｃ前		29
	30		SE81002		淡色見込花文染付碗	18ｃ前		30
	31		SE81002		淡色見込花文染付碗	18ｃ前		31
	32		SE81002		土師質鍋	18ｃ前		32
	33		SE81002		土師皿	18ｃ前		33
	34		SE81002		土師皿	18ｃ前		34
	35		SE81002		土師皿	18ｃ前		35
2-1	36	A	SE81001		丹波擂鉢	18ｃ中		36
	37		SE81001		肥前京焼系鉢	18ｃ前		37
	38		SE81001		淡色焼染付皿	18ｃ前		38
	39		SE81001		土人形	18ｃ前		39
	40		SE81001		土師皿	18ｃ前		40
2-2	41	A	SK82002		淡色見込花文染付碗	18ｃ		41
	42		SK82002		淡色焼染付碗	18ｃ		42
	43		SK81003		淡色見込花文染付碗	18ｃ		43
	44		SK82002		淡色焼染付碗	18ｃ		44
	45		SK81003		土師皿	18ｃ	糸切底	45
2-3	46	B-1	SK91005		淡色焼染付大碗	18ｃ前		1
	47		SK91005		淡色見込花文染付碗	18ｃ前		2
	48		SK91005		淡色見込花文染付碗	18ｃ前		3
	49		SK91005		土師質燈明	18ｃ前		4
2-4	50		SE91001		淡色見込花文染付碗	18ｃ		5
	51		SE91001		伊万里染付碗	18ｃ		6
	52		SE91001		伊万里染付皿	18ｃ		7
	53		SE91001		美濃・瀬戸系鉢	18ｃ		8
	54		SE91001		在地系焼塩壺	18ｃ		9
	55		SE91001		土師皿	18ｃ	糸切底	10
	56		SE91001		土師質燈明	18ｃ		11

表 7　遺物一覧 2

遺物出現	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	実測番号
3-1	57	B-1	SE91002		肥前京焼系皿	18 c		12
	58		SE91002		波佐見陽花文染付椀	18 c		13
	59		SE91002		波佐見陽花文染付椀	18 c		14
	60		SE91002		波佐見陽花文染付椀	18 c		15
	61		SE91002		波佐見陽花文染付椀	18 c		16
	62		SE91002		波佐見染付椀	18 c		17
	63		SK91002		唐・明石系皿Ⅱ	18 c 末		18
	64		SE91002		土師質焙烙	18 c		19
3-2	65	B-2	SE81003		伊万里牡丹文染付椀	18 c		20
	66		SE81003		波佐見陽花文染付椀	18 c		21
	67		SE81003		唐津Ⅱ	18 c		22
	68		SE81003		土師質焙烙	18 c		23
包含層	69	C-1	遺構面検出時		平瓦	中世	瓦字	2
	70		SK201		唐津片口Ⅱ	18 c		1
3-3	71	D	SX72001		備前擂鉢	16 c 後		1
	72		SX72001		土師皿	16 c 後		2
	73		SD72001		備前擂鉢	16 c		3
	74		SD72001		備前擂鉢	16 c		4
	75		SK71011		美濃・瀬戸系擂鉢	18 c		5
	76		SK71011		波佐見網目文染付椀	18 c		6
	77		SK71011		備前皿	18 c		7
	78		SK71011		土師皿	18 c	糸切底	8
	79		SK71011		土師皿	18 c	糸切底	9
	80		SK71011		土師質焙烙	18 c		10
3-4	81	E-1	SE71003		唐・明石系擂鉢Ⅱ	18 c		11
	82		SE71003		波佐見陽平文染付椀	18 c		12
	83		SE71003		土師質焙烙	18 c		13
	84		SE71007		波佐見染付椀	18 c		14
	85		SE71010		瀬戸染付椀	18 c		15
4-1	86		石垣裏込	3 段目	能泉東青磁線描連弁文椀	16c1/4		13
	87		石垣裏込	3 段目	能泉東青磁椀	15c 前		12
	88		石垣裏込	2 段目	能泉東青磁椀	15c 後		19
	89		石垣裏込	2 段目	備前大皿	15c		16
	90		石垣裏込	3 段目	備前水屋甕	15c 前		14
	91		石垣	盛方	東播系皿Ⅱ	14c		28
	92		石垣裏込	2 段目	備前擂鉢	15c 後		18
	93		石垣裏込	2 段目	備前擂鉢	15c 後		17
4-2	94	E-2	石垣	上面	能泉東青磁印花文椀	15c 前		2
	95		石垣	上面	景德鎮東青花皿	16c 前		4
	96		石垣	上面	開江流域東白磁小椀	15c 後		3
	97		石垣	上面	能泉東青磁椀	15c 前		1
	98		石垣	堀内	備前大皿	15c		8
	99		石垣	上面	東播系擂鉢Ⅱ	14c		5
	100		石垣	上面	備前擂鉢	13c		7
	101		石垣	上面	備前擂鉢	16c1/4		6
	102		石垣	堀内	備前擂鉢	16c 中		10
	103		石垣	堀内	在地系土師質皿	16c1/4		9
5-1	104	E-1	石垣	盛方	在地系土師質皿			24
	105		石垣	盛方	在地系土師質皿			25
	106		石垣	盛方	在地系土師質皿			26
	107		石垣	下層	開江流域東白磁皿	15c 後		27
	108		10 層	整地層	土師	15c 後		23
	109		10 層	整地層	能泉東青磁蓋文椀碗	15c 前		21
	110		10 層	整地層	開江流域東白磁皿	15c 後		22
	111		瑞巌	裾床	東播系擂鉢Ⅱ	13c4/4		11
	112		10 層	整地層	備前擂鉢Ⅱ	15c 中		20

遺物出現	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	実測番号
5-2	113	E-1	石垣裏込		平瓦	14c		36
	114		石垣裏込		平瓦	14c		37
	115		石垣検出		軒平瓦			29
	116		石垣裾下層		平瓦			35
	117		整地層		軒平瓦			34
	118		瑞巌裾床		三巴文軒丸瓦			31
	119		石垣検出		平瓦			30
	120		石垣裏込		三巴文軒丸瓦			33
	121		瑞巌裾床		平瓦			32
6-1	122	F-1	東迎石垣	裏込	漳州窯青花椀	16c 後		76
	123		東迎石垣	裾下層	景德鎮東青花皿	17c 前		84
	124		東迎石垣	裏込	景德鎮東白磁碗反皿	16c		70
	125		東迎石垣	裏込	景德鎮東白磁碗反皿	16c 後		73
	126		東迎石垣	裏込	景德鎮東青花皿	16c 後		77
	127		東迎石垣	裏込	備前種壺	16c		72
	128		東迎石垣	裏込	備前擂鉢	16c 前		80
	129		東迎石垣	裏込	備前擂鉢	16c 前		75
	130		東迎石垣	裏込	備前擂鉢	16c		74
	131		土橋	東西断割	景德鎮東白磁碗反皿	16c		17
6-2	132	F-1	馬出状郭	南端検出	在地系皿	17c		5
	133		馬出状郭	入口	瀬戸・美濃鉄釉天目椀	16c 後		13
	134		馬出状郭	南端検出	波佐見染付草花椀	17c		8
	135		馬出状郭	南端検出	波佐見染付椀	17c		9
	136		馬出状郭	検出	伊万里染付椀蓋	17c		3
	137		馬出状郭	南端検出	波佐見色絵蓋	17c		6
	138		馬出状郭後列	石垣裏込	波佐見染付椀蓋	17c		11
	139		馬出状郭後列	石垣裏込	波佐見染付丸文椀	17c		12
	140		馬出状郭	検出	波佐見染付椀花皿	17c		1
	141		馬出状郭	検出	伊万里染付四方荷椀	17c		2
	142		馬出状郭	南端検出	波佐見染付丸皿	17c		7
	143		馬出状郭	南端検出	波佐見青磁香炉	17c		10
	144		馬出状郭	南端検出	丹波土瓶	17c		4
7	145	F-1	南迎石垣	東石上層	唐津灯明皿	17c 前		91
	146		南迎石垣	東石上層	唐津灰釉折縁皿	17c2/4		100
	147		南迎石垣	東石上層	唐津黒茶釉折縁皿	17c2/4		99
	148		南迎石垣	東石上層	唐津灰釉皿	17c 前		97
	149		南迎石垣	東石上層	漳州窯染付皿	17c 前		94
	150		南迎石垣	東石上層	唐津灰釉椀	17c1/4		102
	151		南迎石垣	上層整地層	波佐見白磁皿	17c		85
	152		南迎石垣	上層整地層	景德鎮東青花皿	16c		87
	153		南迎石垣	東石上層	唐津灰釉皿	17c 前半		96
	154		南迎石垣	東石上層	唐津灰釉椀	17c 前		98
	155		南迎石垣	東石上層	唐津茶釉椀	17c 前		95
	156		南迎石垣	東石上層	ベトナム屋長胴壺	17c 前		93
	157		南迎石垣	上層整地層	備前擂鉢	17c 前		86
	158		南迎石垣	東石上層	丹波甕	17c		101
	159		南迎石垣	東石上層	備前擂鉢	16c 末		90
	160		南迎石垣	東石上層	唐津擂鉢	17c 初		89
	161		南迎石垣	東石上層	丹波擂鉢	16c 末		104
	162		南迎石垣	東石上層	在地系皿	17c		105

表８　遺物一覧３

遺構図面	番号	区	遺構名	器種	器種	年代	備考	実測番号
7	163	F-1	南迎石廻	上層陶器類	景德鎮東青花鉢蓋	16c		88
	164		南迎石廻	裏山	龍泉東青磁稜花皿	15c 前		114
	165		南迎石廻	裏山	景德鎮東青花端反皿	16c		108
	166		南迎石廻	石垣崩下層	龍泉東系青磁碗	15c 後		106
	167		南迎石廻	裏山	龍泉東青磁碗底連片文碗	16c1/4		111
	168		南迎石廻	裏山	唐津灰釉鉄絵皿	17c2/4		110
	169		南迎石廻	裏山	唐津灰釉碗	17c 初		112
	170		南迎石廻	裏山	中国産四耳壺？	16-17c?		113
	171		南迎石廻	石垣崩下層	備前擂鉢	17c1/4		107
	172		南迎石廻	裏山	丹波擂鉢	17c 初		109
8	173	F-1	堀	下層谷	景德鎮東青花魚文丸皿	16c		300
	174		堀	下層谷	景德鎮東青花草花文坏	17c 初		301
	175		堀	下層	瀬戸美濃鉄絵天目碗	17c1/4		302
	176		堀	下層谷	波佐見青磁染付碗蓋	17c		291
	177		堀	下層谷	波佐見染付碗	17c		292
	178		堀	下層谷	初期伊万里染付皿	17c2/4		296
	179		堀	下層	波佐見染付一重網目文碗	17c		303
	180		堀	下層谷	波佐見染付四方荷碗	17c		261
	181		堀	下層	唐津丸皿	17c2/4		304
	182		堀	下層	丹波擂鉢	17c2/4		305
	183		堀	下層谷	備前擂鉢	17c 後		281
	184		堀	下層谷	備前擂鉢	18c		252
	185		堀	下層谷	丹波擂鉢	18c		309
	186		堀	下層谷	瓦器鉢	18c		268
	187		堀	下層谷	備前擂鉢	17c4/4		293
9	188	F-1	堀	下層谷	在地系土師質格鉢灯明皿	18c		286
	189		堀	下層	丹波火入れ	18c		308
	190		堀	下層谷	丹波火入れ	18c		271
	191		堀	下層谷	肥前系胎釉皿	18c	見込部分目跡 輪花皿？	259
	192		堀	下層谷	瀬戸灰釉木葉形皿	18c		298
	193		堀	下層谷	在地系土師質香	18c	植木鉢転用 底部穿孔	253
	194		堀	下層谷	丹波香	18c	植木鉢に転用底部穿孔	267
	195		堀	下層谷	瀬戸灰釉小鉢	18c		269
	196		堀	下層谷	波佐見白磁茶碗	18c		257
	197		堀	下層谷	肥前京焼系鉢	18c		254
	198		堀	下層谷	波佐見染付小皿	18c		263
	199		堀	下層谷	波佐見青磁香炉	18c		250
	200		堀	下層谷	波佐見染付鉄釉交一輪半礼花入れ	18c		272
	201		堀	下層谷	波佐見染付筒茶碗	18c		256
	202		堀	下層谷	肥前京焼系色絵碗	18c		258
	203		堀	下層谷	伊万里染付菊文小碗	18c		274
	204		堀	下層谷	伊万里染付蛇文皿	18c		265
	205		堀	下層	波佐見染付唐草文格花皿	18c		307
	206		堀	下層谷	波佐見染付大皿	18c		264
	207		堀	下層谷	波佐見染付皿	18c	2個同じ文様	290
	208		堀	下層谷	波佐見染付瓶敷皿	18c		262
	209		堀	下層谷	伊万里染付八角大皿	18c	風凍で接合 大明成化作風？	279
	210		堀	下層谷	伊万里染付広東碗蓋	18c	蓋碗セット	278
	211		堀	下層	波佐見染付広東碗	18c	セットと思われる 広東碗 299	451
	212		堀	下層谷	波佐見青磁染付碗蓋	18c		295
	213		堀	下層谷	波佐見染付サンスクリット文碗蓋	18c		273
	214		堀	下層谷	伊万里染付小皿	18c	蓋碗セット	277
	215		堀	下層	波佐見染付広東碗	18c	セット蓋 451	299
	216		堀	下層谷	波佐見青磁染付碗蓋	18c		275
	217		堀	下層谷	波佐見染付碗	18c		297
	218		堀	下層谷	波佐見青磁染付四方荷碗	18c		283
	219		堀	下層谷	波佐見染付丸文碗	18c		282
	220		堀	下層谷	波佐見染付碗	18c	同様１点あり	260
	221		堀	下層谷	波佐見染付小碗	18c		294
	222		堀	下層谷	波佐見染付小碗	18c		249
10	223	F-1	堀	下層谷	肥前京焼系碗	18c		251
	224		堀	下層谷	波佐見染付草花文碗	18c		276
	225		堀	下層谷	波佐見色絵小碗	18c		285
	226		堀	下層	波佐見染付碗	18c		306
	227		堀	下層谷	波佐見染付草花文碗	18c	４個同じ文様	288
	228		堀	下層谷	波佐見染付草花文碗	18c		287
	229		堀	下層谷	波佐見染付二重網目文碗	18c		289
	230		堀	下層谷	波佐見染付二重網目文小碗	18c		255
	231		堀	下層谷	波佐見染付仏餉具	18c		266
	232		堀	下層谷	唐津黒茶碗香炉	18c		270
	233		堀	下層谷	瀬戸美濃鉄手茶碗	18c		280
	234		堀	下層谷	伊万里色絵染付碗	18c		284
	235		堀	下層谷	墨書（小壺力）		父安	391
	236		堀	下層谷	墨書土師器小皿	18c	大ら屋	389
11-1	237	F-1	堀	中層	在地系土師質灯明皿	18c	白系	241
	238		堀	中層	在地系土師質灯明皿	18c	赤系	242
	239		堀	中層谷	波佐見鉄釉釉小碗	18c		243
	240		堀	中層谷	波佐見染付文字文筒茶碗	18c	西(或鶴)平成の御世 鶴亀（？年～必？）	244
	241		堀	中層	美濃黒釉東博	18c		240
	242		堀	中層谷	伊万里染付四方厚広東碗	18c	風凍で接合	245
	243		堀	中層谷	肥前京焼系草花文小皿	18c		246
	244		堀	中下層谷	波佐見青磁染付波濤文深鉢	18c		247
	245		堀	中層	美濃唐津皿	17c 初	胎土目	238
	246		堀	中下層谷	波佐見色絵輪花鉢	18c		248
	247		堀	中層	丹波擂鉢	18c 前		239
	248		堀	上層力	在地系土瓶	19c	底に刷毛目	236
11-2	249	F-1	堀	上層力	波佐見青磁碗	18c		235
	250		堀	上層力	瓦器鉢	18c		237
12	251	F-1	石組溝	層力	墨書明石擂鉢	18c	杵（国）● 鶴亀 松竹ウメ 鶴亀杵	1
	252		南迎石組溝	層力	波佐見染付広東碗	18c		231
	253		南迎石組溝	層力	波佐見染付筒茶碗	18c		232
	254		南迎石組溝	層力	波佐見染付筒茶碗	18c		234
	255		南迎石組溝	層力	波佐見染付広東碗	18c		233
	256		西迎石組溝	層力	波佐見青磁染付四方荷碗蓋	18c		198
	257		西迎石組溝	層力	波佐見染付梅花文碗	18c		197
	258		西迎石組溝	層力	波佐見染付碗蓋	18c		202
	259		西迎石組溝	層力	波佐見染付筒茶碗	18c		199
	260		西迎石組溝	層力	波佐見染付広東碗	18c		201
	261		西迎石組溝	層力	波佐見染付五井花文丸皿	18c		200
	262		西迎石組溝層	層力	丹波徳	18c	四角形に ロの字 大田	196

表9　遺物一覧 4

遺構図面	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	実測番号
	263		東迫石組溝	覆方	在地系灯明皿	18c		218
	264		東迫石組溝	覆方	瀬戸染付小碗	18c		216
	265		東迫石組溝	覆方	波佐見染付草花文碗	18c		224
	266		東迫石組溝	覆方	十能	18c		229
	267		東迫石組溝	覆方	在地系黒釉壺甕	18c		228
	268		東迫石組溝	覆方	波佐見染付碗蓋	18c		227
13-1	269	F-1	東迫石組溝	覆方	伊万里赤絵碗蓋	18c		217
	270		東迫石組溝	覆方	波佐見青磁染付碗反筒平碗	18c		225
	271		東迫石組溝	覆方	波佐見染付皿	18c		226
	272		東迫石組溝	覆方	肥前系京焼調油壺	18c		214
	273		東迫石組溝	覆方	波佐見染付鉢	18c	焼け歪み	215
	274		東迫石組溝	覆方	伊万里染付碗	18c		223
	275		東迫石組溝	覆方	瀬戸美濃系馬目文盤	18c		222
	276		石組溝	覆方	波佐見染付鉢	18c		209
	277		石組溝	覆方	波佐見青磁筒平碗	18c		208
13-2	278	F-1	石組溝	覆方	波佐見陽香炉	18c		204
	279		石組溝	覆方	波佐見仏花瓶	18c		207
	280		石組溝	覆方	波佐見青磁染付皿	18c	ハリ支丈	203
	281		石組溝	覆方	唐津系象嵌鉢	18c	松山城跡分 重出度	205
	282		石組溝	覆方	備前鉄釉壺	18c	城風、陶工沙丸子	206
	283		石組溝	覆方	伊万里染付山水文碗蓋	18c		212
14-1	284	F-1	石組溝	覆方	波佐見染付碗蓋	18c	恐山二酒氏酒文	213
	285		石組溝	覆方	波佐見染付竜文碗蓋	18c		210
	286		石組溝	覆方	波佐見染付皿	18c	口縁縁圧潰工	211
	287		東迫石組溝	覆方	刻字大袋（備前か）		●四●	390
	288		石組溝	溝内下層	波佐見染付杯	18c		191
	289		石組溝	溝内下層	唐津系灰釉小鉢	18c	山の紋か	189
	290		石組溝	溝内下層	江永碗	18c	霞入多し、麻呂焼か多い	193
14-2	291	F-1	石組溝	溝内下層	波佐見染付鉢文碗	18c		192
	292		石組溝	溝内下層	肥前碗	18c		190
	293		石組溝	溝内下層	備前鉄釉壺	18c		194
	294		石組溝	溝内下層	丹波土瓶	18c		195
	295		石組溝	溝内下層	柿動式甕	18c		188
	296		石組溝	溝内上層	在地系灰釉土瓶蓋	18c		170
	297		石組溝	溝内上層	在地系灰釉土瓶蓋	18c		171
	298		石組溝	溝内上層	在地系土瓶蓋	18c		187
	299		石組溝	溝内上層	波佐見染付碗蓋	18c		176
	300		石組溝	溝内上層	波佐見青磁染付碗蓋	18c		179
	301		石組溝	溝内上層	波佐見青磁染付小鉢	18c		173
	302		石組溝	溝内上層	波佐見染付碗	18c	黒漆掃合痕	177
	303		石組溝	溝内上層	瀬戸染付猪口碗	19c		169
	304		石組溝	溝内上層	波佐見染付碗	18c		180
	305		石組溝	溝内上層	波佐見色絵碗	18c	上端に焼台痕	174
	306		石組溝	溝内上層	肥前京焼系灰釉小杯文小碗	18c		184
15	307	F-1	石組溝	溝内上層	波佐見筒平碗	18c	松山城跡区移	186
	308		石組溝	溝内上層	瀬戸美濃鉄釉芯芯文四方皿	18c		172
	309		石組溝	溝内上層	波佐見染付碗	18c		183
	310		石組溝	溝内上層	波佐見染付碗	18c	焼成不明	178
	311		石組溝	溝内上層	波佐見筒平碗	18c		185
	312		石組溝	溝内上層	波佐見染付仏飯具	18c		182
	313		石組溝	溝内上層	瀬戸色絵杯	19c		168
	314		石組溝	溝内上層	瀬戸釉絵菊模文皿	19c		167
	315		石組溝	溝内上層	波佐見染付皿	18c	松山城跡出土	181
	316		石組溝	溝内上層	備前建水	16c末～17c前	橋本鉄工船用か	175
	317		石組溝	溝内上層	知田柿動式甕	18c	明治本家　山田	387
	318		石組溝	溝内上層	陶製捩り器	18c		386

遺構図面	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	実測番号
	319		町屋第８面	ピット	備前擂鉢	16ｃ後		459
	320		町屋第７面	精査	備前擂鉢	16ｃ後		117
	321		町屋第７面	溝	丹波擂鉢	16c4/4		122
	322		町屋第７面	精査	瀬戸灰釉丸皿	16ｃ後		121
16-2	323	F-1	町屋第７面	土坑	瀬戸美濃灰釉溝縁皿	16ｃ後		116
	324		町屋第７面	精査	景德鎮黒青花端反碗	16c		118
	325		町屋第７面	精査	瀬戸灰釉皿	16ｃ後		120
	326		町屋第７面	土坑	朝鮮王朝白磁碗	16ｃ後		458
	327		町屋第７面	土坑	備前徳利	16ｃ後		115
	328		町屋第７面	ピット	備前壺香	16c		123
	329		町屋第６面	不明遺構	在地系灯明皿	16c		124
	330		町屋第６面	不明遺構	在地系灯明皿	16c		125
	331		町屋第６面	土坑	在地系灯明皿	16ｃ末		133
	332		町屋第６面	土坑	瀬戸・美濃鉄釉溝縁皿	16c4/4		128
	333		町屋第６面	検出	唐津灰釉碗	17c1/4		132
	334		町屋第６面	土坑	唐津灰釉碗	17c 初		127
	335		町屋第６面	ピット	景德鎮黒白磁端反碗	16ｃ末		126
16-2	336	F-1	町屋第６面	土坑	唐津灰釉丸皿	17c 初		135
	337		町屋第６面	土坑	星梁黒青磁線描連弁文碗	16c1/4		129
	338		町屋第６面	検出	景德鎮黒青花碗	16ｃ後		131
	339		町屋第５面	土坑	唐津灰釉溝反碗	17c2/4		137
	340		町屋第５面	検出	唐津灰釉碗	17c2/4		140
	341		町屋第５面	土坑	備前盤	17c 初		139
	342		町屋第５面	土坑	唐津灰釉碗	17c 初	浅黄茶碗 底子に転用	138
	343		町屋第５面	土坑	在地系焙烙	17c2/4		136
	344		町屋第４面	建物跡	唐津灰釉丸皮鉢皿	17c1/4		149
	345		町屋第５面	ピット	唐津灰釉丸皮鉢碗	17c1/4		141
	346		町屋第４面	建物跡	丹波肥手付鉢	16ｃ後		148
	347		町屋第４面	下層	唐津灰釉丸皿	17c 初		151
	348		町屋第４面	検出	唐津灰釉溝縁皿	17c2/4		143
16-3	349	F-1	町屋第４面	不明遺構	美濃唐津向付	17c 初		144
	350		町屋第４面	土坑	肥前白釉端反皿	17c2/4	初期６個	142
	351		町屋第４面	不明遺構	唐系焙烙皿	17c 初	縦方向面取り	145
	352		町屋第４面	土坑	瀬州窯青花碗	17c 初		146
	353		町屋第４面	版築整地層	丹波擂鉢	17c2/4		147
	354		町屋第４面	建物跡	丹波擂鉢	16c4/4		150
	355		町屋第３面	精査	初期伊万里染付椀文皿	17c2/4		152
	356		町屋第３面	土坑	在地系土師質皿	18c		153
	357		町屋第２面	土坑	伊万里染付盤	17c2/4	□福	155
	358		町屋第２面	土坑	丹波壺	16c 力		154
	359		町屋第２面	土坑	丹波壺	16c 力		154
	360		町屋第２面		唐津青磁皿（瀬戸美濃か）	18c	蔓台内に八十一	392
	361		町屋第２面	溝	瀬戸美濃鉄釉天目碗	17c2/4		157
	362		町屋第２面	土坑	志野端反皿	17c2/4	灯明皿転用か	156
17-1	363	F-1	町屋第１面	井戸	柿動灯明皿	18c		163
	364		町屋第２面	溝	唐津系緑釉皿	17c2/4	松山城跡出土	158
	365		町屋第１面	土坑	黒釉象嵌	18c	敷瓦重複痕跡	164
	366		町屋第１面	井戸	波佐見色絵皿小鉢	18c		165
	367		町屋第１面	土坑	波佐見染付草花文碗	18c		161
	368		町屋第１面	土坑	波佐見草花文碗	18c		160
	369		町屋第１面	井戸	肥前京焼系青釉御詰徳利	18c		162
	370		町屋第１面	沢尻地区 転落段階	在地系軟質陶器陶器ぐい呑み	18c		166
	371		町屋第１面	土坑	波佐見染付碗	18c	松山城跡出土	159

表10　遺物一覧 5

遺物出現	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	実測番号
17-2	372	F-1	塀	中上層	碗	18c	表面に墨書文字多数	310 311
	373		塀	中上層	碗	18c		317
	374		塀	最下層	碗	18c		312 313
	375		塀	中層	碗	18c		318
	376		塀	中層	碗	18c		314
	377		町屋第７面	検出中	碗	18c	小型品	321
	378		塀	上層	碗	18c		319 316
	379		塀	下層※	碗	18c	亀形	319
	380		南辺石組溝	裏込	碗	18c		320
18-1	381	F-1	土橋	東西断割	丸瓦	16c		322
	382		土橋	東西断割	丸瓦	16c		323
	383		土橋	東西断割	平瓦	16c		325
	384		土橋	東西断割	平瓦	16c		324
18-2	385	F-1	東辺石垣	裏込	三巴文軒丸瓦	14c 中以前		328
	386		東辺石垣	裏込	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4		329
	387		東辺石垣	裏込	平瓦	16c		330
	388		東辺石垣	掘付溝	軒平瓦	16c	瓦当	343
	389		東辺石垣	裏込	唐	16c		326
	390		東辺石垣	裏込	平瓦	16c		327
19-1	391	F-1	馬出状郭	周辺	三巴文軒丸瓦	16 c	瓦当	457
	392		馬出状郭	周辺	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	349
	393		馬出状郭	周辺	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	350
	394		馬出状郭	周辺	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	347
	395		馬出状郭	周辺	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	348
	396		馬出状郭	周辺	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	456
	397		馬出状郭	周辺	軒平瓦	16 c 3/4	瓦当	351
19-2	398	F-1	馬出状郭前列・入口	石垣裏方	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	344 346
	399		馬出状郭	入口集石	三巴文軒丸瓦	14c 中以前	瓦当	331
	400		馬出状郭	入口集石	軒平瓦	16 c 3/4	瓦当	345
	401		馬出状郭	南端検出	丸瓦	16 c 4/4		342
20-1	402	F-1	馬出状郭	入口	丸瓦	16 c 3/4		452
20-2	403	F-1	馬出状郭側面	北端裏込	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	332
	404		馬出状郭前列	石垣裏込	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	341
	405		馬出状郭側面	北端裏込	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	333
	406		馬出状郭前列	石垣裏込	三巴文軒丸瓦	16 c 3/4	瓦当	338
	407		馬出状郭前列	石垣裏込	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	337
	408		馬出状郭前列	石垣裏込	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	336
	409		馬出状郭前列	石垣裏込	三巴文軒丸瓦	15c 後半以降	瓦当	334
	410		馬出状郭前列	石垣裏込	三巴文軒丸瓦	16c 末～17 c	瓦当	335 339
	411		馬出状郭前列	石垣裏込	丸瓦		吊り紐	462
	412		馬出状郭前列	石垣裏込	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	340
21-1	413	F-1	町屋第８面	土坑ピット	軒平瓦掘瓦	14 c 以降	瓦当	460 461
	414		町屋第８面	ピット	軒平瓦	15 c	瓦当	378
	415		町屋第８面	検出	軒平瓦	16 c 前半	瓦当	459
21-2	416	F-1	７面北東隅	建物	瓦家文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	377
	417		７面北東隅	建物	軒平瓦	15 c ？	瓦当	454
	418		７面	検出時	軒平瓦	15 c 以降	瓦当	376
22-1	419	F-1	７面	検出時	丸瓦	16 c 4/4		375
	420		７面北東隅	建物	丸瓦	16 c 3/4		453

遺物出現	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	実測番号
22-2	421	F-1	３面	土坑	三巴文軒丸瓦	16c 末～17 c	瓦当	371
	422		６面	検出時	三巴文軒丸瓦		瓦当	374
	423		６面	検出時	軒平瓦		瓦当	372
	424				軒平瓦		瓦当	372
23	425	F-1	南辺石垣	裏込上層	鬼瓦		下顎部分のみ	353
	426		2 面	検出時	京花軒丸瓦瓦		瓦当	370
	427		南辺石垣	裏込上層	三巴文軒丸瓦	16 c 3/4	瓦当	352
24	428	F-1	北辺石組溝	掘方	三巴文軒丸瓦	18c	瓦当	364
	429		４面		梅羽口		鉄滓解か	381
	430		５面		梅羽口		鉄滓解か	380
	431		馬出状郭前列	石垣裏込	平瓦		格子目タタキ	463
24	432	F-1	塀	下層	三巴文軒丸瓦	16 c 1～3/4	瓦当	356
	433		塀	下層※	三巴文軒丸瓦	16c 末～17 c	瓦当	368
	434		塀	下層	三巴文軒丸瓦		瓦当	359
	435		塀	下層※	軒平瓦		瓦当	369
	436		塀	下層※	三巴文軒丸瓦	18c	瓦当	367
	437		塀	下層	京花軒丸瓦瓦		瓦当	363
	438		塀	下層※	三巴文軒丸瓦	18c	瓦当	366
	439		塀	中層	三巴文鳥伏間	16 c 末以降	瓦当	355
	440		塀	上層	三巴文軒丸瓦		瓦当	362
	441		塀	上層	三巴文軒丸瓦		瓦当	357
	442		塀	上層	三巴文軒丸瓦		瓦当	361
	443		塀	上層	三巴文軒丸瓦		瓦当	360
	444		塀	上層	軒平瓦		瓦当	365
	445		塀	上層	軒平瓦		瓦当	358
	446		塀	上層	鬼瓦か			354
25-1	447	Ⅰ	城外側石垣	裏込	在地系土師質皿	16c 後		2
	448		城外側石垣	裏込	備前擂鉢	16c 前		1
	449		城内側石垣	掘方	瀬戸灰釉皿	15c		3
	450		城内側石垣	裏込	備前小壺	16c1/4		4
	451		城内側石垣	裏込	備前擂鉢	16c1/4		5
	452		城内側石垣	裏込	備前大壺	13c		6
	453		城内側石垣	ベース	在地系土師質ヘそ皿	14 後		7
	454		城内側石垣	ベース	在地系土師質ヘそ皿	14 後		8
	455		城内側石垣	ベース	在地系土師質皿	14c 中	白系	9
	456		城内側石垣	ベース	東播系こね鉢	13c 後		10
25-2	457	Ⅰ	城外側石垣	崩落石下	初期伊万里染付皿	17c2/4		12
	458		城外側石垣	崩落石下	在地系土師質皿	18c		13
	459		城外側石垣	崩落石下	備前擂鉢	17c1/4		11
	460		城内側石垣	側落石上中	初期伊万里染付皿	17c2/4		16
	461		城内側石垣	崩落石下	伊万里染付椀	18c	鉛ガラズ青緑点青緑赤の跡あり	14
	462		城内側石垣	崩落石中	波佐見染付皿	18c		15
	463		城内側石垣	側落石上中	瀬戸美濃錆釉皿	17c2/4		17
	464		城内側石垣	側落石上中	在地系土師質焙烙	17c2/4	内面コゲ？付着	18
25-3	465	Ⅰ	塀	下層	唐系焼塩壺	18c		23
	466		塀	下層	在地系土師質桶箍灯明受皿	18c	糸切	22
	467		塀	下層	志野皿	18c		24
	468		塀	下層	龍泉窯青磁稜花皿	15c 後		35
	469		塀	下層	波佐見磁反五井花文鉢	18c		28
	470		塀	下層	波佐見染付五井花文皿	18c1/4		26
	471		塀	下層	波佐見染付梅花文碗蓋	18c		34

表11　遺物一覧 6

遺物図版	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	実測番号
26-1	472		塩	下層	須恵見染付草花文碗	18c		20
	473		塩	下層	須恵見染付竹文筒茶碗	18c		21
	474		塩	下層	須恵見青磁染付五井花文碗	18c		33
	475		塩	下層	須恵見青磁染付五井花文碗	18c		32
	476	I	塩	堀底	須恵見染付小碗	18c 中		19
	477		塩	下層	須恵見染付碗	18c1/4		31
	478		塩	下層	須恵見青磁染付鉢	18c		27
	479		塩	下層	鉄釉土瓶	18c		29
	480		塩	下層	肥前系瀬戸	18c		30
	481		塩	下層	明石瀬戸	18c		25
26-2	482		塩	中層	鍋泉東青磁皿	15c 後		40
	483		塩	中層	肥前京焼系灰釉碗	18c	貫入多し	47
	484	I	塩	中層	肥前京焼系黒灰釉碗	18c		46
	485		塩	中層	肥前灰釉鉢	18c	見込み 松の目跡①	48
	486		塩	中層	瀬戸美濃錆手煎茶碗	18c		41
	487		塩	中層	丹波小鉢	18c		42
27-1	488		塩	中層	須恵見染付草花文小碗	18c	2次焼けあり	43
	489		塩	中層	須恵見青磁染付おもだか文碗蓋	18c		37
	490		塩	中層	須恵見染付牡丹文碗	18c		39
	491	I	塩	中層	須恵見染付丸皿	18c	見込み 松の目跡①	36
	492		塩	中層	須恵見染付五井花文筒茶碗	18c		44
	493		塩	中層	須恵見染付葱麦猪口	18c		45
	494		塩	中層	在地系土師質鍋り込み鉢	18c		49
	495		塩	中層	在地系土師質皿	17c	糸切り ケナデ 切込み	38
27-2	496		塩	上層	在地系土師質特輪皿	18c	糸切 - スス付着	56
	497		塩	上層	在地系土師質灯明皿	18c	糸切 - スス付着	57
	498		塩	上層	瀬戸染付小碗	19c		53
	499	I	塩	上層	須恵見染付唐草文碗	18c	見込み蛇文	50
	500		塩	上層	須恵見染付花文皿	18c		52
	501		塩	上層	志野輪花皿	18c	貫入多し	54
	502		塩	上層	丹波平瓶	18c		51
	503		塩	上層	瀬戸特殊獣文火鉢	18c	内面煤付着	55
27-3	504		SX201	区画内検出	丹波鉄釉徳利	18c	胴部に6mm穿孔	62
	505		SX201	廃下層	須恵見染付火入れか	18c 前		59
	506	I	SX201	精査	須恵見染付広東碗	18c		60
	507		SX201	区画内検出	瀬戸染付碗	19c		64
	508		SX201	精査	須恵見染付問茶碗	18c		65
28	509		SX201	南側土層方	須恵見染付牡丹唐草文輪花皿	18c	黒漆で焼継ぎ	58
	510		SX201	区画内検出	須恵見染付サンスクリット文碗蓋	18c		63
	511		石組溝	5 層	須恵見染付碗	18c		68
	512		石組溝	4 層	瀬戸染付くい呑み	19c		77
	513		石組溝	4 層	須恵見染付鍋皿	18c	口縁部工夫	72
	514		石組溝	層方	須恵見染付碗	18c		65
	515		石組溝	4 層	須恵見染付杯	18c		71
	516		石組溝	4 層	伊万里肥茶用急須	18c		73
	517		石組溝	4 層	古唐部杯	18c	刻印「古唐部」	78
	518		石組溝	4 層	肥前京焼系丸皿	18c	刻書「山」	74
	519		石組溝	4 層	肥前京焼系丸皿	18c	胴部線状 1 点あり	75
	520		石組溝	2 層	唐津系胎土碗	18c	見込み松の目	82

遺物図版	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	実測番号
28	521		石組溝	4 層	在地系新興陶器鉄釉輪灯明皿	18c		80
	522		石組溝	4 層	在地系か陶器文字文坏	18c		70
	523		石組溝	3 ' 層	大阪系土師質焼塩壺蓋	18c	内面布目	81
	524	I	石組溝	層方	在地系土師質灯明皿	18c	糸切 - スス付着	67
	525		石組溝	層方	在地系土師質特輪灯明受皿	18c		66
	526		石組溝	4 層	備前鉄釉徳利	18c		76
	527		石組溝	5 層	唐焼土	18c		69
	528		石組溝	4 層	丹波徳利	18c	小字1 印(C印)	79
29-1	529		塩蔵	井戸	在地系土師質灯明皿	16 世～17 世		103
	530		塩蔵	井戸	在地系土師質灯明皿	16 世～17 世		104
	531	I	塩蔵	井戸	瓦器埴	13c 前		105
	532		塩蔵	井戸	景德鎮漢青花碗	16 世～17 世		100
	533		塩蔵	井戸	備前擂鉢	16 世～17 世		102
	534		塩蔵	井戸	備前壺底	16 世～17 世		101
29-2	535		第 3 面	SP303	在地系土師質皿	17c 前		84
	536		第 3 面	SL303	在地系土師質皿	17c 前		93
	537		第 3 面	SP331	在地系土師質土鍋	17c		88
	538		第 3 面	SP322	在地系土師質皿	17c		87
	539		第 3 面	SP322	備前擂鉢	14c		86
	540		第 3 面	SP305	須恵見染付碗	18c	見込み 松の目跡①	85
	541		第 3 面	SP304	江永染付碗	18c		83
	542		第 3 面	SD302	東播系鍋鉢	14c 前	同上復元	90
	543		第 3 面	SD302	東播系鍋鉢	14c 前	同上復元	89
	544	I	第 3 面	カマド検出	在地系新興陶器鉄釉碗	18～19c	錆手風か	92
	545		第 3 面	カマド検出	在地系土師質特輪皿しかり見入れ	18～19c	口縁部 - スス付 糸切	91
	546		第 1 面	SK104	在地系土師質皿	18c	糸切	95
	547		第 2 面	面下げ	中国製鉄釉碗菊皿	16 世～17 世		94
	548		第 1 面	SK108	瀬戸染付プリント碗	19c		96
	549		第 1 面	SP102	景德鎮漢青花碗	17c		97
	550		第 1 面	SP111	在地系土師質皿	18c		99
	551		第 1 面	SP108	景德鎮染白磁碗反皿	16 世～17 世		98
	552		第 1 面	SK105	彩陶唐草文軒平瓦	近世	橘唐草 鉄で塗料	135
	553		第 1 面	SP111	彩陶唐草文軒平瓦	18 c	橘唐草文	136
	554		第 1 面	東あぜ	平瓦	近世	内面布目の「三巴紋」	137
30-1	555		墳内側石塁	裏込	軒平瓦	14 c 代		106
	556		墳内側石塁	裏込	軒平瓦	14 c 代		107
	557		墳内側石塁	裏込	平瓦	14～15 c 代	凸紋文様 / パチ紋様の	155
	558	I	墳内側石塁	裏込	平瓦	中世		108
	559		墳内側石塁	裏込	丸瓦	16c14～4/4	内の紋様の / コビキ平瓦	153
	560		墳内側石塁	裏込	平瓦	14 c 代	凸紋ケラキ有り	154
	561		墳内側石塁	裏込	丸瓦	中世室町	摩り込む付 / コビキ A	152
30-2	562		墳内側石塁	崩落石中	中心三葉文軒平瓦	16c 末～17 世		117
	563		墳内側石塁	崩落石	唐草文軒平瓦	中世	領貼り付け	158
	564		墳内側石塁	崩落石中	水波文軒平瓦	15c 代		118
	565	I	墳内側石塁	崩落石下	水波文軒平瓦	15c 代		111
	566		墳内側石塁	崩落石中下	水波文軒平瓦	15 c 代		114
	567		墳内側石塁	崩落石下	宝珠水波文軒平瓦	16 c 3/4		109
	568		墳内側石塁	崩落石中	唐草文軒平瓦	15 c 代 ?		115
	569		墳内側石塁	崩落石中	唐草文軒平瓦	15 c 代 ?		116

表12　遺物一覧７

遺構図版	番号	区	遺構名	器種	器種	年代	備考	実測番号
31	570	1	城内側石垣	崩落石	軒丸瓦	15ｃ代？	巴紋単弧先端が太く、内傾する印象	157
	571		城内側石垣	崩落石下	三巴文軒丸瓦	16ｃ4/4		110
	572		城内側石垣	崩落石下	三巴文軒丸瓦	16ｃ末		113
	573		城内側石垣	崩落石下	三巴文軒丸瓦	16ｃ4/4		112
	574		城内側石垣	崩落石中	三巴文軒丸瓦	16ｃ4/4		119
	575		城内側石垣	崩落石	三巴文鳥伏間	15ｃ以降カ		161
	576		城内側石垣	崩落石	丸瓦	16ｃ3/4	巴の線が一つ巴ＩＶ類	160
	577		城内側石垣	崩落石	丸瓦	14ｃ頃カ	凸線幅ほぼ中半幅	159
	578		城内側石垣	崩落石	丸瓦	16ｃ3/4	巴の線・つどＩＶＡ・横巴巴分方	156
	579		城内側石垣	崩落石	瓦平瓦	中世		163
	580		城内側石垣	崩落石	瓦版瓦	中世		162
32	581	1	塩	下層	軒平瓦	16ｃ3/4	張付け？	165
	582		塩	下層	水波文軒平瓦	15ｃ代		164
	583		塩	中層	水波文軒平瓦	15ｃ代		125
	584		塩	中層	偏行唐草文軒平瓦	14ｃ中？	張線あり去手	126
	585		塩	中層	唐草文軒平瓦	中世	張付け？	166
	586		塩	中層	唐草文軒平瓦	15ｃ代？		127
	587		塩	下層	石輪唐草文軒平瓦	18ｃ	橘唐草文	121
	588		塩	下層	三巴文軒丸瓦	18ｃ		120
	589		塩	中層	三巴文軒丸瓦	18ｃ		130
	590		塩	上層	三巴文軒丸瓦	近世	珠文なし	132
	591		塩	中層	三巴文軒丸瓦	14ｃ前		129
	592		塩	中層	三巴文軒丸瓦	14ｃ中～後		131
	593		塩	中層	三巴文軒丸瓦	16ｃ4/4		124
	594		塩	上層	巴文軒丸瓦	江戸初？		168
	595		塩	中層	三巴文軒丸瓦	17ｃ中～	桟瓦	128
	596		塩	下層	瑞文軒丸瓦	16ｃ末～17ｃ		122
	597		塩	下層	丸瓦	15ｃ		123
	598		塩	上層	丸瓦	16ｃ末～17ｃ初		167
33	599	1	塩	SX201	軒丸瓦	18ｃ	桟瓦	134
	600		塩	SX201	石輪唐草文軒平瓦	18ｃ	橘唐草文	133
	601		塩底	井戸	丸瓦	中世	コビキＡ・ヘラ・ヘラ＋刻線	169
34	602	1	城内側石垣	崩落石上中	硯		兼面硯書（「高」）	146
	603		塩	SX201	硯		兼面硯書（「海」「ニ」）	150
	604		塩	SX201	硯		兼面硯書か	149
	605		塩	中層	硯			148
	606		塩	中層	硯		兼面硯書（「松」「ニ」）	147
	607		塩	SX201	硯		兼面硯書（「朝明」「ハ明朝」）	151
	608		塩底	在地系土師質焼塩壺			墨書「上」・刻印「雲」	138
	609		塩	上層	在地系土師質底部		墨書「元」	144
	610		塩	中層	波佐見碗		墨書「一」	139
	611		塩	中層	波佐見染付広鉢底		墨書（三手）・（三手カ）	143
	612		塩	中層	波佐見碗		墨書「一」	141
	613		塩	中層	丹波鉢糖壺利		墨書「フキ○」	140
	614		塩	中層	土瓶		墨書「上カ」	142
	615		石組溝	4層	瀬戸美濃灰釉碗		墨書「八ト」・人書２？	145
35-1	616	K-1	SD13002		波佐見草花文染付碗	18ｃ前		1
	617		SD13002		波佐見染付碗	17ｃ末		2
	618		SD13002		波佐見草花文染付碗	18ｃ前		3
	619		SD13002		丹波鉢鉢	17ｃ初		4
	620		SD13002		丹波鉢鉢	17ｃ初		5
	621		SD13002		土師皿	17ｃ後	糸切底	6
	622		SD13002		土師皿	18ｃ前ｃ	糸切底	7

遺構図版	番号	区	遺構名	器種	器種	年代	備考	実測番号
35-2	623	K-1	SP12006		肥前京焼系法線色釉碗	18ｃ前	虹の目釉剥げ	8
	624		SP12006		伊万里白磁小碗	18ｃ前		9
	625		SP12006		土師皿	18ｃ前	糸切底	10
	626		SP12006		土師質燈明	18ｃ前		11
	627		SP12006		瓦鉢鉢	18ｃ前		12
35-3	628	K-1	SP12004		伊万里赤絵碗	18ｃ		13
	629		SP12004		波佐見二重網目文染付碗	18ｃ		14
	630		SP12004		波佐見草花文染付碗	18ｃ		15
	631		SP12004		唐・明石系鉢鉢	18ｃ		16
	632		SP12004		土師皿	18ｃ	糸切底斜	17
	633		SP12004		土師皿	18ｃ	糸切底	18
	634		SP12004		土師質燈明	18ｃ		19
	635		SP12004		土師質燈明	18ｃ		20
35-4	636	K-1	SP12007		土師質燈明	18ｃ		21
	637		SP12007		柿釉土師皿	18ｃ	糸切底斜	22
	638		SP12007		土師皿	18ｃ	糸切底斜	23
	639		SP12007		波佐見染付碗	18ｃ		24
	640		SP12007		波佐見草花文染付碗	18ｃ		25
	641		SP12007		美濃・瀬戸系鉢鉢	18ｃ		26
	642		SP12007		信楽鉢鉢	18ｃ		27
	643		SP12007		大阪系塩壺	18ｃ	泉州産生	28
36-1	644	K-2	SE24001		備前鉢鉢	16ｃ後		29
	645		SE24001		備前鉢鉢	16ｃ		30
	646		SE24001		丹波鉢鉢	17ｃ初		31
	647		SE24001		丹波鉢鉢	17ｃ初		32
	648		SE24001		瀬戸美濃灰釉碗	16ｃ		33
	649		SE24001		景德鎮窯青花碗	16ｃ		34
	650		SE24001		土師皿	17ｃ初		35
	651		SE24001		土師皿	17ｃ初		36
	652		SE24001		土師質鍋	16ｃ		37
	653		SE24001		軒平瓦			38
36-2	654	K-2	SD24001		丹波鉢鉢	18ｃ前		39
	655		SD24001		景德鎮窯青花碗	17ｃ初		40
	656		SD24001		波佐見染付碗	18ｃ前		41
	657		SD24001		土師皿	17ｃ		42
	658		SD24001		土師皿	17ｃ	「東」墨書	43
36-3	659	K-2	SK24005		波佐見草花文染付碗	18ｃ前		44
	660		SK24005		波佐見草花文染付碗	18ｃ前		45
	661		SK24005		波佐見草花文染付碗	18ｃ前	虹の目釉剥げ	46
	662		SK24005		波佐見草花文染付皿	18ｃ前		47
	663		SK24005		波佐見斜格子文染付皿	18ｃ前		48
	664		SK24005		丹波鉢鉢	18ｃ中		49
	665		SK24005		土師質燈明	18ｃ前		50
	666		SK24005		土師質燈明	18ｃ前		51
	667		SK24005		土師皿	18ｃ前		52
	668		SK24005		土師皿	18ｃ前		53
	669		SK24005		土師皿	18ｃ前	糸切底	54
	670		SK24005		土師皿	18ｃ前		55
	671		SK24005		土師皿	18ｃ前		56
	672		SK24005		土師皿	18ｃ前	糸切底	57
	673		SK24005		土師皿	18ｃ前		58
	674		SK24005		土師皿	18ｃ前	糸切底	59

表13　遺物一覧８

遺構図版	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	実測番号
37-1	675	K-2	SK24007		波佐見染付文染付碗	18ｃ前		60
	676		SK24007		波佐見染付碗	18ｃ前		61
	677		SK24007		波佐見染付皿	18ｃ前		62
	678		SK24007		土師皿	18ｃ前		63
	679		SK24007		土師皿	18ｃ前		64
	680		SK24007		土師鍋焙烙	18ｃ前		65
	681		SK24007		堺・明石系擂鉢	18ｃ前		66
37-2	682	K-2	SK23005		波佐見染付皿	18ｃ		67
	683		SK23005		波佐見草花文染付碗	18ｃ		68
	684		SK23005		波佐見草花文染付碗	18ｃ		69
	685		SK23005		波佐見草花文染付碗	18ｃ		70
	686		SK23005		波佐見染付碗	18ｃ		71
	687		SK23005		波佐見染付碗	18ｃ		72
	688		SK23005		波佐見染付碗	18ｃ		73
	689		SK23005		波佐見染付碗	18ｃ		74
	690		SK23005		初期伊万里皿	17ｃ前		75
	691		SK23005		初期伊万里皿	18ｃ		76
	692		SK23005		肥前系碗	18ｃ		77
	693		SK23005		肥前京焼系碗	18ｃ		78
	694		SK23005		土師皿	18ｃ	糸切底	79
	695		SK23005		土師皿	18ｃ	糸切底	80
	696		SK23005		土師鍋焙烙	18ｃ		81
	697		SK23005		土師鍋焙烙	18ｃ		82
37-2	698	K-2	SK23007		波佐見染付碗	18ｃ		83
	699		SK23007		波佐見草花文染付碗	18ｃ		84
	700		SK23007		波佐見染付碗	18ｃ		85
	701		SK23007		波佐見草花文染付碗	18ｃ		86
	702		SK23007		土師鍋焙烙	18ｃ		87
	703		SK23007		土師皿	18ｃ	糸切底	88
38-1	704	K-2	SD22001		波佐見染付蓋	18ｃ～19ｃ		89
	705		SD22001		波佐見草花文染付碗	18ｃ～19ｃ		90
	706		SD22001		波佐見染付碗	18ｃ～19ｃ		91
	707		SD22001		波佐見草花文染付碗	18ｃ～19ｃ		92
	708		SD22001		波佐見染付碗	18ｃ～19ｃ		93
	709		SD22001		波佐見草花文染付皿	18ｃ～19ｃ		94
	710		SD22001		堺・明石系擂鉢	18ｃ～19ｃ		95
	711		SD22001		堺・明石系擂鉢	18ｃ～19ｃ		96
	712		SD22001		土師鍋焙烙	18ｃ～19ｃ		97
	713		SD22001		土師鍋焙烙	18ｃ～19ｃ		98
	714		SD22001		土師鍋焙烙	18ｃ～19ｃ		99
	715		SD22001		土師鍋焙烙	18ｃ～19ｃ		100
	716		SD22001		土師皿	18ｃ～19ｃ	糸切底新	101
	717		SD22001		土師皿	18ｃ～19ｃ	糸切底	102
	718		SD22001		土師皿	18ｃ～19ｃ	糸切底	103

遺構図版	番号	区	遺構名	層位	器種	年代	備考	実測番号
38-2	719	K-2	鹿内井戸		波佐見牡丹文染付蓋	18ｃ～19ｃ		104
	720		鹿内井戸		波佐見草花文染付蓋	18ｃ～19ｃ		105
	721		鹿内井戸		伊万里染付碗	18ｃ～19ｃ		106
	722		鹿内井戸		波佐見サンスクリット文染付碗	18ｃ～19ｃ		107
	723		鹿内井戸		波佐見草花文染付碗	18ｃ～19ｃ		108
	724		鹿内井戸		明石擂鉢	18ｃ～19ｃ		109
38-2	725	K-2	SD21001		波佐見染付蓋	19ｃ		110
	726		SD21001		堺・明石系擂鉢	19ｃ		111
39-1	727	K-2	SM21001		土師皿	19ｃ	糸切底	112
	728		SM21001		波佐見染付皿	19ｃ		113
	729		SM21001		波佐見染付蓋	19ｃ		114
	730		SM21001		波佐見染付碗	19ｃ		115
	731		SM21001		伊万里染付碗	19ｃ		116
	732		SM21001		波佐見草花文染付皿	19ｃ		117
	733		SM21001		瀬戸染付碗	19ｃ		118
39-2	734	K-2	石清水遺構		波佐見染付碗	19ｃ		119
	735		石清水遺構		土師皿	19ｃ	糸切底	120
	736		石清水遺構		土師鍋焙烙	19ｃ		121
	737		石清水遺構		丹波擂鉢	18ｃ		122
39-2	738	K-3	SM64004		伊万里染付碗	18ｃ～19ｃ		123
	739		SM64004		波佐見草花文染付碗	18ｃ～19ｃ		124
	740		SM64004		鹿津系抹茶碗	18ｃ～19ｃ		125
	741		SM64004		堺・明石系擂鉢	18ｃ～19ｃ		126
	742		SM64004		土師皿	18ｃ～19ｃ	糸切底新	127
	743		SM64004		土師皿	18ｃ～19ｃ	糸切底新	128
39-4	744	K-3	SK64001		伊万里染付蓋	18ｃ～19ｃ	焼継ぎ	129
	745		SK64001		伊万里染付碗	18ｃ～19ｃ		130
	746		SK64001		波佐見染付広東碗	18ｃ～19ｃ		131
	747		SK64001		波佐見矢羽根文染付碗	18ｃ～19ｃ		132
	748		SK64001		柿釉土師皿	18ｃ～19ｃ	糸切底新	133
	749		SK64001		堺・明石系擂鉢	18ｃ～19ｃ		134

第３章　各　論

第１節　兵庫城跡（兵庫津遺跡第57次）出土の土器・陶磁器について

森 村 健 一

はじめに－出土した土器や陶磁器から知りたいこととは何か－

兵庫城跡から出土した土器・陶磁器を分析することは、当時の生活や文化を解明する最高の材料である。さらには、それらの商品の流通や歴史的背景をも解明する糸口を有している。当時の豊かな生活ぶりを証明する生き証人である。注目すべき項目の概要と判明した点や問題点に触れたい。出土品の年代観については大火の文献、沈没船資料、木簡資料の一括品とその年代に並行する地層の上下の出土資料から判断した。

１．備前擂鉢（遺物図版1-15・16、遺物図版3-71・73・74、遺物図版4-92・93・101・102、遺物図版5-112、遺物図版6-129・130）

摂津・河内・和泉における内面に擂り目がある擂鉢の産地の時代的大きな流れを少し説明しておきたい。12世紀から14世紀初頭までは兵庫県神出・魚住窯須恵質捏鉢、その後から15世紀第３四半期までは瓦質擂鉢、その後から17世紀第１四半期前半の1615年大坂夏の陣までは備前焼、その後から18世紀初頭までは丹波焼、その後から明治時代までは備前擂鉢の技術を継承・導入した堺擂鉢と明石擂鉢が使用されていた。

備前擂鉢の出土量の増加は15世紀後半以降にあって中国食文化や禅院の食文化の中心であった練物・和え物・粉末食文化がより多くの人々の日常食文化に使用された結果である。その大きな原因は、1467～1477年に発生した応仁の乱により京都の禅僧が地方に逃れたことにある。

約400年前には、茶の湯文化が花開くと会席料理用として採用されたことが茶の湯道具一括出土から判明している。

しかし、応仁の乱により1467年遣明船堺初入港を契機として堺商人の力が増大したことにより15世紀第３四半期以降は、国家力と堺の禅林の信用を背景に商圏を握っていた堺商人が備前擂鉢の生産と販売圏を確保していたが1615年大坂夏の陣大火で被害を受けたために、それ以降は大坂商人により丹波擂鉢に凌駕される。

（註：中近世備前焼研究会・乗岡実2000『備前焼擂鉢の編年』第30回中近世備前焼研究会資料、
石井啓・乗岡実2001「備前焼編年資料」『関西近世考古学研究IX』関西近世考古学研究会）

２．丹波擂鉢（遺物図版1-29、遺物図版2-36、遺物図版7-161・172、遺物図版8-182・185、遺物図版11-247、遺物図版16-321・353・354、遺物図版35-620、遺物図版36-646、遺物図版39-737）

丹波擂鉢の特徴は色調が黄色がかった肌色系、外面は指圧痕が多い、胎土にやや目立つ白色砂粒の長石や石英が含有しているが信楽焼のそれのように溶けていない。17世紀第２四半期以降のそれは色調が茶黒色に変化し、白色砂粒が目立つ、見込み（内面底部）に金属製工具による円形＋十字の刷毛目を施している。以下、形式的な変化を見てみる。

16世紀第４四半期前半　16-321（擂目一本挽き）⇒16世紀第４四半期後半　7-161（擂目櫛目以下同じ）⇒17世紀第1四半期初期　7-172⇒1615年段階　36-646⇒17世紀第２四半期前半　35-620⇒17世紀後半　39-737⇒18世紀前半　1-29⇒18世紀後半

丹波擂鉢が兵庫城跡において目立つ存在であるのは、丹波からの街道で搬入を容易にしていた証拠である。

(註：森村健一2006「流通④関西　江戸時代のやきもの」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター、堺市教育委員会1984『堺環濠都市遺跡発掘調査報告一市之町東4丁SKT19地点－』堺市文化財調査報告第20集）

３．堺擂鉢・明石擂鉢（fig.83堺擂鉢・丹波擂鉢）

「堺擂鉢」（遺物図版3-67、遺物図版11-250、遺物図版8-186、遺物図版28-527、遺物図版35-627）は、備前焼擂鉢に変わるものとして堺環濠都市遺跡の環濠内の寺内町と環濠に挟まれた都市縁辺部で生産していたことが発掘調査で確認されている。

（註：堺市教育委員会1988『堺環濠都市遺跡(SKT' 79)発掘調査報告』・同書白神典之「堺擂鉢について」）

その場所は、大小路より北側の農人町で都市内での公害を避け、環濠沿いで燃料の薪の運搬、その地が堺擂鉢の粘土を必要とする粘土層上で生産開始した。

(註：前田書店『元禄二年(1688)堺大絵図』)

堺擂鉢の生産開始は人見理兵衛　書林　享保20年(1735)『堺大絵図改正網目』には見受けられないが、寛保元年(1741)の文献には「摺鉢并壺焼株　一　摺鉢并壺焼釜本　八株　…堺極与印を押度候、…」とあることからこの時期には、すでに堺擂鉢の生産を開始していたのである。さらに、考古学的検証では18世紀第１四半期には生産を開始していたことが判明した。

それの生産の最後頃の時期を示す資料としては、堺書林　明治五年(1872)『堺港全図』「名物土産…摺鉢…」がある。川崎源太郎1883『明治初年和泉豪商名家図譜』和泉文化研究会刊には、「神明町西二丁　木谷七平　土樋　擂鉢製造所」とあることから明治時代には生産していたと推測される。

さて、堺擂鉢の特徴は備前擂鉢に比して胎土に粘性度が少ない、色調はレンガ色が主流で優秀品が茶黒色で光沢がある。そのレンガ色は全体に見られる。その現象は、重ね焼きする時に高さ３～７㎝・径17～20㎝の半月でリング状の焼台に乗せて焼成していたからである。

一方、備前擂鉢は堺擂鉢に採用された焼台がなく直接に重ね焼きしているために口縁部のみが備前焼の特徴である茶褐色がそれ以外の部分は火の回りがなく赤褐色に止まっている。

「明石擂鉢」（遺物図版12-251、遺物図版26-481、遺物図版38-724）は、18世紀第２四半期に堺擂鉢の職人が明石市内の窯を開窯したことが文献で知られている。地上式の達磨窯である点や焼成方法は基本的には変わらない。しかし、胎土に砂質が多いために底部からの立上がり部が堺擂鉢のそれよりも分厚く、また口縁部に歪みが見られる。さらに、大きな違いがある。

それは、堺擂鉢の見込みには「ウールマーク」の刷毛目文様に対して明石擂鉢は「放射状」の刷毛目文様がある。焼成された色調も堺擂鉢のそれよりもやや黄色を帯びている。

そして、明石擂鉢には、堺擂鉢の高級ブランドを示す「堺極」のような刻印はない。堺擂鉢・明石擂鉢の販売は競合しており東が江戸や神津島、西は備前、奈良県大峯山山頂の祠下層からも出土している。

堺との海運関係は１日の距離であるばかりか、兵庫津遺跡第53次調査の1600～1615年の

堺焼塩壷(SK602)、禅宗寺院の床に敷かれた塼や土塀下部の雨はね除けをヒントから堺環濠都市遺跡において16世紀第１四半期に出現した塼列建物(SB701)の基礎への採用、堺環濠都市遺跡において16世紀第１四半期に出現した堺オリジナルの堺井戸瓦積み井戸が18世紀第１四半期に採用されていることが物語っている。

さらに、堺との関係を示すように『元禄二年(1689)堺大絵図』には、兵庫益庵・兵庫屋岩松・兵庫屋吉左衛門・兵庫屋冶平衛・兵庫屋仁左衛門・兵庫屋甚兵衛・兵庫屋善太郎・兵庫屋長左衛門・兵庫屋妙宜・兵庫屋与三右衛門の名が見える。

(註：神戸市教育委員会2012『兵庫津遺跡第53次調査報告書』)

４．輸入陶磁器（fig.84）

出土した輸入陶磁器は、東アジアや東南アジアの生産窯からの陶磁器である。それらは、高級食器や茶の湯の道具として使用されていたものである。

朝鮮王朝陶磁白磁碗(遺物図版16-326)、約400年前の茶の湯において切溜花生(きりだめはないけ)に利用されることの多いベトナムミースエン・フックィク窯系長胴壷(遺物図版7-156)

(註：森村健一2004「堺出土ベトナム陶磁による近世茶の湯スタイルの確立」『ベトナム・ホイアンの学術的研究－ホイアン国際シンポジウムの記録』昭和女子大学国際文化研究所紀要Vol.9/2003昭和女子大学国際文化研究所)

中国陶磁器(龍泉窯青磁碗遺物図版1-5・6・12・13等)

(註：森村健一2006「12・13世紀における関南沿海窯系白磁碗から龍泉窯系青磁碗へ」『吉岡康暢先生古希記念論集　陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会、森村健一2005「14・15世紀の龍泉窯系青磁碗－編年と堺貿易システム－」『産業・社会・人間』産業社会学会誌No.６羽衣国際大学産業社会学会)

景徳鎮窯(青花：遺物図版6-126、遺物図版7-152、白磁：遺物図版6-124・131)

漳州窯(遺物図版6-122、遺物図版16-352、遺物図版36-648)

(註：森村健一1997「漳州窯陶瓷器-SWATOW-的貿易」『漳州窯』福建省博物館：森村健一2009「漳州窯」『別冊太陽　中国やきもの入門』平凡社、中国漳州窯研究会・中国古窯調査研究会2013『漳州窯陶瓷器-SWATOW-IV-』日中漳州窯国際学術交流会議2013-)

福建省閩江中流域白磁窯割高台小碗・皿(遺物図版4-96、遺物図版5-107・110)

(註：堺市教育委員会2002『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－SKT787地点・熊野町東２丁－』堺市文化財調査概要報告第98冊：第10層琉球銭世高通宝1461年初鋳共伴)

16世紀末葉から17世紀初頭の都市遺跡から出土する翡翠釉(遺物図版29-547)が多量の日本陶磁器の中にあって少ないながら目立つ存在である。

兵庫城から輸入陶磁器が出土することは、古代・日宋貿易・遣明船貿易・応仁の乱時の兵站基地・国際貿易都市堺の補助港・直轄領・隣接する大輪田泊から兵庫津との密接な関係を見逃す訳にはいかない。

蛇足になるが、18世紀後半代において波佐見・伊万里焼で模倣生産される広東蓋碗(遺物図版10-210・211・214・215等)は、以前とは異なり蓋が付くタイプである。

このタイプの見本となった広東蓋碗の輸入は、清朝が1757年に海外貿易港を広州に限定したことによる。これ以降は、飯用蓋碗が流行するきっかけとなる。

５．焼塩壷（第３図焼塩壷『堺鑑』貞享１年(1684)）

使用例としては、約400年前の堺における茶の湯の会席料理の食卓塩である。その後は、嘉永６年(1853)ペリー来航時における宴会に出された各膳に食卓塩として描写された絵がある。

源流は、平安時代の貴族に供された膳に出された四種器という塩・酢・飴(砂糖)・醤を土師質小皿に乗せた調味料である。これは、現代の中華料理店の卓上にある調味料とも共通する。衣笠一閑宗葛著貞享1年(1684)『堺鑑』「土産 湊壺盥」(小谷城郷土館再発行1977年)には、以下のようにある。

「京都・上鴨畠枝村人が天文年間(1532～1555)に堺の湊村に来て住んだ。紀州雑賀盥を壷に入れて焼返し、諸国へ商売した。壺盥屋藤太郎の名で知られていた。承応3年(1654)より「天下一」、延宝7年(1679)には「伊織」の号の使用が許される。

三谷一馬1997年中央公論社『江戸商売図絵』「塩屋」には『堺鑑』と同じ内容が『浪華百事談』にもあり、「焼塩は花塩ともいって、江戸中期は播磨の赤穂のものが有名でした。」とある。同様の内容は、鈴木棠堂1985東京堂出版『日本職人辞典』にも記載されている。

堺焼塩壷(遺物図版16-351、遺物図版25-465)は、考古学的調査においても堺環濠都市遺跡で16世紀第3四半期から出土しているが形や大きさはまばらである。

赤褐色で形も画一化して塩の内容量を一定して全国販売したのは、慶長年間(1596～1615)に至る。17世紀第3四半期には、堺焼塩壷ブランドを模倣した貝塚の「泉州麻生」、堺焼塩壷や泉州麻生(遺物図版35-643)を模倣した大坂産・堺焼塩壷を模倣した江戸産が見受けられる。18世紀には、各地で独自の形をした焼塩壷を生産開始する。

それは、江戸幕府による各藩の特産品を創るという政策である。その例が遺物図版2-54の焼塩壷である。堺焼塩壷は人見理兵衛 書林 享保20年(1735)『堺大絵図改正網目』には「湊焼塩」、堺書林 明治五年(1872)『堺港全図』「名物土産…花塩」とあり、第二次世界大戦までは堺市堺区西湊町の紀州街道沿いで生産していた家があったという話を聞いたことがある。

(註:財団法人小谷城郷土館・関西近世考古学研究会2000『シンポジウム『焼塩壷の旅－ものの始まり堺－』－小谷方明の焼塩壷の研究から70年の時を経て－』)

6. 伊万里染付煎茶用横手急須(遺物図版28-516：18世紀後半)

中国において急須という単語や発音を使用しているのは、福建省晋江市東石を中心とする一帯にのみである。古くは、横手急須12・13世紀の晋江磁竈窯でも生産されていたことが発掘調査されている。(註:曾凡2001『福建陶瓷考古概論』福建省地図出版社)

確かに、厦門を出帆して承応3年(1654)に来朝した隠元隆琦(いんげんりゅうき)が煎茶法を伝播させたとする定説がある。しかし、それを証明する当時の文献が存在しない事や江戸・京都・長崎の考古学的調査では18世紀第1四半期にならないと涼炉を使用した煎茶法が確認できないのが現状である。(註:京都国立博物館2013『特別展覧会 魅惑の清朝陶磁』)

むしろ、『南方録』に記載されている千利休が発案したと想定される「茶の湯形式の煎茶法」が17世紀代まで主流を成していたと考えるのが自然である。すなわち、湯を茶釜で沸かし急須に移す形式であり、現代煎茶道家元においても茶の湯の風炉や炉壇を使用した煎茶道が存在する。

(註:熊倉功夫1988『南方録を読む』淡交社、森村健一2006「16世紀末葉から17世紀初頭の堺における煎茶の出現」『喜谷美宣先生古希記念論集』喜谷美宣先生古希記念論集刊行会)

7. 焼継ぎ

焼き継ぎは高級器である佐賀県有田の伊万里焼の製品には見られるが、伊万里焼を模倣生産した安価な長崎県波佐見町の波佐見焼の上手以外(「くらわんか茶碗」で有名)は見られない。

遺物図版12-252(上手な波佐見焼)、遺物図版25-461(伊万里焼：焼継師のサイン有り)、遺物図版39-744(伊万里焼)は、19世紀代に入って鉛ガラスで焼き継ぎされた製品である。

それ以前の製品は、16世紀代以降から黒漆(上手な波佐見焼：遺物図版15-302、伊万里焼：遺物図版9-209、上手な波佐見焼遺物図版28-509)で接合している。

三谷一馬1997年中央公論社『江戸商売図絵』「焼き接ぎ師」では、喜田川守貞画嘉永６年(1853)『守貞漫稿』を引用して「昔は漆で、寛政の中頃(1790年代前半)から白玉粉で焼き接ぎ、今も貴重な陶器や茶器は漆で補修して金粉を塗る日用陶器は焼き接ぎを専ら」とある。

岳亭丘山画 文政９年(1826)『略画職人尽』では、「焼き接ぎ師」「焼継屋」「焼継ぎ」の名が見られる。

鈴木棠堂1985東京堂出版『日本職人辞典』には、蒔絵師源三郎画 元禄３年(1690)『人倫訓蒙図彙』に「継物師」、葛飾文々舎編 岳亭定岡画 文政９年(1826)板『略画職人尽』・黒沢翁満編嘉永７年(1854)刊『雅波職人歌合』に「焼継屋」が見られる。

焼継ぎが少なくとも19世紀第１四半期には行われていたことを示している。その年代は、考古学的な検証と一致している。

８．文献に見る天正８年(1580)兵庫城築城時期

天正８年(1580)兵庫城築城時期は正しいとの結論を冒頭に示しておきたい。E区石垣裏込・E区石垣検出及び堀内、F区第７・８層、I区石垣裏込及び石垣基盤層、K区SE(井戸)24001出土遺物は、天正前期(1573～1582)であることは堺環濠都市遺跡SKT19地点SF001「天正13年(1585)」木簡共伴出土遺物との比較検討で判断した。

９．堀に多量に廃棄された陶磁器や石垣の崩れは地震・津波被害

兵庫城跡堀内から出土した遺物は、遺物コンテナ(≒みかん箱大)約300箱であった。兵庫城の堀は、元来、排水・防御や運河の役割をはたしているので通常では堀内に貴重品や瓦類の大量廃棄することは考えられない。大量廃棄しなければ何らなの理由を想定する必要がある。

①．1596年M7.０畿内(慶長伏見大地震)、②．1604年M7.９東南海大地震(慶長大地震)、③．1707年M8.４：五畿七道被害、④．1711年M6.７讃岐、津波１日10回、⑤．1789年M7.４阿波、⑥．1830年M6.４京都及び隣国、⑦．1854年M8.４が２回東南海大地震(安政大地震)の被害を想定したい。

(注：藤井陽一郎1979『写真・図説 地震』図書刊行会)

10．なぜその場所に兵庫城を築造したのか

兵庫城は国家における軍事・政治・経済すなわち、商品流通の陸路・海運・水運の要衝地であった。家康の全国支配を誇示するために作製させた慶長10年(1605)『慶長十年摂津国絵図』(fig.86)には、山陽道に近く、兵庫城や兵庫津から山陰地方に放射状に伸びる街道が描写されている。また、兵庫津・兵庫城近くに流れ込む河川による水運の重要性も把握する必要がある。

(註：西宮市立郷土資料館2000『西宮古地図大観』第15回特別展展示案内図録、東京大学総合図書館蔵『南葵文庫・江戸幕府図絵図「摂津国絵図・慶長図」』森村健一2000年資料調査)

江戸時代のやきもの

森村 健一

— 17・18・19世紀にみる大坂・京・堺の生産・流通・消費形態 —

堺擂鉢の重ね焼き

SKT755地点

18 世紀初頭

SKT388－A　18 世紀前半

18 世紀前半

KHG2地点（牧園町）

中百舌鳥遺跡

型式	年代	擂鉢
I	17初	西福寺貯留
II	17前	A
III		B
IV	17中	C
V	17後	D1
VI		D2
VII	18前	E
VIII	18中	F

丹波焼　江戸期擂鉢

— 下相野窯跡を中心に —　大平　茂

筒井家屋敷内

SD902北土壙陶器

18 世紀第 2 四半期

18 世紀第 3 四半

中百舌鳥遺跡

第12地区SE80北土壙陶器(A)

SKT388－D

18 世紀後半～19 世紀前半

19 世紀前半

SKT754地点（九間長人町）

文久 3 年(1863)堺絵図

『江戸時代のやきもの－生産と流通－』
記念講演会・シンポジウム資料集

発行　2006(平成18)年12月9日
編集　財団法人堺市文化振興財団
堺歴文化財センター

fig.83　堺擂鉢・丹波擂鉢

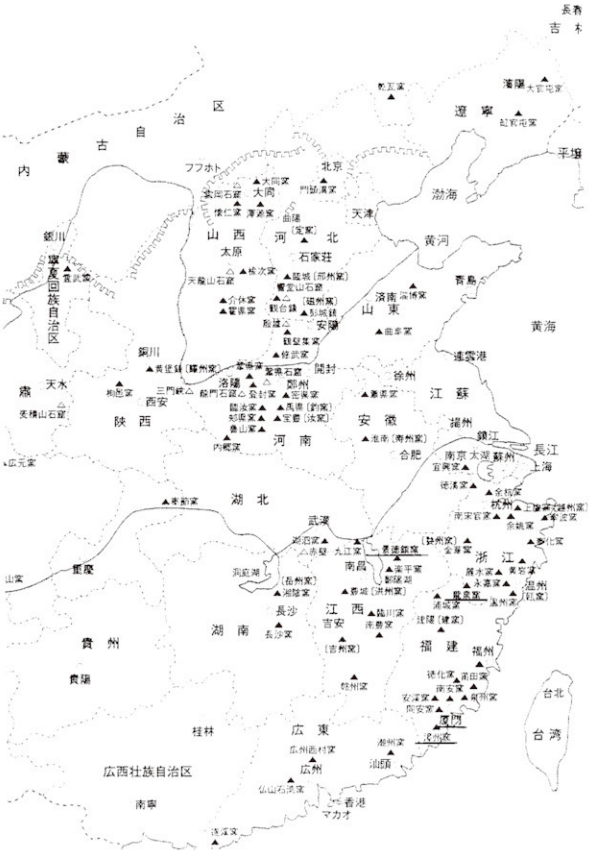


fig.84　中国陶磁器窯跡位置図

堺鑑卷下目錄

湊壹鹽

今ノ壹鹽屋先祖ハ昔年ハ藤太郎トテ猿丸大夫ノ末裔ト云リ花洛上鶴島枝村人也ニ天文年中ニ當津湊ノ村ニ來住居シテヨリ以來純州雜賀鹽ヲ求ム土壹ニ入テ燒反諸國ヘ商賣シテ壹鹽屋藤太郎ト號シ世ニ廣用故ニ今ニ至迄其子孫相續ス承應三年甲午ニ女院御所ヨリ天下一ノ美號不苦トアリ時ノ奉行石河氏是ヲ承リ頂戴ス又延寶七年ノ比ニ鷹司殿ヨリ折紙狀アリ呼名伊織ト號ス

眞字西曰十年二月書展
三條通松屋町
武村市兵衛板行

著者衣笠一閑示題

貞享元年（一六八四）

昭和五十二年四月一二日　印刷
昭和五十二年四月一二日発行
編輯兼発行者　堺市豊田一六〇二
小谷方明
印刷所製本者　堺市宋井五一
森田印刷
発行所　堺市豊田一六〇二
小谷城郷土館

fig.85　焼塩壺『堺鑑』貞享１年（1684）

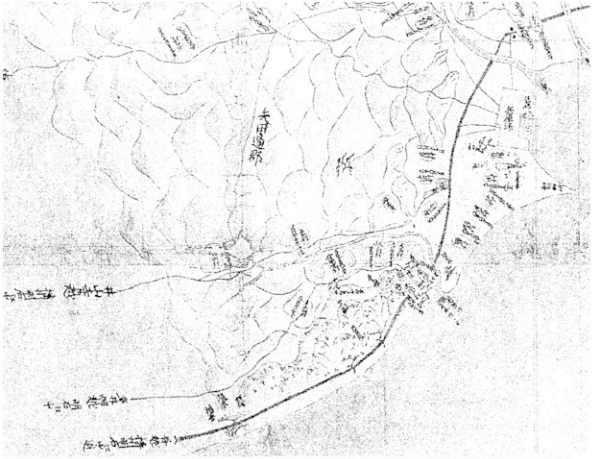


fig.86　『慶長十年（1605）摂津国絵図』西宮市立郷土資料館 2000『西宮古地図大観』第 15 回特別展展示案内図録

第２節　兵庫城跡の石垣に転用された石塔について

狭 川 真 一（(公財) 元興寺文化財研究所）

１．はじめに

兵庫城跡（兵庫津遺跡第57次調査）で確認された石垣には、多数の石塔残欠が含まれていた。城の石垣等に石塔が転用される事例は多く、各所で見受けられるが、発掘調査後に解体されて裏込石を含めた内容を把握できている事例はほとんどない。本稿では今次の調査で得られた所見を眺め、兵庫城跡に転用された石塔の傾向を検討してみたい。

なお、本稿では組合せ式五輪塔を単に五輪塔と表記する。したがって五輪塔の用語内には一石五輪塔は含まれないものとする。

２．兵庫城跡石垣出土石塔の概況

詳細な個別報告は本編中に記載されるので、ここでは大きな傾向を把握することに努めたい。今次の調査区で石垣中から石塔が確認されたのは、Ｅ区、Ｆ区、Ｉ区の３地区である。以下、区毎に簡単な整理をしておく。

Ｅ区　出土数は他地点に比べて少なく34点で、一石五輪塔が21点確認されている。そのうち15点が空風火輪の残欠で、風輪のみが1点、空風輪が1点となっている。実に81％が火輪以上の残欠である。

Ｆ区　石造物の出土総数は477点で、そのうち一石五輪塔は357点、五輪塔は部材数94点を数える。一石五輪塔の内訳は、部位が完存するもの８点（2.2％）、地輪を欠くもの22点（6.2％）、空風火輪となるもの233点（65.3％）、空風輪となるもの18点（５％）、空輪のみが３点（0.8％）、風火水となるもの3点（0.8％）、火水輪となるもの23点（6.4％）、火水地輪となるもの29点（8.1％）、水輪のみのもの５点（1.4％）、水地輪となるもの11点（3.1％）、地輪のみのもの２点（0.7％）である。五輪塔では、空風輪が53点（56.4％）と圧倒的に多く、風輪だけになったもの１点（1.1％）、火輪が18点（19.1％）、水輪が22点（23.4％）で、地輪がまったく見えないことは注意を要する。さらに幅が47.7cm・53.1cmという大型五輪塔の火輪が２基分あり、うち１基には大きな梵字が刻まれる。また火輪の背が高めであり、この地方に多い形態である。いずれも14世紀前半から中頃の資料かと思われる。

上記の数値を眺めると、一石五輪塔では圧倒的に火輪と水輪を境にして分割していることがわかる。しかし、水輪以下の部材が数値的に対応していないことは重要である。つまり単純に使用地点で加工したのではなく、別の場所に一旦集積してそこで加工作業をし、使用場所に応じて部材を分配したと考えられる。かなり手慣れた組織的な行為と判断する。このことは、五輪塔の地輪がまったく見つかっていないことや、一石五輪塔においても地輪を含む部材がきわめて少ないという事実の説明にもつながる。また、出土比率の高い部材はその多くが裏込め材として使用されていることも注意したい。おそらく、五輪塔や一石五輪塔の地輪部分は、その形状が直方体であることから積み易いだけでなく見た目も整うという利点があるため、見栄えを重視する必要がある場所に意識的に運ばれたのであろう。逆に使い辛い部位は小さくして裏込材等に用いたと考えたい。

この他、幅43.2cm、47.9cmを測る笠が２基あり、いずれも露盤を作り出しているので層塔の笠部分（最上層）と思われ（宝塔の可能性も残される）、両者とも軒裏面に垂木型を作り出している。やはり14世紀代のものであろう。

なお、縦長の地輪状部材の側面に方形の枘を２面に穿つ資料があり、釘貫の柱材とみられる。上部は欠損しているが、近在の真光寺境内の無縁塚内に類似の資料があり（挿図写真７）、それが一石五輪塔であったことがわかる（１）。

Ⅰ区　石造物の出土総数は90点で、一石五輪塔は64点出土しており、F区と同様に空風火輪となる部材が37点で半分以上を占める。裏込材やその崩落材に多いのも同様である。五輪塔の部材は14点で、うち９点が火輪である。火輪のうち１点は幅49.4cm、高さ30.5cmを測るもので、その形から14世紀前半かあるいはそれより少し古いかと思われる資料である。それより少し小さいが梵字を大きく入れる火輪も存在する。大型の火輪に隣接して出土した宝篋印塔の笠も注目される。幅51.3cm、高さ40.0cmという大きなもので、石垣に使用されていた時の表面側は隅飾を綺麗に打ち欠いていたが、裏面になり埋没していた部分ではほぼ当初の姿をとどめていた。二弧式で輪郭が巻き、薄く浮き出る月輪内に梵字を刻んでおり、この地方でみられる型式である。さらにこの石塔の表面はかなり摩耗が進行していた。石垣に転用されるまで屋外で長期間安置されていたことを物語る資料と言える。

３．兵庫城跡石垣出土石塔の傾向

３地区から総数572点の石造品が出土し、そのうち一石五輪塔は421点（73.6％）、五輪塔部材は112点（19.6％）でこれに続き、両者で全体の93％を占める。当初の個体数を推測すると、一石五輪塔では空風火輪の部材が多いが、部位の重複している部分を考慮して例えば空輪を含む部材だけを数えてみると、E区20点、F区284点、Ⅰ区46点で少なくとも350基分は存在したことがわかる。五輪塔では、空風輪を含む部材が最も多く58点となる。礎石等の建築材や石臼などの日用品はそれほど数が多くなく、上記以外の石塔や石仏類はE区で台座が１点、屋根状部材が１点、F区では層塔の笠２点、宝篋印塔の笠１点など計15点、Ⅰ区では宝篋印塔の笠１点を含む10点である。

このうち年代を直接的にうかがえるのは一石五輪塔である。今次の調査資料中にわずか２点だが年号の知られるものがあり、寛正二年（1461）と文亀四年（1504）が判明した。これらは全体の製作年代のどの位置を占めるかはより詳細な研究が必要だが、兵庫県下の一石五輪塔を検討した鈴木武氏に整理に従うと、県下在銘一石五輪塔の最古例は応永九年（1402）で、以後16世紀中頃までは徐々に増加の傾向にあるが、それ以後は急激に数量を増しており、この地域の一石五輪塔のピークは16世紀中頃から17世紀前半にあることがわかる（鈴木2005／表14）。今回出土した２点の事例はこのグラフでは古い段階に該当する。同時に出土した無銘の一石五輪塔の形状もこれら２点に近いものであり、鈴木氏の提示する16世紀後半に属する一石五輪塔の形状は見かけない。雑駁な整理だが、今次の出土資料は主として16世紀前半頃までの資料ではないかと推定しておきたい。

今回の出土資料中で最も古い石塔は、F区やⅠ区で出土した大型の五輪塔火輪、層塔笠部、宝篋印塔笠部が該当する。それぞれの形状から概ね14世紀前半頃を上限とし、一部14世紀中頃へ下るものが含まれている。

これと一石五輪塔の中間を埋めるものが、おそらく小型の五輪塔群である。地輪の資料

が出土していないので火輪の幅を中心にみてみると、18.2～27.5cmのところに集中し（30基中23基）、さらに22～26cm未満の範囲に半分の15基がまとまっている（表15）。火輪のデータの比較資料はないが、地輪幅の数値は火輪幅の数値に近いのでこれを比較対象にすると、例えば三重県上野市（現在の伊賀市の一部）のデータ（藤澤2004）では、上記の数値が収まるのは15世紀中頃から16世紀中頃である。わずか１例だけだが参考程度にはなるだろう。また高野山では、15世紀中頃から後半に五輪塔から一石五輪塔に入れ替わるようであり、これを参考にすると今回出土の五輪塔は一石五輪塔以前の所産かと思われる。数量的には大型の石塔が若干あり、続いて小型の五輪塔が増加、その後量産された一石五輪塔へという流れが読み取れる。そこに古い段階では宝篋印塔や層塔も散見するという風景が見えてくる。この傾向は中世の墓地における石塔の変遷に一致するものであり、石垣に転用された石塔は、鎌倉時代末期頃に成立し16世紀前半頃まで存続していた墓地の姿を彷彿とさせるものと言える。つまり、石材調達のために近在の墓地から無差別に石塔を運んだものとみていいだろう。ただ、それが一か所の墓地だったのか複数だったのかは今のところ不明だが一石五輪塔の数量の多さや大型石塔が数基分あることを思うと、複数の墓地（あるいは寺院の境内も含めて）が石材接収の標的になったのではないかと思われる。

４．石塔を石垣に転用すること

こうした石塔の転用事例は各地で確認されており、特に中世後期の城跡では決して珍しいことではない。大坂城跡や二条城跡の調査でもかなりの数が出土しているほか、奈良県郡山城跡では早くから石塔や石仏の転用が注目され、詳細な調査も行われている（南村1975）。特に郡山城は奈良市内にある多聞城の石材を運んで構築したとされており、この兵庫城が花熊城の石材を運んで構築されたと言われていることと共通する。兵庫城の建設は花熊城落城の天正八年（1580）とされ、花熊城の建設は永禄十一年（1568）説や天正二年（1574）説があるが、どうあれ16世紀後半（第３四半期）の造営である。現状で把握できる出土石塔の最新年代を16世紀前半頃とみているので、若干の時間的開きが認められる。現役の墓ではなく、廃止された墓地から石塔を接収したのであろうか。この微妙な年代差は今後の課題として残る。

さて、石塔の部材を転用する行為については、当該領地を制圧、占領した証として、「弾圧的政策の意味をも含めたもの」（南村1975）という理解がなされている。類似の遺跡に遭遇すると必ずと言ってよいほど同様の推測がなされている。しかし、石塔の部材の転用は城郭の石垣に限定されるものではなく、寺院（塔頭）の石垣に転用した奈良県正暦寺旧境内（三好1999）、中世の五輪塔を建物の礎石に転用した高野山金剛三昧院の例（結城2011）などもあり、必ずしも弾圧的な意味があるとは思えない。

戦国時代には城郭建設を急ぐあまり、石材調達の迅速性が求められたことと、石塔や石仏に対する認識のあり方が大きな要因かと思われる。石塔に先祖の祖霊が宿り続けるという思想はまだ発達していなかった可能性が高い。

石塔の転用、それは墓地の破壊でもある。中世後期における石塔（墓石）への認識が如何なるものであったのか、それを探る重要な鍵がこの行為の中に隠されている。中世という時代を考える上で重要な課題の一つと言えるだろう。

（註）

(1) これで注意したいのは『一遍聖絵』に登場する一遍上人の墓所の場面である（小野ほか2012）。石造五輪塔の周囲に釘貫を巡らせているが、四隅の柱は擬宝珠形を呈している。しかし、良く見ると擬宝珠は五輪塔の絵に重ねて描かれているように見える。五輪塔が前筆らしく見えるので、ある時期に一遍墓を囲む釘貫四隅の柱頂部が、五輪塔から擬宝珠に変更されていたのかも知れない。

≪参考文献≫

小野正敏ほか2012『一遍聖絵を歩く』高志書院

鈴木　武2005「兵庫の一石五輪塔」『シンポジウム一石五輪塔の諸問題』歴史考古学研究会ほか

南村俊一1975『石造物郡山城跡転用材調査概要』郡山城史跡・柳沢文庫保存会

三好美穂1999「正暦寺旧境内調査第１・２次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書－平成10年度－』奈良市教育委員会

藤澤典彦2004「石造品」『上野市史　文化財編』上野市

結城啓司2011「礎石に転用されていた五輪塔について」『和歌山県文化財センター年報2010』公益財団法人和歌山県文化財センター

挿図写真７　真光寺無縁塚内の釘貫材

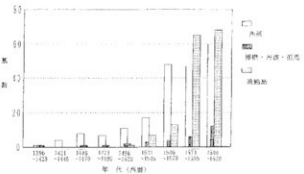


表14　兵庫県の一石五輪塔年代別分布図（鈴木 2005 より）

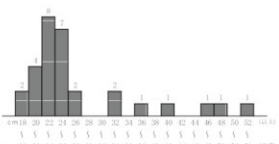


表15　兵庫城跡出土火輪幅とその数量グラフ

第３節　兵庫津遺跡第57次調査出土の動物遺存体

丸山真史（奈良文化財研究所・客員研究員）

１．概要

今回の調査では、16世紀から19世紀にかけての動物遺存体が出土している。当調査地は、兵庫城の堀とその周辺の南浜の関屋町、岡方の新町に相当する位置からしている。K－２区の動物遺存体は、石組溝に使用されていた胴木に付着していた土を水洗篩別によって採集したが、それ以外は調査中に肉眼で確認して、取り上げたものである。総破片数590点のうち、種類や部位を同定したものは523点を数える（表17・表18）。なお、以下で記載する町屋敷地内の遺物包含層から出土した動物遺存体は、町屋に伴う遺物として限定することはできない。

２．調査区別の動物遺存体

Ａ区　動物遺存体は、町屋敷地内から出土しており、貝類、魚類、哺乳類を５点同定した。

町屋敷地内：SK81002（18C後）から、哺乳類のニホンジカが1点出土している。遺物包含層（18C後～ 19C）から、貝類はテングニシとハマグリ（左右不明）が１点ずつ、魚類はタイ科が２点出土している。

Ｃ－１区　動物遺存体は、町屋跡敷地内から出土しており、貝類７点を同定した。

町屋敷地内：SK202（18C）から、ハマグリと思われるものが１点出土している。遺物包含層（18C）からアカニシが４点、イタボガキ科、タイラギ、ハマグリが１点ずつ出土している。

Ｆ区　動物遺存体は、堀、石垣、石組溝、町屋跡敷地内から出土しており、ウニ類、サンゴ類、貝類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類を319点同定した。

堀：堀（18C）から、ウニ類はタコノマクラ目が１点、貝類はトリガイ（左３不明２）が５点、アカニシとハマグリ（左１右２不明１）が４点ずつ、サザエ、ヤマトシジミが１点ずつ、爬虫類はスッポンが１点、鳥類はニワトリが１点、哺乳類はニホンジカが８点、ネコが２点、イヌが１点出土している。ニホンジカの大腿骨と脛骨には、解体痕が見られる。また、用途不明の骨製品（fig.87-4）が１点出土している。

石垣：天正年間の石垣（16C後）から、イノシシ/ニホンジカの四肢骨が１点出土している。石垣裏込め（17C前）から、鳥類はアビ科が１点、哺乳類はオオカミが１点出土している。

石組溝：石組溝（18C）から、貝類はハマグリ（左２右２不明３）７点、アカニシ３点、サザエ、バイが１点ずつ、魚類はコチ科、マダイが１点ずつ、爬虫類はスッポンが１点、哺乳類はネコ、ウシ、イノシシ/ブタ、ヒトが１点ずつ出土している。魚類の大きさは、コチ科が体長20～30cmと40～50cm、マダイが全て20cm以上で30～40cmと推定されるものが中心である。ウシの上腕骨は近位端が癒合しておらず、幼獣と考えられる。また、鞣と思われる角製品が１点出土している（fig.87-3）。石組溝（19C）から、アカニシと思われるものが１点出土している。

町屋敷地内：遺物包含層（16C末）から、サザエと思われるものが１点出土している。遺物包含層（16C末～17C初）から、アカニシとヤマトシジミが１点ずつ出土している。SK503（17C前）から、魚類のイシダイ科が４点、ハタ科が計３点、コチ科、マダイが１点ずつ出土している。大きさは、イシダイ科は体長30cm以上、ハタ科は60～70cm、コチ科とマダイは40～ 50cm、フグ科20～30cmと推定される。SK403（17C中）から、ヤマトシジミ（右）が１点出土している。SK405（17C中）から、貝類はトリガイ（左右不明）が１点、魚類はマダイ９点、ブリ属と

表 16　動物遺存体種名表

刺胞動物門 Cnidaria
　花虫綱 Anthozoa
　　花虫綱の一種 Anthozoa ord., fam., gen. et sp. indet.
　イシサンゴ目 Scleractinia
　　キクメイシ属目 Faviina
棘皮動物門 Echinodermata
　ウニ綱 Echinoidea
　　タコノマクラ目 Clypeasteroida
　　タコノマクラ目の一種 Clypeasteroida fam., gen. et sp. indet.
軟体動物門 Mollusca
　腹足綱 Gastropoda
　　古腹足目 Vetigastropoda
　　ミミガイ科 Hiliotidae
　　クロアワビ *Haliotis discus*
　　ミミガイ科の一種 Haliotidae gen. et sp. indet.
　　サザエ科 Turbinidae
　　サザエ *Turbo cornutus*
　盤足目 Discopoda
　　カニモリガイ科 Cerithiidae
　　カニモリガイ科の一種 Cerithiidae gen. et sp. indet.et.
　　フトヘナタリ科 Potamidae
　　フトヘナタリ *Cerithidea rhizophorarum*
　　ソデガイ科 Strombidae
　　シドロガイ *Strombus japonicus*
　　オキニシ科 Bursidae
　　ミヤコボラ *Bufonaria rana*
　　ヤツシロガイ科 Tonnidae
　　ヤツシロガイ科 Tonnidae gen. et sp. indet.
　新腹足目 Neogastropoda
　　アッキガイ科 Muricidae
　　イボニシ *Thais clavigera*
　　アカニシ *Rapana venosa*
　　ムシロガイ科 Nassariidae
　　ムシロガイ *Niotha livescens*
　　エゾバイ科 Buccinidae
　　バイ *Babylonia japonica*
　　テングニシ科 Melongenidae
　　テングニシ *Hemifusus tuba*
　　イトマキボラ科 Fasciolariidae
　　ナガニシ *Fusinus perplexus*
　斧足綱 Bivalvia
　　フネガイ目 Arcoida
　　フネガイ科 Arcidae
　　アカガイ *Scpharaca broughtonii*
　　サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*
　　ミミエガイ/サヤゲミミエガイ *Acropsis* seu. *Estellarca* sp.
　　フネガイ科の一種 Arcidae gen. et sp. indet.
　　タマキガイ科 Glycymerididae
　　タマキガイ科の一種 Glycymerididae gen. et sp. indet.
　　カキ目 Ostreoida
　　イタヤガイ科 Pectinidae
　　イタヤガイ *Pecten albicans*
　　イタボガキ科 Ostreidae
　　イタボガキ *Ostrea denselamellosa*
　　マガキ *Crassostrea gigas*
　　イタボガキ科の一種 Ostreidae gen. et sp. indet.
　　マルスダレガイ目 Veneroida
　　ザルガイ科 Cardiidae
　　トミガイ *Fulvia mutica*
　　シジミ科 Corbiculidae
　　ヤマトシジミ *Corbicula japonica*
　　マルスダレガイ科 Veneridae
　　アサリ *Ruditapes philippinarum*
　　ハマグリ *Meretrix lusoria*
　　ウチムラサキウ *Saxidomus purprata*
脊椎動物門 Vertebrata
　軟骨魚綱 Chondrichthyes
　　板鰓亜綱の一種 Elasmobranchii, order, fam., gen. et sp. indet.
　硬骨魚綱 Osteichthyes
　　ウナギ目 Anguilliformes
　　アナゴ科 Congridae
　　アナゴ科の一種 Congridae gen. et sp. indet.
　　ハモ科 Muraenesocidae
　　ハモ属の一種 *Muraenesox sp.*
　ニシン目 Clupeiformes
　　ニシン科 Clupeidae
　　マイワシ *Sardinops melanosticutus*
　　ニシン科の一種 Clupeidae gen. et sp. indet.
　カサゴ目 Scorpaeniformes
　　コチ科 Platycephalidae
　　コチ科の一種 Platycephalidae gen. et sp. indet.
　スズキ目 Percidae
　　スズキ科 Percichthyidae
　　スズキ *Lateolabrax japonicus*
　　ハタ科 Serranidae
　　ハタ科の一種 Serranidae gen. et sp. indet.
　　アジ科 Carangiae
　　ブリ属の一種 *Seriola* sp.
　　タイ科 Sparidae
　　クロダイ属の一種 *Acanthopagrus* sp.
　　マダイ *Pagrus major*
　　イシダイ科 Oplegnathidae
　　イシダイ属の一種 *Oplegnaths* sp.
　　サバ科 Scombridae
　　マグロ属の一種 *Thunnus* sp.
　カレイ目 Pleuronectiformes
　　カレイ科 Pleuronectidae
　　カレイ科の一種？ Pleuronectidae gen. et sp. Indet.
　フグ目 Tetraodontiformes
　　フグ科 Tetraodontidae
　　フグ科の一種 Tetraodontidae, gen. et sp. indet.
両生綱 Amphibia
　無尾目 Anura
　　無尾目の一種 Anura fam., gen. et sp. indet.
爬虫綱 Reptilia
　カメ目 Chlonia
　　スッポン科 Tnonychidae
　　スッポン *Trionyx sinensis*
　　イシガメ科 Geoemydidae
　　イシガメ科の一種 Geoemydidae gen. et sp. indet.
鳥綱 Aves
　アビ目 Gaviformes
　　アビ科 Gaviidae
　　アビ科の一種 Gaviidae, gen. et sp. indet.
　キジ目 Galliformes
　　キジ科 Phasianidae
　　ニワトリ *Gallus domesticus*
哺乳綱 Mammalia
　霊長目 Primates
　　ヒト科 Homonidae
　　ヒト *Homo sapiens*
　食肉目 Carnivora
　　イヌ科 Canidae
　　イヌ *Canis familiaris*
　　オオカミ *Canis lupus*
　　ネコ科 Felidae
　　ネコ *Felis catus*
奇蹄目 Perissodactyla
　　ウマ科 Equidae
　　ウマ *Equus caballus*
偶蹄目 Artiodactyla
　　ウシ科 Bovidae
　　ウシ *Bos Taurus*
　　イノシシ科 Suidae
　　イノシシ *Sus scrofa*
　　シカ科 Cervidae
　　ニホンジカ *Cervus nippon*
齧歯目 Rodentia
　　ネズミ科 Muridae
　　ネズミ科の一種 Muridae gen. et sp. indet.
　クジラ目 Cetacea
　　イルカ科 Delphinidae
　　イルカ科の一種 Delphinidae gen. et sp.

１点ずつ出土している。マダイは30 ～ 40cmの個体が多く、60cm以上と推定される大型個体も含まれる。ブリ属は60cm以上、フグ科は20 ～30cmと推定される。マダイは前頭骨が２点出土しており、いずれも正中方向に切断されている。SP204（17C中）から、蒲鉾形の板状を呈する骨製品が１点出土している（fig.87-8）。遺物包含層（17C中）から、貝類はアカニシ、サザエ、イガイ科、ヤマトシジミが１点ずつ、魚類はマダイが２点、サメ類とフグ科が１点ずつ出土している。SK309（17C後）から、貝類はトリガイ（左69右90不明24）が183点、フトヘナタリ科とアサリ（左３右２）が５点ずつ、ハマグリ（左１右２）とヤマトシジミ（左２右１）が３点ずつ、アカニシ、イボニシ、カニモリガイ科、コシダカガンガラ、ミヤコボラ、ムシロガイ、ヤツシロガイ科、イタボガキ科、ミミエガイ/ササゲミミエガイが１点ずつ、魚類はハモ属が１点出土している。ハモ属は、体長50cm以下の小形個体と推定される。遺物包含層（17C代）から、哺乳類のイルカ類が１点出土しており、椎骨の椎体が切断されている。SK204（18C中）から、魚類のマグロ属が１点出土している。マグロ属は体長100cmを超える大形個体である。遺物包含層（18C中）から、貝類のトリガイ（左右不明）が１点出土している。江戸時代の撹乱坑（18C）から、サンゴ類が１点、貝類はサザエが２点、クロアワビが１点、哺乳類はニホンジカが１点出土している。遺物包含層（18C）から、貝類はハマグリ（左右不明）が２点、シドロガイ、トリガイ（左右不明）、マガキ（左）が１点ずつ、魚類はマダイが１点、哺乳類はイヌ、イノシシ/ブタ、ニホンジカが１点ずつ出土している。また、貝製品のバイゴマが１点出土している（fig.87-7）。SX01（19C）から、哺乳類のウマの下顎第１あるいは第２後臼歯（右）が１点出土している。西中川編（1991）に倣うと、歯冠高56.25mmを測り、生後５～７年の若齢馬と推定される。遺物包含層（19C）から、貝類のサザエが１点出土している。

H区　動物遺存体の出土量は少なく、町屋敷地内から１点出土している。

町屋敷地内：遺物包含層（18C）から、貝類のアカニシが１点出土している。

I区　動物遺存体は堀、石組溝、町屋跡敷地内、堀の埋土に含まれる撹乱SX201から出土しており、貝類、魚類、爬虫類を136点同定した。

堀：堀（18C）からサンゴ類が１点、貝類のアカニシとハマグリ（左３右２不明３）が８点ずつ、マガキ（左１右２）が３点、サザエとアサリ（左１右１）が２点ずつ、クロアワビと種を特定できないアワビ類、テングニシ、ナガニシ、アカガイ（左）、イタボガキ科（左右不明）、イガイ科（左右不明）が１点ずつ、魚類はマダイが１点、爬虫類はスッポンが６点、イシガメ科が３点、哺乳類はニホンジカが１点出土している。スッポンのうち１点は、背甲板の大部分が、イシガメ科のうち１点は、背甲板と腹甲板の大部分が結合した状態で出土している。

石組溝：石組溝（19C）からアカガイ（左１右１）が２点、サザエ、アカニシ、ハマグリ（左右不明）が１点ずつ出土している。

町屋敷地内：SK304（18C）から、魚類のマダイが1点出土しており、大きさは体長30cm以上と推定される。SP306（18C）から、貝類のイタボガキ科（左右不明）と思われるものが１点出土している。遺物包含層（18C）から、アカニシが２点出土している。SK107（19C）から、貝類のアサリ（左右不明）が１点出土している。SK108（19C）から、貝類のアカニシが１点出土している。遺物包含層（19C）から、ハマグリ（左１右１不明１）が３点、アカニシとマガキ（左１右１）が２点、テングニシが１点ずつ出土している。

SX201：堀埋土の撹乱部分である。SX201（18～19C）から、貝類はヤマトシジミ（左12右16不明１）が29点、ハマグリ（左５右８）が13点、アカニシが８点、バイが５点、イガイ科（左

挿図写真8
鹿角製品X線写真

１右１不明１）３点、クロアワビとトリガイ（左右不明）が２点、アワビ類、サザエ、テングニシ、イタボガキ、イタヤガイ科、サルボウ、フネガイが１点ずつ、魚類はマダイが２点、スズキ属が１点、爬虫類はイシガメ科が１点出土している。また、貝製品のバイゴマが２点、鹿角製品が１点出土している（挿図写真８、fig.87-2）。鹿角製品は、断面が三角形の棒状を呈し、片側端部に穴が穿たれ、反対端部には金属の軸が途中で折れた状態で保存されている。形態から擬餌針の可能性が考えられる。

K-1区　動物遺存体は、石組溝と町屋跡敷地内から出土しており、10点を同定した。

石組溝：裏込（19C初）から、貝類のアカニシが１点出土している。下層（19C中）から、魚類のハモ属が３点、マイワシ、タイ科、カツオ/ソウダガツオ属が1点ずつ出土している。魚類の大きさは、ハモ属のうち1点が体長100cm以下で、それ以外は100cm以上の大型個体と推定される。マイワシは20cm以下、カツオ/ソウダガツオ属は20～30cmと推定される。

町屋敷地内：SD13001（17～18C）から、骨製の櫛払いが１点出土している（fig87-5）。遺物包含層(17～18C)から、貝類のイタヤガイ（左右不明）１点が出土している。遺物包含層（18C後）から、貝類のサザエが１点出土している。

K-2区　動物遺存体は、井戸、石組溝、町屋跡敷地内から出土しており、36点を同定した。

堀内井戸：SM24001（18C後～19C）から、貝類のアワビ類、ハマグリ（左右不明）、イガイ科（左右不明）が１点ずつ出土している。

石組溝：SM21001（19C中）から、貝類はイガイ科（右１不明５）６点、アワビ類、サザエ、テングニシ、ハマグリ（左右不明）、ヤマトシジミ（右）１点ずつ、魚類はマダイ２点、アナゴ科、ハタ科、クロダイ属が１点ずつ、両生類はカエル類が２点、哺乳類はネズミ科が２点出土している。魚類の大きさは、マダイが体長20cm以下と40～50cm、アナゴ科が50cm程度、ハタ科が20～30cm、クロダイ属が20cm以下と推定される。

町屋敷地内：遺物包含層（18C前）から、爬虫類のイシガメ科が１点出土している。SK24007（18C中）から、魚類のマグロ属が３点出土しており、体長100cm以上の同一個体と推定される。SK23002（18C末）から、ハマグリ（左右不明）と思われるものが１点出土している。遺物包含層（18C後～末）から、哺乳類のネズミ科が１点出土している。遺物包含層（18C末～19C前）から、貝類のアカニシが２点、トリガイ（左右不明）、ハマグリ（右）、ヤマトシジミ（右）が１点ずつ出土している。SK23007（19C初）から、骨製の櫛払いが１点出土している（fig.87-6）。SK21003（19C前）から、魚類はニシン科が１点、両生類はカエル類が１点出土している。

K-3区　動物遺存体は、堀と城内側土坑から出土しており、9点を同定した。

堀：堀（18C後）から、貝類はアカニシが２点、アワビ類、サザエ、ヤマトシジミ（左）が１点ずつ、魚類はマダイが1点出土している。マダイの大きさは、体長60cm以上の大型個体と推定される。また、貝製品のバイゴマが１点、骨製の横櫛が１点出土している（fig89-1）。

城内側土坑：SK4001（18C後～19C初）から、魚類のマダイが１点出土しており、大きさは体長60cm以上の大型個体と推定される。

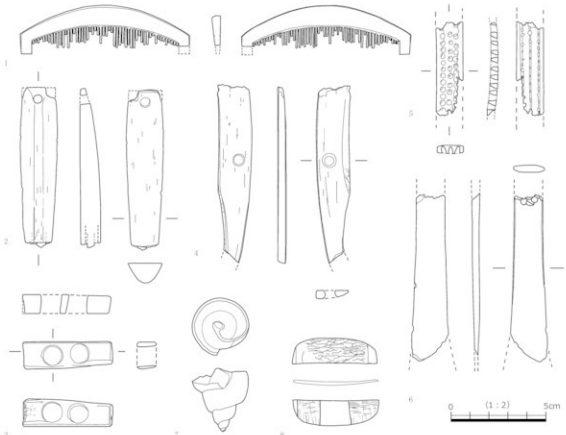


fig.87　骨角貝製品

3．兵庫津遺跡における動物利用

動物遺存体は、兵庫城の堀、溝、町屋に伴うゴミ穴などから出土しており、それらは共伴する土器によって16世紀から19世紀までに投棄されたものと考えられる。町屋敷地内として記載したもので、K区は岡方の新町に、その他の調査区は南浜の関屋町に位置している。出土した動物遺存体は、食料となる動物種が大部分を占める。骨角貝製品ではバイゴマ、横櫛、櫛払いなどの玩具や化粧道具、鞋や擬餌針と思われるものが出土しており、当地付近で使用したものと考えられる。

貝類はいずれも汽水・鹹水産であり、最多の出土量を示したトリガイは破片数にして194点、最小個体数に換算すると90個体を数える。F－1区の町屋に伴う17世紀後葉のSK309で集中的に出土しており、アカニシ、アサリ、ハマグリ、ヤマトシジミなどの食料残滓だけでなく、ヤツシロガイ科、カニモリガイ科、ムシロガイなどの食用を目的としないものが含まれる。北浜の宮前町（現在の七宮町）に位置する第14次調査では、17世紀後半から18世紀前半の埋桶からトリガイが集中的に出土しており、宮前町には魚市場があったこと、土地所有者が水産業に関連する屋号であるから、そこがトリガイの剥き身製造などの水産物加工に関連する町屋と考えた（丸山・松井2010）。SK309に見られる集中的なトリガイの廃棄は、その剥き身を製造していた可能性を指摘できる。

魚類も汽水・海水産ばかりであり、マダイの出土頻度が高く、出土量も多い。マダイの骨は大きく、頑強であり、イヌやネコなどの食害にあいにくく、発掘調査時にも見つけやすい。マダイと同じタイ科に分類されるクロダイ属は出土量が少なく、赤いタイが好まれていたことを示唆する。その他、アナゴ科、ハモ属、ニシン科、コチ科、ハタ科、ブリ属、フグ科などは、いずれも瀬戸内海で漁獲できる。F－1地区の18世紀中葉のSK204とK－2地区SK24007から、体長1ｍを超える大形のマグ

ロ属の椎骨が出土している。瀬戸内海で大形マグロ属が漁獲されることは稀であり、太平洋岸から持ち込まれたものと推測される。

両生類、爬虫類、鳥類の出土量は少ない。両生類のカエル類は食用の魚貝類と一緒に出土しており、食用の可能性もあるが、明らかではない。爬虫類はスッポンとイシガメ/クサガメが出土している。I区の堀では、両種類に甲板の大部分が結合した状態のものが含まれており、堀のなかで自然死した可能性もあるが、その他は食用と考えられる。現代では、スッポン料理が有名であるが、イシガメ/クサガメを食用とするする習慣はない。しかし、中世末の料理法などを紹介した『料理物語』には、カメの調理法が記されており（吉井1978）、近世にも食用としていたことは十分に考えられる。鳥類は、アビ科とニワトリが出土している。大阪や京都の近世遺跡では、カモ科やニワトリの出土が一般的であり、アビ科は稀である。しかし、兵庫津遺跡では第14次調査でもアビ科が出土しており、食用にすることも珍しくなかったのであろう。

哺乳類の大部分は堀から出土している。ニホンジカが最も多く、イノシシ/ブタ、イヌ、オオカミ、ウシ、ウマ、ネズミ科、イルカ類が出土している。ニホンジカ、イノシシ/ブタ、イルカ類は食用と考えて差し支えないが、それら以外は食用かどうか明らかではない。A区の町屋に伴う18世紀後葉のSK81002からニホンジカの上腕骨が出土しており、町民層の肉食が窺える。F－1区の17世紀前葉の石垣からオオカミが出土しており、現在は絶滅したとされるニホンオオカミと考えられる。骨端部が破損しており、計測値を示すことができないが、奈良文化財研究所が所蔵するチョウセンオオカミの現生骨格標本と同程度の大きさである。また、F区の18世紀の石組み溝から人骨が出土している。端部にイヌなどの食肉類の咬痕が見られ、死後しばらく遺体が野晒しになっていたことを示す。江戸中期に、兵庫市中で遺体が放置されることもあったことが推測される。

4．まとめ

当調査ではウニ類、貝類、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類が出土している。F区では、町屋に伴うSK309からトリガイが集中的に出土しており、17世紀後葉には水産物加工が行われていた可能性がある。また、ニホンジカなどの獣肉も消費しており、近世の町民層の肉食が窺える。擬餌針と思われる鹿角製品は、今後、類例の収集などを通じて、詳細を検討する必要がある。また、動物遺存体以外の遺物を含めて、生業や食生活に関する議論も必要である。

謝辞

貝類の同定について、土佐市教育委員会の池田研氏からご教示頂いた。また、骨角貝製品の実測は高村夏氏に、鹿角製品のX線写真は奈良文化財研究所の脇谷草一郎氏に作成していただいた。末筆ではありますが、感謝申し上げます。

参考文献

西中川駿編1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告

丸山真史・松井章2010「兵庫津遺跡第14次調査出土の動物遺存体」『兵庫津遺跡発掘調査報告書第14・20・21次調査』第１分冊　神戸市教育委員会　pp. 353-386

吉井始子1978『翻刻江戸時代料理本集成』第一巻　臨川書店

表17　動物遺存体集計表１

A区出土の動物遺存体

時期	出土地	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
18C後	町屋 SK81002	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨		1		1
18C後～19C	町屋 第1面検出中	腹足綱	テングニシ	殻質			1	1
		斧足綱	ハマグリ	殻質			1	1
		硬骨魚綱	タイ科	椎骨			1	1
				上腕鎖骨	1			1
		計						5

C-1区出土の動物遺存体

時期	出土地	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
18C	町屋SK202	斧足綱	ハマグリ？	殻質			1	1
	町屋第1面	腹足綱	アカニシ	殻質			4	4
		斧足綱	イタボカキ科	殻質			1	1
			タイラギ	殻質			1	1
			ハマグリ	殻質			1	1
		計						8

F区出土の動物遺存体１

時期	出土地	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
16C後	東辺石垣堀形	哺乳綱	イノシシ/ニホンカ	四肢骨			1	1
16C末	町屋 第7～8面堀掘	腹足綱	サザエ？	殻質			1	1
16C末～17C初	町屋 面下打込灰褐色砂礫	腹足綱	アカニシ	殻質			1	1
	町屋 北東隅・建物下層	斧足綱	ヤマトシジミ	殻質		1		1
17C前	南辺石垣裏込	腹足綱	アカニシ？	殻質			1	1
	町屋SK503	哺乳綱	島嶼	アビ科	上腕骨	1		1
			ニホンオオカミ	腓骨		1		1
		硬骨魚綱	イシダイ科	主鰓蓋骨	1			1
				上後頭骨			1	1
			コチ科	舌骨骨	1			1
				前上顎骨	1			1
				前鰓蓋骨	1			1
				角舌骨＋上舌骨	1			1
			ハゼ科	前鰓蓋骨	1			1
				部位名不明	1			1
			フグ科	口蓋骨		1		1
			マダイ	角骨		1		1
17C中	町屋SK405	斧足綱	トリガイ	殻質			1	1
		硬骨魚綱	フグ科	前鰓蓋骨		1		1
			ブリ属	歯骨	1			1
			マダイ	外後頭骨	1			1
				歯骨	1	1		2
				主上顎骨		1		1
				舌骨骨		1		1
				前上顎骨		2		2
				前頭骨			2	2
							1	1
	町屋SP402	骨角製品	薄鏡形板状				1	1
	町屋SK403	斧足綱	ヤマトシジミ	殻質		1		1
	町屋　黄色板細砂シルト	斧足綱	ヤマトシジミ	殻質			1	1
		硬骨魚綱	フグ科	前鰓蓋骨		1		1
	町屋 第4遺構面	腹足綱	アカニシ	殻質			1	1
		軟骨魚綱	サメ類	椎骨			1	1
		硬骨魚綱	マダイ	副蝶形骨			1	1
				上後頭骨			1	1
	町屋　炭、焼土面検出時	腹足綱	サザエ	蓋			1	1
		斧足綱	イガイ科	殻質			1	1
17C後	町屋SK309	腹足綱	アカニシ	殻質			1	1
			イボニシ	殻質			1	1
			カニモリガイ科	殻質			1	1
			コシダカガンガラ	殻質			1	1
			フトヘナタリ科	殻質			5	5
			ミヤコボラ	殻質			1	1
			ムシロガイ	殻質			1	1
			ムシロガイ科？	殻質			1	1
			ヤツシロガイ科	殻質			1	1
		斧足綱	アサリ	殻質	3	2		5
			イタボカキ科	殻質	1			1
			トリガイ	殻質	69	90	24	183
			ハマグリ	殻質	1	2		3
			ミミエガイ/ササミミエガイ	殻質	1			1
			ヤマトシジミ	殻質	2	1		3
		硬骨魚綱	カレイ科？	椎骨		1		1
			ハモ属	椎骨		2		2
17C代	町屋整地層	哺乳綱	イルカ類	椎骨		1		1

F区出土の動物遺存体２

時期	出土地	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
18C	石組溝	腹足綱	アカニシ	殻質			3	3
			サザエ	殻質			1	1
			バイ	殻質			1	1
		斧足綱	ハマグリ	殻質	2	2	3	7
		硬骨魚綱	コチ科	鰓蓋骨		1		1
			マダイ	前頭骨			1	1
		爬虫綱	スッポン	背甲板			1	1
		哺乳綱	ヒト	大腿骨		1		1
			ウシ	上腕骨		1		1
			イノシシ	中手骨/中足骨			1	1
			ネコ	下顎骨	1			1
		骨角製品	鞍？				1	1
	町屋掘乱	サンゴ類	イシサンゴ類？	枝			1	1
		腹足綱	クロアワビ	殻質			1	1
			サザエ	殻質			2	2
		哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	1			1
	町屋面下付	腹足綱	シドロガイ	殻質			1	1
		斧足綱	クマモガイ科	殻質		1		1
			トリガイ	殻質			1	1
			マガキ	殻質	1			1
			ハマグリ	殻質			2	2
			ウチムラサキ？	殻質			1	1
		硬骨魚綱	マダイ	前頭骨			1	1
			イエ	大腿骨		1		1
		哺乳綱	イノシシ/ブタ	遊離歯	1			1
			ニホンジカ	大腿骨	1			1
		貝製品	バイゴマ				1	1
	堀理土	腹足綱	ウニ類	タコノマクラ目	殻質		1	1
			サザエ	殻質			1	1
			アカニシ	殻質			4	4
			アカニシ？	殻質			1	1
		斧足綱	トリガイ	殻質	3		2	5
			ヤマトシジミ	殻質・殻皮		1		1
			ハマグリ	殻質	1	2	1	4
			イガイ科？	殻質			1	1
			ハマグリ？	殻質			2	2
		爬虫綱	スッポン	背甲板			1	1
		鳥綱	ニワトリ	脛足根骨		1		1
		哺乳綱	イタチ	腓骨	1			1
			ネコ	寛骨	1			1
				大腿骨	1			1
				橈骨	1			1
				肩甲骨	1			1
				橈骨	1			1
			ニホンジカ	尺骨	1			1
				大腿骨	2			2
				中足骨	1			1
				腓骨	1			1
		骨角製品	用途不明品					1
18C中	町屋SK204	硬骨魚綱	マグロ属	椎骨			1	1
	町屋 第2面検出	斧足綱	トリガイ	殻質			1	1
19C	石組溝 東肩上面	腹足綱	アカニシ？	殻質			1	1
	町屋　昭和期裏込層	腹足綱	サザエ	蓋			1	1
	町屋SX01	哺乳綱	ウマ	遊離歯		1		1
	計							328

H地区出土の動物遺存体

時期	出土地	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
18C	町屋　第2層	腹足綱	アカニシ	殻質			1	1
	計							1

表18　動物遺存体集計表２

１区出土の動物遺存体

時期	出土地	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
18C	町屋SK304	硬骨魚類	マダイ	上後頭骨			1	1
	町屋SP306	非足類	イタボガキ科？	殻質			1	1
	町屋 第3面握所	鹿足類	アカニシ	殻質			2	2
	堀理土	サンゴ類	イシサンゴ目	(空白)			1	1
		腹足綱	クロアワビ	殻質			1	1
			アワビ類	殻質			1	1
			サザエ	殻質			2	2
			アカニシ	殻質			8	8
			テングニシ	殻質			1	1
			ナカニシ	殻質			1	1
		非足類	アカガイ	殻質	1			1
			マガキ	殻質	1	2		3
			イタボガキ科	殻質			1	1
			イタボカキ科？	殻質		1		1
		非足類	イガイ科	殻質			1	1
			アサリ	殻質	1	1		2
			ハマグリ	殻質	3	2	3	8
			ハマグリ？	殻質			1	1
		硬骨魚類	マダイ	椎骨			1	1
		爬虫綱	スッポン	背甲板	1		2	3
				腹甲板	2			2
			鳥口骨			1		1
			イシガメ科	背甲・腹甲板			2	2
				腹甲板		1		1
		哺乳綱	ニホンジカ	距骨	1			1
18C～ 19C	SX201	腹足綱	クロアワビ	殻質			2	2
			アワビ類	殻質			1	1
			サザエ	殻質			1	1
			アカニシ	殻質			8	8
			テングニシ	殻質			1	1
			バイ	殻質			5	5
			ササ貝？	殻質			1	1
			テングニシ？	殻質			1	1
		非足類	イタボカキ	殻質	1			1
			イタボカキ科？	殻質			1	1
			イガイ科	殻質・殻皮	1		1	2
			イガイ科	殻質	1			1
			イガイ科？	殻質			1	1
			イタヤガイ科	殻質			1	1
			サルボウ	殻質	1			1
			ハマグリ	殻質	3	5		8
				殻質・殻皮	2	3		5
			フネガイ科	殻質			1	1
			ヤマトシジミ	殻質・殻皮	12	16	1	29
			トリガイ	殻質			2	2
			ハマグリ？	殻質			1	1
		硬骨魚類	スズキ属	主鰓蓋骨	1			1
			マダイ	下鰓蓋骨		1		1
				主鰓蓋骨		1		1
		爬虫綱	イシガメ/クサガメ	背甲・腹甲板			1	1
		骨角製品	釣針？				1	1
		貝未成品	バイゴマ	(空白)			2	2
19C	石組溝	腹足綱	サザエ	殻質			1	1
			アカニシ	殻質			1	1
			アカニシ？	殻質			1	1
			テングニシ？	殻質			1	1
		非足類	アカガイ	殻質	1	1		2
			ハマグリ	殻質			1	1
			ハマグリ？	殻質			1	1
	町屋SK107	非足類	アサリ	殻質			1	1
	町屋SK108	腹足類	アカニシ	殻質			1	1
	町屋 第1面握所	非足類	マガキ	殻質		1		1
	北半部 面下げ	腹足類	アカニシ	殻質			1	1
	町屋黄褐色 堀道砂質土	腹足類	アカニシ	殻質			1	1
			テングニシ	殻質			1	1
	町屋 第1面握所	非足類	マガキ	殻質	1			1
	町屋 第2面握所	非足類	ハマグリ	殻質	1	1	1	3
			ハマグリ？	殻質			1	1
	計							148

K-1区出土の動物遺存体

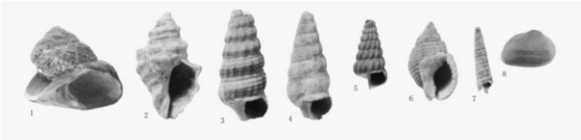
時期	出土地	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
17C	町屋SD13001	骨角製品	櫛払い （ブラシタイプ）				1	1
18C	町屋 第4面検出	非足類	イタヤガイ	殻質			1	1
18C後	町屋 第3面検出	鹿足綱	サザエ	殻質			1	1
19C前	石組溝（裏込）	鹿足綱	アカニシ	殻質			1	1
19C中	石組溝（下層）	硬骨魚類	ハモ属	椎骨			3	3
			マイワシ	歯骨	1			1
			タイ科	前上顎骨/歯骨			1	1
			カツオ/ ソウダガツオ属	角舌骨	1			1
			マダイ？	椎骨			1	1
	計							11

K-2区出土の動物遺存体

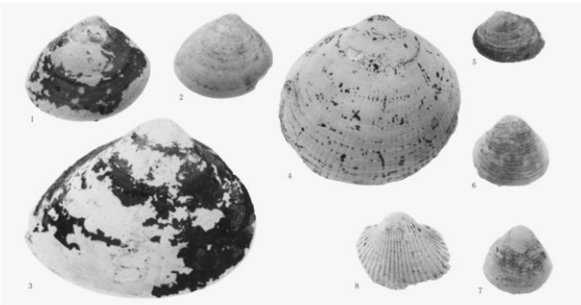
時期	出土地	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
18C前	町屋 第4面検出	爬虫綱	イシガメ科	腹甲板	1			1
18C中	町屋SK2007	硬骨魚綱	マグロ属	椎骨			3	3
18C末	町屋SK23002	非足綱	ハマグリ？	殻質			1	1
18C末～ 18C末	町屋 第3面検出	哺乳綱	ネズミ科	大腿骨	1			1
18C末～ 19C前	町屋 第2面検出	腹足綱	アカニシ	殻質			2	2
		非足綱	トリガイ	殻質			1	1
			ハマグリ	殻質	1			1
			ヤマトシジミ	殻質・殻皮	1			1
			ヤマトシジミ？	殻質・殻皮	1			1
18C後～ 19C	堀内井戸 SM24001	腹足綱	アワビ類	殻質			1	1
		非足綱	イガイ科	殻質			1	1
			ハマグリ	殻質・殻皮			1	1
19C前	町屋SK23007	骨角製品	櫛払い （ブラシタイプ）				1	1
19C前	町屋SK21003	硬骨魚綱	ニシン科	椎骨			1	1
		両生綱	カエル類	篤骨	1			1
19C中	石組溝 SM21001	腹足綱	アワビ類	殻質			1	1
			サザエ	殻質			1	1
			テングニシ	殻質			1	1
		非足綱	イガイ科	殻質	1	5	6	
			ハマグリ	殻質・殻皮			1	1
			ヤマトシジミ	殻質・殻皮	1			1
			ハマグリ？	殻質			1	1
			アナゴ科	椎骨			1	1
		硬骨魚綱	ハタ科	舌顎骨	1			1
			クロダイ属	主上顎骨	1			1
			マダイ	主上顎骨		1		1
				主鰓蓋骨		1		1
		両生綱	カエル類	椎骨			2	2
		哺乳綱	ネズミ科	大腿骨	1			1
				距骨	1			1
	計							39

K-3区出土の動物遺存体

時期	出土地	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
18C後	堀理土	腹足綱	アワビ類	殻質			1	1
			サザエ	蓋			1	1
			アカニシ	殻質			2	2
		非足綱	ヤマトシジミ	殻皮・殻質	1			1
			マダイ	前鰓蓋骨	1			1
		硬骨魚綱	スズキ属？	椎骨			1	1
			マダイ？	上顎頭骨	1			1
			タイ科？	椎骨			1	1
		貝製品	バイゴマ				1	1
		骨製品	機織				1	1
19C中～ 19C末	堀内側土坑 SKA4001	非足綱	イタボガキ科？	殻質			1	1
		硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨	1			1
	計							13



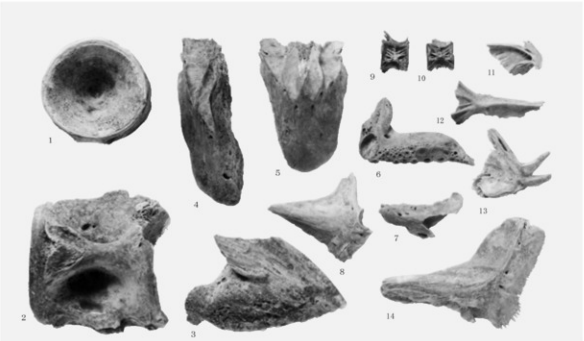
貝類①



貝類②

貝類③

挿図写真9　貝類①②③



魚類

1. サメ類(椎骨)　2. マグロ属(椎骨)　3. イシダイ属(前上顎骨) 4～8. マダイ(4, 5. 前頭骨　6.前上顎骨　7. 歯骨　8.角骨)　9, 10. ハモ属(椎骨)　11, 12. フグ科(11. 前鰓蓋骨　12. 口蓋骨)　13. コチ科(前鰓蓋骨)　14. ハタ科(前鰓蓋骨)

爬虫類

1, 2. イシガメ科(1. 背甲骨板　2. 腹甲骨板)
3～8. スッポン(3. 烏口骨　4, 5. 肋骨板　5, 7. 中腹骨板　8. 背甲骨板)

前頁写真の解説

貝類①1．コシダカガンガラ　2．イボニシ　3～5．フトヘナタリ
6．ムシロガイ　7．カニモリガイ科　8．ミミエガイ/ササゲミミエガイ
貝類②1～3．ハマグリ　4．タマキガイ　5．アサリ　6，7．ヤマトシジミ　8．サルボウ
貝類③1．バイ　2，3．アカニシ　4．テングニシ　5．ナガニシ　6．シドロガイ　7．サザエ　8，9．クロアワビ
10，11．イガイ科 12．イタボガキ　13．アカガイ　14，15．トリガイ

挿図写真10　魚類・爬　虫類

鳥類・哺乳類①

1．ニホンオオカミ(脛骨)　2，3．イヌ(2．脛骨　3．大腿骨)　4．イノシシ(中手骨／中足骨)　5．ウマ(下顎臼歯)
6．イルカ類(椎骨)　7，8．ネコ(7．寛骨　8．大腿骨)　9．アビ科(上腕骨)　10．ニワトリ(足根中足骨)

哺乳類②

1，2．ウシ(上腕骨・同一個体で2は近位端)　3～8．ニホンジカ(3．橈骨　4．尺骨　5～7．大腿骨　8．脛骨)
9．ヒト(大腿骨)

挿図写真11　鳥類・哺乳類①・哺乳類②

挿図写真12　骨角貝製品

第４節　兵庫津遺跡第 57 次調査で出土した木製品の樹種

吉川純子（古代の森研究舎）

1.はじめに

兵庫津遺跡第57次調査では兵庫城築城当初の石垣が確認され、堀の埋土から多数の木製品が検出され、そのほとんどが18世紀頃のものであると確認された。このことから当時の木材利用状況を把握する目的でこれらの樹種同定を行なった。分析に充てた種類は下駄、漆椀、曲物、櫛、船材、建築部材など合計360点である。出土木製品からは小片を採取し、小片からステンレス剃刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の３方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

2．同定結果及び考察

兵庫津遺跡第57次調査から出土した木材の樹種同定結果を表19～21に示す。

表19　出土木製品樹種同定結果(１)

番号	台帳番号	地区	遺物名	出土遺構	出土層位	年代	樹種
1	E-024	C-1	割り下駄		第2遺構面 検出面		スギ
2	E-060-2	F-1	遺瓶下駄	東辺石垣	東辺石垣裏込 粗粘土ブロ		針葉樹
3	E-074-1	F-1	遺瓶下駄	東辺石垣	東辺石垣裏込 粗粘土		カツラ
4	E-076	F-1	遺瓶下駄	東辺石垣	東辺石垣裏込 粗粘土内	桃区色粘土	ヒノキ
5	E-080-1	F-1	遺瓶下駄	南辺石組	城内側盛土	18世紀	スギ
6	E-081-2	F-1	遺瓶下駄	石垣裏込	下層石垣 構築作業		ヒノキ
7	E-095	F-1	遺瓶下駄	堀	最下層	18世紀	マツ属複維管束亜属
8	E-097-1	F-1	遺瓶下駄	—	—	—	マツ属複維管束亜属
9	E-105	F-1	遺瓶下駄	堀土層断面	丸天色粘質土		クリ
10	E-106-3	F-1	遺瓶下駄		6号遺構周辺 (3301)	18世紀	スギ
11	E-121-6	F-1	遺瓶下駄	堀埋土中層	丸天色粘質 粘質土		クリ
12	E-132-2	F-1	遺瓶下駄	北辺石組裏	城内側盛土	19世紀	ネズコ属
13	E-133-7	F-1	遺瓶下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	モミ属
14	E-135-12	F-1	遺瓶下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	クリ
15	E-137-4	F-1	遺瓶下駄	下層柴垣 検出			針葉樹
16	E-137-6	F-1	遺瓶下駄	下層柴垣 検出			モミ属
17	E-139-11	F-1	遺瓶下駄	下層柴垣下層	桃区色粘土		クリ
18	E-192	F-1	遺瓶下駄	堀	明区色砂礫	18世紀	針葉樹
19	E-213	F-1	遺瓶下駄	東辺石組裏	城内側盛土	18世紀	クリ
20	E-252-1	F-1	遺瓶下駄	南辺石組	紫石上層	17世紀	ヒノキ
21	E-252-2	F-1	遺瓶下駄	南辺石組	紫石上層	17世紀	針葉樹
22	E-270	F-1	遺瓶下駄	堀	桃黒色粘土		針葉樹
23	E-111	F-1	割り下駄	石組裏	濃内土層	18世紀	スギ
24	E-116-6	F-1	割り下駄	—	—	—	ヒノキ
25	E-118-1	F-1	割り下駄	堀	丸天色粘 質砂質土	18世紀	スギ
26	E-119-7	F-1	割り下駄	下層石垣裏込 上層	桃区色粘土		スギ
27	E-119-8	F-1	割り下駄	下層石垣裏込 上層	桃区色粘土		スギ
28	E-122-1	F-1	割り下駄	裏込上層～ 中層	灰色粘土		スギ
29	E-122-2	F-1	割り下駄	裏込上層～ 中層	灰色粘土		スギ
30	E-139-2	F-1	割り下駄	下層柴垣下層	桃区色粘土		スギ
31	E-149-1	F-1	割り下駄	石垣裏中側 西側	桃区色粘土		針葉樹
32	E-194-2	F-1	割り下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	カリ
33	E-215-5	F-1	割り下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	スギ
34	E-215-6	F-1	割り下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	スギ
35	E-076	F-1	高歯下駄	東辺石組裏込 内側	東辺石組裏込 粗粘土内	桃区色粘土	ヒノキ
36	E-061-1-1	F-1	高歯下駄	石垣裏込	下層石垣構 造作業		トネリコ属
37	E-061-1-2	F-1	高歯下駄 (前)(後)	石垣裏込	下層石垣構 造作業		トネリコ属
38	E-061-1-3	F-1	高歯下駄 (前)(後)	石垣裏込	下層石垣構 造作業		サクラ節
39	E-116-3	F-1	高歯下駄	—	—	—	ヒノキ
40	E-135-9-1	F-1	高歯下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	ヤナギ属
41	E-137-5	F-1	高歯下駄	下層柴垣 検出			アスナロ属
43	E-142-9-1	F-1	高歯下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	クリ
44	E-142-9-2	F-1	高歯下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	クリ
46	E-230-1-1	F-1	高歯下駄	東辺石垣裏込 外側石垣内外	石垣裏込		トネリコ属

番号	台帳番号	地区	遺物名	出土遺構	出土層位	年代	樹種
47	E-230-1-2	F-1	高歯下駄裏		東辺石垣裏込 外側石垣内外	石垣裏込	トネリコ属
48	E-240-1-1	F-1	高歯下駄	東辺石垣裏込 外側石垣内外	東辺石垣裏込 粗粘土	桃区色粘土	ヒノキ
49	E-240-1-2	F-1	高歯下駄裏	東辺石垣裏込 外側石垣内外	東辺石垣裏込 粗粘土	桃区色粘土	カツラ
50	E-240-1-3	F-1	高歯下駄裏	東辺石垣裏込 外側石垣内外	東辺石垣裏込 粗粘土	桃区色粘土	カツラ
51	E-242-2-1	F-1	高歯下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	モクレン属
52	E-242-2-2	F-1	高歯下駄裏	堀	桃区色粘土	18世紀	モクレン属
53	E-242-4-1	F-1	高歯下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	ヒノキ
54	E-242-4-2	F-1	高歯下駄裏	堀	桃区色粘土	18世紀	ケヤキ
55	E-242-4-3	F-1	高歯下駄裏	堀	桃区色粘土	18世紀	ケヤキ
56	E-134-12	F-1	低歯下駄	下層柴垣下層	桃区色粘土		ヒノキ
57	E-130-1	F-1	低歯下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	ケヤキ属
58	E-130-2	F-1	低歯下駄裏	堀	桃区色粘土	18世紀	クスノキ属
59	E-130-3	F-1	低歯下駄裏	堀	桃区色粘土	18世紀	クスノキ属
60	E-150-1	F-1	低歯下駄	規足子	明黄色粘土		ヒノキ
61	E-242-3	F-1	低歯下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	ケヤキ
62	E-194-1	F-1	草履下駄	堀	桃区色粘土	18世紀	マツ属複維管束亜属
63	E-137	I	遺瓶下駄	SX001 北1区画		18世紀	スギ
64	E-134	I	遺瓶下駄	SX001 南4区画	明黄色粘質 土砂礫混り	18世紀	スギ
65	E-139-2	I	遺瓶下駄	SX001 南2・3区画		18世紀	スギ
66	E-141	I	遺瓶下駄 本底部	堀	暗褐色粘質土	18世紀	スギ
67	E-144-1	I	遺瓶下駄	堀	中層	18世紀	トネリコ属
68	E-145-1	I	遺瓶下駄	堀	下層	18世紀	スギ
69	E-145-2	I	遺瓶下駄	堀	下層	18世紀	スギ
70	E-150-1	I	遺瓶下駄	堀	下層	18世紀	スギ
71	E-153	I	遺瓶下駄	堀	下層	18世紀	スギ
72	E-156	I	遺瓶下駄	堀	下層	18世紀	スギ
73	E-156	I	遺瓶下駄	堀	下層	18世紀	ヒノキ
74	E-160	I	遺瓶下駄	堀	下層	18世紀	ヒノキ
75	E-168-1	I	遺瓶下駄	堀	中層	18世紀	スギ
76	E-168-2	I	遺瓶下駄	堀	中層	18世紀	ヒノキ
77	E-168-5	I	遺瓶下駄	堀	中層	18世紀	クリ
78	E-246-2	I	遺瓶下駄	SX001	検出	18世紀	スギ
79	E-246	I	遺瓶下駄	SX001	検出	18世紀	スギ
80	E-247	I	遺瓶下駄	堀	中層	18世紀	ヒノキ
81	E-248	I	遺瓶下駄	堀	下層	18世紀	アスナロ属
82	E-253	I	遺瓶下駄	堀	上層	18世紀	スギ
83	E-254-1	I	遺瓶下駄	堀	中層	18世紀	スギ
84	E-254-2	I	遺瓶下駄	堀	中層	18世紀	ヒノキ
85	E-254-2	I	遺瓶下駄裏	堀	中層	18世紀	スギ
86	E-254-3	I	遺瓶下駄	堀	中層	18世紀	スギ
87	E-254-3	I	遺瓶下駄裏	堀	中層	18世紀	スギ
88	E-254-4	I	遺瓶下駄	堀	中層	18世紀	ヒノキ
89	E-254-7	I	遺瓶下駄裏	堀	中層	18世紀	ヒノキ
90	E-267-3	I	遺瓶下駄	堀	下層	18世紀	マツ属複維管束亜属

表20　出土木製品樹種同定結果(2)

番号	石器番号	地区	遺物名	出土遺構	出土層位	年代	樹種
88	R-149	1	剥ぎ下駄	柵	下層	18世紀	スギ
92	R-160	1	剥ぎ下駄	柵	下層	18世紀	スギ
93	R-168-1	1	剥ぎ下駄	柵	中層	18世紀	スギ
94	R-168-4	1	剥ぎ下駄	柵	下層	18世紀	スギ
95	R-245-3	1	剥ぎ下駄	柵	上層	18世紀	ヒノキ
96	R-245-3	1	剥ぎ下駄	柵	上層	18世紀	ヒノキ
97	R-246-1	1	剥ぎ下駄	S3201	検出	18世紀	ヒノキ
98	R-246-3	1	剥ぎ下駄	S3201	検出	18世紀	ヒノキ
99	R-254-5	1	剥ぎ下駄	S3201	中層	18世紀	スギ
100	R-137-1-1	1	踏歯下駄重	S3201 南区西	明黒色粘質土砂礫混土	18世紀	ヒノキ
101	R-137-1-2	1	踏歯下駄重	S3201 南区西	明黒色粘質土砂礫混土	18世紀	モミ属
102	R-139-1-1	1	隠歯下駄	S3201 南2～3区西	黒色粘質土	18世紀	スギ
103	R-139-1-2	1	隠歯下駄重	S3201 南2～3区西	黒色粘質土	18世紀	ヒノキ
104	R-144-2	1	隠歯下駄	柵	中層	18世紀	スギ
105	R-144-3	1	隠歯下駄	柵	中層	18世紀	スギ
106	R-144-2-2	1	隠歯下駄重	柵	中層	18世紀	スギ
107	R-246-4	1	隠歯下駄	S3201	検出	18世紀	ヒノキ
108	R-246-5	1	隠歯下駄	S3201	検出	18世紀	マツ属
109	R-254-6	1	隠歯下駄	柵	上層	18世紀	スギ
110	R-246	1	隠歯下駄重	S3201	検出	18世紀	ケヤキ
111	R-246	1	隠歯下駄重	S3201	検出	18世紀	ハンノキ亜属
112	R-077	K-1	産歯下駄	SM1001			スギ
113	R-007-1	K-2	隠歯下駄重	SM2001	下層		スギ
114	R-007-2	K-2	隠歯下駄重	SM2001	下層		ハンノキ亜属
115	R-007-3	K-2	隠歯下駄重	SM2001	下層		ハンノキ亜属
116	R-105-1	K-2	隠歯下駄重	SM3001			スギ
117	R-105-2	K-2	隠歯下駄重	SM2001			スギ
118	R-111-2-1	K-2	隠歯下駄	SM3001			スギ
119	R-111-2-2	K-2	隠歯下駄重	SM4001			トチノキ
120	R-032-1	F-1	漆器蓋	石組濃	南沼濃内下層	18世紀	カツラ
121	R-032-4	F-1	漆器椀	石組濃	南沼濃内下層	18世紀	ブナ属
122	R-032-5	F-1	漆器椀	石組濃	南沼濃内下層	18世紀	ナナカマド属
123	R-037-1	F-1	漆器椀	石組濃	濃内上層	18世紀	ブナ属
124	R-040-2	F-1	漆器蓋	東沼石組内下層			トチノキ
125	R-064-1	F-1	漆器椀	柵	中層	16末～	コシアブラ
126	R-080-2	F-1	漆器椀	南沼石組濃	端内側面方	18世紀	トチノキ
127	R-089	F-1	漆器椀	東沼石組濃ふ			ケヤキ
128	R-092	F-1	漆器椀	石組濃	濃内下層	18世紀	カエデ属
129	R-093-1	F-1	漆器椀	下層石組内			ブナ属
130	R-094-1	F-1	漆器椀	下層石組内敲土層			カエデ属
131	R-097-4	F-1	漆器椀			—	コナラ節
132	R-105-2	F-1	漆器椀	敲土層堆積	瓦状色礫混敲質土		ブナ属
133	R-105-3	F-1	漆器椀	敲土層堆積	瓦状色礫混敲質土		ブナ属
134	R-105-4	F-1	漆器蓋	敲土層堆積	瓦状色礫混敲質土		トチノキ
135	R-106-1	F-1	漆器椀	不明遺構周辺(S3011)		18世紀	ブナ属
136	R-114-1	F-1	漆器椀	下層敲内下層	暗灰色粘土		トチノキ
137	R-114-4	F-1	漆器椀	下層敲内下層	暗灰色粘土		サクラ節
138	R-115-1	F-1	漆器椀	柵	下層	18世紀	トチノキ
139	R-115-2	F-1	漆器椀	柵	下層	18世紀	ブナ属
140	R-116-1	F-1	漆器椀	—	—		クリ
141	R-116-8	F-1	漆器椀	—	—		トチノキ
142	R-116-9	F-1	漆器椀	—	—		ブナ属
143	R-116-10	F-1	漆器椀	—	—		トチノキ
144	R-118-4	F-1	漆器椀	柵	瓦状色礫混敲質土	18世紀	トチノキ
145	R-119-1	F-1	漆器椀	下層石組敲土下層	暗灰色粘土		トチノキ
146	R-119-2	F-1	漆器椀	下層石組敲土下層	暗灰色粘土		ブナ属
147	R-119-3	F-1	漆器椀	下層石組敲土下層	暗灰色粘土		トチノキ
148	R-119-4	F-1	漆器椀	下層石組敲土下層	暗灰色粘土		ホクレン属
149	R-121-1	F-1	漆器椀	敲層土中層	瓦状色礫混敲質土		トチノキ
150	R-121-9	F-1	漆器椀	敲層土中層	瓦状色礫混敲質土		ケヤキ
151	R-121-10	F-1	漆器椀	敲層土中層	瓦状色礫混敲質土		トチノキ
152	R-121-14	F-1	漆器椀	敲層土中層	瓦状色礫混敲質土		トチノキ
153	R-122-1	F-1	漆器椀	敲層土上層～中層	灰色粘土		トチノキ
154	R-131-101	F-1	漆器椀	S3101			トチノキ
155	R-132-1	F-1	漆器椀	北沼石組濃	端内側面方	18世紀	ブナ属
156	R-132-2	F-1	漆器椀	北沼石組濃	端内側面方	18世紀	オニグルミ
157	R-132-4	F-1	漆器椀	北沼石組濃	端内側面方	18世紀	ブナ属
158	R-132-5	F-1	漆器椀	北沼石組濃	端内側面方	18世紀	クリ
159	R-133-9	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	カエデ属

番号	石器番号	地区	遺物名	出土遺構	出土層位	年代	樹種
160	R-134-25	F-1	漆器椀	下層敲下層	暗灰色粘土		トチノキ
161	R-134-26	F-1	漆器椀	下層敲下層	暗灰色粘土		ヤシャブシ亜属
162	R-134-27	F-1	漆器杯	下層敲下層	暗灰色粘土		トチノキ
163	R-134-28	F-1	漆器椀	下層敲下層	暗灰色粘土		ブナ属
164	R-134-29	F-1	漆器椀	下層敲下層	暗灰色粘土		トチノキ
165	R-135-1	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
166	R-135-4	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	クリ
167	R-135-5	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	クリ
168	R-135-4	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
169	R-135-5	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
170	R-135-6	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	サクラ節
171	R-135-7	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
172	R-135-8	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
173	R-135-9	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
174	R-135-10	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
175	R-135-11	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
176	R-135-16	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
177	R-135-18	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	サクラ節
178	R-135-19	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
179	R-137-7	F-1	漆器椀	下層敲底面検出			トチノキ
180	R-138-1	F-1	漆器椀	馬出状沼	南端検出	18世紀	ブナ属
181	R-138-3	F-1	漆器椀	馬出状沼	南端検出	18世紀	ブナ属
182	R-139-9	F-1	漆器椀	下層敲下層	暗灰色粘土		トチノキ
183	R-139-12	F-1	漆器椀	下層敲下層	暗灰色粘土		トチノキ
184	R-139-13	F-1	漆器椀	下層敲下層	暗灰色粘土		トチノキ
185	R-139-14	F-1	漆器椀	下層敲下層	暗灰色粘土		ブナ属
186	R-139-15	F-1	漆器椀	下層敲下層	暗灰色粘土		ブナ属
187	R-139-16	F-1	漆器椀	下層敲下層	暗灰色粘土		トチノキ
188	R-141-1	F-1	漆器椀	深凡？	暗黒色粘土		トチノキ
189	R-141-2	F-1	漆器椀	深凡？	暗黒色粘土		トチノキ
190	R-142-1	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ホクレン属
191	R-142-2	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
192	R-142-12	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
193	R-142-13	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
194	R-142-16	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
195	R-142-18	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ホクレン属
196	R-142-20	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
197	R-149-2	F-1	漆器盤	石組濃内側西端	暗灰色粘土		ブナ属
198	R-149-3	F-1	漆器椀	石組濃内側西端	暗灰色粘土		トチノキ
199	R-150-5	F-1	漆器椀	深凡？	暗黒色粘土		ブナ属
200	R-164	F-1	漆器椀	石組濃	南沼濃内下層	18世紀	ホクレン属
201	R-184-1	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
202	R-184-2	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
203	R-184-3	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
204	R-185-3	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土		トチノキ
205	R-185-4	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土		ブナ属
206	R-192-1	F-1	漆器椀	柵	明灰色砂礫	18世紀	ブナ属
207	R-192-2	F-1	漆器椀	柵	明灰色砂礫	18世紀	ブナ属
208	R-192-3	F-1	漆器椀	柵	明灰色砂礫	18世紀	ブナ属
209	R-193	F-1	漆器椀	柵	瓦状色礫混敲質土	18世紀	ブナ属
210	R-194-1	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
211	R-194-2	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
212	R-195	F-1	漆器椀	敲層土	下層部	18世紀	トチノキ
213	R-196-2	F-1	漆器椀	柵	明灰褐色礫混敲質土	18世紀	トチノキ
214	R-196-3	F-1	漆器椀	柵	明灰褐色礫混敲質土	18世紀	トチノキ
215	R-209-1	F-1	漆器椀	柵	下層部	18世紀	ブナ属
216	R-209-2	F-1	漆器椀	柵	下層部	18世紀	トチノキ
217	R-209-3	F-1	漆器椀	柵	下層部	18世紀	トチノキ
218	R-209-4	F-1	漆器椀	柵	下層部	18世紀	ブナ属
219	R-210-1	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土 北端		トチノキ
220	R-210-3	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土 上層		ブナ属
221	R-214-1	F-1	漆器椀	柵	中層	18世紀	トチノキ
222	R-214-2	F-1	漆器椀	柵	中層	18世紀	トチノキ
223	R-214-3	F-1	漆器椀	柵	中層	18世紀	トチノキ
224	R-215-1	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
225	R-215-2	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	カツラ
226	R-215-12	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
227	R-215-4	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
228	R-222-1	F-1	漆器椀	柵	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属

表21 出土木製品樹種同定結果(3)

番号	官報番号	地区	遺物名	出土遺構	出土層位	年代	樹種
229	R-222-2	F-1	漆器椀	椀	暗灰色粘土	18世紀	カツラ
230	R-223-1	F-1	漆器椀	椀埋土	下層面	18世紀	ブナ属
231	R-223-2	F-1	漆器椀	椀埋土	下層面	18世紀	トチノキ
232	R-224-1	F-1	漆器椀	椀埋土	下層面	18世紀	ブナ属
233	R-228-1	F-1	漆器椀	椀	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
234	R-228-2	F-1	漆器椀	椀	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
235	R-228-3	F-1	漆器椀	椀	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
236	R-229-4	F-1	漆器椀	椀	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
237	R-233	F-1	漆器椀	東辺石組溝	遺外側盛方		トチノキ
238	R-236-3	F-1	漆器椀	東辺石組溝 外側石敷土外	石垣裏込		トチノキ
239	R-239-1	F-1	漆器椀	椀	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
240	R-240-4	F-1	漆器椀	東辺石組溝 外側石敷土外	表灰色粘性 砂礫		ブナ属
241	R-240-5	F-1	漆器椀	東辺石組溝 外側石敷土外	表灰色粘性 砂礫		ブナ属
242	R-240-6	F-1	漆器椀	東辺石組溝 外側石敷土外	表灰色粘性 砂礫		ブナ属
243	R-241	F-1	漆器椀	椀	暗灰色粘土	18世紀	ゼクラ節
244	R-242-12	F-1	漆器椀	椀	暗灰色粘土	18世紀	トチノキ
245	R-242-13	F-1	漆器椀	椀	暗灰色粘土	18世紀	ブナ属
246	R-246-2	I	漆器椀	SX201	検出	18世紀	ブナ属
247	R-246-3	I	漆器椀	SX201	検出	18世紀	ブナ属
248	R-246-6	I	漆器椀	SX201	検出	18世紀	ブナ属
249	R-248	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ブナ属
250	R-265-7	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ブナ属
251	R-272-1	F-1	漆器椀	南辺石垣	第石上層	18世紀	ケヤキ
252	R-273-1	F-1	漆器椀	—		18世紀	オニグルミ
253	R-112	I	漆器椀	椀	排水	18世紀	ケヤキ
254	R-127	I	漆器椀	SX201		18世紀	トチノキ
255	R-131	I	漆器椀	SX201	列黒色粘質土	18世紀	トチノキ
256	R-132	I	漆器椀	SX201	列黒色粘質土	18世紀	トチノキ
257	R-138	I	漆器椀	SX201	黒色粘質土	18世紀	ケヤキ
258	R-142	I	漆器椀	堀内側石垣	堀落石	18世紀	トチノキ
259	R-144-1	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ブナ属
260	R-144-1	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ブナ属
261	R-144-2	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	トチノキ
262	R-144-3	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ブナ属
263	R-144-5	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ブナ属
264	R-144-6	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ハンノキ亜属
265	R-144-7	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ヤシャブシ亜属
266	R-145	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	トチノキ
267	R-145-1	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ヤシャブシ亜属
268	R-145-2	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ブナ属
269	R-145-3	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	クリ
270	R-145-4	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ブナ属
271	R-145-5	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	カツラ
272	R-145-6	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ホウソバ
273	R-145-7	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	サワシバ
274	R-145-8	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ブナ属
275	R-150	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ブナ属
276	R-152	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	トチノキ
277	R-165-1	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ブナ属
278	R-167	I	漆器椀	SX201	堀埋土上層	18世紀	トチノキ
279	R-167	I	漆器椀	SX201	堀埋土上層	18世紀	トチノキ
280	R-194-2	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ブナ属
281	R-195	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ブナ属
282	R-197	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	トチノキ
283	R-198	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	トチノキ
284	R-198	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	トチノキ
285	R-209	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ブナ属
286	R-238	I	漆器椀	SX201	黒褐色砂礫 混じり粘質	18世紀	カツラ
287	R-245-1-1	I	大口台漆器	椀	上層	18世紀	ヨゴノキ属
288	R-245-1-2	I	大口台(引)	椀	上層	18世紀	カバノキ属
289	R-245-1	I	漆器椀	椀	上層	18世紀	ブナ属
290	R-245-3	I	漆器椀	椀	上層	18世紀	ブナ属
291	R-245-3	I	漆器椀	椀	上層	18世紀	トチノキ
292	R-246-3	I	漆器椀	SX201	検出	18世紀	トチノキ
293	R-252-1	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ブナ属
294	R-252-2	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ブナ属
295	R-254	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	トチノキ
296	R-254-1	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ケヤキ
298	R-254-2-2	I	大口台(引)	椀	中層	18世紀	ゼクラ節
299	R-254-3	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	トチノキ
300	R-254-4	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	ブナ属
301	R-254-5	I	漆器椀	椀	中層	18世紀	カエデ属

番号	官報番号	地区	遺物名	出土遺構	出土層位	年代	樹種
302	R-261	I	漆器椀	堀外側石垣	側落石下	18世紀	モクレン属
303	R-267	I	漆器椀	椀	下層	18世紀	ブナ属
304	R-246	I	板	SX201	検出	18世紀	トチノキ
305	33	F-1	板	土層の遺構			ヒノキ
306	28	F-1	角柱	土層の遺構			スギ
307	R-131-1	F-1	墨書木札	椀			スギ
308	R-206-3	F-1	墨書木札	椀埋土	下層面	18世紀	スギ
309	R-215-2	F-1	漆塗櫛	椀	暗灰色粘土	18世紀	サカキ
310	R-216	F-1	漆絵櫛	椀	暗灰色粘土	18世紀	イスノキ
311	R-222	F-1	漆絵櫛	椀	暗灰色粘土	18世紀	イスノキ
312	R-184-1	F-1	大工鉋表ネ	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
313	R-106	F-1	大型竹文字下	不明遺構周辺 (SX01)		18世紀	モミ属
314	R-225-2	F-1	折敷底板	椀	暗灰色粘土	18世紀	ヒノキ
315	R-228	F-1	折敷底板	椀	暗灰色粘土	18世紀	アスナロ属
316	R-087	F-1	巻手元柳橋	石組溝	堀内側盛込	18世紀	ヨゴノキ属
317	R-132-2	F-1	組梁	北辺石組溝	堀内側盛方	18世紀	ツブラ属複雑管束束属
318	R-194	F-1	曲行	椀	暗灰色粘土	18世紀	ヒノキ
319	R-184-2	F-1	曲手	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
320	R-044	F-1	手鉋若蓋	石組溝	西側角横用	18世紀	ヒノキ
321	R-118	F-1	手鉋若蓋	椀	表灰色粘性 砂礫混	18世紀	アスナロ属
322	R-135-3	F-1	手鉋若蓋	椀	暗灰色粘土	18世紀	ヒノキ
323	R-239	F-1	芯子鉋	椀	暗灰色粘土	18世紀	アスナロ属
324	R-184-3-1	F-1	柄付鉋刃	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
325	R-184-3-2	F-1	柄付鉋刃	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
326	R-235-1	F-1	柄付鉋刃	椀	暗灰色粘土	18世紀	ヒノキ
327	R-196	F-1	角形木製品	椀	暗灰色粘土	18世紀	ヒノキ
328	R-242	F-1	角形木製品	椀	暗灰色粘土	18世紀	アスナロ属
329	船材-1-1	F-1	船材はぎ板	椀	暗灰色粘土	18世紀	ツブラ属単維管束束属
330	船材-1-2	F-1	船材はぎ板	椀	暗灰色粘土	18世紀	ツブラ属複雑管束束属
331	船材-1-3	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	ツブラ属複雑管束束属
332	船材-1-4	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	ツブラ属複雑管束束属
333	船材-1-5	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	ツブラ属複雑管束束属
334	船材-1-6	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	ツブラ属複雑管束束属
335	船材-2	F-1	船材はぎ板	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
336	船材-3-1	F-1	船材はぎ板	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
337	船材-3-2	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
338	船材-3-3	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
339	船材-3-4	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
340	船材-3-5	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
341	船材-3-6	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
342	船材-4-1	F-1	船材はぎ板	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
343	船材-4-2	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
344	船材-4-3	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
345	船材-4-4	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	ヒノキ
346	船材-4-5	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
347	船材-4-6	F-1	曲の木	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
348	船材-5	F-1	船材	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
349	20	F-1	板	土層の遺構			カヒ
350	R-267	I	墨書木札	椀	下層	18世紀	ヒノキ
351	R-144-4	I	漆塗杯腰高	椀	中層	18世紀	アスナロ属
352	R-144-2	I	櫛	椀	中層	18世紀	ヒノキ
353	R-143-1	I	櫛	椀	中層	18世紀	ツゲ
354	R-209	I	刷毛板	椀	下層	18世紀	ヒノキ
355	R-142	I	箸	堀内側石垣	側落石	18世紀	ヒノキ
356	R-144-5	I	箸	椀	中層	18世紀	ヒノキ
357	R-195	I	箸	椀	下層	18世紀	ヒノキ
358	R-254-4	I	板状木製品	椀	中層	18世紀	スギ
359	R-148	I	板状木製品?	椀	中層	18世紀	スギ
360	R-144-6	I	曲物	椀	中層	18世紀	ヒノキ
361	R-143-2	I	曲物底板	椀	中層	18世紀	ヒノキ
362	R-267	I	曲物底板	椀	下層	18世紀	ヒノキ
363	R-254-3	I	桶底板	椀	中層	18世紀	ヒノキ
364	R-150	I	木偶	椀	下層	18世紀	ヒノキ
365	船材-1-1	I	船材	SX201		18世紀	スギ
366	船材-1-2	I	曲の木	SX201		18世紀	スギ
367	船材-1-3	I	曲の木	SX201		18世紀	スギ
368	大型部材-1	I	建築部材	SX201		18世紀	マツ属
369	大型部材-2	I	建築部材	SX201		18世紀	マツ属
370	大型部材-3	I	建築部材	SX201		18世紀	ツブラ属複雑管束束属
371	R-132-1	F-1	不明木製品	北辺石組溝	堀内側盛方	18世紀	スギ
372	R-135	F-1	曲物底板	椀	暗灰色粘土	18世紀	スギ
373	R-136-2	F-1	石張円板	舗石直下	南端検出	18世紀	スギ

表22は全試料の利用樹種別集計である。トチノキがもっとも多く76点で全体の21%、次いでスギ71点19%、ブナ属66点18%で、この３種が全体の60%を占める。ヒノキ、クリ、マツ属複維管束亜属も多く使用されていた。器種別樹種使用状況(表23)をみると、下駄には様々な樹種を用いており、多いのはスギとヒノキで以下クリ、針葉樹、トネリコ属などで、クスノキ属、カツラ、キリも使用されていた。櫛はイスノキ、サカキ、ツゲが、箱類はヒノキとアスナロ属、木札にはスギとヒノキが用いられていて樹種が限定されていた。その他生活具では天目台にサクラ属、エゴノキ属、カバノキ属、傘轆轤にエゴノキ属が使われていた。食器具でもっとも点数が多い漆椀はトチノキ69点ブナ属64点で、この２種が抜きんでて多用されており、これらの他にはケヤキ、クリ、モクレン属、カツラ、カエデ属、サクラ節などでコシアブラやオニグルミも利用されていた。漆器その他は蓋や杯などであるが椀材と同じようなトチノキやブナ属などの種類が用いられていた。点数が少ないが箸にはヒノキのみ用いられ、曲物類もスギ、ヒノキ、アスナロ属と針葉樹の３種類に限定されていた。その他食器具は塗りがない鉢にはトチノキが用いられ、柄杓、杓文字などには針葉樹が使用されていた。祭祀具はヒノキ、スギ、アスナロ属が用いられ針葉樹に限定されていた。船材はスギとマツ属が多く使われていて１点ヒノキが確認された。土木材にはおもに針葉樹材が用いられ、１点角杭にクリが使われていた。

以上の結果、消耗品には様々な樹種が使われており、漆器は軽くて加工がしやすい広葉樹が多く使用されていた。いっぽう素材に直接触れる箸や曲物類などの食器具や札、祭祀具にはマツ属を除いた針葉樹、とりわけスギとヒノキが使われていた。美しさを要求される細工ものである櫛や傘轆轤、天目台などにはイスノキ、エゴノキ属などを用いている。また、耐性や強度を要求される船材や土木材にはほとんど針葉樹のスギやマツ属が用いられていた。椀材で多用されているブナ属は、現在では六甲山山頂付近に小面積のブナ林が確認されているのみであるが、イヌブナを含めたブナ属林の潜在分布は、多雪の日本海側では比較的低地部まで想定されている(深町1995)。兵庫県では本遺跡のほかにも明石城武家屋敷跡や入佐川遺跡などの椀材の樹種同定結果でも漆椀にブナ属やトチノキなどの広葉樹材が多用される傾向があり(伊東・山田2012)、江戸時代には六甲山や氷ノ山などから日本海側にかけて比較的大きい面積のブナ属林とそれに伴う多様な広葉樹林が分布し用材の供給源になっていた可能性がある。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久．木の考古学　出土木製品用材データベース．海青社．データCD．

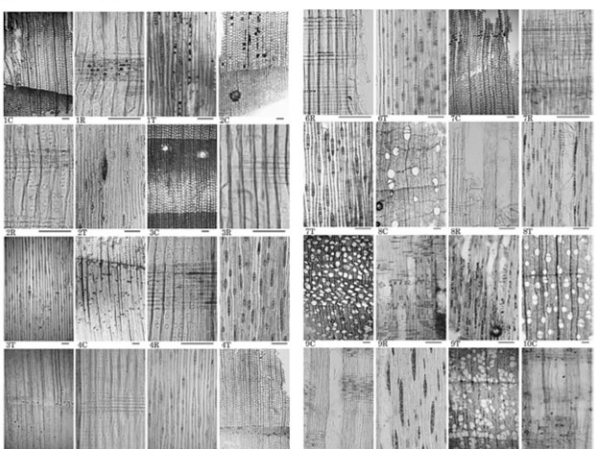
深町加津枝．1995．近畿地方のブナ林の分布について．平成7年度森林総合研究所関西支所年報第37号．39-44.

表 22 樹種別集計表

分類群名	点数
トチノキ	76
スギ	71
ブナ属	66
ヒノキ	44
クリ	14
マツ属複維管束亜属	11
ケヤキ	9
カツラ	8
アスナロ属	7
モクレン属	7
サクラ節	6
針葉樹	6
トネリコ属	5
カエデ属	4
ハンノキ亜属	4
モミ属	4
イスノキ	3
マツ属	3
ヤシャブシ亜属	3
エゴノキ属	2
オニグルミ	2
クスノキ属	2
サワシバ	2
ヤナギ属	2
カバノキ属	1
キリ	1
コシアブラ	1
コナラ属コナラ節	1
サカキ	1
ツガ	1
ナナカマド属	1
ネズコ属	1
マツ属単維管束亜属	1
合計	370

表 23 器種別樹種集計表

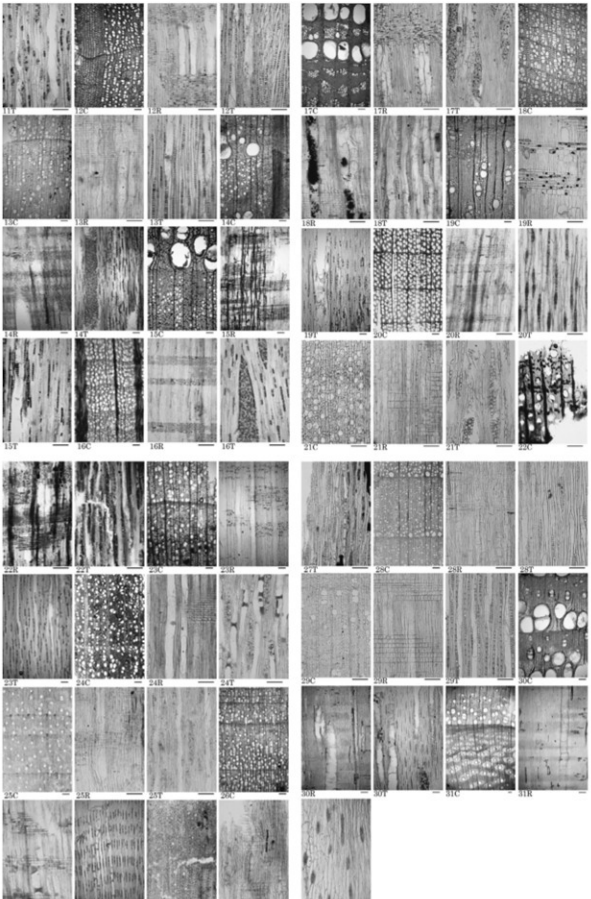
分類群名	生活具 下駄	生活具 櫛	生活具 箱類	生活具 札	食器具 その他漆塗椀	食器具 漆器	食器具 箸	食器具 椀・曲物類その他	祭祀具 木偶	祭祀具 舟形	船材	上木材 角材	上木材 建築部材	上木材 板	木用木製品
モミ属	3								1						
マツ属複維管束亜属	4				1							5		1	
マツ属単維管束亜属												1			
マツ属	1													2	
スギ	43			2	2			2	2		1	16	1		1	1
ヒノキ	26		2	1	2		3	4	1	1	2	1			1	
アスナロ属	2		2		1			1			1					
ネズコ属	1															
針葉樹	6															
オニグルミ					1	1										
ケヤキ属	2															
サワシバ						2										
カバノキ属					1											
ヤシャブシ亜属						2	1									
ハンノキ亜属	3					1										
ブナ属					1	64	1									
コナラ属コナラ節						1										
クリ	8					5							1			
ケヤキ	3					6										
モクレン属	2					5										
クスノキ属	2															
カツラ	3					4	1									
サワシバ		1														
ヤナギ属		3														
イスノキ	1				1	3	1									
カエデ属						3	1									
トチノキ	1					69	5			1						
ツガ		1				1										
エゴノキ属					2											
キリ	5															
マツ属単維管束亜属	1															
小計	117	5	4	3	12	168	10	3	7	5	1	4	23	2	3	2	1



挿図写真13　兵庫津遺跡出土木製品の顕微鏡写真１

1．モミ属（W016 下駄）2．マツ属複維管束亜属（W334 船材）3．マツ属単維管束亜属（W329 船材）4．スギ（W33 船材）5．ヒノキ（W020 下駄）6．アスナロ属（W081 下駄）7．ネズコ属（W012 下駄）8．オニグルミ（W156 漆盤）9．ヤナギ属（W057 下駄）10．カバノキ属（W288 天目台・羽）11．サワシバ（W273 漆椀）

（C：横断面、R：放射断面、T：接線断面、スケールは 0.05mm）



挿図写真14　兵庫津遺跡出土木製品の顕微鏡写真2

第５節　兵庫津遺跡第57次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、兵庫城築城時の基盤堆積物および堀埋積時の堆積環境に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析を実施する。また、堀内埋土より出土した種実および昆虫遺体について種類同定を行い、当時の植物利用や環境に関する情報を得る。なお、本報告では、紙面の都合で珪藻分析結果表を割愛している。

1.珪藻化石からみた堆積環境

(1)調査地点・試料

珪藻分析は、E地区６試料、F地区28試料、I地区12試料、K－３地区６試料について実施する。調査地点の試料採取位置・層相等については発掘調査時の所見に基づき結果に記載する。

(2)分析方法

湿重約3gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数する。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。珪藻の同定と種の生態性は、Horst Lange-Bertalot(2000)、Hustedt(1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot(1985～1991)などを参考にする。結果は主要珪藻化石群集の分布図として示す。

(3)結果(珪藻化石群集の特徴と堆積環境)

・E区

E区では標高-1.0m前後の堀内礫敷直下の基盤堆積物について実施した(fig88)。

灰色小円角礫層(試料６)から乳褐色粘性砂礫最下部(試料５)は、淡水生種を主体とするものの、海水生種および海水～汽水生種といった海域に生育する種群が25%前後含まれていることが特徴である。淡水生種は主に湿地に生育する止水性種が卓越しており、比較的、単調な群集である。海水生種あるいは海水～汽水生種は、内湾や汽水の干潟域に生育する種群で構成される。特徴的に認められた種のうち、海水生種のParalia sulcata(Large Type:>30μ)は、内湾指標種群(小杉,1988)とされ、内湾水中を浮遊生活する種群である。また、本種の多産は、暖かい低鹹水を指標すると考えられている(Tanimura,1981)。なお、本種は、通常、殻径が20μ以下であるが、海進期の堆積物には30μ以上の大型の個体が増加する傾向にあることが知られている(森,1980)。本帯にやや卓越して認めれた個体は、殻径が30μm以上の大型の個体である。続いて、海水～汽水生種のCocconeis scutellum は、塩分濃度が12パーミル以上の水域の海藻や海草(アマモなど)に付着生活する種群とされ、海水藻場指標種群(小杉,1988)と呼ばれている。他方、淡水生種で流水不定性種のNitzschia amphibiaは、淡水域でも水の出入りが少

なく淀んだ水域に生育していることが多く、Asai & Watanabe(1995)は、好汚濁性種としている。さらに、最も多産したStaurosira Fragilaria construens var.venterは、一般に貧栄養の水域に広く分布する(Patrick and Reimer、1975)とされる。また、Krammer and Lange-Bertalot(1990)によれば、やや貧栄養な水域でフミン酸濃度の低下した水域(湿原などで腐植を生成するような水域)に認められるとされる。このような珪藻化石群集は、海水の影響を受ける、沿岸部の湿地の環境を示唆する。

乳褐色粘性砂礫上部(試料4)～乳灰色粘性砂礫(試料1～3)は、淡水生種を主としており、海水生種および海水～汽水生種が認められるものの、すべて合わせても10%未満である。認められた淡水生種は、ほとんど湿地に生育する流水不定性および止水性種で占められており、上位では陸生珪藻が増加傾向にある。特徴的に認められた種で、前述していない種について述べると、淡水～汽水生種のFragilaria construens fo. subsalinaは、水中の塩類濃度が高まった水域に生育する種とされる(Krammer and Lange-Bertalot、1991)。本種は、Fragilaria brevistriata に伴って沿岸部の後背湿地や汽水域などで多産する場合が多い。さらに、陸生珪藻のHantzschia amphioxysは、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群(小杉,1986)である。特に、本種は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる(伊藤・堀内,1989;1991)。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占(70～80%以上)する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。以上の群集組成は、海水の影響を受ける沿岸部の湿地の環境を示唆する。

このようにE区の礫敷直下の基盤堆積物である砂礫層中の珪藻化石群集は沿岸部の湿地のような堆積環境を示す。ただし、層相からみた堆積環境とは矛盾しているように思われる。この点については、湿地の環境に砂礫が堆積した、あるいは砂礫形成後に湿地のような環境になり、礫の隙間を湿地の堆積物が充填したなどの可能性があるが詳細は地形発達を踏まえ慎重に評価する必要がある。

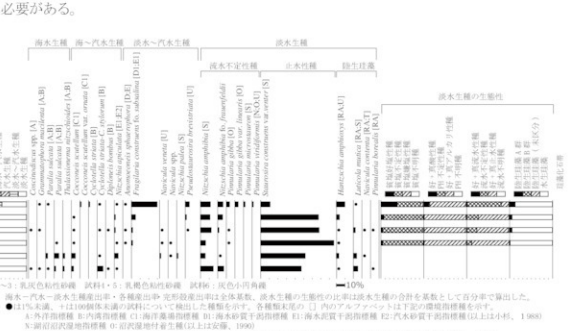
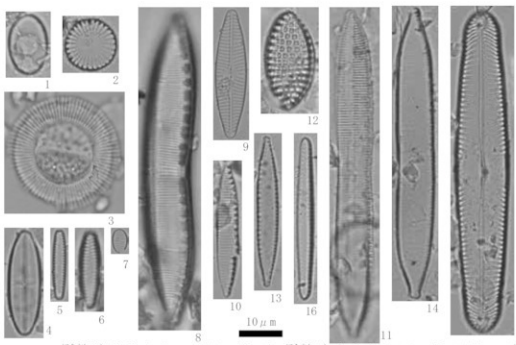


fig.88　E-1区の主要珪藻化石群集

・F地区

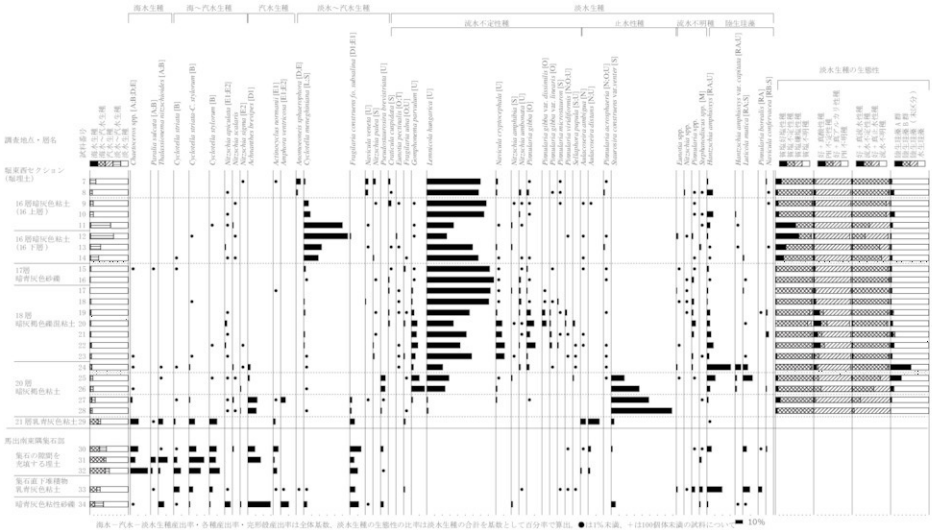
F地区では堀東西セクションの堀埋土、および馬出状郭南東隅集石部の基盤堆積物および集石の隙間を充填する埋土について分析を実施した(Fig89)。

馬出状郭南東隅集石部の集石の基盤堆積物の暗青灰色粘性砂礫(試料34)・乳青灰色粘土(試料33)、および集石埋土(試料32～30)の珪藻化石群集は、海水生種あるいは汽水生種といった海域に生育する種の産出率が陸域に生育する淡水生種を上回っている。海域に生育する種群は、内湾から沿岸部汽水域に生育する種が特徴的に認められる。淡水生種は主に湿地性の種群を主体に流水性種や陸生珪藻を伴う混合群集である。多産または特徴的に認められた種の生態性で前述していない種について述べると、まず、海水生種のChaetoceros spp.は、種は不明であるが、休眠胞子と呼ばれる。休眠胞子とは、生育する水域(この場合は海域)において、その時期の環境がその種群の生育に適さない環境に変化した場合に、環境の回復を待つ間にとるひとつの防御体制として殻の形態を変化させたものをいう。したがって、この休眠胞子が多く認められたことは、当時の水域の環境が不安定であったことを物語っている。不安定な環境要因とは、海水中の温度変化、陸域に近い海域の場合に淡水が流入することで塩分濃度が安定しないなどであるが、Chaetocerosの場合は塩分濃度の不安定さが第一要因と考えられる。同じく、海水生種のThalassionema nitzschioidesは、日本近海の沿岸・内湾に極めて普通にかつ冬春季に多量にあらわれるとされる(山路,1980)。沿岸部や内湾等に多く認められる。次に、海水～汽水生種として示したCyclotella striataおよびCyclotella stylorumは、一般に内湾奥部で浮遊生活する種とされ(Hustedt,1930)、内湾指標種群とも呼ばれる(小杉,1988)。本2種は、外洋においても認められるが、外洋では群集の中での占める割合が少ないが、内湾では優占種となる場合が多い。さらに、汽水生種のAchnanthes brevipesは、海水砂質干潟の指標種群とさ



1. *Chaetoceros* spp.(試料32) 2. *Cyclotella meneghiniana* Kuetzing(試料11) 3. *Cyclotella striata* (Kuetz.) Grunow(試料1) 4. *Lemnicola hungarica* (Grun.) Round & Basson(試料18) 5. *Pseudostaurosira brevistriata* (Grun.) Williams & Round(試料44) 6. *Fragilaria construens* fo. *subsalina* (Hust.) Hustedt(試料1) 7. *Staurosira construens* var.*venter* (Ehr.) Hamilton(試料50) 8. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow(試料1) 9. *Navicula cryptocephala* Kuetzing(試料50) 10. *Nitzschia amphibia* Grunow(試料1) 11. *Nitzschia apiculata* (Greg.) Grunow(試料11) 12. *Nitzschia granulata* Grunow(試料3) 13. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W.Smith(試料50) 14. *Nitzschia umbonata* (Ehr.) Lange-Bertalot(試料18) 15. *Pinnularia gibba* Ehrenberg(試料50) 16. *Thalassionema nitzschioides* (Grun.) Grunow(試料5)

挿図写真15　珪藻化石



海水～汽水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数，淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出。●11%未満，＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。各種属末尾の［］内のアルファベットは下記の環境指標種を示す。

A：外洋指標種 B：内湾指標種 C 1：海洋藻類指標種 C 2：汽水藻類指標種 D 1：海水砂質干潟指標種 D 2：汽水砂質干潟指標種 E 1：海水泥質干潟指標種 E 1：汽水砂質干潟指標種（以上は小杉，1988）
L：最下流性河川指標種 M：潮汐浮遊性種 N：潮汐沼沢湿地指標種 O：沼沢湿地付着生種（以上は宮脇，1990）
S：好汽水性種 U：広適応性種 T：好淡水性種（以上は Atsui and Watanabe, 1995） R 1：淡生殖巣（R A：A群，R B：B群，伊藤・堀内，1991）

fig.89　F－1区における主要珪藻化石群集の層位分布

れる(小杉,1988)。海水砂質干潟とは、塩分濃度が26パーミル以上の水域の砂底(砂の表面や砂粒間)であり、このような場所にはウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活するとされる。同じく、汽水生種のActinocyclus normaniiは、基本的に海域から汽水域に生育する種とされるが、内湾で特徴的に認められる場合が多い種類である。なお、本種の小型のタイプ(殻径が25～40μ)は、比較的塩分濃度が低い海域でよく繁殖することが知られている。このタイプをActinocyclus normanii f.sabsalsaとして分ける場合もあるが、本分析では承名変種に一括している。本分析試料から検出されたものは、大半が大型の個体である。以上のような多産種の生態性と他の希産種の産状を考え合わせると、堀の基盤堆積物形成時の環境は、湾奥の沿岸部汽水域(浅瀬)から干潟のような水域環境にあったと推定される。

堀東西セクションの21層の乳青灰色粘土(試料23)は、上記の集石の隙間を充填する埋土と同様な群集組成を示しており、同様の水域環境で形成された堆積物であると推定される。

20層下～中部(試料22・21)は、淡水生種を主とするものの、汽水生種も卓越し、低率に海水～汽水生種、海水生種および淡水～汽水生種を伴っている。このうち淡水生種は、ほとんど湿地に生育する止水性種で占められており、これら以外は、沿岸部の干潟に生育する種類で構成されていた。特徴的に認められた種の生態性で前述していない種について述べると、淡水生種で止水性種の Staurosira construens fo. venterは、一般に貧栄養～中栄養の水域に広く分布する(Patrick and Reimer,1975)とされる。また、Krammer and Lange-Bertalot(1990)によれば、やや貧栄養な水域でフミン酸濃度の低下した水域(湿原などで腐植を生成するような水域)に認められるとされる。以上の多産種の生態性と他の希産種の産状を踏まえると、20層下～中部形成時は、沿岸部の干潟に近接し、頻繁に海水の影響を受ける湿地のような堆積環境で形成された堆積物と推定される。年代的には遺物の出土状況から17世紀頃と推定される。

20層上部(試料20～19)は、淡水生種を主として、低率に淡水～汽水生種、極低率に汽水生種、海水～汽水生種および海水生種を伴っている。群集の組成は、淡水生あるいは淡水～汽水生の湿地性種で構成される。特徴的に認められた種の生態性で前述していない種について述べると、まず、Pseudostaurosira brevistriata は、富栄養水域の沿岸部に認められるとされる(Van Landingham,1970;田中・中島,1985)他、塩分濃度12～2パーミル程度の水域の泥底に付着生活する種群で淡水の影響により汽水化した塩性湿地に生活することが多く汽水泥質干潟指標種群とする研究者もある(小杉,1988)。さらに、淡水生で流水不定性種のGomphonema parvulumは、流水に対して不定なだけでなく、塩分濃度やpHに対しても不定であり、極めて高い適応能力を持つ種であり、さまざまな水域に認められる。そのため、Asai and Watanabe(1995)は、広域適応種としている。他方、流水不定性種のLemnicola hungaricaは、付着性で池や流れの弱い川などで浮葉植物の葉に付着して生育する場合が一般的である。中汚濁耐性種(小林ほか,2006)とされ、水田からも特徴的に出現する(田中,2002)ことから、概ね沼沢湿地性の種と考えられる。以上のような多産種の生態性と認められた群集の構成から、20層上部形成時の堀内は、塩類濃度の高い湿地のような環境下にあったと推定される。年代的には遺物の出土状況から17世紀頃と推定される。

20層最上部(試料24)、18層の暗灰褐色礫混粘土(試料23～17)、17層の暗青灰色砂礫(試料16～15)は、淡水生種を主として、低率に淡水～汽水生種、極々低率に汽水生種、海水～汽水生種および海水生種を伴う種群で構成される。群集の組成としては、流水不定性種の一種で占められ、他は低率～極低率に随伴する程度である。特徴的に認められた種は、淡水生種で流水

不定性種のLemnicola hungarica(前述)と、Gomphonema parvulum、Navicula cryptocephala等である。特徴的に認められた種の生態性で前述していない種について述べると、流水不定性種のNavicula cryptocephalaは、汎世界種(Lange-Bertalot,2001)とされ、湖沼～河川に生育する汎布種、広-低温性、貧～β中腐水性、貧～富栄養、電解質の少ない～やや多い水域に広く認められる。大塚(1998)によれば、水底の砂上に多く生育するとされる。以上のような多産種の生態性と認められた群集の構成から、20層最上部～ 17層形成時は、概ね沼沢湿地のような環境下にあったと推定される。年代的には遺物の出土状況から18世紀頃と推定される。

16層下部から上部(試料14～9)は、淡水生種あるいは淡水～汽水生種を主として、極低率に汽水生種あるいは海水～汽水生種を伴う種群で構成される。群集の組成としては、下位亜帯に引続き淡水生の流水不定性種に加えて、淡水～汽水生種の一種が特徴的に認められた。特徴的に認められた種は、淡水～汽水生種のCyclotella meneghiniana、淡水生種で流水不定性種のLemnicola hungarica(前述)等である。特徴的に認められた種の生態性で前述していない種について述べると、Pseudostaurosira brevistriata は、富栄養水域の沿岸部に認められるとされる(Van Landingham,1970；田中・中島,1985)他、塩分濃度12 ～ 2パーミル程度の水域の泥底に付着生活する種群で淡水の影響により汽水化した塩性湿地に生活することが多く汽水泥質干潟指標種群とする研究者もある(小杉,1988)。以上の多産種の生態性を中心に随伴する種群の産状から、沿岸部の塩類濃度の高い湿地のような堆積環境下にあったと推定される。なお、極低率に汽水生種あるいは海水～汽水生種が認められたことから、本地点は比較的、沿岸部で海域に近接するため、時折、台風などの際の高潮などによる海水の影響を受けた可能性が示唆される。年代的には遺物の出土状況から18世紀頃と推定される。

16層上部(試料２～１)は淡水生種を主として、低率に淡水～汽水生種、極低率に汽水生種あるいは海水～汽水生種を伴う種群で構成される。群集の組成としては、16層中・下部に引続き淡水生の流水不定性種に加えて、淡水～汽水生種の数種が特徴的に認められた。特徴的に認められた種は、淡水～汽水生種のAnomoeoneis sphaerophora、Navicula veneta、淡水生種で流水不定性種のLemnicola hungarica等である。特徴的に認められた種の生態性で前述していない種について述べると、淡水～汽水生種のAnomoeoneis sphaerophoraは、電解質の豊富な電気伝導度の高い水域に生育する種として知られる。次に、淡水～汽水生種のNavicula venetaは、広温性、電解質多い水域または汽水域、富栄養化の著しい水域で強腐水域まで耐えられるとされる。電解質の乏しい水域には生育できない(Lange-Bertalot,2001)とされる。電解質物質の豊富な水域から汽水域に普通にみられるほか、強度に富栄養化した時にもみられることから、汚濁に対する適応性が強い種とされている(Witkowski & Lange-Bertalot & Metzeltin,2000)。以上の多産種の生態性を中心に随伴する種群の産状から、16層上部堆積時は、沿岸部の塩類濃度の高い湿地のような環境下にあったと推定される。年代的には遺物出土状況から18世紀頃と推定される。

・Ⅰ地区

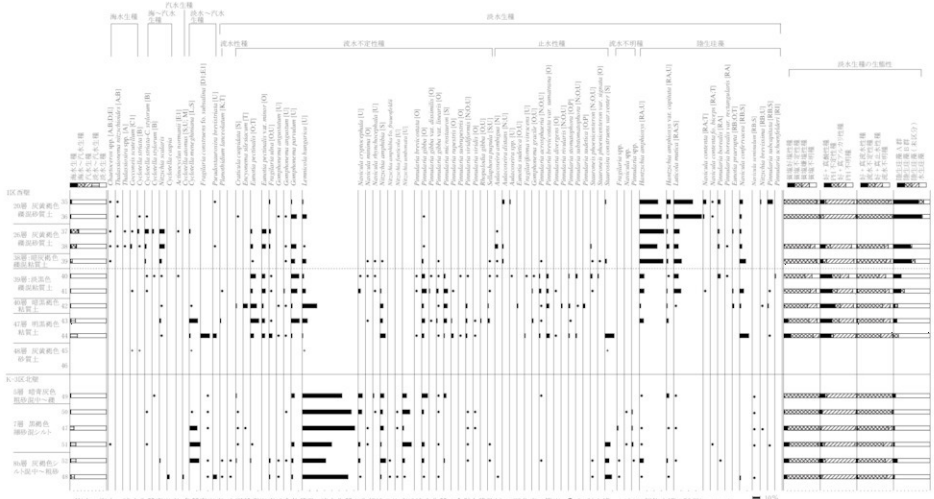
Ⅰ地区では、西壁の堀埋土について実施した(fig 90)。

堀埋土最下層の中粒～粗粒砂からなる48層(試料45 ～ 44)は化石数が極めて少なく、海水～汽水生種、汽水生種および淡水生種が僅かに産出しただけである。産出した化石の保存状態は、いずれの個体も溶解の痕跡が認められるなど、保存不良であり、ほとんどの種群が比較的、生育時の生産力が高く、殻が大きいものやシリカの沈着が厚いものであることから、選択的に残った個体と考えられる。また、海域に生育する種であったり、陸域に生育する種類である

ことから、産出個体は堆積時に生育した種群だけではなく、二次化石が多く含まれていると考えられる。おそらく、実際に堆積時の群集を構成する種群のうちの大半は、完全に分解消失したものと考えられる。

城内側石崩落石とされる47層の明黒褐色粘質土（試料44 ～ 43）と堀埋土下層40層（暗黒褐色粘質土：試料42）は、平均して比較的多くの珪藻化石が含まれており、いずれの試料も200個体以上が産出した。産出した分類群は、淡水生種を主として、低率の淡水～汽水生種、極低率に海水～汽水生種および汽水生種を伴う種群で構成される。主体をなす淡水生種の組成は、前述の他地点とは異なり、特に卓越した種が認められず、産出率が多くの種に分散している。以上のような産状を総合的に解釈すると、47層・40層の傾向は特に流水に対して、流水不定性種が最優占するものの、流水性種、止水性種、流水不明種および陸生珪藻を伴うことから、分類群の生態性にはばらつきがあることがわかる。このような特徴を示す群集は、明らかに混合群集である。淡水生種群の混合群集とは、基本的に生育環境を異にする種群で構成され、また、検出種数が多い群集とされ（堆積物中からの産出率は低い割に構成種数は多い）、流れ込み等による二次化石種群を多く含む群集とされる（堀内ほか、1996）。混合群集は、一般には低地部の氾濫堆積物などの一過性堆積物で認められる場合が多いが、この場合は堆積物中の絶対量が少ない傾向にある。他方、一過性ではなく定常的に堆積物が供給されるような場所の場合、例えば河口付近（デルタの前縁）や後背湿地等において同様な環境が長期間続いた場合も混合群集が認められるが、この場合は長い間に徐々に堆積して行く中で珪藻の生産が繰り返し行われること、堆積物の表層部付近での自然の撹乱が行われること、多少の流れ込みもあることなどから絶対数はやや多い傾向にある。いずれにしても、混合群集の場合は珪藻の群集のみならず堆積層の観察も含めた慎重な解析が必要となる。今回の場合、堆積物中の絶対量自体は多く、河口付近（デルタの前縁）や沿岸部の湿地等の混合群集に対応する可能性がある。したがって、47・40層については塩類濃度の高い湿地のような水域環境下にあった可能性が考えられる。年代的には出土遺物から18世紀と推定される。ただし、47層については石垣の崩落石を含む層準に相当することから、堀斜面や裏込堆積物由来の珪藻化石が混入している可能性もある。

堀埋土中層の淡黒色礫混粘質土とされる39層（試料41・40）、暗灰褐色礫混粘質土とされる38層（試料39）、埋土上層の灰黄褐色礫混砂質土される26層（試料38・37）、灰黄褐色礫混砂質土とされる20層（試料36・35）は、断面写真をみると、39層は淘汰不良の礫・偽礫が混じり、城内側堀斜面からの崩積もしくは人為的営力により形成された堆積物のようにみえる。そうだとすると、これらの層準の珪藻化石群集は本地点に堆積する以前の堆積環境を反映していることになる。39層ではこれら26層～ 20層では絶対量としては多いとは言えないものの、100個体以上が検出された。検出された分類群は、淡水生種を主として、低率に海水～汽水生種（試料3・4のみ）、極低率に淡水～汽水生種、汽水生種および海水生種を伴う種群で構成される。淡水生種の群集の構成は、陸生珪藻が優占しており、その他は、保存不良の流水不定性種と不明種が低率に認められる。また、26層では海水～汽水生種が特徴的に認められた。上記した堆積物の成因を踏まえると、堆積当時の堀内の環境を反映しておらず、供給されている堆積物の堆積環境を反映しているものと思われる。群集組成からは、好気的環境下で形成された堆積物や堀埋土などが利用されている可能性がある。



海水～汽水～淡水生種産出率・各種産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出 ●≧1%未満、+は100個体未満の試料について
検出、白種類を示す。各種類末尾の[]内のアルファベットは下記の環境指標種を示す。
A:外洋指標種 B:内湾指標種 C1:海岸藻場指標種 C2:汽水藻場指標種 D1:海水砂質干潟指標種 D2:汽水砂質干潟指標種 E1:海水泥質干潟指標種(以上は小杉, 1988)
K:中～下流性河川指標種 L:陸下流性河川指標種 M:湖沼浮遊性種 N:湖沼沿岸藻地指標種 O:沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)
S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe,1995) H:陸生珪藻(RAA,RIA,RB, 伊藤・堀内, 1991)

fig.90　Ⅰ区・K-3区における主要珪藻化石群集

K−3地区

K−3地区では堀埋土について実施した(fig90)。堀埋土5層・7層・8b層(試料47～52)の珪藻化石群集は、いずれも近似している。産出した分類群は、淡水生種を主として、低率に淡水～汽水生種、極低率に汽水生種あるいは海水～汽水生種を伴う種群で構成される。群集の組成としては、淡水生の流水不定性種(Lemnicola hungarica)に加えて、淡水～汽水生種の一種(Cyclotella meneghiniana)が特徴的に認められた。以上の産状を考慮すると、本地点の堆積時は、概ね沿岸部の後背湿地の環境下にあったものと推定される。なお、極低率に汽水生種あるいは海水～汽水生種が認められたことからすると、7層・8b層堆積時には、若干、海水の影響を受けていた可能性が考えられる。年代は、出土遺物から8b層が18世紀以前、7層・5層が18世紀後半と推定される。

2．種実からみた植物利用

(1)試料・方法

種実・昆虫同定試料は、堀埋土の水洗・抽出済み試料で、種実85点(試料1・2・5～20・22～88)である。

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本と石川(1994)、中山ほか(2000)、清水ほか(2012)等を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。また、主な分類群を対象に、デジタルノギスを用いて種実遺体の大きさを計測した結果を一覧表に示す。

(2)結果

出土種実の同定結果を表24に示す。全85試料を通じて、裸子植物1分類群(針葉樹のマツ属複維管束亜属)4個、被子植物25分類群(広葉樹のナラガシワ、マテバシイ、アンズ、ウメ、スモモ、モモ、ノイバラ節、ナツメ、センダン、カキノキ、草本のイネ、イネ科、ナデシコ科、ソバ、ヒユ属、カタバミ属、カボチャ、トウガン、ヘチマ、ヒョウタン類、雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、モモルディカメロン型、アカネ科、ナス)94個、計98個の種実が同定された。種実以外では、炭化材が1点(試料番号54)、葉の可能性がある不明植物が1点(試料番号23)、樹皮の可能性がある不明植物が1点(試料番号68)、昆虫が1点(試料番号35)の、計4点が確認された。

種実遺体には、栽培種のアンズ、ウメ、スモモ、モモ、ナツメ、カキノキ、イネ、ソバ、カボチャ、トウガン、ヘチマ、ヒョウタン類、メロン類(雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、モモルディカメロン型)、ナスが確認され、試料全体の8割を栽培種が占める組成を示した。これらは周辺で栽培されていたか、近辺より持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆され、遺構内への投棄または埋納などの人為的行為に由来する可能性がある。

栽培種を除いた分類群は、木本は、常緑高木のマツ属複維管束亜属、マテバシイ、落葉高木のナラガシワ、センダン、常緑または落葉低木のノイバラ節が確認された。当時の堀周辺の森林や、その林縁等の明るく開けた場所に生育していたと考えられる。草本は、イネ科、ナデシコ科、ヒユ属、カタバミ属、アカネ科などの人里植物を主体とし、湿った場所にもやや乾いた場所にも生育する中生植物が確認された。当時の調査区周辺域の明るく開けた草地環境に生育していたと考えられる。

表24　種実同定結果

出土地				同定結果							計測値(mm)		
番号	分類番号	調査区	出土遺構	状態	分類群	部位	状態	個数	校倉	備考	長さ	幅	厚さ
1	R-027	F		炭	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	－	球果幅7.9mm	36.6	25.9	－
2	R-031(図1)	F	石組護上層	炭	ヒロハノキ	核	破片	1	－	1は平り,殻大切,種子の切ち:20.6×12.7mm	20.6	20.6	8.8 ×
3	R-131-3	F		炭	ウメ	核	完形	1	－		19.3	13.3	11.2
4	R-194	F	第1層(石組上)	炭	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	－	表面摩耗	39.4	21.0	－
5	R-214	F		炭	スモモ	核	完形	1	－		12.8	8.6	6.7
6	R-029	1		炭	モモ	核	破片	1	－	表面摩耗	23.6	17.2	13.8 ×
7	R-130	1		炭	モモ	核	破片	1	－	種子の切ち:12.9×8.2mm	18.9	15.7 ×	6.6 ×
10	R-134	1		炭	ヒロクチン類	種子	完形	1	－		13.8	7.1	1.9
11	R-136	1		炭	カボチャ	種子	完形	1	－	表面を残存	14.5	8.1	2.1
12	R-144-1	1	第中層	炭	センダン	核	破片	1	－		13.4	10.6	－
13	R-144-2	1	第中層	炭	ノブドウ属	殻果	完形	1	－	内面に果実確認	5.3	4.8	－
14	R-209	1	第上層	炭	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	－	表面摩耗,基部欠損	52.2 ×	30.4 ×	－
15	R-245-1	1	第上層	炭	マツ属複維管束亜属	球果	完形	1	－	表面摩耗,基部欠損,食痕の可能性	39.6 ×	30.1 ×	－
16	R-245-2	1	第上層	炭	スモモ	核	半分	1	－	種子の切ち:8.2×6.6mm	10.7	9.0	2.9 ×
17	R-254-1	1	第中層	炭	モモ	核	破片	1	－	1は半り,種子の切ち:17.7×10.6mm	27.7	18.9 ×	7.0 ×
18	R-254-2	1	第中層	炭	アンズ	核	破片	1	－	1は半り,種子の切ち:15.5×12.2mm	19.9	18.1	6.9 ×
19	R-009	K		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	10.5 ×	4.9 ×	1.0
20	R-027	K		炭	ナツメ	核	破片	1	－	表面に1か所開いている	16.9	5.6	3.5 ×
20	R-027	K		炭	ナツメ	核	破片	1	－	表面に1か所開いている	10.5 ×	5.6 ×	－
22	R-003-1	K-1	SM1001上層	炭	カキノキ	種子	完形	1	－	胞面:裂開	24.4	11.9	4.3
23	R-003-2	K-1		炭	桃?	核	破片	1	－	16.7×16.8×13.6mmの三角形,側面で表面光沢あり	14.4 ×	16.7 ×	6.3 ×
24	R-003-3	K-1		炭	ヘチマ	種子	破片	1	－	基部	6.6 ×	8.7 ×	0.9
25	R-003-4	K-1		炭	ヘチマ	種子	完形	1	－	尖端不良	13.5 ×	6.7	1.4
26	R-003-5	K-1		炭	マクワシロウリ型	種子	破片	1	－	側面欠損	7.4	3.8 ×	1.6
27	R-003-6	K-1		炭	ナツメ	核	完形	1	－		23.7	7.9	6.9
28	R-003-7	K-1		炭	キセルヴィタカロン型	種子	完形	1	－		8.6	3.9	0.8
29	R-003-8	K-1		炭	カボチャ	種子	破片	1	－		7.3 ×	－	1.3
30	R-003-9	K-1		炭	イネ	穀	完形	1	－		7.1	3.2	1.5
31	R-003-10	K-1		炭	ひゲガン	種子	完形	1	－		10.5	6.7	2.1
32	R-011-2	K-1		炭	ひゲガン	種子	破片	1	－	基部	7.2 ×	7.4 ×	1.5 ×
33	R-011-3	K-1		炭	キセルヴィタカロン型	種子	破片	1	－		8.4	3.4	1.5
34	R-011-4	K-1		炭	雑穀ホロン型	種子	破片	1	－		5.3	2.8	1.6
35	R-011-6	K-1		炭	ナンテンコ科	種子	完形	1	－		－	－	－
35	R-011-6	K-1		炭	ヒロ属	種子	破片	2	－		－	－	－
35	R-011-6	K-1		炭	カラハ属	種子	破片	2	－		－	－	－
35	R-011-6	K-1		炭	鬼灯	種子	破片	1	－		－	－	－
36	R-011-7	K-1		炭	ウメ	核	破片	3	－	接合し1個体,種子の切ち:14.8×10.2mm	20.1 ×	11.8 ×	7.5 ×
36	R-011-7	K-1		炭	ヒロ属	種子	破片	1	－		－	－	－
37	R-002-1	K-2		炭	ひゲガン	種子	完形	1	－		11.8	7.1	2.4
38	R-002-2	K-2		炭	イネ	穀	破片	1	－	基部	6.0	－	－
38	R-002-2	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	13.4	6.6 ×	1.2 ×
39	R-002-3	K-2		炭	ひゲガン	種子	破片	1	－	尖端不良	10.2	5.8 ×	1.3 ×
39	R-002-4	K-2		炭	ナラガシワ	果実	破片	1	－	基部重点,表皮	－	16.7 ×	16
41	R-002-5	K-2	第1層	炭	マクワシロウリ型・キセルヴィタカロン型	種子	破片	1	－	頂部欠損	5.6 ×	4.1	1.2
42	R-002-6	K-2		炭	ソバ	果実	破片	1	－	1/3片	5.9	3.2	－
42	R-002-6	K-2		炭	ヒロ属	種子	破片	1	－		－	－	－
43	R-002-7	K-2		炭	イネ	穀	破片	1	－		5.3 ×	2.1 ×	－
43	R-002-7	K-2		炭	イネ	穀	破片	1	－		5.7 ×	3.1 ×	－
44	R-002-10	K-2		炭	イネ	穀	破片	1	－	基部	5.5	2.5 ×	－
45	R-002-11	K-2		炭	ヒロ属	種子	破片	1	－		－	－	－
46	R-002-12	K-2		炭	イネ	穀	破片	1	－		7.2	2.1 ×	1.8
47	R-002-14	K-2		炭	イネ科	果実	破片	1	－		2.8	0.9	0.9
48	R-003-1	K-2		炭	モモ	核	破片	1	－	表面摩耗,基部欠損	16.6 ×	13.6 ×	12.3
49	R-003-2	K-2		炭	ひゲガン	種子	破片	1	－	表面を残存	11.3	7.4	2.0
50	R-003-3	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存,頂部欠損	13.7 ×	7.3	0.8
51	R-004-2	K-2		炭	ヘチマ	種子	破片	1	－		12.2	7.3	1.2
52	R-004-3	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	基部欠損	8.5 ×	6.6 ×	1.1 ×
53	R-004-4	K-2		炭	キセルヴィタカロン型	種子	破片	1	－		8.4	3.4 ×	－
54	R-004-5	K-2		炭	ひゲガン	種子	破片	1	－	基部	4.4 ×	4.9 ×	－
55	R-005-3	K-2		炭	閉殻材		破片	1	－		7.7	－	－
55	R-005-1	K-2		炭	ひゲガン	種子	半分	2	1	下に接合,1個体	10.2	6.5	0.8
55	R-005-1	K-2		炭	ひゲガン	種子	半分	2	2	上に接合,1個体	10.2	6.5	0.7
56	R-005-2	K-2		炭	ナス	種子	破片	2	1		2.7	3.3	0.8
56	R-005-2	K-2		炭	ナス	種子	破片	2	2		2.6	3.8	0.3 ×
57	R-005-3	K-2		炭	アカネ科	核	破片	1	－	ヤエムグラ属?	－	－	－
58	R-005-6	K-2		炭	雑穀ホロン型	種子	破片	1	－		5.6	2.7	0.9
59	R-009-1	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	13.0	7.6	1.0
60	R-009-2	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	14.5	7.7	0.8
61	R-009-3	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存,頂部欠損	9.9 ×	6.5 ×	1.8
62	R-009-4	K-2		炭	ひゲガン	種子	破片	1	－	頂部欠損	7.5 ×	5.2 ×	1.8
63	R-009-5	K-2		炭	ヒロクチン類	種子	破片	1	－	基部	6.0 ×	3.8 ×	2.3
64	R-009-7	K-2		炭	マクワシロウリ型	種子	破片	1	－		6.8	2.9	1.2
65	R-009-8	K-2		炭	マクワシロウリ型	種子	破片	1	－	頂部わずかに欠損	7.1 ×	3.5	0.8 ×
66	R-009-10	K-2		炭	ナス	種子	破片	1	－		2.9	3.6 ×	0.4 ×
67	R-017-1	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	12.9	7.1	1.2
68	R-017-2	K-2		炭	石榴	胞嚢?	破片	1	－		7.2	－	－
69	R-021	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	12.4	8.0	1.1
70	R-023	K-2		炭	マクワシロウリ型	種子	破片	1	－	頂部わずかに欠損	6.9 ×	3.6	1.1
71	R-029	K-2		炭	ひゲガン	種子	破片	1	－	表面を残存	11.0	7.5	2.2
72	R-105	K-2		炭	ヘチマ	種子	破片	1	－	頂部欠損	10.9 ×	7.3 ×	2.3
73	R-109-1	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	14.5	8.2	1.2
74	R-109-2	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存,基部欠損	10.6 ×	9.1 ×	1.5
75	R-110-1	K-2		炭	マタバシイ	果実	破片	1	－	基部重点:18.0mm	23.8	10.9	－
76	R-110-2	K-2		炭	ウメ	核	破片	2	1	基部	7.9 ×	12.7 ×	8.7 ×
76	R-110-2	K-2		炭	ウメ	核	破片	2	2		6.0 ×	－	－
77	R-110-3	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	側頂欠損	13.7	6.7 ×	1.6
78	R-110-4	K-2		炭	ヘチマ	種子	破片	1	－	表面を残存	12.6	7.8	1.1
79	R-110-5	K-2		炭	ひゲガン近似種	種子	破片	1	－		11.3	7.1	1.9
80	R-110-6	K-2		炭	ひゲガン	種子	破片	1	－	表面を残存	11.4	6.4	2.0
81	R-112	K-2		炭	ウメ	核	破片	1	－	半面摩耗	16.4	12.5 ×	9.9
82	R-113-1	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	15.0	8.2	1.3
83	R-113-2	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	13.8	8.1	1.7
84	R-113-3	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	15.4	8.1	2.6
85	R-113-4	K-2		炭	ひゲガン近似種	種子	破片	1	－		12.2	8.2	2.2
86	R-113-5	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	16.5	7.5	2.4
87	R-113-6	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－		15.9	8.2	1.3
88	R-113-7	K-2		炭	カボチャ	種子	破片	1	－	表面を残存	12.6	8.5	1.9

注)計測はデジタルノギスを使用。

3．昆虫同定

（1）試料

昆虫同定は、F区堀埋土から出土した２点（台帳番号R-131-1、R-131-3）とK－１区堀埋土から出土した１点（台帳番号R-0093）について実施する。

（2）方法

試料を双眼実体顕微鏡やルーペを用いて同定を実施した。同定にあたっては、東京農業大学松本浩一氏の協力を得た。

（3）結果

F区堀埋土のR-131－１はハエ目の蛹、R-131-2はドウガネブイブイ(Anomala cuprea Hope)の左上翅に同定された。ドウガネブイブイはコガネムシ科で、日本全土の平地から低山地に分布する。幼虫は土中でサツマイモなどの根茎やスギ・ヒノキなどの幼苗の根を食害し、成虫は各種広葉樹の葉を摂食するいわゆる「害虫」である。K－１区堀埋土のR-0093は蛹の一部の可能性があるが種類がはっきりしなかった。

引用文献

安藤一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35-47.

Cholnoky, B. J., 1968, Die Okolgie der Diatomeen in Binnen-Gewassern. Lehre.

藤下典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究.古文化財編集委員会編,同朋舎,638-654.

堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫，1996，珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－．日本文化財科学会，第13回大会研究発表要旨集，62.

Hustedt, F., 1930, Bacillariophyta (Diatomeae). In Pascher, Die Susswasser Flora Mitteleuropas, Part 10, 466p. Jena, G. Fischer.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊藤良永・堀内誠示，1989，古環境解析からみた陸生珪藻の検討　――陸生珪藻の細分――.日本珪藻学会第10回大会講演要旨集，17.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌,6, 23-44.

小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五,2006,小林弘珪藻図鑑.第1巻,雄内田老鶴圃,531p.

小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－. 植生史研究, 1, 9-44.

小杉正人,1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27,(1), 1-20

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1) : 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

Patrick, R. and Reimer, C. W., 1966, The diatoms of the United States exclusive of Alaska and Hawaii. Vol. 1, 688p. Monographs of Acad. Nat. Sci. Philadelphia 13.

Lange-Bertalot, H. 2001. Navicula sensu stricto. 10 Genera separated from Navicula sensu lato.

Frustulia. Diatoms of Europe: diatoms of the European inland waters and comparable habitats. Vol. 2 pp. 1-526.: A.R.G. Gantner Verlag. K.G..

Lowe, R. L., 1974, Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water daitoms. In Environmental Monitaing Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center office of Res. Develop. U. S. Environ. Protect. Agency. cincinati. 1-344.

大塚泰介. 1998. 河川の一形態単位内における付着藻類群落、特に珪藻群落の生息場所による違い. 陸水学雑誌 59: 311-328.

Patrick, R. and Reimer, C. W., 1975, The diatoms of the United States exclusive of Alaska and Hawaii. Vol. 2, Part 1, 213p. Monographs of Acad.Nat. Sci. Philadelphia 13.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－. 誠文堂新光社,272p.

田中正明. 2002. 日本淡水産動植物プランクトン図鑑. 584 pp. 名古屋大学出版会, 名古屋

田中宏之・中島啓治,1985, 群馬県老神・奥平・梨木・猿・赤久縄温泉及び福島県元温泉小屋温泉のケイソウ. 群馬県立博物館紀要, 1985(6), 1-22.

Tanimura, Y., 1981, Late Quaternary Diatoms of the Sea of Japan, Tohoku Univ. Sci. Rep. 2nd ser. (Geol.), 51, 1-36.

Van Landingham, S.L., 1970, Origin of an early non-Marine Diatomaceae Deposit in Broad water County, Montana, U. S. A. Diatomaceae II Nova Hedwigia Heft 31, p. 449-473.

挿図写真16　種実遺体・昆虫遺体

種実遺体

1.アンズ 核(試料18)　2.ウメ 核(試料5)　3.ウメ 核(試料81)　4.スモモ 核(試料7)　5.スモモ 核(試料16)　6.モモ 核(試料8)
7.モモ 核(試料2)　8.モモ 核(試料17)　9.ナツメ 核(試料27)　10.カキノキ 種子(試料22)　11.イネ 穎(試料30)
12.イネ 穎(試料38)　13.イネ 穎(試料43)　14.イネ 穎(試料44)　15.イネ 穎(試料46)　16.ソバ 果実(試料42)　17.ナス 種子(試料45)
18.ナス 種子(試料56)　19.ナス 種子(試料66)　20.カボチャ 種子(試料11)　21.カボチャ 種子(試料59)　22.カボチャ 種子(試料60)
23.カボチャ 種子(試料67)　24.カボチャ 種子(試料69)　25.カボチャ 種子(試料73)　26.カボチャ 種子(試料82)
27.カボチャ 種子(試料83)　28.カボチャ 種子(試料84)　29.カボチャ 種子(試料86)　30.カボチャ 種子(試料87)
31.カボチャ 種子(試料88)　32.トウガン 種子(試料49)　33.トウガン 種子(試料31)　34.トウガン 種子(試料37)
35.トウガン 種子(試料55)　36.トウガン 種子(試料80)　37.トウガン近似種 種子(試料79)　38.トウガン近似種 種子(試料85)
39.ヘチマ 種子(試料51)　40.ヘチマ 種子(試料72)　41.ヘチマ 種子(試料78)　42.ヒョウタン類 種子(試料10)
43.モモルディカメロン型 種子(試料28)　44.モモルディカメロン型 種子(試料33)　45.マクワ・シロウリ型 種子(試料64)
46.雑草メロン型 種子(試料34)　47.マツ属複維管束亜属 球果(試料1)　48.ナラガシワ 果実(試料40)　49.マテバシイ 果実(試料75)
50.ノイバラ節 偽果(試料13)　51.ノイバラ節 果実(試料13)　52.センダン 核(試料12)　53.イネ科 果実(試料47)
54.ナデシコ科 種子(試料35)　55.カタバミ属 種子(試料35)　56.ヒユ属 種子(試料36)　57.アカネ科 核(試料57)

昆虫遺体

58.ドウガネブイブイ　左上翅(試料4)　59.ハエ目 蛹(試料3)

第４章　まとめ

（１）花熊城と兵庫城

これまで兵庫城に関する研究は、江戸時代に描かれた絵図資料や文献史料としては、江戸時代に書かれた戦記物で菊屋新右衛門六十有六清書之奥書がある通称『花熊落城記』に出てくる内容が最もよく知られている。土地に残された伝記や古老の話などから作成されたようであり、築城後150年以上たった後に作成された史料であることから、伝聞など地域に残されたものをもとに作成されたと推測される。しかしながら、戦記物にありがちな勝者に都合の良い解釈ではなく、兵庫の人が著した郷土資料として一定の評価される記録内容であり、花熊城での戦の状況やその後の戦後処理に至るまでを知る唯一の資料といえる。その内容をすべて信用して考察することはできないが、今回の調査によって明らかになったことと、『花熊落城記』の記述に見られる共通点について以下で検証する。

花熊城の落城と兵庫城の構築時期については、「天正八年庚辰夜亥刻に落城す明る九年の正月より池田勝入此城を割給ふ兵庫に屋鋪を□成此大名を此所へ引給ふ勝入殿兵庫に二年ほど御座候而残りの石は大坂の御城へも御取りなされ候」の内容から、花熊城は天正８年に落城し、翌年の天正９年正月から兵庫城が築城されたことが指摘されてきた。この件については、発掘調査の結果、最も兵庫城築城当初に近い形状をとどめていると考えられるＦ－１区東辺城外側石垣の裏込から出土する遺物には、景徳鎮窯や漳州窯などの中国輸入磁器や備前焼など16世紀末のものが中心であることが判明しており、天正９(1581)年の築城時期と一致することが判明した。

また、転用されていた一石五輪塔に刻まれていた年号に関しても「文亀四年月日」(1504年)であり、古い要素の中世墓を解体して石垣に利用していることからも天正期に近い時期に構築された石垣といえる。

次に花熊城の築城に関して、「永禄十丁卯年織田信長公御沙汰として津の国矢田部郡花熊に城を築き給ふ半年斗あって其の後荒木摂津守村重に仰付られ家臣野口與一兵衛奉って是を奉行す大工ならびに石等は近江の国より来る又近辺の自然石をよせ一ヶ年の内に出来す」との記述がある。この記述は花熊城の築城についての記述であるため、兵庫城に当てはめることにはやや無理があるかもしれないが、兵庫城に使用されている石垣も川原などでみられる角の取れた丸みを帯びた自然石が中心であり、石造品に対する加工痕や矢穴はあるが、石垣構築のため石垣の部材としての加工や矢穴は東辺城外側石垣には見られなかった。この東辺城外側石垣に使用されている石垣の石材は、六甲花崗岩よりも花崗閃緑岩が多く用いられている。花崗閃緑岩は、六甲山系に産出する石材であり、産出地として布引や当地域の北方にある鳥原でも産出することが指摘されており、六甲山麓に頻発する土石流の中からは角の取れた丸みを帯びた花崗閃緑岩は容易く手に入ったものと考えられる。

『花熊落城記』以外から、花熊城と兵庫城の関連性が見いだされるものとしては、神戸高速腺建設に伴う工事の際に、花熊城推定地において大量の石造品が掘り出されており、花熊城に使用された石垣の一部ではないかと考えられているが、発掘調査を行ったわけではなく、単に中世墓が掘り出されただけかもしれない。しかしながら、短期間のうちに築城しなければならない状況は花熊城にも、兵庫城にも当てはまることであり、容易く手に入る中世墓が城の石垣に転用されたことは大いに可能性としてある。今回の調査では、石垣の解体に伴う部分のみではあるが、取り上げた転用石材の総数が572点もあり、総点数を推測することはできないが、中世

墓地を複数取り壊して石垣の構築に利用したことが窺える。

神戸市教育委員会が調査した花隈城第３次調査において、今回出土した瓦と同文の瓦が出土している。今回の調査で出土した瓦は、第８遺構面の遺構から出土しており、直接は城の石垣などからの出土ではないが、生活面としては兵庫城築城時期と同一面と考えられる。花熊城第３次調査の瓦についても、城と関連する出土資料ではないが、近接するとはいえ離れた場所から同文の瓦が出土することは、ものが移動した事を考えられる事例といえよう。

次に花熊城と兵庫城の立地条件の違いを比較すると、花熊城はその地名となっている花熊（鼻隈・花隈）は六甲山から派生した一尾根が海に突き出した突端に立地しており、山城とはいえないが西国街道を意識した高い場所に築城された城である。これに対し、兵庫城は海に隣接しており、今回の調査で、堀底は標高が東京平均海水面（T.P.）よりも低い堀底であった。堀は浚渫が丁寧に行われていたようであり、比較的古い要素を持った馬出状郭の入隅部の底にたまっていた粘土を珪藻分析した結果、海水性の珪藻が多く検出された。つまり、馬出状郭が増設もしくは改修された時には海の影響を受けていたことがわかっており、海を意識した海城としての機能が重視された事がうかがわれる。これまでも、花熊城と港湾都市の兵庫津は両者が併存することで成り立っていたことが考えられるが、兵庫城は兵庫津という港湾都市の中に城を移して一体運営を計ったものと考えられる。

土壌汚染の除去作業のため、調査をして石垣の解体を一部行った。その結果、石垣の下部構造として、胴木がない事が確認された。離れた４地区で見つかった石垣全てに胴木がないので、一辺の石垣の事ではなかったようである。このことは石垣の最下段の基礎となる土壌が玉砂利であるため、重量がある石垣を構築しても力を分散できる地質的な特徴を利用し、胴木を用いることなく構築することができたものと考えられる。胴木が必要となれば、既存の家屋、寺院などを打ち壊した際に柱などの部材が手に入ったものと考えられるが、緊急性もあり地質を考慮して無駄を省いた結果ではないかと考えられる。

（２）兵庫城の変遷

F－１区の調査では、石垣から石組溝への造り替えの過程を追うことができた。調査の結果からそれぞれの石垣の構築順序を整理したい。

築造年代の決め手となる裏込め出土の遺物年代から、東辺城外側石垣が築造当初の石垣と考えられる。このことは、使用石材に矢穴などの加工痕が見受けられないことからも他の石垣よりも古い要素を持ったものである。時期的には第1期として16世紀末である。この時期は、池田恒興が花熊城の戦果により、兵庫津に城を築いた時期と一致する。入隅部の粘土の珪藻分析結果から、この時期の堀には海水の影響を受けた泥土の堆積していることが判明しており、海水が堀に流入していた可能性もある。

次に、第２期として南辺石垣の裏込めのみが残っていたものと、入隅を有する馬出状郭の改築した時期が考えられる。この時期に慶長伏見地震より兵庫津の町もかなりの被害を受けたことが、慶長７年の朝鮮使節の慶七松の記録からもわかっている。兵庫城の石垣にも被害が考えられる。I区で検出した城外側石垣については、崩壊理由を慶長伏見地震と特定はできないが、自然災害などの緊急措置による無謀な修復が行われたものと考えられる。E区の石垣の構築年代もこの時期が考えられるため、もともとはD字形の主郭を一部切り離すように堀を増設し、E区の石垣部分を増築した可能性がある。元和３（1617）年以降は尼崎藩の飛び地として、兵庫陣屋のもと、堀の浚渫が丁寧に行われていたようであり、17世紀初頭から18世紀は元禄絵

図に見られる姿であったものと考えられる。

第3期は、明和6（1769）年の上知令以降に町人請により堀の埋め立てが行われ、粘土の堆積過程から、南辺石組溝の南側と東辺石組溝の東側を先に構築し、その後南辺石組溝の北側と東辺石組溝の西側を取り付けたことが最下段を粘土上に据え付けていることで判明した。

これまでの兵庫城の姿は、元禄期以降の絵図からの考察が主であったが、今回の発掘調査の結果から、築造当初の石垣が発見され、さらに改修が行われたことにより元禄絵図に残された城郭へと変化した可能性がある。

第1期
天正9（1581）年
池田恒興が築城。花熊城を解体し、一部の部材を兵庫城で使用した記録（『花熊落城記』1732年）
天正11（1583）年
池田恒興は美濃へ転封。兵庫、尼崎は三好（豊臣）秀次に与えられる。
天正13（1585）年
羽柴秀吉の直轄領となる。片桐且元が代官となり、「片桐陣屋」と呼ばれる。

第2期
慶長元（1596）年
慶長伏見地震。兵庫津も被害を受ける。
元和3（1617）年
尼崎藩領となる。「兵庫陣屋」が置かれ、奉行の管理のもと堀の浚渫も行われる。
元禄9（1696）年
『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』が作成され、「兵庫陣屋」は「御屋敷」と表記。

第3期
明和6（1769）年
上知令により幕府直轄領となる。「勤番所」が設置され、町人請による堀の埋め立て。

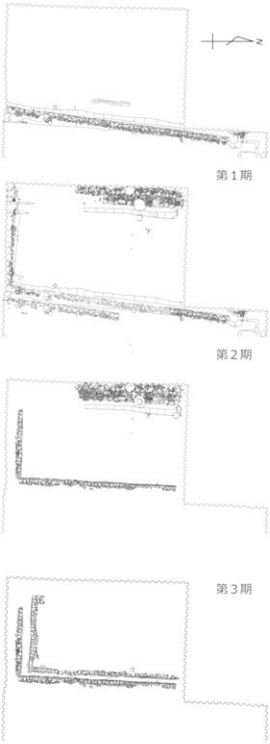
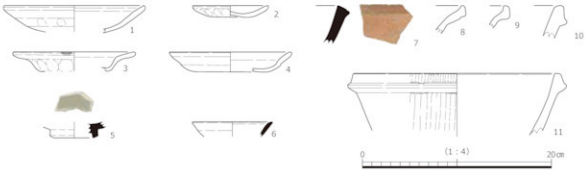
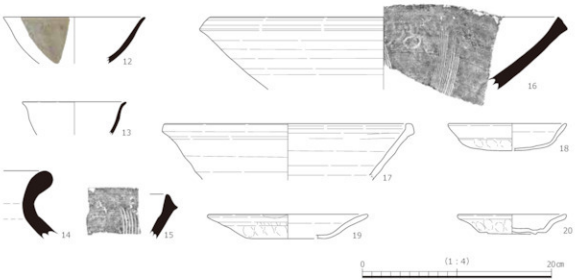


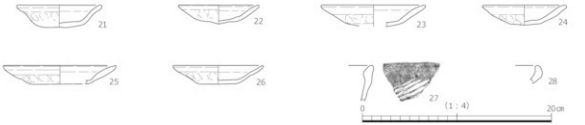
Fig.91 F-1区　石垣から石組溝への変遷



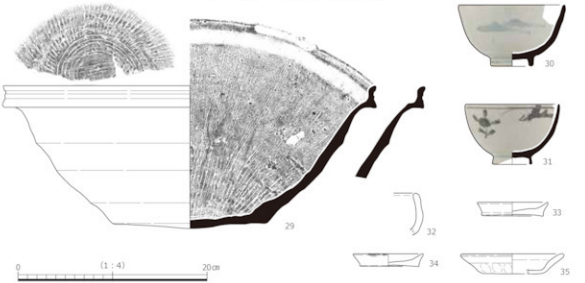
1.　A区　ＳＤ82001出土陶磁器・土器



2.　A区　ＳＫ82004出土陶磁器・土器

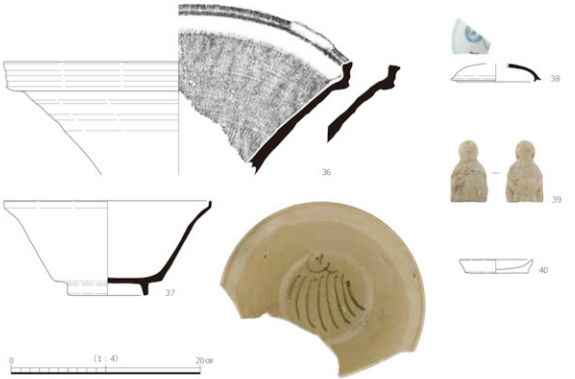


3.　A区　ＳＰ82015出土土器



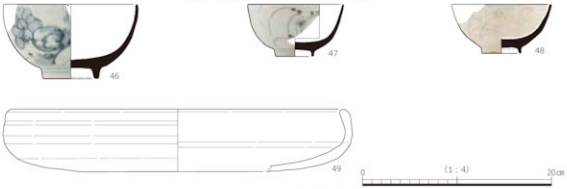
4.　A区　ＳＥ81002出土陶磁器・土器

遺物図版２

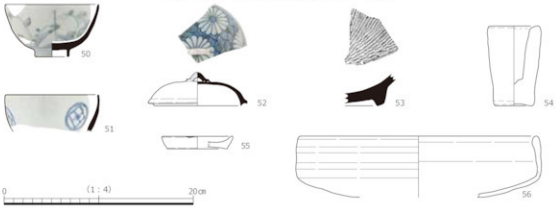


１．　Ａ区　ＳＥ81001出土陶磁器・土器

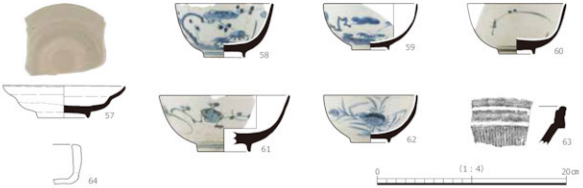
２．　Ａ区　ＳＫ出土磁器・土器



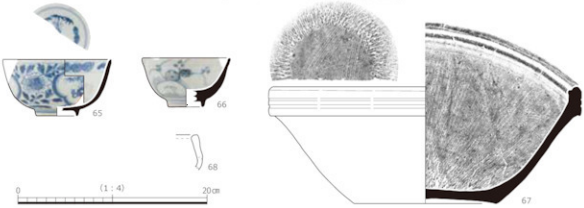
３．　Ｂ区　ＳＫ91005出土陶磁器・土器



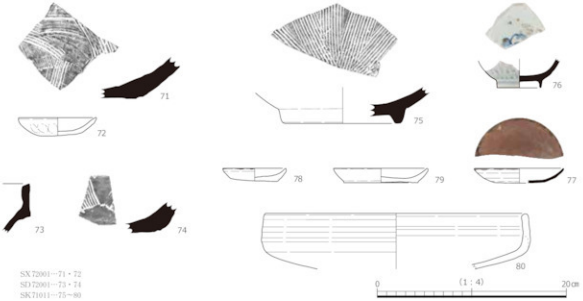
４．　Ｂ区　ＳＥ91001出土陶磁器・土器



１．　Ｂ区　ＳＥ91002出土陶磁器・土器

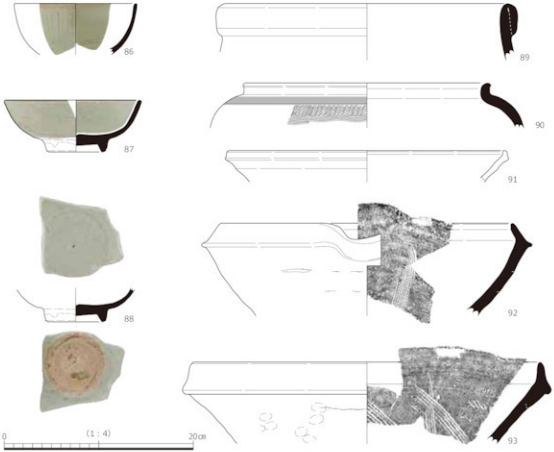


２．　Ｂ区　ＳＥ81003出土陶磁器・土器

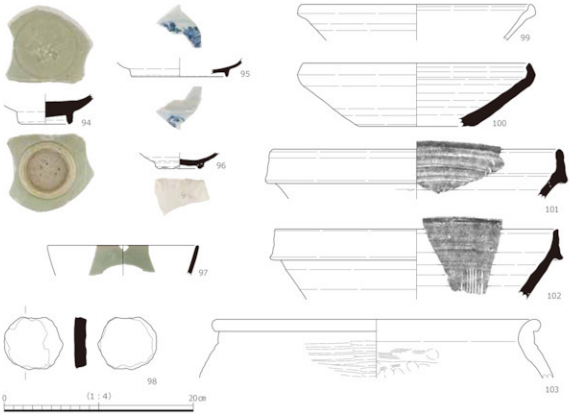


３．　Ｄ区　ＳＸ・ＳＤ・ＳＫ出土陶磁器・土器

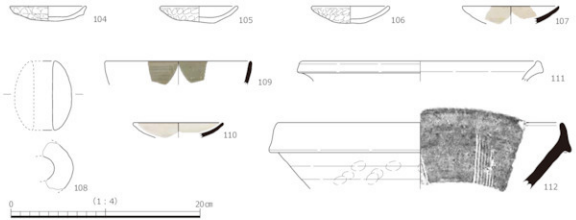
４．　Ｄ区　ＳＥ出土陶磁器・土器



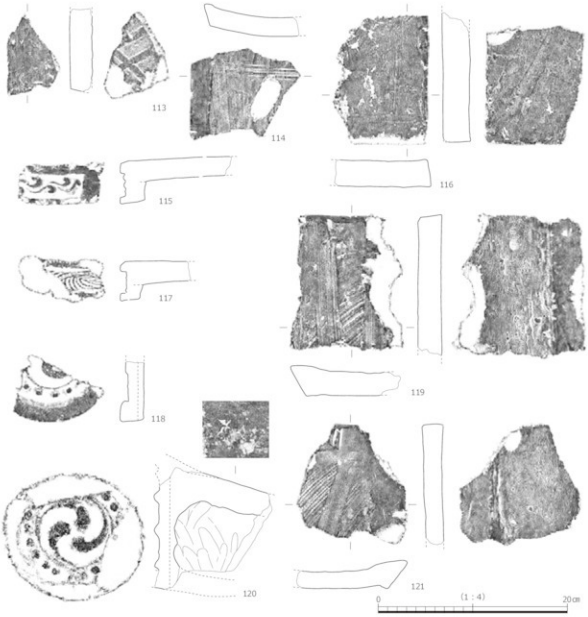
1． E-1区　石垣裏込出土陶磁器



2． E-1区　石垣検出及び堀内出土陶磁器

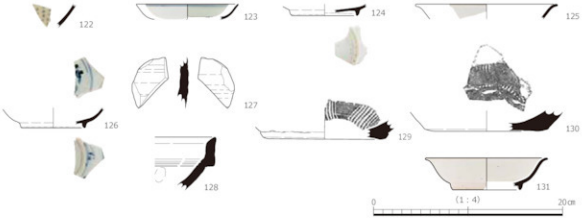


1． E-1区 石垣下層及び整地層出土陶磁器



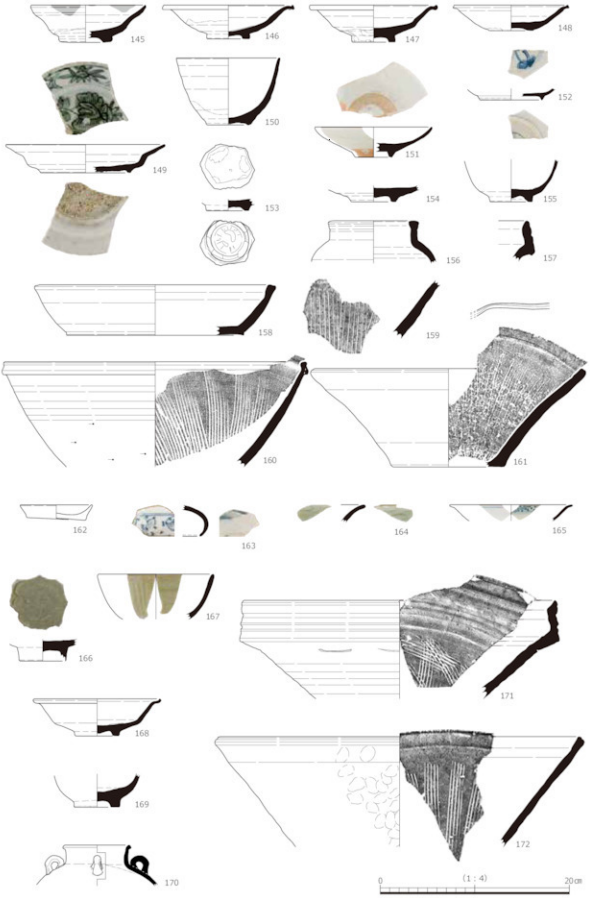
2． E-1区 出土瓦

遺物図版 6

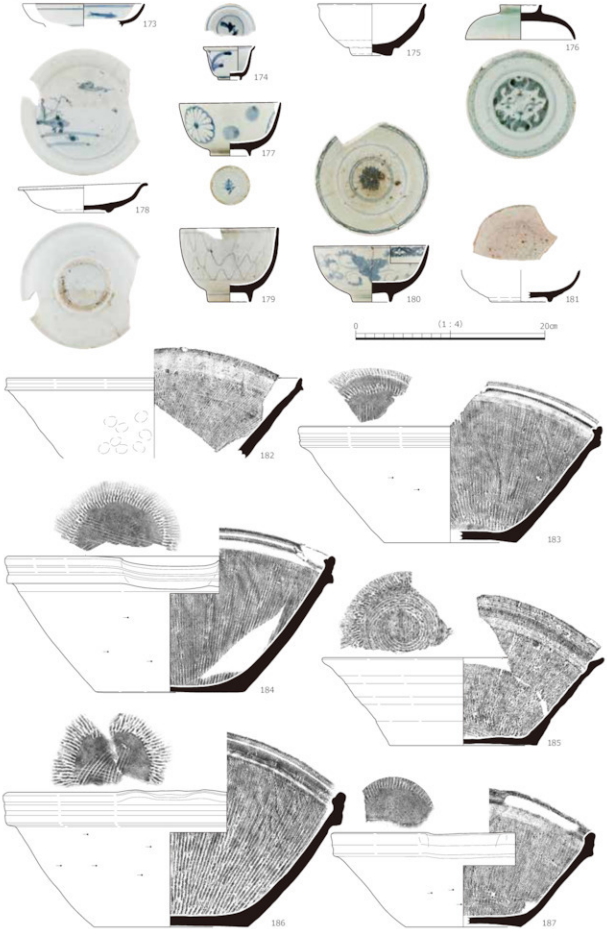


1． F-1区 東辺石垣出土陶磁器

2． F-1区 馬出状郭出土陶磁器・土器



F-1区　南辺石垣出土陶磁器・土器

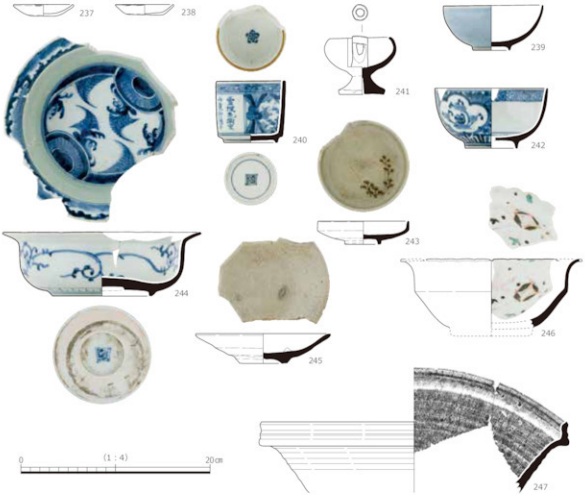


F-1区　堀下層出土陶磁器1

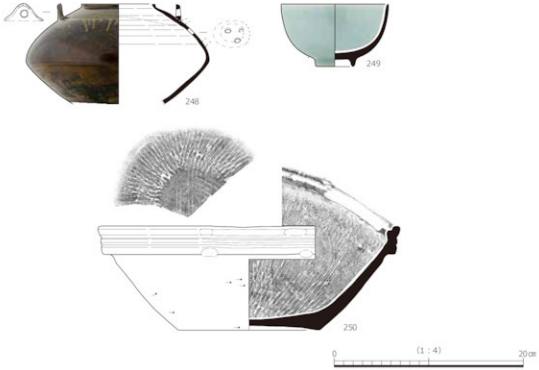
F-1区　堀下層出土陶磁器2

遺物図版 10

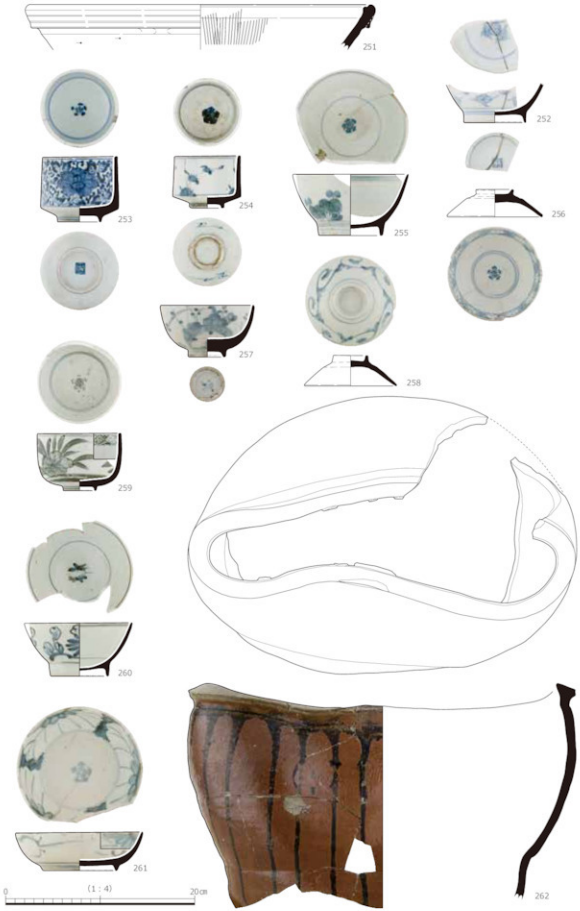
F-1区　堀下層出土陶磁器3



1.　F-1区　堀中層出土陶磁器

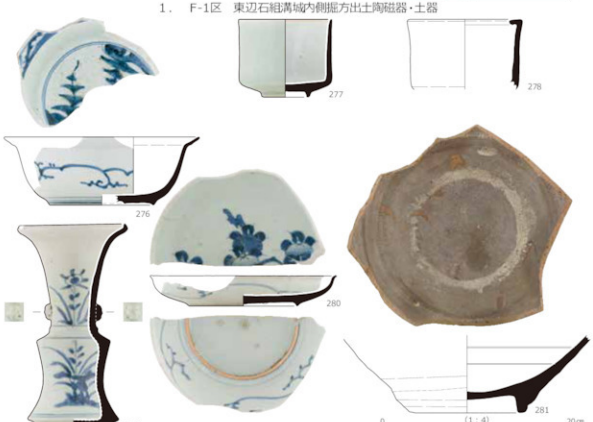


2.　F-1区　堀上層出土陶磁器



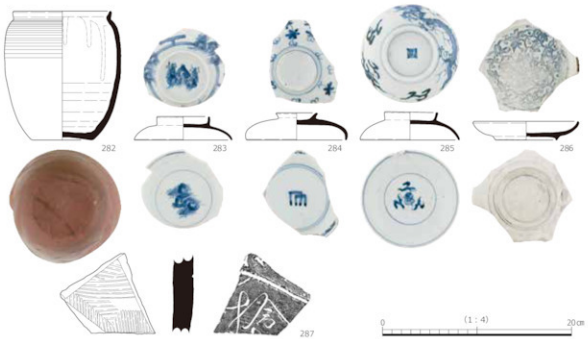
F-1区　南・西辺石組溝城内側掘方出土陶磁器

1．　F-1区　東辺石組溝城内側掘方出土陶磁器・土器



2．　F-1区　石組溝城内側掘方出土陶磁器

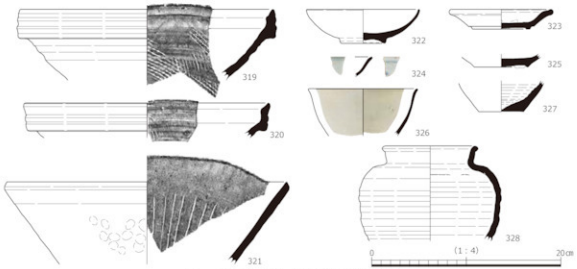
遺物図版 14



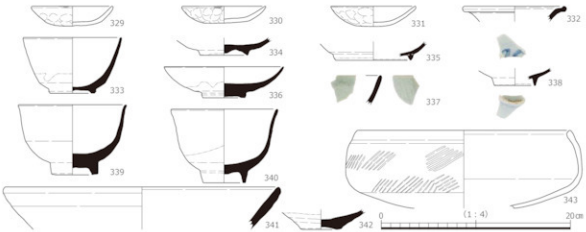
1． F-1区　石組溝域内側掘方出土陶磁器

2． F-1区　石組溝内下層出土陶磁器・土器・土管

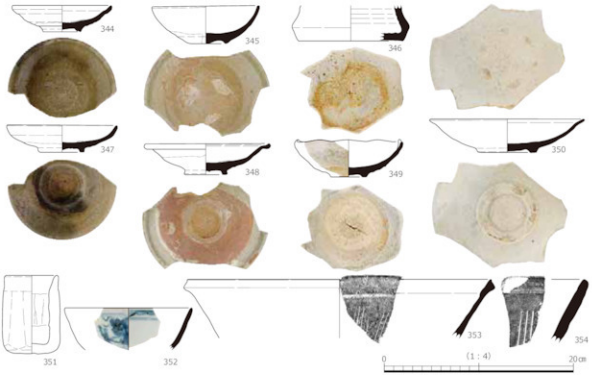
F-1区　石組溝内上層出土陶磁器



1． F-1区 第7・8遺構面出土陶磁器

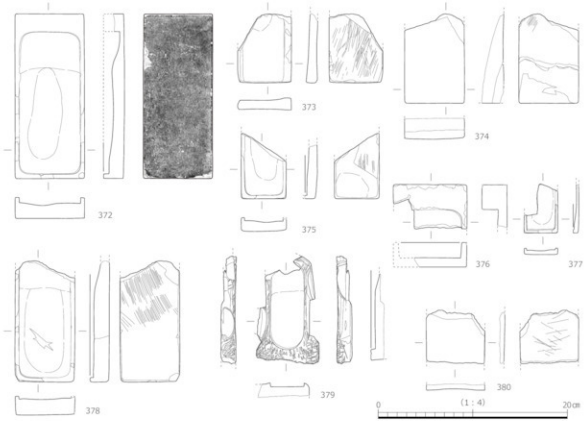


2． F-1区 第5・6遺構面出土陶磁器



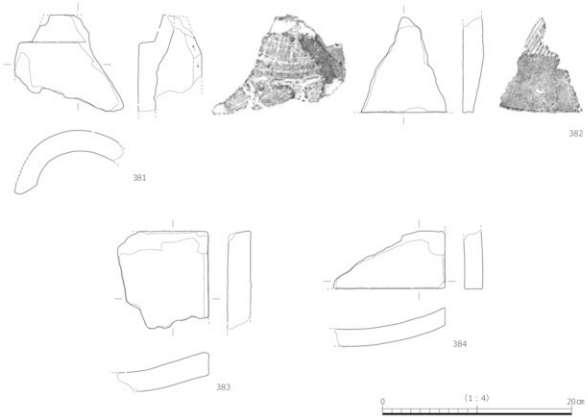
3． F-1区 第4遺構面出土陶磁器

1．　F-1区　第1～3遺構面出土陶磁器

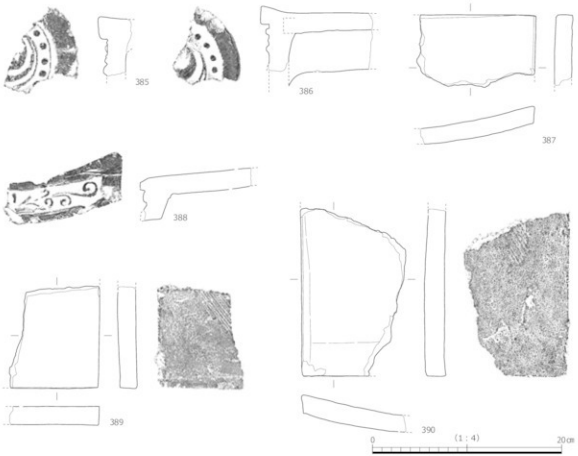


2．　F-1区　出土硯

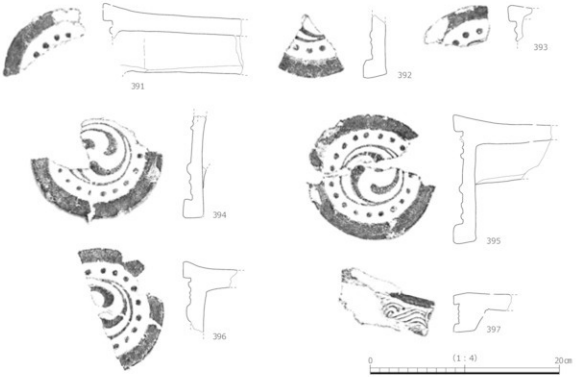
遺物図版 18



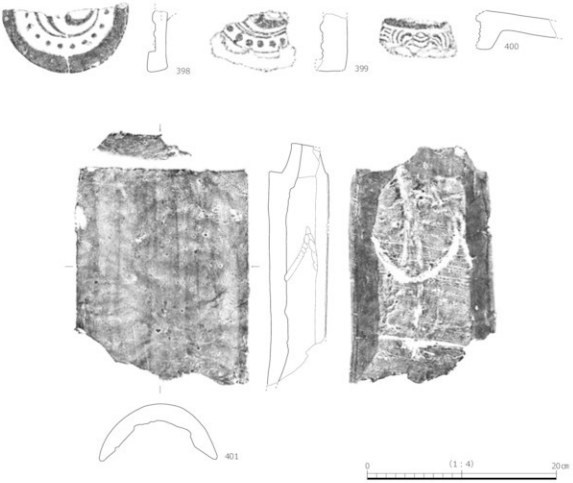
1． F-1区　東辺石垣土橋付近出土瓦



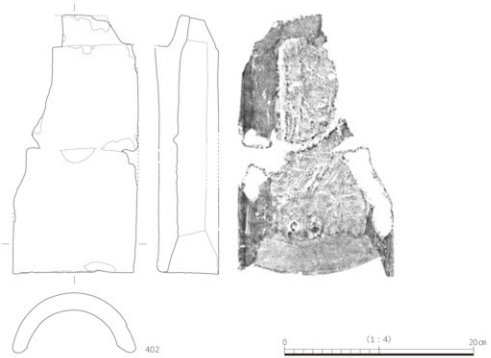
2． F-1区　東辺石垣裏込出土瓦



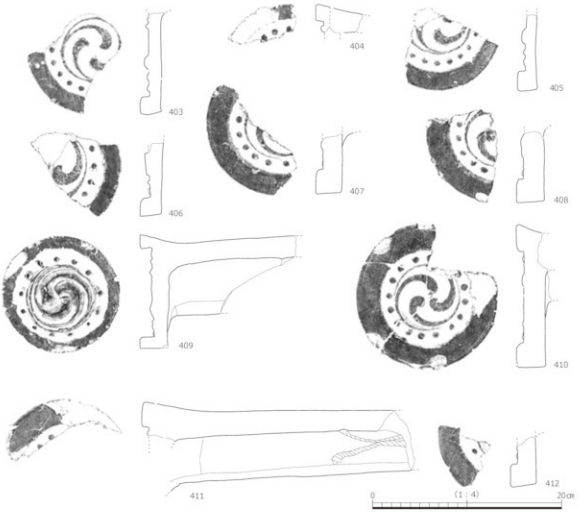
1． F-1区 馬出状郭検出時出土瓦



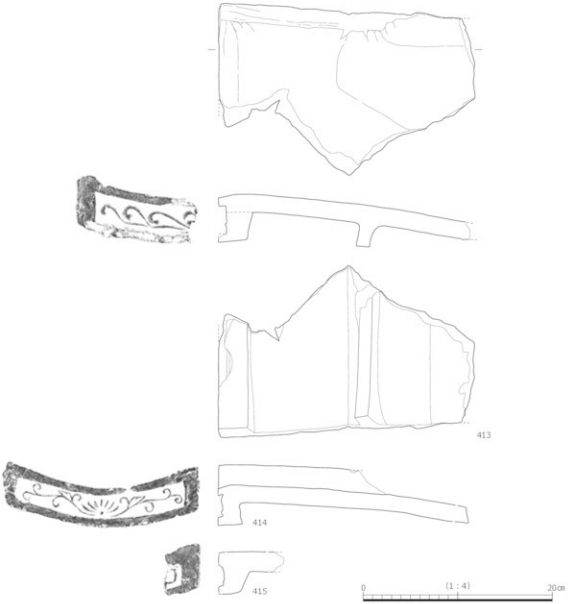
2． F-1区 馬出状郭南東入隅出土瓦1



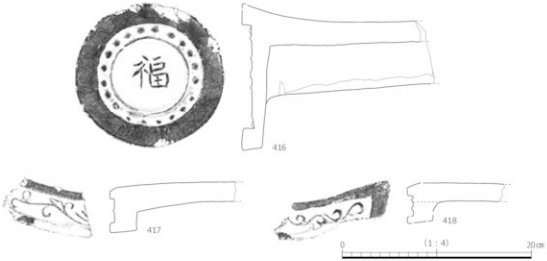
1． F-1区 馬出状郭南東入隅出土瓦2



2． F-1区 馬出状郭前列石垣裏込出土瓦

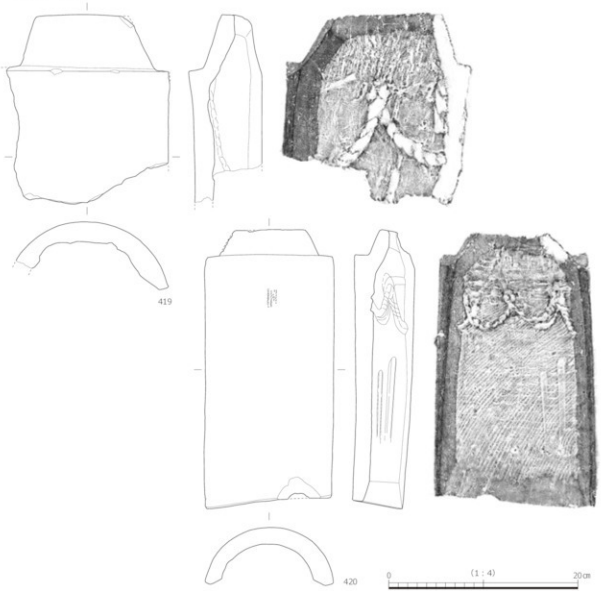


1． F-1区 第8遺構面出土瓦

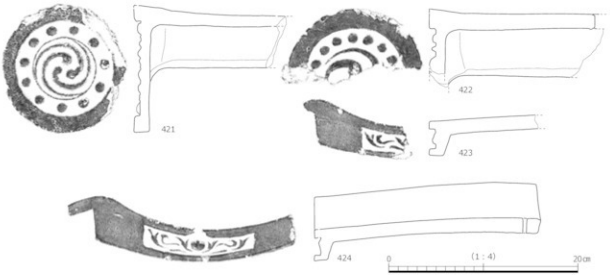


2． F-1区 第7遺構面出土瓦1

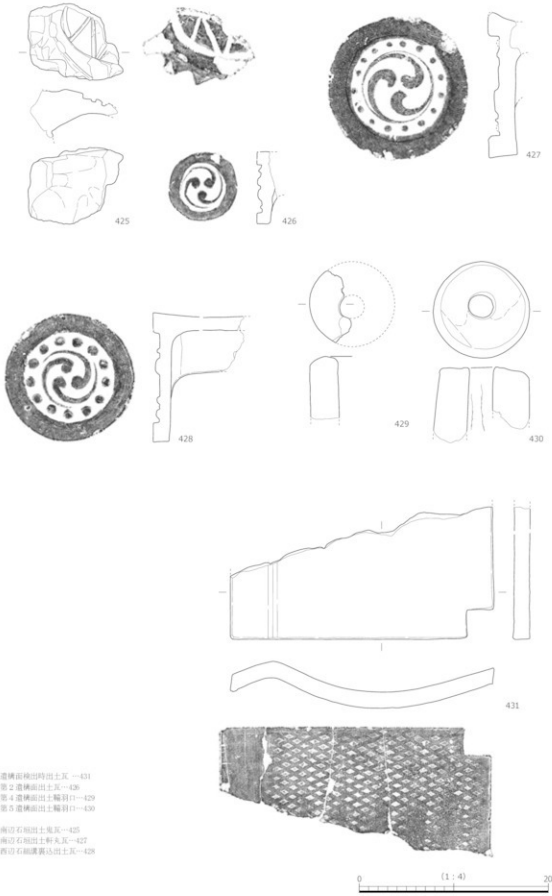
遺物図版 22



1．　F-1区　第7遺構面出土瓦2



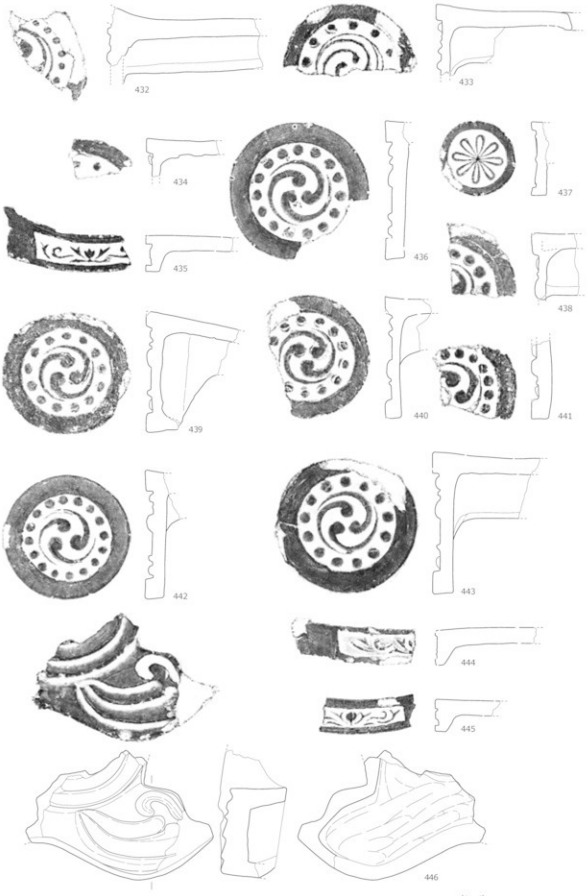
2．　F-1区　第6遺構面出土瓦



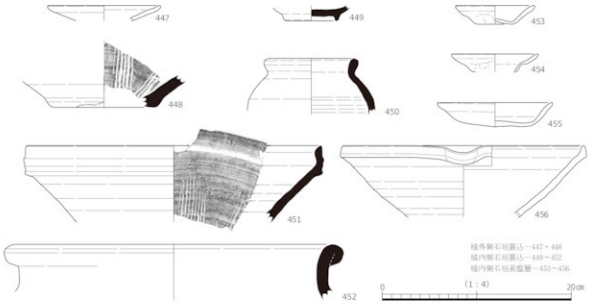
遺構面検出時出土瓦 …431
第 2 遺構面出土瓦…426
第 4 遺構面出土輪羽口…429
第 5 遺構面出土輪羽口…430

南辺石垣出土鬼瓦…425
南辺石垣出土軒丸瓦…427
西辺石組溝裏込出土瓦…428

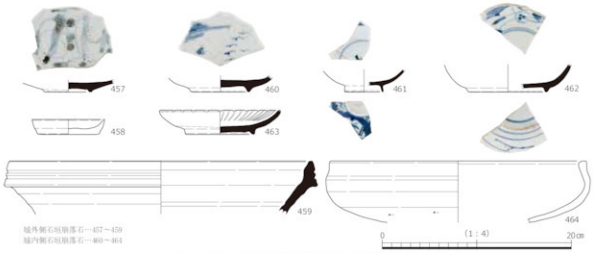
F-1区　その他出土瓦・輪羽口


432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
0
(1 : 4)
20cm

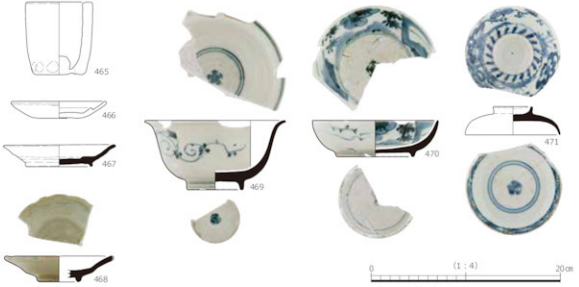
F-1区　堀埋土出土瓦



1．Ⅰ区　石垣裏込及び石垣基盤層出土陶磁器・土器

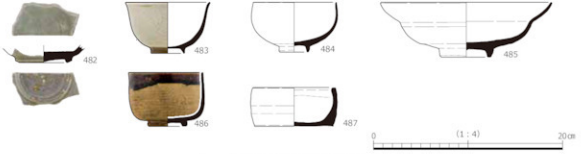


2．Ⅰ区　石垣付近崩落石中出土陶磁器・土器



3．Ⅰ区　堀埋土下層出土陶磁器・土器1

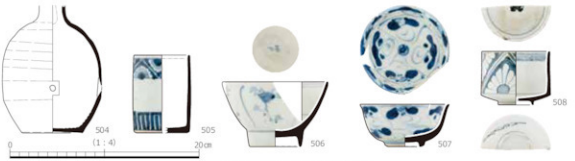
1． Ⅰ区　堀理土下層出土陶磁器2



2． Ⅰ区　堀理土中層出土陶磁器1

1．　Ⅰ区　堀埋土中層出土陶磁器・土器２

2．　Ⅰ区　堀埋土上層出土陶磁器・土器

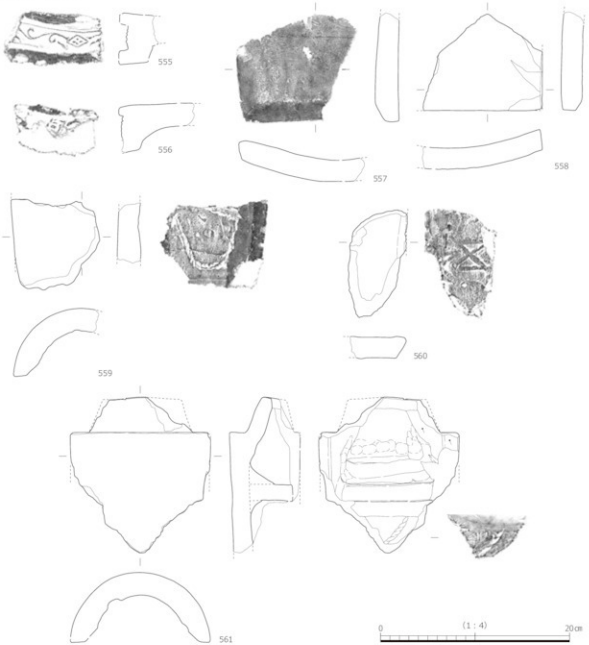


3．　Ⅰ区　ＳＸ201出土陶磁器１

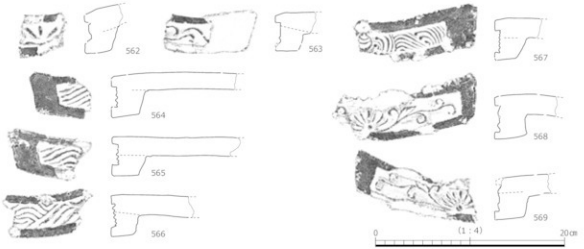
Ⅰ区　ＳＸ201出土陶磁器２，石組構出土陶磁器・土器

1．　Ⅰ区　堀底検出井戸出土陶磁器・土器

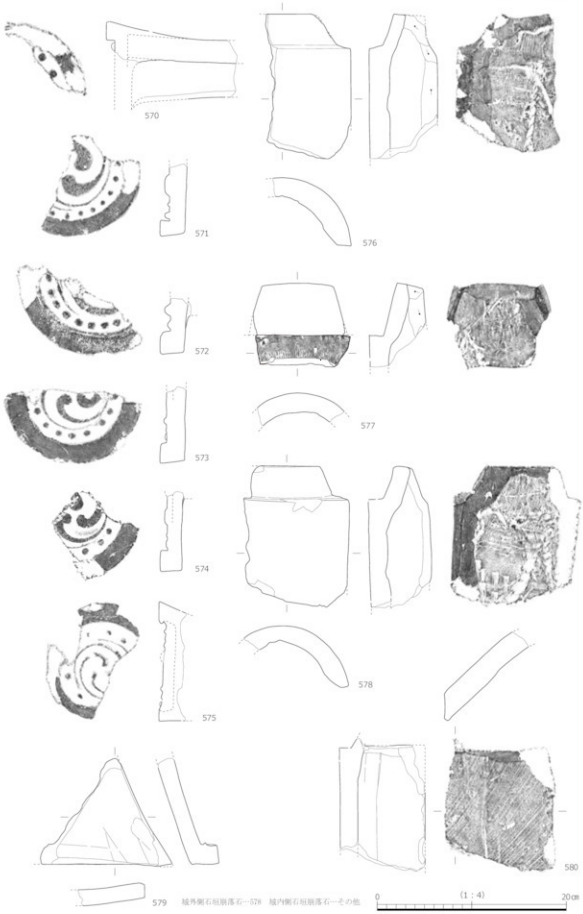
2．　Ⅰ区　第１・２・３遺構面出土陶磁器・土器・瓦



1． Ⅰ区　城内側石垣裏込出土瓦

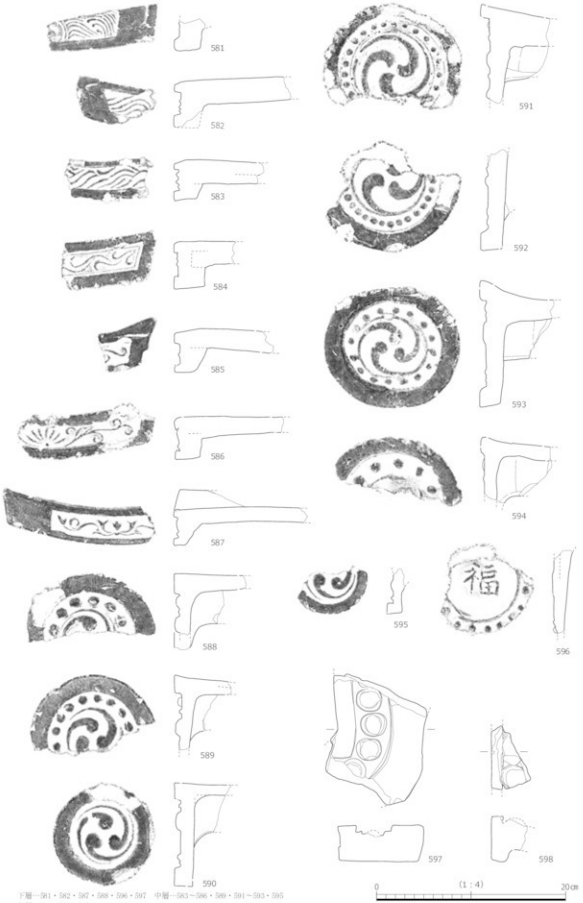


2． Ⅰ区　城内側石垣付近崩落石中出土瓦１



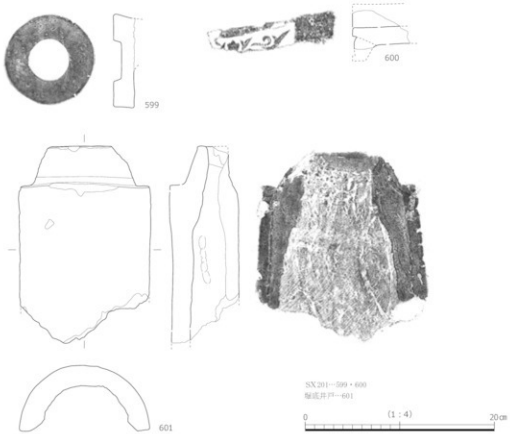
Ⅰ区　城内側石垣・城外側石垣付近崩落石出土瓦 2

遺物図版 32



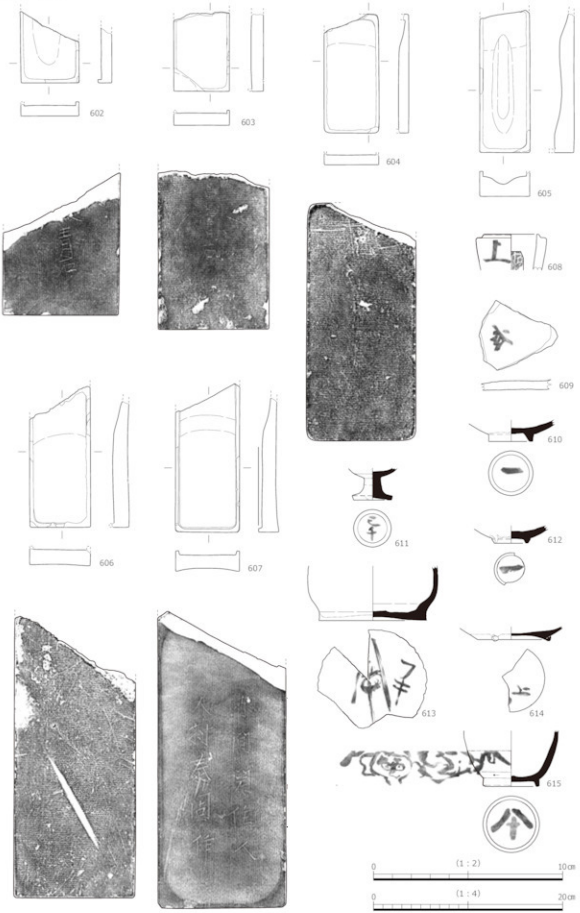
下層—581・582・587・588・590・597　中層—583～586・589・591～593・595
上層—590・594・598

Ⅰ区　堀埋土出土瓦

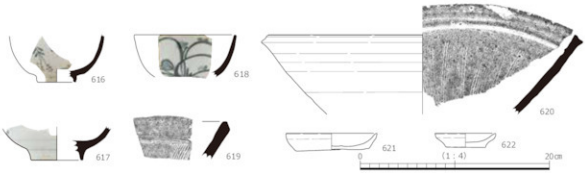


Ⅰ区　ＳＸ201・堀底検出井戸出土瓦

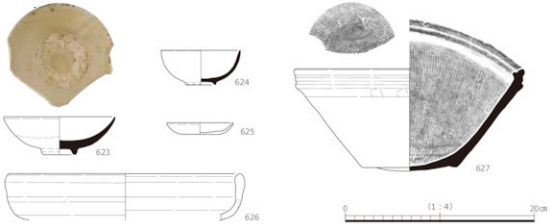
遺物図版 34



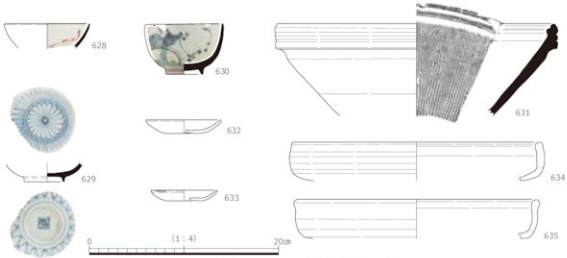
Ⅰ区　出土硯・墨書土器（硯拓本はS＝1／2・その他はS＝1／4）



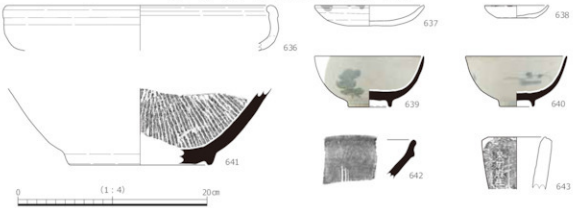
1．　K-1区　SD13002出土陶磁器・土器



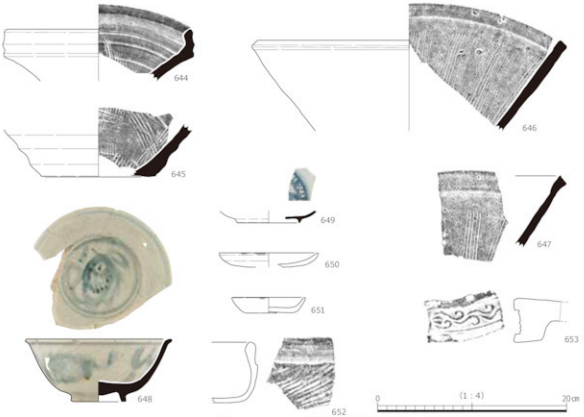
2.　K-1区　SP12006出土陶磁器・土器



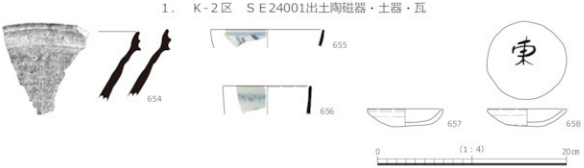
3.　K-1区　SP12004出土陶磁器・土器



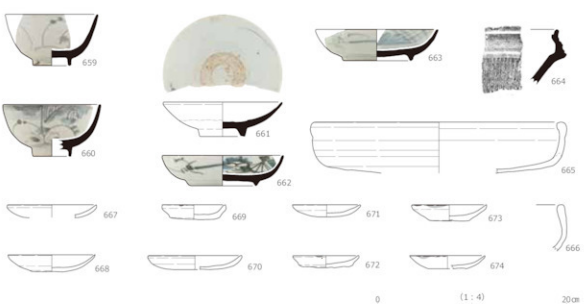
4.　K-1区　SP12007出土陶磁器・土器



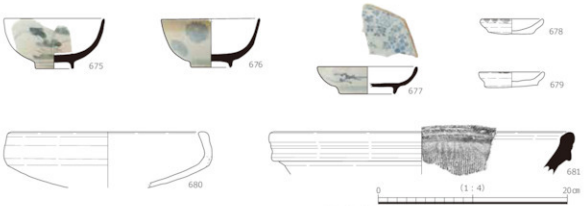
1.　K-2区　SE24001出土陶磁器・土器・瓦



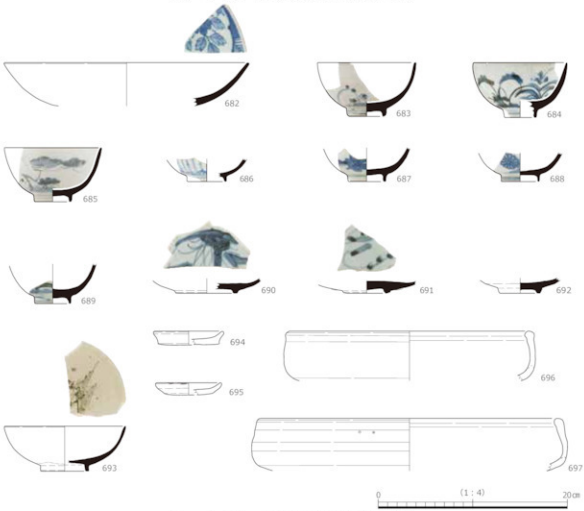
2.　K-2区　SD24001出土陶磁器・土器



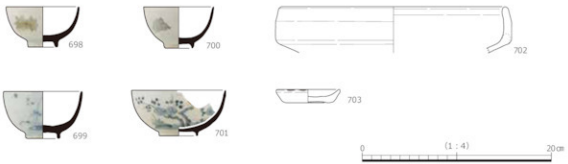
3.　K-2区　SK24005出土陶磁器・土器



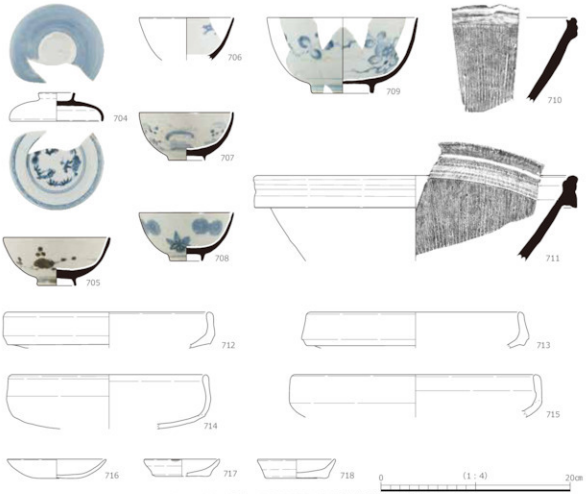
1．　K-2区　SK24007出土陶磁器・土器



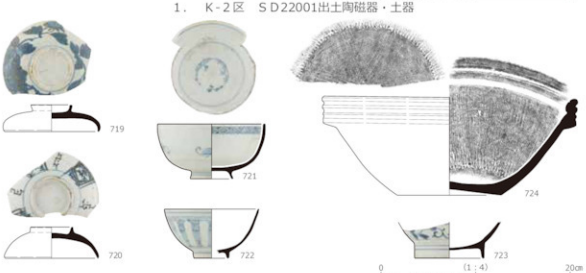
2．　K-2区　SK23005出土陶磁器・土器



3．　K-2区　SK23007出土陶磁器・土器

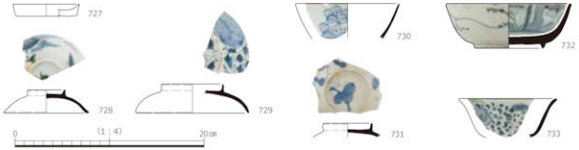


1.　K-2区　SD22001出土陶磁器・土器



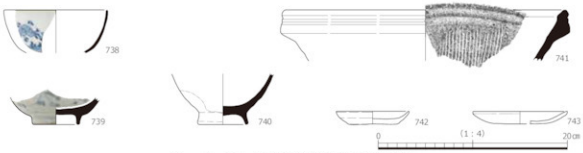
2.　K-2区　SM24001埋没後の井戸出土陶磁器

3.　K-2区　SD21001出土陶磁器



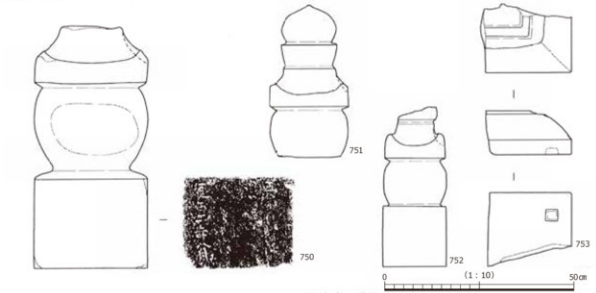
1．　K-2区　SM21001掘方出土磁器・土器

2．　K-2区　SM21001最下層出土陶磁器・土器

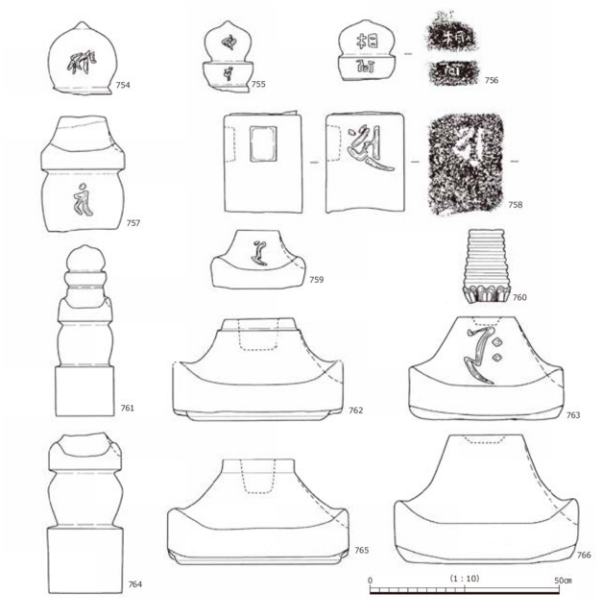


3．　K-3区　SK64004出土陶磁器・土器

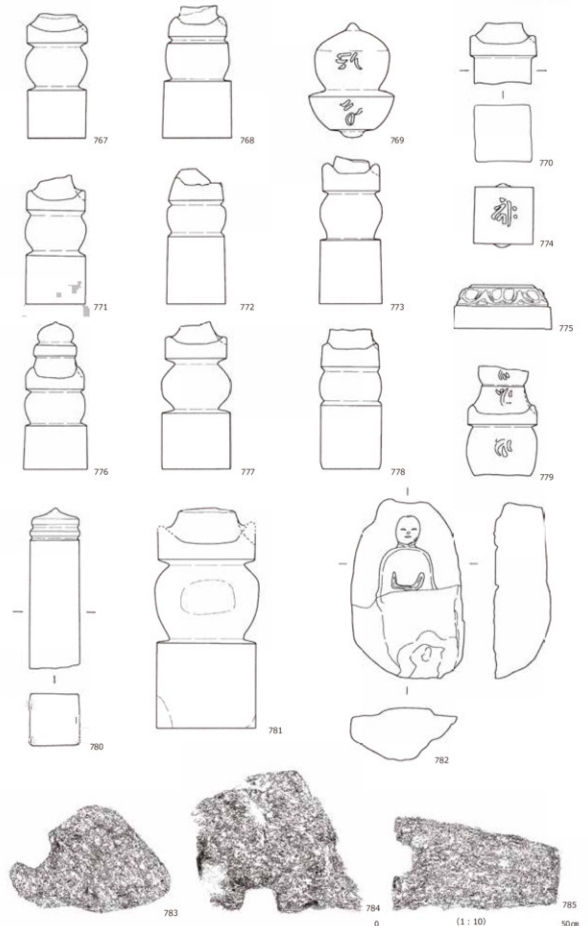
4．　K-3区　SK64001出土陶磁器・土器



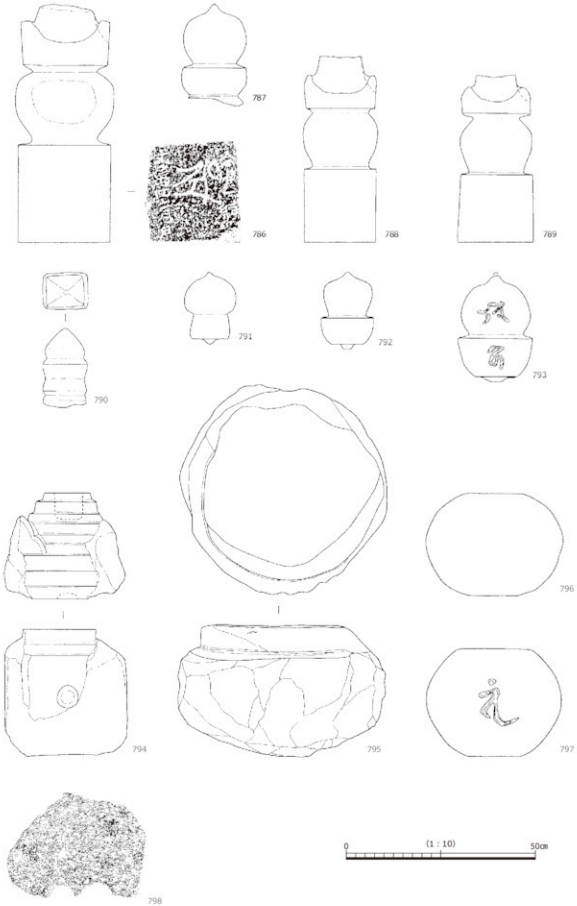
1．　E-1・2区 出土石造品



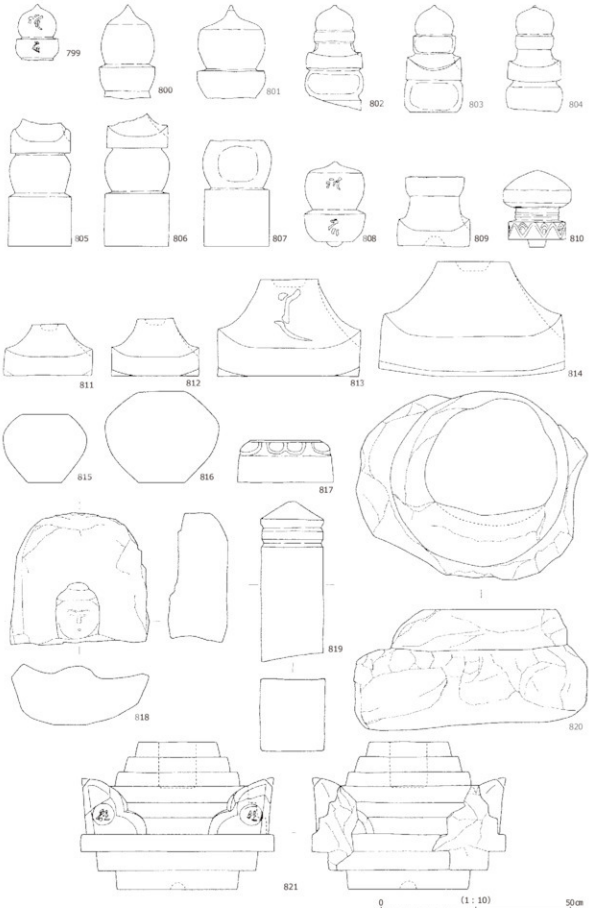
2．　F-1区　石組溝・堀内出土石造品



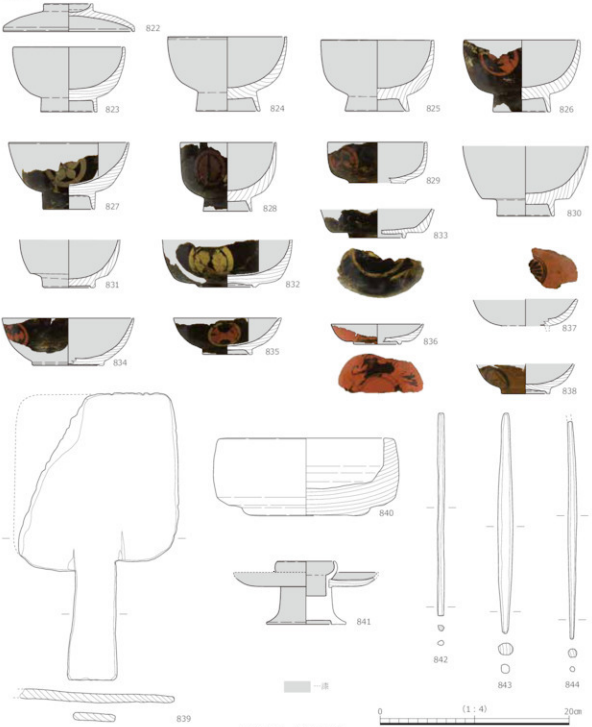
F－1区　馬出状郭出土石造品



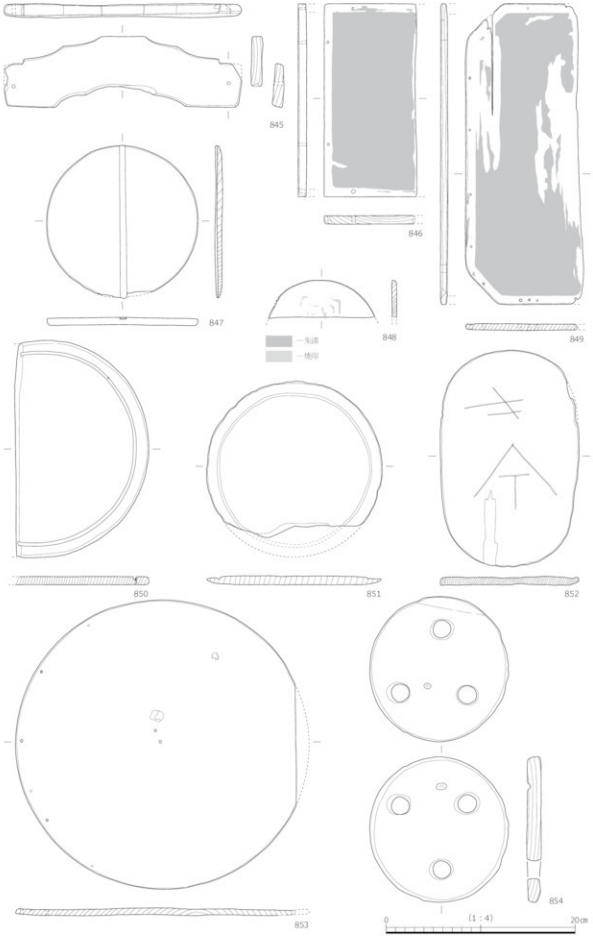
F - 1 区　東辺・南辺石垣出土石造品


799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
0
(1：10)
50cm

Ⅰ区　出土石造品

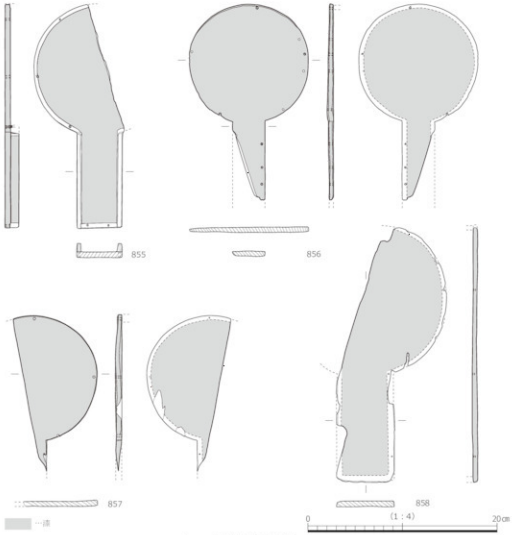

822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
一連
0
(1：4)
20cm

木製品 1（食膳具）

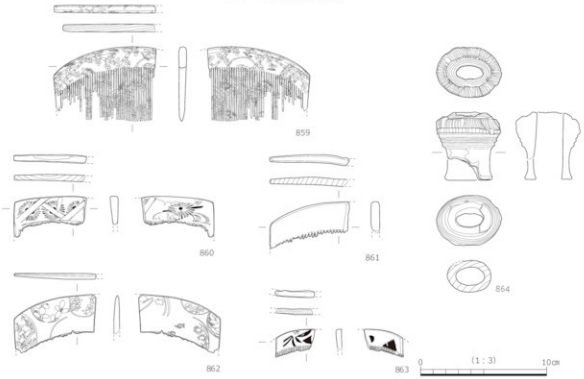


木製品 2（容器）

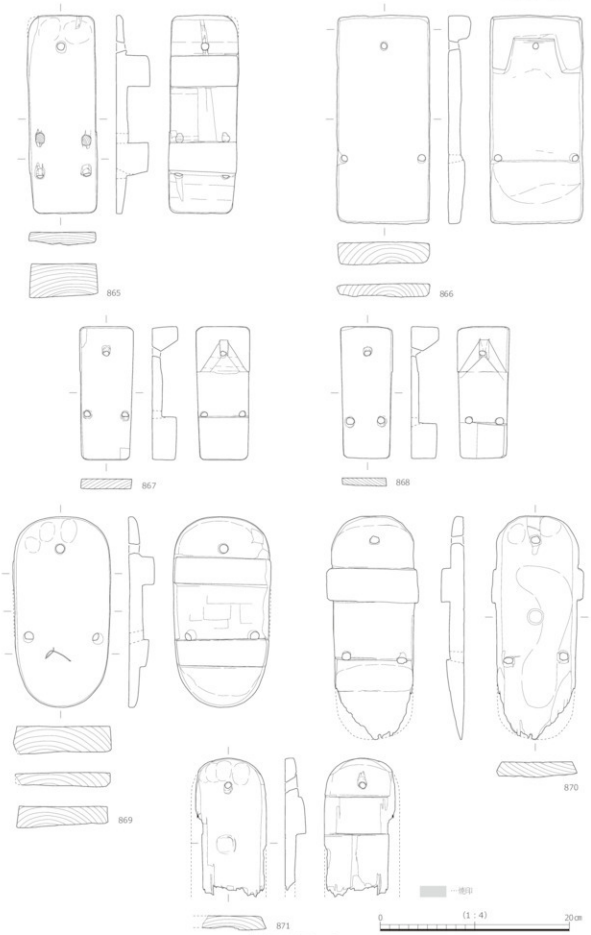
遺物図版 46



1． 木製品（柄鏡箱）

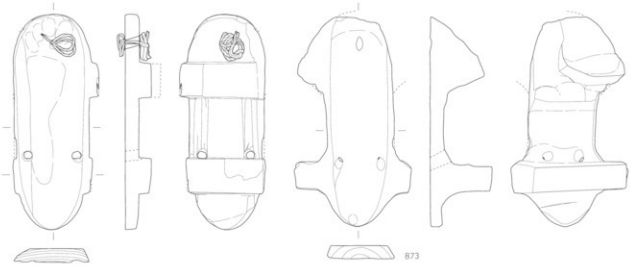


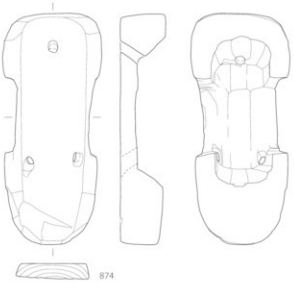
2． 木製品（横櫛・傘轆轤）

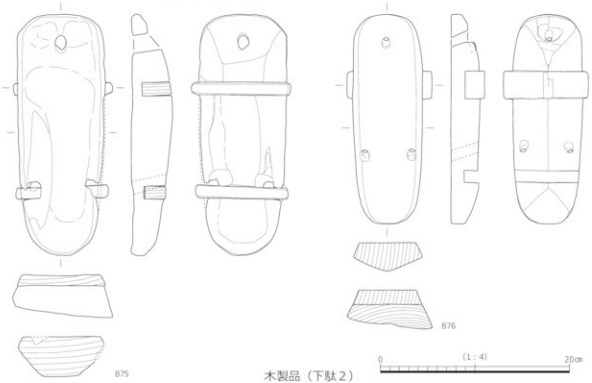


木製品（下駄１）

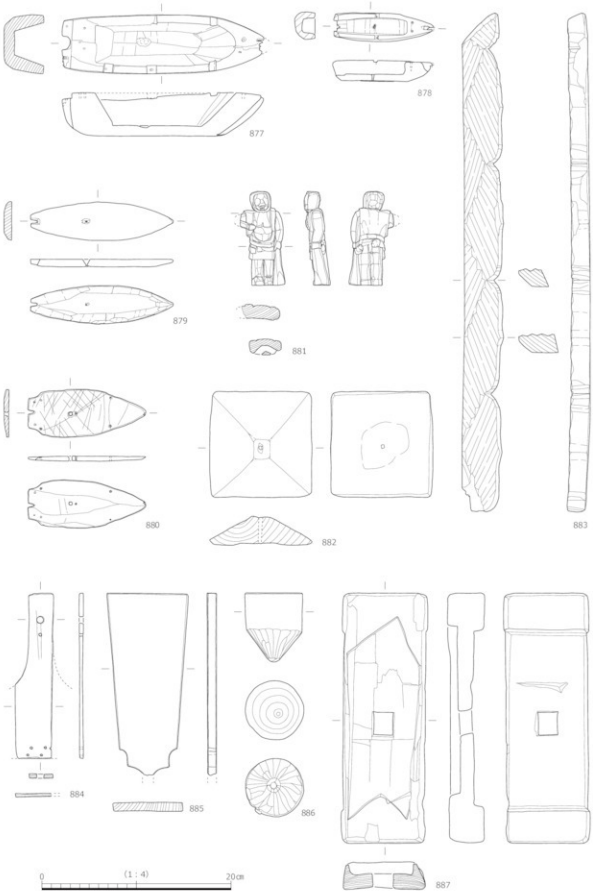
遺物図版 48





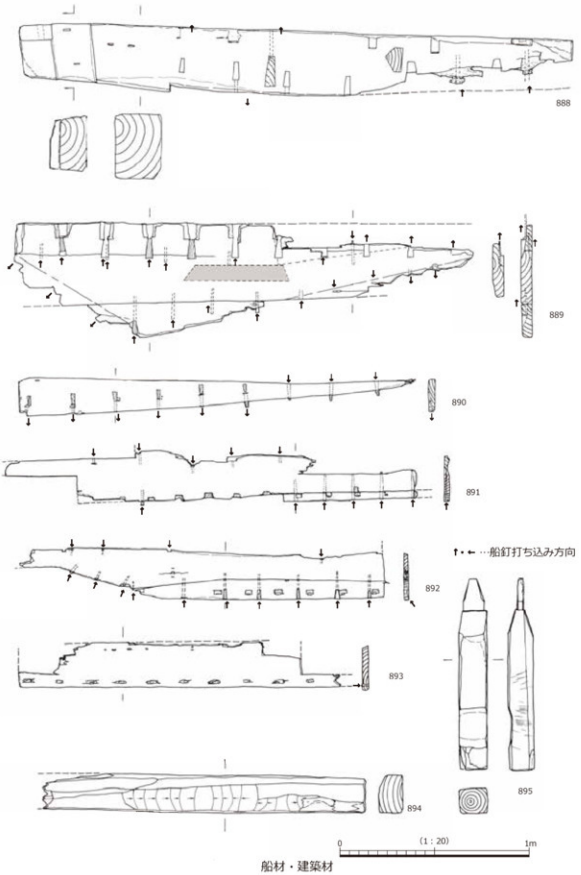


木製品（下駄２）

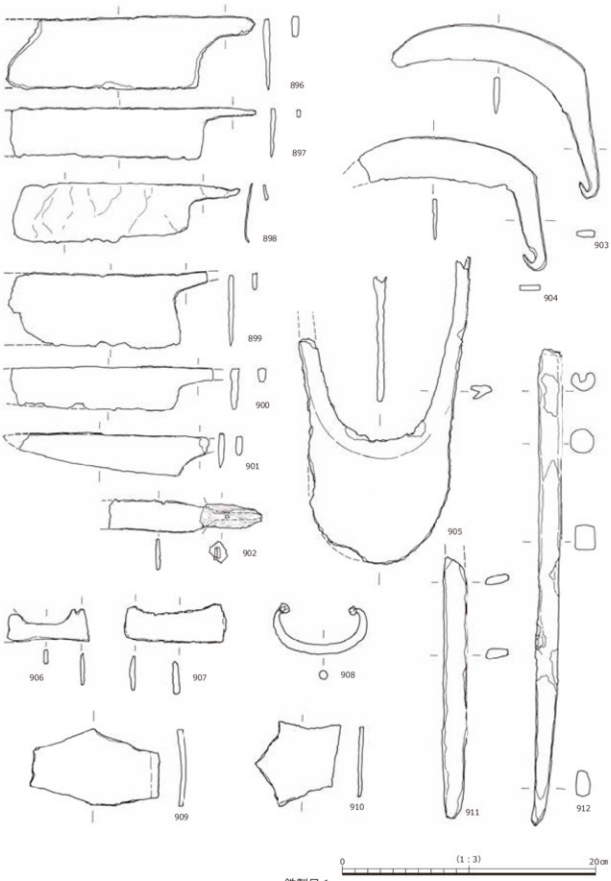


木製品（祭祀具・玩具・その他）

遺物図版 50



船材・建築材

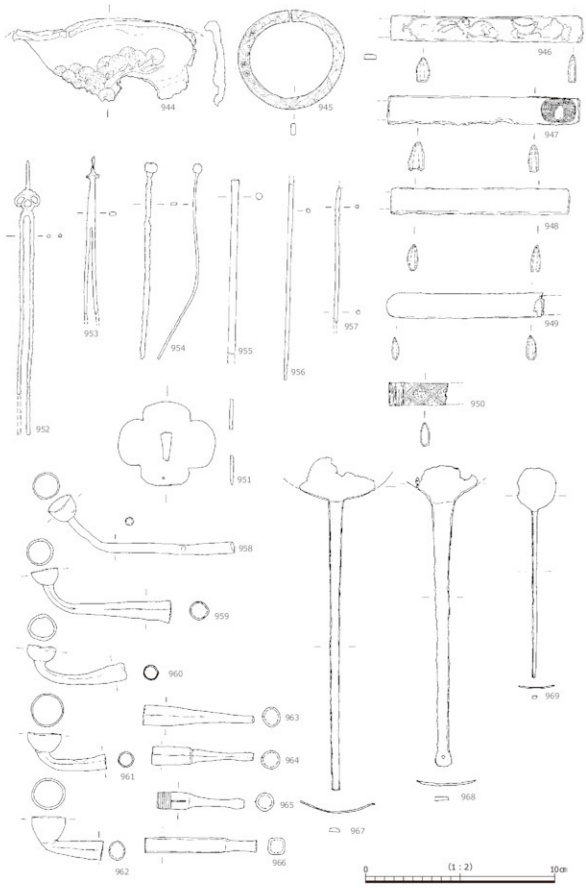

896
897
898
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
910
911
912
0
(1 : 3)
20cm

鉄製品 1

遺物図版 52

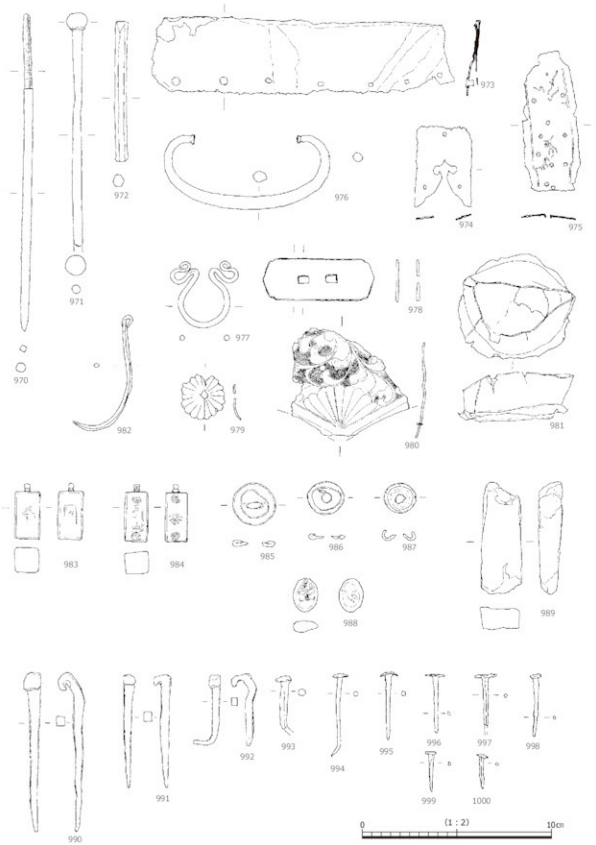
913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942
943
0
(1 : 2)
10cm

鉄製品 2


944
945
946
947
948
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
0
(1：2)
10cm

銅製品 1

遺物図版 54



銅製品 2 ・豆板銀

写 真 図 版

１．調査地付近空中写真（北から）

２．調査地付近空中写真（東から）

カラー図版２

１．Ｅ-１区　石垣・堀全景（西から）

２．Ｅ-１区　石垣（南西から）

１．Ｆ-１区　石垣・堀全景（南から）

２．Ｆ-１区　石垣・堀全景（南西から）

カラー図版４

１．Ｆ-１区　石垣・堀全景（北西から）

２．Ｆ-１区　東辺城外側石垣（北西から）

１．Ⅰ区　石垣・堀全景（南東から）

２．Ⅰ区　城内側石垣（南東から）

カラー図版６

1．Ⅰ区　城外側石垣（北西から）

2．K-3区　城内側石垣（北から）

1．F-1区　東辺城外側石垣裏込出土陶磁器

2．Ⅰ区　城内側石垣裏込出土陶器

3．Ⅰ区　城外側石垣裏込出土陶器

カラー図版８

１．Ｆ-１区　漳州窯染付皿見込

２．Ｆ-１区　漳州窯染付皿高台内

３．Ｆ-１区　唐津皿

４．Ｆ-１区　備前建水（植木鉢転用）

１．Ｆ-１区　堀埋土出土陶磁器

２．Ｆ-１区　堀埋土出土染付磁器

1．F-1・I区　土人形・泥面子

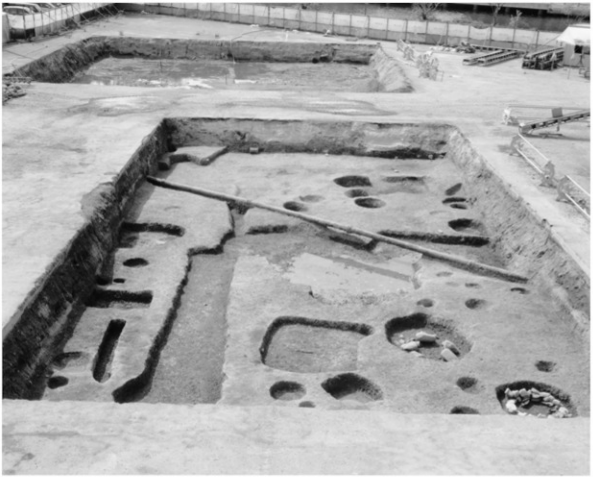
2．F-1区　横櫛

2．F-1区　横櫛（反転）

１．Ａ区　第２遺構面（北から）

２．Ａ区　第１遺構面（北から）

写真図版２



１．Ｂ-１区　第１遺構面全景（東から）

２．Ｂ-１区　ＳＥ91001全景（西から）

３．Ｂ-２区　第１遺構面全景（西から）

４．Ｂ-２区　ＳＥ81005全景（南から）

１．Ｃ-１区　遺構面全景（南から）

２．Ｃ-２区　遺構面全景（南から）

写真図版４

１．Ｄ-１区　第２遺構面全景（東から）

２．Ｄ-１区　第１遺構面全景（東から）

１．D-２区　第２遺構面全景（東から）

２．D-２区　第１遺構面全景（東から）

３．D-３区　第１遺構面全景（東から）

４．D-４区　第１遺構面全景（北から）

５．D-５区　第１遺構面全景（西から）

写真図版６

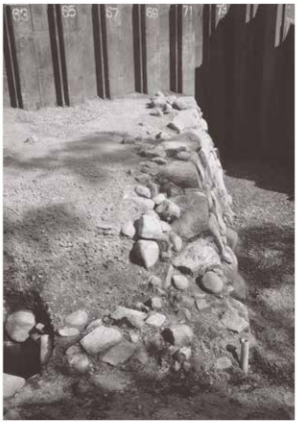
１．　Ｅ－１区
堀底下層土留遺構検出（南西から）

２．　Ｅ－１区
下層土留遺構（南西から）

３．　Ｅ－１区
下層土留遺構全景（西から）

1．E-1区　石組井戸（西から）

2．E-1区　石組井戸断面（西から）



3．E-3区　石垣断面（西から）

4．E-3区　石垣裏込断面（西から）

写真図版８

１．　E－１区
　　堀埋土断面（西から）

２．　E－１区
　　石垣・堀全景（西から）

３．　E－１区
　　石垣・堀全景（南西から）

１．　F－１区
東辺城外側石垣（北西から）
文亀四年一石五輪塔出土状況

２．　F－１区
東辺城外側石垣部分１（西から）

３．　F－１区
東辺城外側石垣部分２（西から）

写真図版 10

1．　F－1区
東辺城外側石垣（南西から）

2．　F－1区
東辺城外側石垣南端部裏込
（北西から）
転用石材検出状況

3．　F－1区
東辺城外側石垣断面（南から）

1．F-1区　馬出状郭検出状況（南東から）

5．F-1区　馬出状郭後列石垣全景（南東から）

2．F-1区　馬出状郭南東隅埋設過程（南東から）

6．F-1区　馬出状郭後列石垣二段目全景（北東から）

3．F-1区　馬出状郭南東隅埋設断面（南から）

7．F-1区　馬出状郭後列石垣一段目全景（北東から）

4．F-1区　馬出状郭南東入隅全景（南から）

8．F-1区　馬出状郭後列石垣最下段目全景（北東から）

写真図版 12

1．F-1区　馬出状郭後列石垣矢穴1（東から）

2．F-1区　馬出状郭後列石垣矢穴2（東から）

3．F-1区　馬出状郭前後石垣断面（北から）

4．F-2区　遺構面検出全景（北から）

5．F-1区　南辺石垣西端（北東から）

6．F-1区　南辺石組溝と南辺石垣断面（西から）

7．F-1区　南辺石組溝と南辺石垣（北西から）

8．F-1区　堀埋土断面（北西から）

1．F-1区
石組溝域外側全景（南西から）

2．F-1区
東辺石組溝域外側（北西から）

3．F-1区
石組溝南東角（南東から）

写真図版 14

1．F-1区　石組溝内埋土断面（北から）

2．F-1区　石組溝内完掘状況（北から）

3．F-1区　石組溝城外側断面（北から）

4．F-1区　石組溝城内側断面（北から）

1．F-1区　第1遺構面全景（南から）

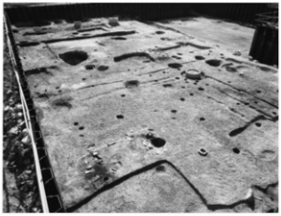
2．F-1区　第2遺構面全景（南から）

3．F-1区　第3遺構面全景（北西から）

4．F-1区　第4遺構面全景（南西から）

5．F-1区　第5遺構面全景（南西から）

6．F-1区　第6遺構面全景（南西から）



7．F-1区　第7遺構面全景（北東から）

8．F-1区　第8遺構面全景（南西から）

写真図版 16

1．F-1区
第５遺構面北東隅町屋（東から）

2．F-1区
第６遺構面北東隅町屋（東から）

3．F-1区
第７遺構面北東隅町屋（東から）

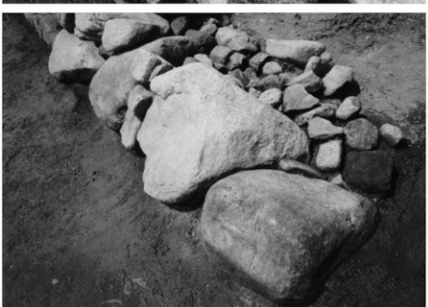
1．Ⅰ区 城内側石垣と崩落石（南東から）

2．Ⅰ区 城内側石垣裏込（東から）

3．Ⅰ区 城内側石垣中央最下段（東から）

写真図版 18

1．Ⅰ区
城内側石垣裏込内瓦出土状況
（北から）



2．Ⅰ区
城内側石垣東端最下段
（南東から）

3．Ⅰ区
城内側石垣西端最下段
（南東から）

1．Ⅰ区
城内側石垣断割（東から）

2．Ⅰ区
城内側石垣裏込断割（東から）

3．Ⅰ区
堀埋土土層断面（北東から）

写真図版 20

1．Ⅰ区
城外側石垣（北東から）

2．Ⅰ区
城外側石垣裏込（東から）

3．Ⅰ区
城外側石垣断割（東から）

1．Ⅰ区
第2遺構面ＳＸ201（南東から）

2．Ⅰ区
第１遺構面全景（南から）

3．Ⅰ区
石組溝（東から）

1．Ⅰ区
城外側崩落石検出状況（南東から）

2．Ⅰ区
第３遺構面町屋（南から）

3．Ⅰ区
第３遺構面カマド（北西から）

1．Ⅰ区 近代遺構上層（南から）

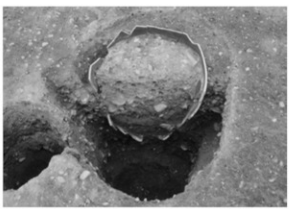
2．Ⅰ区 近代石組溝（西から）

3．Ⅰ区　近代遺構下層（南から）

4．Ⅰ区　第１遺構面 SK112

5．Ⅰ区　第１遺構面 SK105

6．Ⅰ区　第１遺構面 SK104



7．Ⅰ区　第１遺構面 SK107

8．Ⅰ区　堀底検出井戸

1．K-1区　第3遺構面（西から）

2．K-1区　第2遺構面（西から）

1．K-1区　第1遺構面（東から）

2．K-1区　SM11001全景（北西から）

1．K-1区　第4遺構面（東から）

2．K-2区　SE24001（西から）

3．K-2区　SE24001 断割（西から）

1．K-2区　第3遺構面全景（東から）

2．K-2区　第2遺構面全景（東から）

3．K-2区　SD22002 全景（東から）

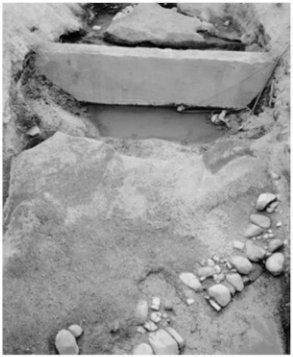
1．K-2区　第1遺構面全景（西から）

2．K-2区　SM12001全景（南から）

3．K-2区　SM12001（西から）

4．K-2区　SM12001断割（南東から）

1．K-3区　第1遺構面全景（西から）



2．K-3区　第1遺構面全景（東から）

3．K-3区　SM24001（東から）

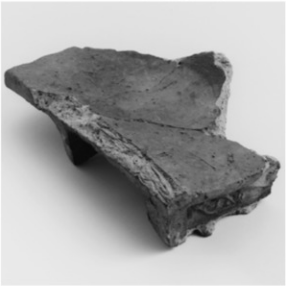
4．K-3区　SM24001 断割（南東から）

5．K-3区　SM24001 全景（北東から）

6．K-3区　SK62004 全景（南から）

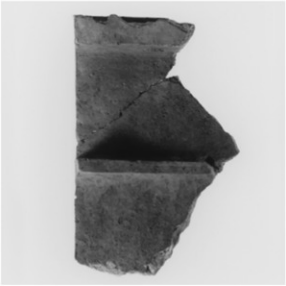
1．E-1区　出土瓦（120）

2．E-1区　出土瓦（115・117・118）



3．F-1区　第8遺構面出土瓦（413）

5．F-1区　第8遺構面出土瓦（414）



4．F-1区　第8遺構面出土瓦（413裏面）

6．F-1区　第7遺構面出土瓦（416）

1．F-1区　馬出状郭前列石垣裏込出土瓦（409）

2．F-1区　馬出状郭前列石垣裏込出土瓦（409裏面）

3．F-1区 馬出状郭前列石垣裏込出土瓦(遺物図版20-2)

4．F-1区 馬出状郭検出時出土瓦(遺物図版19-1)

写真図版 32

1．F-1区　東辺石垣裏込出土瓦（遺物図版18-2）

2．F-1区　出土瓦（遺物図版17-2）

3．F-1区　南・西辺石溝組溝掘方出土墨書擂鉢（251）

4．F-1区 南・西辺石溝組溝掘方出土墨書擂鉢(251 裏面)

5．F-1区　石組溝内上層出土 陶製オロシ（318）

6．F-1区　石組溝内上層出土 陶製オロシ（318 裏面）

1．Ⅰ区　城内側石垣裏込出土瓦（556）

2．Ⅰ区　城内側石垣裏込出土瓦（555）

3．Ⅰ区　城内側石垣・城外側石垣付近崩落石出土瓦(遺物図版 31)

4．Ⅰ区　城内側石垣付近崩落石中出土瓦(遺物図版 30-2)

5．Ⅰ区　城内側石垣付近崩落石中出土瓦(遺物図版 30-2)

1．Ⅰ区　堀埋土出土瓦（591～593）

2．Ⅰ区　堀埋土出土瓦（581～586）

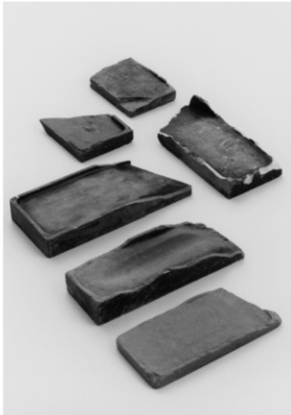
3．Ⅰ区　堀埋土出土瓦（587～590・595）

4．Ⅰ区　堀埋土出土瓦（598・597）

1．瀬戸美濃灰釉碗 人面墨書（615）

2．瀬戸美濃灰釉碗 高台裏墨書（615）

3．丹波鉄釉徳利 墨書（613）



4．Ⅰ区　出土硯（遺物図版 34）

5．硯裏面刻書（607）

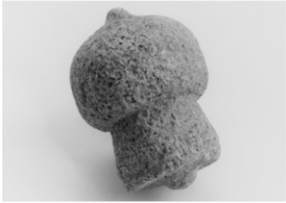
1．E-2区　出土 一石五輪塔（750）

3．F-1区　東辺城外側石垣 一石五輪塔（786）

2．同上　地輪部 寛正二年八月

4．同上　地輪部 文亀四 二月

1．F-1区　馬出状郭入隅部出土 石仏（782）



2．宝珠（791）

3．相輪（790）

4．角塔婆（780）

5．宝篋印塔（794）

1．屋根材（753）

2．屋根材（753 裏面）

3．釘貫（758）

4．宝篋印塔塔身（774）

1．層塔（762）

2．層塔（762 裏面）

3．F－1 区　石垣裏込転用一石五輪塔

1．五輪塔 各種

2．一石五輪塔 各種

1．一石五輪塔（756）

2．宝珠（810）

3．五輪塔（809）

4．五輪塔（809 裏面）

5．宝篋印塔（821）

6．石仏（818）

1．木製品（容器：845～852・854）

2．木製品（食膳具：839・842～844）

3．木製品（天目台：841）

1．木製品（柄鏡箱：855～858）

2．木製品（傘轆轤：864）

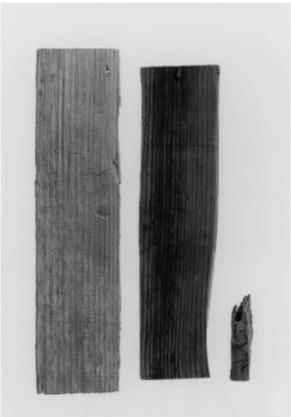
3．木製品（下駄：865～870・872～876）

1．木製品（船形：877～880）

2．木製品（人形：881）

3．木製品（玩具・その他：882～887）

1．木札（1001～1003）

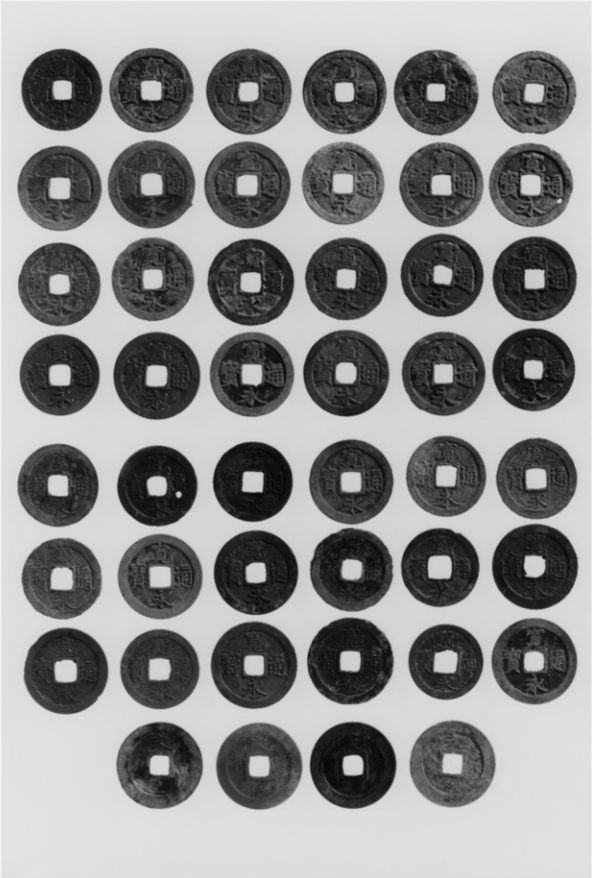


2．木札（裏面）

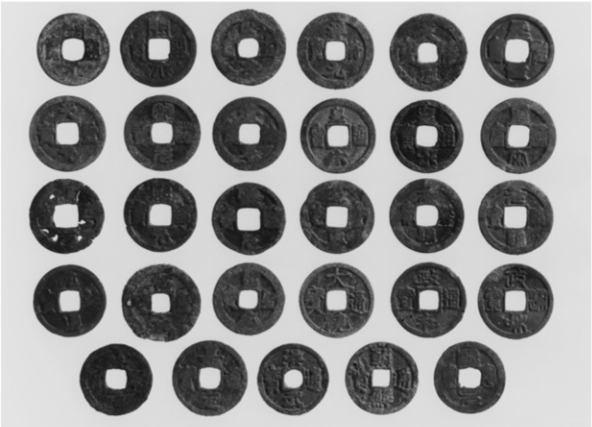
3．船材（888～893）

1．建築材（894・895）

2．E-1区　下層土留坑



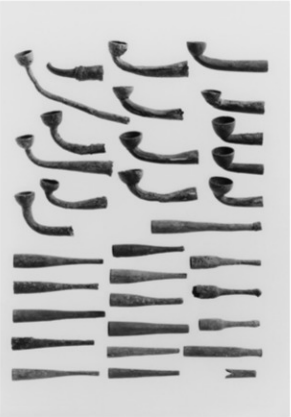
銅銭（寛永通宝）



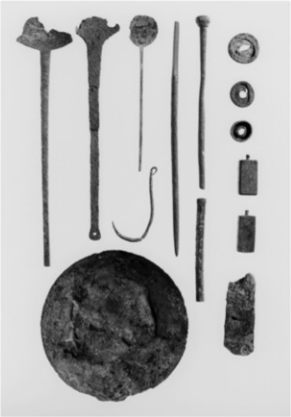
1．銅銭（渡来銭）

2．銅銭・鉄銭・豆板銀

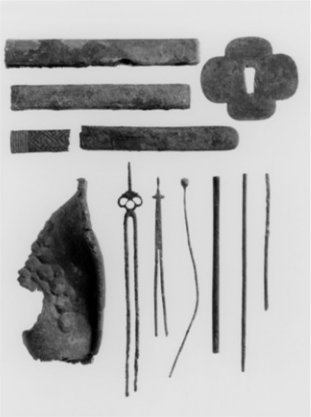
3．分銅・豆板銀



1．銅煙管



2．銅製品（匙・火箸・雁首銭ほか）

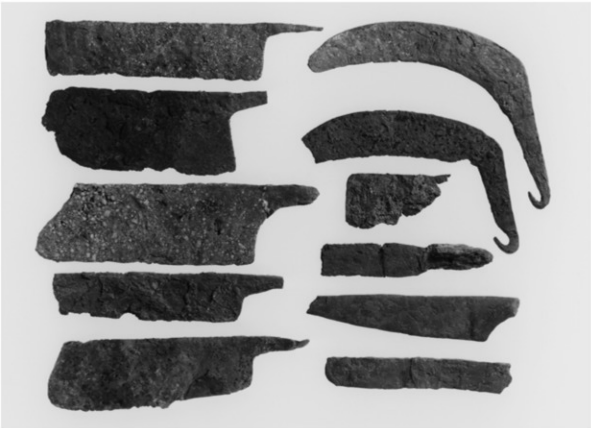


3．銅製品（小柄・刀装具・服飾具）

4．鍍金銅製品（小柄・煙管・調度品）

1．銅製品（調度飾金具）

2．銅釘



3．鉄製品（包丁・鎌）

1．鉄製品（火打金・小札・釣針・把手）

2．鉄製品（鋤先・棒・板）

3．鉄釘

4．簪

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひょうごついせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	兵庫津遺跡発掘調査報告書
副書名	第57次調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	川上厚志（編）・井上麻子・富山直人・中村大介・森村健一・狭川真一・丸山真史
編者機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号　　TEL 078-322-6480
発行年	西暦2014年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひょうごついせき 兵庫津遺跡	ひょうごけんこうべし 兵庫県神戸市 ひょうごくちゅうおうしまちょう 兵庫区中の島町 2丁目	28105	4-24	34度 39分 57秒	135度 10分 29秒	2012040 ～ 20121227	約4,640㎡ 延べ 約12,104㎡	旧神戸市中央卸売市場本場内における汚染土壌除去工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
兵庫津遺跡	集落跡 ・城館	中世～近世	町屋、井戸 石組溝、石垣、堀	陶磁器、輸入磁器、 漆器、石造品	天正期の築造当初の石垣と堀を検出

要約

神戸市中央卸売市場本場の跡地には、兵庫城の一部が残存していることが期待されていた。そのため神戸市教育委員会では本調査に至るまでに、4回にわたる試掘調査を行ない、堀の堆積層と既存建物の基礎間に辛うじて遺構が残存していることを確認した。今回の調査では、初めて築造当初と考えられる天正期の石垣と堀を確認した。また、兵庫城から尼崎藩の藩庁である兵庫陣屋、明和6（1769）年の上知令により幕府直轄領となり、出先機関として勤番所へと変遷していく、堀から石組溝となる過程を解明することができた。

兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書

平成26年3月　印刷
平成26年3月　発行

発行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL ０７８（３２２）５７９９

印刷　株式会社クレアチオ
神戸市中央区新港8-2　新港貿易会館4階32
TEL 079-233-9080 FAX 097-233-1788

神戸市広報印刷物登録　平成25年度　第374号（広報印刷物規格Ａ－６類）